

「魂の法則」



Vicent Guillem

ヴィセント ギリエム

VU

「魂の法則」

Vicent Guillem

ヴィセント ギリエム

題名：「魂の法則」

スペイン語原題：“LAS LEYES ESPIRITUALES”

著者：Vicent Guillem Primo ヴィセント ギリェム・プリモ

邦訳：小坂 真理

知的財産権登録番号 V-2095-08 (Valencia, España)

Copyright © 2008 Vicent Guillem Primo

Japanese Translation Copyright © 2013 Mari Kosaka

ホームページ：<http://lasleyespirituales.blogspot.com.es/>

日本語サイト：<http://tamashiinohousoku.blogspot.com.es>

メールアドレス：tamashiinohousoku@gmail.com



「魂の法則」 by [Vicent Guillem](#) is licensed under a [Creative Commons Reconocimiento-NoComercial-SinObraDerivada 3.0 Unported License](#).
Creado a partir de la obra en <http://lasleyespirituales.blogspot.com.es/>.

本書に修正を加えず営利目的にしない条件で、現在利用可能な全ての媒体によって、本書全体またはその一部の複製を許可するものとする。

目次

はじめに	4 項
序文	5 項
最初のお会い	11 項
神	23 項
「魂の法則」	
第一の法則： 「進化の法則」	28 項
霊的世界	29 項
進化の構図	39 項
人間の構成形態	47 項
人間の転生とそれが霊性進化に果たす役割	50 項
霊界との交信	56 項
転生のプロセス	67 項
他世界での生	74 項
第二の法則： 「自由意志の法則」	86 項
第三の法則： 「霊的裁きの法則」	93 項
第四の法則： 「愛の法則」	110 項
愛VS我欲	113 項
虚栄心・自尊心・尊大	118 項
「エゴ的感情」	146 項
人間関係と「愛の法則」	176 項
「愛の法則」から見た病気	187 項
イエスの地上での使命	202 項
別れ	238 項
作者のあとがき	244 項

はじめに

本書は、全世界の人びとに贈る愛のメッセージだ。

メッセージがどのようにしてもたらされたのか、また誰から伝えられたのかということは、重要ではない。問われるのはその内容だろう。

これをどう扱うかは、各人の自由だ。無視しても、批判しても、検証しても、あるいは君自身の人生に適用してもらっても構わない。僕自身は、色々な経緯の後に、人生に応用するということを選んだ。

したがって、対話相手であり本書の主人公であるイザヤが架空の人物なのか実在するのか、彼との会話が本物なのか、それがどのような状況下で起きたのか、などを判断するのは君に委ねたいと思う。いずれにせよ、これが君の心に届くように、真心をこめて書いたことに偽りはない。

僕の役に立ったように、君にとっても有意義なものとなってくれることを願う。

君が自分自身を知り、感情を目覚めさせてエゴを解き放つと共に、人生の目的を知り、自分に起きたことや今後起こる出来事を理解するために役立てて欲しい。

希望を持ち続け、他の人びとへの理解を深め、いつかは皆を愛せるように。また、自分が生きる世界を理解し、最も悲惨な状況からも最大の恩恵を引き出し、愛において成長できるように。

つまり、君が本来の自分になれて、自由で、自覚しながら真実の愛・無条件の愛を体験でき、そしてそれによって、さらに幸せになってくれることを願う。

全ての愛をこめて。

序文

僕は、長い間いつも多くの疑問を抱えてきた。

それらは、存在の根源に関するものだった。いつも、自分の人生の目的や、皆の存在理由を知りたがっていた。

「僕は何者か」「なぜ存在しているのか」「他者はなぜ存在するのか」「僕らはここで何をしているのか」「何か特別なことをするためにやって来たのか」「人はなぜ生まれ、死ぬのだろうか」「僕らはどこからやって来て、どこに向かうのか」「死後にも、何かがあるのだろうか」

そして、それでおしまいではなかった。時には、世界中で目にするおびただしい不正に対する答えを求めた。

「人生は、なぜこれほど不公平なのか」「誰にも危害を加えたことのない小さな子どもが、生まれた時から誰からも愛されずに飢餓・戦争・貧困・病気・搾取・虐待で残酷なまでに苦しむその一方で、健康に生まれつき、幸せな環境で愛される子どもがいるのはどうしてか」「なぜ病気になる人とならない人がいるのか」「長生きする人がいる一方で、生まれた途端に死んでしまう人がいるのはなぜか」「苦悩と悪意は何のためなのか」「善人と悪人、幸福な人と不幸な人がいるのはなぜか」「僕はどうしてこの家族の下に生まれ、他の家ではなかったのか」「どうして他の人ではなく、この僕に、こんな災難が降りかかるのか」「他の人に起こる不幸が、自分に起こらないのはなぜか」「これらの違いは一体何によるのだろうか」

また、ある時は感情面でのものだった。

「なぜ僕は幸せでないのか」「なぜ幸せになりたいのか」「どうしたら幸せになれるのか」「僕を幸せにしてくれる愛の対象を見つけられるだろうか」「愛とは何で、感情とは何だろう」「この気持ちは何なのか」「愛す価値があるのか」「愛す方が苦しむのか、それとも愛さない方だろうか」

おそらく君も、人生のある時点で、同じような質問をしたことがあるだろうし、今でも時々そのように考えることがあるのではないだろうか。

でも僕たちは、日常生活の一日一日に追われているので、意識してこのような問題を提起する機会も、答えを見つけようと努力する時間も余りない。僕たちには、色んな義務や気を逸らされる雑事が多過ぎるのだ。そして、答えは簡単には見つからないし、探求すると自分が不安になるので、疑問は心の片隅に押し込めておくのだ。そうすれば、苦しみが軽減されるとでも思うのかもしれない。

これらの疑問の一つ一つに答えはあるのだろうか？ ありきたりな答えを求めているのではなく、本当のことが知りたいんだ。真実は存在するのか？ 何が真実なのだろう。どこに真理を求めべきか。そしてそれが本物だと、どうして分かるのだろうか。

僕は、常に懐疑的で疑い深い人間だったが、探求心も旺盛だった。いつも自分自身で物事を確かめるのが好きだった。だから、小さい頃から教えられた宗教・哲学・科学の中に答えを見出そうと、ずっと長い間探し求めてきたのだと自信を持って言える。

そしてどの分野にも、世の中の理解が深まる独自の宇宙観があったが、自分の現実をありのままに説明するには、宗教にも科学にも限界があるように思えた。いつも現実からかけ離れた、中途半端で矛盾し合う答えしか得られずに、僕の疑問が解消することはなかった。深く追求しようとどんなに努力を重ねても、最後には破ることのできない壁 - 質問を続ける気が損なわれてしまう最終回答 - に突き当たった。

宗教から得られた最終回答は、「神の御心です。神のみが知るのは。私たちには計り知れません」というものだった。

つまり、人の生まれ出る環境にどうして優劣があるのかや、病気になる人とならない人がいることや、寿命の長さの違いなどは、僕たちには理解できないということだ。死後に起きることや、他にもなくこの家族の下に生まれた訳や、なぜこんな世界なのかとか、神がこの世の不正を許容する理由などは、僕たちには、到底理解できないということなのだ。

そして科学から得られた最終回答は、大体次のものだった。「全ての事象は物理的な説明が可能だが、哲学的な観点から言えば、ほとんどは『偶然の産物』か『それが存在するかどうかは、科学的には証明できない』ということになる」

つまり、君が存在するに足る理由はないし、生きるに値する特別な目的もないということだ。もし概ね恵まれた環境の下に生まれたのだとしたら、それは偶然だ。生まれつき病気だったり健康なもの、どの家族に生まれるかや寿命の長短なども、偶然だ。科学的には、生まれる以前の生や死後の生の存在などは証明できない。科学的には、神が存在することも証明できない、などなど。

大抵の人は、このように教わったことを真に受けているので、誰かと話をしても、宗教を信じている人であれば、概ね、「神の御心です。神のみが知るので。私たちには計り知れません」と答えるだろう。

一方、科学を信奉する科学者の立場を取る人たちは、宗教を信じるグループよりも知識があると信じ込んでいて、「それは偶然の賜物だ」または「科学的には証明できない」と答えるだろう。

僕にこんな風に答える第三のグループの人たちもいた。「さあ、知らない。君の質問に対する答えが何かは分からない。でも、そういうことを自問するのにも、答えるのにも興味がないんだ」

そして、僕が彼らに「悪いけれど、その答えは役に立たないよ。僕の質問に答えてくれないのだから」と言うと、最初のグループの人なら、「それは、信仰心がないからだよ。信仰心さえあれば、知る必要なんかはないよ」と言う。

二番目のグループなら「君には必要な知識が欠けてるからね。科学は答えをくれるさ。それが僕の言うところの『科学では証明できないってことが、科学的に証明されている』ことなんだよ」と返答する。

第三グループは、「払わなければならないローンがあるし、食わせないとならない家族がいるし、分割払いの車がある。週末には旅行に行くことになっているし、もう充分忙しいんだから、こんなことでこれ以上僕を煩わせないでくれよ」と言う。

最初のグループには、僕自身の疑問に答えることを放棄することなどできないと答えよう。放棄できるとしたら、自分の意志に背くことになるし、僕にはそうする気がないからだ。

第二グループには、知識の欠如によるものではないと答えたい。そのような知識は学んだ。僕は化学博士だし、物事の探求に限界を設ける必

要がある、という結論に達したことは一度もない。計測する道具がないからといって、踏み込めない分野があるとは思わない。僕には僕自身がいるし、自分が自分の計器となればいい。僕は、自分が知覚したことは、精密な計器で測定できたも同様に見なしているで、他者もそれぞれが感知器であることを認めよう。だから、僕自身の計器で感知できないことがあったら、他の人たちに、その人たちの感知器では何を捉えたのかを聞いて、役に立つのか見てみようと思う。

第三のグループには何も言わないでおこう。彼らは僕の話の聞きに来ているのではないから。

こう言うのはいても、答えの探求において、役に立ったり注目するような事柄に出会えなかった訳ではない。だけど、より多くのヒントに出会えたのは、正規の道筋から外れたところだった。

中でも最も興味を惹かれたのは、他の人たちの体験だった。それは、自分でも試せるものだった。誰かが以前に経験したのだとしたら、僕にも体験できるかもしれないからだ。

特に二つのことに興味を持った。アストラル体（幽体）での旅とナザレのイエスの生涯だ。この名前には聞き覚えがあるだろう？僕は、教会が彼についてどう言っているかを問題にしているんじゃない。公式なもの非公式なもの、宗教上のものも世俗的なものも様々な起源の、随分沢山の資料を研究してみたが、ほとんどのものが二つの点で共通していた。それは、この人物が実際に存在したということと、話したり行ったりしたことが人類史上に多大な影響を与えた、ということだ。

一体何が僕の注意を引いたのだろうか。それは「汝の敵を愛せよ、誰でも愛せよ」という彼のメッセージだった。全ての宗教の神々が征服や戦争を正当化するために利用され、人びとや民族がありとあらゆる口実で絶えず戦い合っているような世の中（現状と同じく）で、それと全く反対のメッセージを携えた人物が現れたことが、目立たない筈はないだろう。そしてそれだけでなく、自分を手本として実践してみせたのだ。つまり、過大な約束しておきながら、後では言ったことと反対のことをするお馴染みの政治家のように、口先だけではなかったのだ。

けれど、イエスについては、死後に彼以外の人—中には彼と出会いもしなかった人たち—によって書かれたものが余りにも多すぎて、一体どうしたら本当に起きたことが分かるのだろうか？彼が実際に言ったこと、または言わなかったことは何だったのか？僕にはそれが気になった。

イエスのテーマは、後ほど本書で取り扱うので一旦置いて、今度はアストラル旅行（幽体離脱）について話したいと思う。

僕は、様々な著者の色々な本の中でその事象を知った。彼らは、身体をリラックスさせるあるテクニックによって、自分の身体から離れることが可能だとしていた。これが幽体（アストラル体）離脱である。信じられないだろう？

自分自身の身体から離れられるということに、興味を持っただけではなかった。この人たちは、その状態で、物体の中を通過したり、考えただけで一瞬にして好きな場所に移動するというような、驚くべきことをやれると断言していたのだ。しかも、それだけではなかった。その状態では意識が拡大するため、人生の目的やこの世ですべきことがはっきりと理解できるというのだ。

僕は、この事に関心を持った。もしかしたら、疑問に対する答えを得られるかもしれない。失うものは何もない。「最悪でも、何も起こらないだけだ」、と考えた。そして、実際に取り組んでみることにした。

毎晩寝る前には、リラックス体操を行ってみた。一月ほどは何も起こらなかった。つまり、身体から離れることには成功しなかった。だけど、リラックスすることで何も感じられない訳ではなかった。これは、なかなか気に入った。通常感じられたのは足の裏の振動で、これは脚まで上昇してきて目で見えるほどだった。

ある日、この振動は脚よりも上に、胴体へ首へ、そして頭へと登っていった、とうとう身体感覚がなくなった。激しいながらも心地よい振動だけとなり、そして、それは起こった。突然スポッ！と、超スピードでトンネルの中に発射されるような感覚を味わった。それは本当に信じ難い感覚で、言葉でどう表現していいのかわからない。目が回るような速度で一瞬のうちに何億キロメートルも旅したようだったが、不快な目眩も酔いも感じられなかった。そしてスピードが少しずつ減速していった、自分のいる場所を見ることができた。

それは、おとぎ話から抜き出したような信じられないところだった。表現する言葉もないほど美しい自然に囲まれた湖があった。全てが、光も色も香りも音も本当に何もかもが、うっとりするような感じだった。そして、僕自身がその場に溶け込んだかのように、全てを生き活きと感じた。言い表せないほどの平和が息づいていた。僕は体験していること全てに余

りにも驚いていたので、何も考えられないでいた。と、その時、一人でいるのではないことに気づいた。

水辺近くの石の上に座っている人がいた。自分でもどうやったのか分からないが、近づきたいと思っただけで、直ぐにその人がいる所に行きつくことができた。どうやら、そこでは、したいと心の中で思ったり考えたりするだけで実現できるようだった。彼は僕のことを待っていたようで、僕を見ても全く驚かなかった。年をとって、髪の毛も長いひげも完全に白髪ではあったけれど、老人につきものの疲労や苦悩の跡は見られなかった。白い祭服のようなものを着て、紐で腰を締めていた。でも、それが一番目を引く点ではなかった。

僕が惹きつけられたのは、彼のまなざしだった。あのような素晴らしい瞳は、この世では絶対に見ることができないだろう。優しく、人を見通すように透き通り、例えようがないほど落ち着いた平和な気分にくれた。変に聞こえるかもしれないけれど、その見知らぬ老人がまなざしで僕に愛を送ってくれているような気がして、自分が置かれたその居心地のいい状況を、大して奇妙だとも思わなかった。

ここからは、イザヤという名を語ったその素晴らしい老人との対話を、この最初の出会いとその後の巡り会いを思い出して、再現してみたいと思う。彼との対話は、僕の人生をより良いものへ、いや、はるかにいいものへと根本から変えるほどのものだったので、それをできる限り忠実に再現して、君たちと共有したいと思う。僕の解釈や印象に捉われることなく、彼の言葉を直接聞いて、君たち自身が自分なりの結論を引き出してくれればと思う。

さあ、寛いで座ってもらおう。幕が上がるから。

最初の出会い

最初に言葉をかけてくれたのは彼だった。僕の手を取り、向かい合っ
て一緒に座るよう勧めてくれてから、こう言った。

良く来たね。君を待っていたのだよ。

*** 僕を待っていたですって？ 僕はあなたを知らないのに。**

私は君を知っているよ。でも、今そんなことは重要ではない。

*** ええと、僕は...一体どこにいるんですか？ どうやってここに来たんだ
ろう。**

それも今は重要ではない。そのうち分かるだろうから。

*** では、あなたはどなたですか？**

イザヤと呼んでくれて構わない。君が今私のことを思い出せなくても、
私たちはずっとずっと昔からの知り合いだよ。

*** それで、あなたと私とはどういう関係なのですか。**

私が君のお兄さんにあたるとでも思ってくれればいい。

*** あなたにお会いしたことを全く覚えていないのですが。**

そのことは今はどうでもいい。もっと大事な事柄について質問するた
めに時間を使った方がいいだろう。質問はなかったのかい？

*** 質問？ 何の質問のことですか？**

覚えていないのかい。ずっと以前から抱き続けていて未だに回答の得
られない君の心の奥底にある質問のことだよ。

*** どうしてそのことを知っているのですか。**

君のことを知っていると言ったろう。君の内面を良く知っているのだ
よ。だから、恐れなくて聞いてもらって構わない。ここでは君は完全に
自由だ。

*** 僕は混乱しています。ここは本当に素晴らしいところだ！ ここでは
とても気持ちがいい。普通の世界とは大違いだ！ 平和で、何かに...何
と言えばいいんだろう、何かに満たされていて...**

愛に満たされているのだ！

*** . . . それは、分かりません。これまでにこんな気分になったことはなかったのです。でも、本当に素晴らしい。**

それが普通だ。君にとっては初めてだからね。この人生では初めてここに意識的に旅して来たのだから。でも、時間を有効に使っておくれ。君の深い疑問を取り出してごらん。

*** どこから始めたらいいのかわからないのですが、自分が空虚に感じられ、孤独で理解されていないと思うことがよくあります。どうしてそのように感じるのでしょうか。**

それは特別なことではないし、多くの人も同じように感じている。それは、君たちの住む世界に愛が欠如していて、人びとが背を向け合って暮らしているからだ。

孤独感というのは、愛されていないという思いや理解されていないという思いから生じるので、周りを多くの人に囲まれていても、世の中で独りということがあり得るのだよ。君たちの世界の大多数の人はこんな風に、何も感じることなく、真実の愛がない内面の孤独の中に生きることに慣れてしまった。君たちは、全員が兄弟であり、同じ目的地に向かっていくことも、そこに達するにはお互い同士が必要になることもまだ理解していないから、それで、自分が独りだと信じてしまっているのだ。

*** 僕たちが到達しなくてはならない目的地とは何ですか。**

真の幸福だ。だがそこには、愛において成長しない限り到達できない。唯一愛のみが、内面の空虚感を埋めることができる。特に気にかかっている質問があるかね？

*** 僕を悩ます最大の質問は、「どうして存在し、何のために存在しているのか」です。僕は何のために生まれたのでしょうか。何かをしにやって来たのでしょうか。どうして何をしにやって来たのか、覚えていないのでしょうか。**

君は進化するために来たのだよ。

*** 進化するとは、どういう意味ですか。何において進化するのですか？**

エゴを愛に変化させていく過程を、私は進化と呼ぶのだよ。進化とは、愛について学ぶことだ。

*** 愛における進化をお話しされるのですね。でも、僕がこの世で目にするものは愛ではありません。苦しみは何のためなのでしょう。 どう**

して、最も美しいものから最も残酷で破壊的なものまでが混在する、こんなにも矛盾に満ちた世界に住んでいるのでしょうか。憎悪、戦争、飢餓、貧困、苦悩。僕には、これらの存在理由が分かりません。何らかの意味があるのですか。それとも、答えは見出せないのでしょうか。

もちろん意味はある。進化のためだ。今君が言ったこれらの災いは全て、愛の欠如、つまりエゴと呼ばれる同一の源から生じたものだ。各人のエゴが集積すると、現状のようにこの世を完全な地獄にしてしまうが、それぞれのエゴが愛に変わって合わされば、この世を天国に変えられる。内面をエゴから愛に変えるのは、各人の意志にかかっている。

内側を変えることができれば、当然の結果として、君たちの周りの外側を、そして世界全体を変えることが可能だ。君たちを取り囲む外界は、自己変革を手伝うためにあるのであって、型作りを教わりたい子どもにとっての粘土のようなものなのだ。

*** やっぱり分かりません。何のために、どこに向かって進化するのですか。それに最後に結局、全てが死に帰すのだとしたら、そのような努力に何の意味があるのでしょうか。**

愛や感情や知識の能力を高めながら、より高次の幸福に近づいていくという各人の進化には、決して終わりが無い。もし終わるのだとしたら、意味がない。

*** それはどういう意味ですか。**

人が存在しなくなることはない、つまり不死ということだ。

*** 毎日、何千何百万という人間が死んでいるというのに、どうしてそう言えるのでしょうか。**

死ぬのは、人間が物質界で存在するために使用する乗り物、つまり肉体に過ぎない。人の本質や意識はそのまま存在しつづける。

*** それは、死の後も生が存在するということですか。**

そうだ。実際に私が言いたいのは、死というものが存在しないということ、朽ちてしまうものは、魂が物質界に顕現できるように使用する乗り物に過ぎないということだ。

*** 魂とは何ですか。**

魂とは、生きて感じることでできる存在のことだ。個人の意志や意識が宿るところが魂であり、決して破壊されることがない。

君は魂だ。君たち人間は全員が魂で、転生と呼ばれる期間の間だけ、物理的な肉体に繋がれているのだ。君たちは自分自身を肉体だと思って

いるが、肉体は、この物質界で活動するために必要とされる衣服に過ぎないのだよ。

*** 確認したいのですが、それではあなたは、魂が、つまり僕ら自身が、肉体からは独立して存在できると言いたいのでしょうか。**

その通り。それが死後に起こることなのだ。魂は完全に肉体から離れて存在し、生き続ける。

*** 魂が死ぬことはないのですか。**

死ぬことはない。魂は不死なのだ。進化したり改善したり停滞することはあるが、決して破壊されはしない。

*** でも、肉体の死を越えて命が存在するという、どんな証拠があるのでしょうか。私の知る限り、あちら側から戻って話をしてくれた人は、一人もいないのですが。**

異議を唱えて申し訳ないが、そう言い切ることが完全に正しいとは言えない。臨床学的には死を迎えて、そこから生き返った人の証言は山ほどある。これらの人びとの多くは、肉体的に死んでいる間に、強烈で彼らにとってはリアルな体験をしたことを覚えているんだよ。

*** それらの体験談は、非常に危機的な状況下での幻覚が生んだ産物だとは考えられませんか。**

それならば、皆で同じ幻覚を見ようと同意した、集団的な幻覚だということになる。なぜなら、皆が同じ話をしているんだよ。

*** 時々自分自身の存在が幻覚ではないのかと疑うことがありますが。**

幻覚を見るためには存在しなければならない。君たちの世界の偉大な哲学者の一人も言ったろう、「我思う、故に我あり」と。私だったら、それに「我感じる、故に存在する」と付け加えるがね。

他人の経験は、自分の経験ではないので、疑うことは可能だ。だが、自分が経験したことには疑いの余地がない。自分の経験とは、その人自身によって体験されたもので、実際にそれを感じ体験した人にとっては、紛れもない現実なのだ。

*** 皆が共通して話しているという話とは、どういうものですか。**

肉体からの分離と、外から自分の身体を見ること。暗いトンネル内を旅する感覚と、通り抜けた時にまぶしい光を感じる。以前に亡くなった家族や友人との再会。光の存在との会話。自身の人生の回顧。

それに、肉体に戻ってから、その後の人生観が変化したり、死という現象の捉え方が変わったという経験もある。こういう体験をした人は、生が継続することを知り、自分が置き去る人生よりもずっといいことが待っていることを経験したので、死に対する恐怖がなくなるのだ。

*** 僕にはやはり、主観的な印象に過ぎないように思えますが。**

これらの証言を表面的に個別に分析するなら、正当性を疑うのは簡単だろう。しかし、国や文化や信念の違いにも関わらず、非常に似通った特徴を持つ現象が、大人に限らず子どもにも、何度もくりかえされている場合には、少なくとも、この件に関する真剣な研究がなされるべきではないだろうか。

君たちの世界にも、アメリカの精神科医で哲学者であるレイモンド・ムーディ（Raymond Moody）博士や臨死体験をした子どもたちの調査した小児科医で神経学研究者のメルヴィン・モース（Melvin Morse）のように、臨死体験を入念に調査することに専念して体験談を取りまとめた、真面目で著名な研究者が沢山いるだろう。『かいまみた死後の世界/*Life after Life*』と『臨死体験光の世界へ/*Closer to the light*』を読むことを勧めよう。

*** そうだとしても、僕には、死後の生の存在の証拠としては、偶発的で根拠に欠けるように思えます。亡くなったまま戻らない人たちに比べると、臨死体験をして生き返ったケースの割合は少ないですから。**

君たちが死と呼ぶ、肉体との最終的な分離の過程にいる死にかけている人たちからの証言はもっとずっと沢山ある。この過程にいる人の多くが、すでに亡くなった親しい人たちや向こう側への移行を助けてくれる光の存在を見たり、彼らと話したりした、と断言しているのだよ。でも普通は、幻覚を見ているのだと思ひ込む。どうやら死が近づくと、まともや世界中のあらゆるところで、同じ幻覚を見ようと皆が約束でもするらしい。

世界的権威の精神科医であるエリザベス・キューブラー・ロス（Elisabeth Kübler-Ross）のように、このテーマを真剣に研究することに専念した熱心な研究者も沢山いる。彼女の『死ぬ瞬間/*On Death and Dying*』を読んでみたらどうだい。

*** でもこれらは全部、臨死体験をしたとは言え、肉体的には生きている人たちのケースではないですか。**

肉体を持たない存在とコンタクトをしたという証言もある。良くあるのが、最近亡くなった親しい人が、はっきりと夢の中やベッドの足元に現れて、お別れを言うケースだ。これは、研究者によって余り調査はされていないが、結構頻繁に起こるケースだ。

*** それにしても、生と死の境での出来事に限定されずに、もっと確固たる証拠があってもいいと思いますよ。**

霊界とのコンタクトをもっと頻繁に継続して取れる霊媒（敏感な人）もいる。

*** それは、なおさら信じられないのですが。**

鵜呑みにしなくてもいい。だが、伝えられるメッセージをよく吟味して分析してごらん。メッセージの質で発信人が分かるだろう。

*** でも、どうしてそれがいかさまではないと分かるんですか。つまり、自称霊媒師がどうして死者のふりをしていないのだと分かるんですか。**

いかさまは常に可能だよ。しかし、偽札を造る人がいるからといって、全てのお金が偽物とは限らないように、霊媒だと偽る人がいるからといって、全ての霊媒師が詐欺師やペテン師だという訳ではない。

詐欺にあわないためには、日常生活において正直で、自己の利益のために能力を使ったりしない霊媒師を選ぶことが一番確実だ。

生まれつき何らかの霊媒体質で、子どもの時からこの能力が目覚めている人は、君が考えている以上に多いのだよ。しかしながら一般的には、周囲から拒絶されたり理解されなかったりするのだから、その力を抑制してしまうのだ。

また、能力を適切に開発できて社会の利益に使おうとするごく少数の者は、嘲笑の対象になったり日常生活で足を引っ張られたりしないように、目立たないようにやるものなのだ。

*** どうして霊媒能力のある人とない人がいるのですか。それは何の違いによるのでしょうか。**

それは、各魂の進化の計画による。霊媒になるというのは、転生前に選んで設定されることなのだ。他の人たちを援助することによってその能力を正しく使うことができれば、その人がより速く進化するために役に立つ。これは、魂が前世で行った行為と深く関連している。

*** 魂が生まれる前から存在していて、他の人生も経験したことがあるのですか。**

その通りだ。魂が現在の人生で遭遇する状況や試練は、過去の人生や、転生と転生との間の期間に、自分が下した決断と密接な関係があるのだよ。

*** 過去生、つまり生まれる以前の人生を証明するどんな根拠があるのでしょうか。**

過去生の記憶を持った人たちの証言があるよ。これらは自発的（特に子どもの場合）なものか、退行催眠によって誘発されたものだ。この件に関してはかなりの文献が揃っている。

子どもたちの記憶に関しては、「前世」を「覚えている」小さな子どもたちを対象に輪廻転生と思われる事例を研究しているカナダの精神医、スティーヴンソン（Stevenson）の研究論文を読んでみるといい。現に、輪廻と思われる二千五百以上のケースを世界中で調査してきた。彼は本も二十冊以上著しているし、心理学と精神学の専門雑誌にも色々な論文を発表している。『*Twenty Cases Suggestive of Reincarnation*』はお勧めだ。

*** これらは全部、想像が生み出したものではないのですか。**

想像や精神的な混乱やその他の要素が原因となるケースがあることは認めるが、過去の人生の詳細を具体的に覚えていて、しかも歴史的な裏づけが取られた事例は、もっと沢山存在しているのだ。彼らは、地名や事件や名前などを詳細に覚えているのだが、その多くが、今生では一度も行ったことない国々でのものなのだ。

特筆すべきなのは、幼い子どもにみられるのだが、今生では聞いたこともない前世で話していた言語を、急にしゃべり出すことさえあることだ。彼らは大抵の場合、二歳から四歳までの子どもたちで、別の場所や別の時代に生きた過去生のことを両親や兄弟に話し出す。こういう子どもは前の人生で経験した事柄に強く興味を惹かれ、しばしば前に暮らしていたという家族の元に返して欲しいと頼むのだ。

*** まあ、子どもというものは、想像力が豊かですからね。これらの証言に確証を与えるのは難しいでしょう。**

だが、「想像」した事が現実だと証明できたとしたなら、それは天才的な想像力ということだね。一方で、退行催眠術によって、前世の記憶を取り戻す大人のケースも沢山ある。

*** 退行催眠術で想像力が膨らんだために、前世を思い出したと錯覚したのではないですか。**

もう一度同じことを言おう。想像力や他の要因の産物であるケースが存在するのは認めるが、歴史的に裏づけされた過去生の詳細を具体的に覚えている人たちの事例は、もっと沢山存在しているのだ。また、多くの人が、輪廻を認めない宗教的信仰を持っているにも関わらず、退行催眠にかかると前世に起こった事柄を思い出すことも注目に値する。しかし、暗示によるかもしれないものと、前世の記憶かもしれないものとを区別するために、これらは全て真剣かつ入念に調査されなければならない。

心理医学者で『*Life Before Life*』の著者であるヘレン・ウォンバック (Helen Wambach) や『*未来世療法 / Same soul many bodies*』を著した精神病医ブライアン・ワイス (Brian Weiss)、または前述のレイモンド・ムーディ (Raymond Moody) の『*Coming back*』にみられるように、退行催眠術にかかった人から得られた返答から、前世の存在の可能性を真剣に探求した研究者は沢山いる。彼らは何千人もの人に催眠をかけて、生まれる前に実在したかもしれない過去生に関して質問し、その回答を調査したところ、これらの経験には一連の共通項があることが分かり、似通った結論に達したのだ。

*** その似通った結論とは何ですか。**

肉体の命というものは、決して終わることのない本物の命の一瞬に過ぎないということ。肉体の死はおしまいではなく、より自由な存在へと移行する一段階に過ぎないこと。我々は皆、先に向こうへ渡った愛する人たちと再び出会えるのだということ。そして愛する人たちとは、別の転生でもめぐり会えるということ。我々の一人ひとりに、物質界を自由に探求しながら、自分自身の力で知識や愛において成長していけるように用意された計画があること。この人生で出会う状況は偶然の産物などではなく、前世の行為の結果であること。我々は生まれる前から、今生で取り組む試練を知っていて、それらを上手く乗り越えようと周到に用意してきたこと。

*** なぜ過去生の体験があるということが言えるのですか。過去生でも今生と同じような意識状態でしかなかったのですから、今と同じように前世の存在を自覚できなかったのではありませんか。**

なぜなら、過去生を詳しく覚えているだけではなく、同時にどうしてそのような人生や試練を経験しなければならなかったのか、その理由も覚えている人がかなりいるからだ。つまり、物理的な生と生の間の肉体を持たない期間に起きた事も覚えているのだ。

心理学博士のマイケル・ニュートン（Michael Newton）のように転生と転生の間の記憶を専門的に調べている研究者もいる。ニュートン博士は、人びとを深い催眠術状態にすることに熟練していて、転生と転生の間の記憶を思い出させることで、どうして特定の時期に、特定の家族や環境の下に転生することを決断したのかを思い出させるのだ。『死後の世界が教える「人生はなんのためにあるのか」/Journey of Souls』と『死後の世界を知ると、人生は深く癒される/Destiny of Souls』を読んでみればいい。

*** 各人生で僕らが経験しなければならない試練や環境とは何で、どうしてそうしないといけないのですか。**

そのような試練の多くは、我々が他者にしたことを自分自身で味わって、自分が招いた状況結果に直面して、自分の行為が他者に及ぼした苦悩や喜びを自覚できるようになるためのものだ。本当に種々様々な試練があるのだが、一般的には、我々がエゴを解き放って愛において成長できるようにと意図されている。

*** 自分が肉体ではなく魂であることを自覚するには、実際に死んだり臨死体験を試みる必要があるのでしょうか。**

その必要はない。実際、君たちの誰もに一時的に肉体を離れる能力があるし、実際睡眠中にはそれが無意識に起こるのだ。でも、特定のリラクゼーション技法によって、意識的に肉体との分離を誘発させることができる人もいる。幽体（アストラル体）離脱は、意識が肉体に縛られてはいないことを実証してくれる。

*** 幽体（アストラル体）離脱とは何ですか。**

肉体から一時的に分離することだ。しかし、どうしてすでに知っていることを質問するのだ？ 君はここにその方法で来たのではないのかい？

*** 僕は、他の人たちが言っていたことを試そうとしていただけなんです。理論と実践は別物ですから。でも、こんなことが実際に起こるとは思ってもいなかったんです。**

実際に起こるのさ。君の身体はここにはない。君のベッドの上に横たわっている。だが、君自身はここにいる。

*** あなたが言いたいのは、身体がなくても僕たちが生きていられるということだけではなくて、物理的に生きているままで、死んだりせずに身体から出たり戻ったりできるということですか。**

その通りだ。

*** 具体的に何が肉体から離れるのですか。**

説明した通り、魂が、物質界での活動に使用する衣に過ぎない肉体から離れるのだ。だが、この分離は一時的なもので、両者の間には常に決して壊れることのない繋がりが存在し、それによって健康を損なわずに魂が肉体に戻ることが可能なのだ。それが、シルバーコードと呼ばれるものだ。

*** シルバーコードとは何ですか。**

アストラル体と肉体とを結ぶ絆だ。アストラル体が抜けても、肉体が生命を維持するために必要となるエネルギーを供給する、臍の緒のようなものだ。霊能者たちは、この「コード」は銀色がかっていて、アストラル体が身体からどれだけ離れようと、必要なだけ伸びることのできる伸縮自在のひもみたいだと言っている。つまり、魂が肉体を離れて遠くに旅する時には、とても長い距離まで伸びることができるのだ。

*** 身体から離れて、魂はどこに行くのですか。**

各人の思考が導く場所へ。アストラル界へ。これは、人間の成長に必要なエネルギーの流動に応じて自然に起こるのだ。睡眠中のこのような旅ではエネルギーが供給され、霊的にもっとレベルの高い存在たちが助言をくれたり導いてくれるので、後の実生活が容易になる経験も与えられる。

このことに関してもっと知りたければ、オリバー・フォックス (Oliver Fox) の『幽体離脱/Astral Projection』を読むようアドバイスしよう。

*** アストラル体？ アストラル界？ 霊的存在？ 駄目だ！ 少し待ってください！ もう、ついていけません。**

私はただ君が質問したことについて答えようとしただけだ。だが、話題が色々飛ぶので、どれも深く掘り下げることができないでいる。もし良ければ、君も身体に戻る時間だし、これで一旦打ち切ろう。

独りになって、探求したり思いを巡らさなければならない事柄が、今はかなりあるだろう。君に推薦した本を探して読むようにしてごらん。この体験が、君の頭が作り出した幻覚ではなく、本当に現実だったと自信が得られるような確証を与えてくれるだろう。

*** その全部を覚えてられるか自信がないのですが。 . . .**

心配しないでもいい。その気になれば、本を見つけ出すために必要なことを思い出さだろう。君がまた私に出会えるのを望んでいるとしてだ

が、次に会った時に私に質問ができるように、それまで新たな疑問を集めておくといひ。

*** いつまた会えるのですか。**

それは君次第だ。私たちが表面的に取りかかり始めたテーマについて、君がどれだけ掘り下げたいのか、あるいは、このままにしておきたいのかによる。

*** あなたと話すにつれて、進化についてや靈魂の不死性のようなことに
関して、もっと質問が湧いてきたのですが。**

それはまた別の機会にとっておきなさい。今見たように、他のテーマには触れずにある話題の一面を掘り下げるのは不可能に近いのだが、テーマ毎に質問に取り組んでみることにしよう。それらの回答も、さらに詳しい説明が要求される別の質問へと発展していくことだろう。

*** 今のところは、まだあなたのお話を懐疑的に聞いているということ
を分かって下さい。**

理解できるよ。君が心から答えを求めている、聞く耳を持っていることは知っている。そうでなければ、私はここにはいないだろう。君は慎重に話を聞いたと思うし、私たちが話した内容を反芻するのに時間が必要なのも分かっている。私にはそれで充分だ。弟よ、また会おう。

*** イザヤ、さようなら。**

そして、ほとんど別れを言う間もないまま、グイっと引っ張られると、外にはじき出された時に感じたのと同じ勢いで、光の速度で落下する感覚があり、自分の身体に突入した。身体に戻るのは、しんどいことだった。あの夢のような場所で、甘く穏やかな波動を感じながら身体の外にいる身軽さと比べたら、なんという違いだろう！寒さを感じた。酔ったように吐き気がして、百キロもある鉛の鎧を着せられたかのように重たく感じた。しばらくは身動きすることも話すこともできなかった。自分に起こったことを自覚し始めたのはこの時だった。強い衝撃を受けて、感動の余りに泣いた。

それは、僕の人生の中で最も不思議な出来事だった。それに続く数ヶ月、僕は通常に戻ろうとしたが、どんなに頑張ってみても、もう物事を同じようには見られなくなっていた。ほとんど全てのことが世俗的に思

えた。日常の心配事や仕事も。自分の周りで起きている出来事を見も聞きもせず、その体験のことばかりを考えながら、ボーッとすることが多かった。家族や友人など誰かにこの事を話したいと思ったが、僕の常識が、頭が少しおかしいと思われるだろうし、理解してもらえないだろうから止めておけ、と言った。エイリアンみたいによそ者の気がした。一体どれだけの人々がこれと同じ体験をしたのだろうかと考えてみた。

そして、時間が経つにつれて疑惑がもたげてきた。もし全部が幻覚で、僕の想像力が生み出したものだったとしたら？ その考えに逆らおうとして、イザヤが僕に言ったことを思い出した。「君に推薦した本を探して読むようにしてごらん。この体験が、君の頭が作り出した幻覚ではなかったと自信が得られるような確証を与えてくれるだろう」

そこで、インターネットで本を探し始めた。著者もタイトルも思い出せなかったけれど、僕たちの会話を思い出せるキーワードは覚えていた。グーグルに「輪廻転生、過去生、死後の生」と入力してみると、本の著者の名前や題名が現れてきて、その中でイザヤが教えてくれた名を見つけることができた。彼が僕に言ったことを一点一点確認しながら、それらを入念に読んでみた。もしあれがただの幻覚だったとしたら、かなりいい線をいっていた。

もう一度イザヤに会いたくなかった。彼の優しい目に癒されたかった。もう一度平和を感じたかった。本を読んだことで、僕と同じ質問に答えようとしている人たちがいて、彼らが答えを見出だそうと取り組んでいることが分かった。だけど一方で、もっとずっと沢山の疑問も出てきてしまったので、それらをノートに書き留めて、またイザヤに会える機会があったらと、時々頭の中で反復して思い出せるようにした。そう認めたくはなかったが、イザヤに、僕の疑問を晴らしながら教えて欲しかった。僕の質問に対する誰かの答えが胸の奥にまで達したのは、あの老人が初めてだったからだ。おまけに、とても愛されている気持ちにさせてくれて、居心地が良かった！ まだ懐疑的ではあったけれど、僕の内の何かが、正しい道を進んでいると教えてくれた。

それで、イザヤに再会する希望を持って、またもやりラックスの練習を始めた。そして、再び身体から抜け出たのだ。今回はそれほど努力を必要としなかった。たった5回やってみただけで外に出られた。同じ旅をして、同じ感覚を味わった。そして、彼はそこにいた。満面の笑みを浮かべて、最初の時と同じ癒しのまなざしで再び僕を待っていた。

神

やあ、弟よ！ 遅かったじゃないか！ 待ちくたびれて年を取ってしまったよ！ 髪まで白くなってしまっただろう！

*** 何ですって？ あなたの髪はもう白かったではありませんか！**

怒りなさんな。冗談だよ！ こんな上の方ではユーモアのセンスもない、とても思っていたのかい？ さて、地上に戻ってからどうだったかい？ 私を懐かしんでくれたかい？

*** ええ、とてもあなたに会いたかったです。もう一度ここに来て平和を感じたいと思いました。あなたが教えてくれた本を見つけ出して読んでみました。とても参考になりましたが、質問がもっと増えてしまいました。**

喜ばしいことだ。さあ、言ってごらん。自由に質問を始めていいよ。

*** 信じている訳ではないんですが、霊性進化についてあなたが言ったことや本に書いてあることから推測すると、かなり複雑な組織化された計画のようなものがあるみたいなのですが。**

そうだよ。全宇宙の全ての生き物と全存在物を網羅する計画だ。もちろん、それぞれの魂には進化の具体的な計画があるがね。万物の生命はどれも愛され幸せになるように定められているのだ。この個人的な進化の計画には、様々な進化段階にいる多数の存在が関与していて、進むべき道をたどれるように各々の魂を支援しているのだ。

*** どういう意味ですか。**

君たちには霊的な家族がいるということだ。

君たちは誰もが、多数の霊的存在から愛されているのだ。先ず初めに神に、それから決して君たちを見捨てることのない君たち自身の守護神に、そして他の多くの靈魂たち。その多くは、すでに故人となっている今生や前生での友人や家族だ。しかも、それでも足りないかと言わんばかりに、君たちには全員に、伴侶とも言える自分に完全に似通った双子の魂が存在していて、それは本当の愛を感じ始める対象としては最適な相手なのだ。彼らの中には、君たちと同時期に転生している者もいて、肉体上の家族の一員であったりなかったり、または単に仲のよい人だったりする。

*** そんなに愛されているのに、多くの場合に独りぼっちだと感じてしまうのは、どうしてでしょう。**

それは君たちが、同じ時期に転生していたり霊界から支えてくれている存在などの仲間との繋がりを知らずに、霊的世界から隔離されて暮らしているからだ。頭や五感の要求を聞くのに一生懸命で、心で感じる思いとはかけ離れてしまい、地上での使命を自覚できないからだ。

一つはっきりさせておこう。物質界で独りだと感じられたとしても、霊的世界においては、決して独りになることなどない。この繋がりを発見し、その繊細な扉の向こう側に本当の生を発見するのは、一人ひとりにかかっている。だがその扉を開くことができる鍵は、愛情だけなのだ。真心を込めて願えば、君たちの感受性を目覚めさせ、君たちの苦悩を癒してくれる助けが得られるだろう。だが、それを受け取るためには愛を阻む鎧を自分で脱がなくてはならない。一人で孤立したいと願う者には、その意思が尊重されるからだ。

*** 先ほど神に言及されたので告白するのですが、僕は神の存在をすごく疑問視しているのです。神に会ったことのある人などいるのですか。**

神の作品を見たことがないのか？ 宇宙、生命、君自身だ。神はこれ以上君に近づけないほど近いところにいる。だが神は、自分を認めろとか心を開けとかを強制しない。君自身が神を感じたい、気づきたいと思わなくてはならない。

しかし、もし君が、君ぐらいの大きさの、目や顔や腕や脚を持った自分に似た人に会うことを期待しているのだとしたら、絶対に神が分からないであろう。神はそれよりずっとすごいものなのだ。

身体の細胞の一つが「どこに私がいるという身体があるのかい？ 見えないんだけど」と言うようなものだ。「君はその中にいるんだよ。気がつかないかい？」と答えても、細胞は言うだろう、「私が見えるのは細胞だけだよ。細胞！ そこらじゅう私みたいな細胞だらけだ」と。「それでは、自分自身の性質や機能や他の細胞と築いている関係を良く見てごらん。全体を形成するのにどれほど素晴らしい連携をしているか、他の細胞同士との関係も調べて、その全体が作るものを観察してごらん。そうすれば、細胞よ、自分が一部となっている身体に気づいて、それを認識することができるだろう」

*** では、どこに神が存在するという確証を求めることができるのでしょうか。**

細胞での例のように、先ず最初に自分の存在、次に自分の周りの存在の中に、それは見出せる。

自分自身の存在を自覚していて、感じたり考えたりできる人はどこからやって来たのか？ 完璧に全ての歯車が噛み合い調和がとれた宇宙の起源とは？

それが、無ということなどあり得ない。なぜなら、無は、こんなにも複雑かつ美しいものを創造することなどできないからだ。成り行きに任せて鍵盤を叩いて美しいシンフォニーを作曲できると信じる人がいるだろうか？ それと同様に、宇宙や生命や人間のように美しく複雑なものが、因果の結果としてではなく、偶然の産物だということはある得ない。

***でもこれら全てを創造したのが、なぜ神でなければならないのですか。自然そのものには、創造する能力がないとでも言うのでしょうか。**

それなら、自然の創造能力はどこから生まれるのだ？ 宇宙を司る法則はどこで出来た？ 君たちは、自然や宇宙に創造する力があることや、その力を組織して秩序化する物理的・化学的・生物的な法則が存在することは認めているようだ。だから、科学者たちは、知らない現象を発見すると、無から生じたとは言わずに、それを生じさせた原因を探そうとする。つまり、君たちは日々の生活の中で、原因なくして結果なしという法則を認めている訳だ。

それなのに、宇宙の起源は何か、つまり最初の原因は何か、という問いに答える時には、いつもは有効だと認めている原因—結果の法則に反して、「無から生まれた！」という原因なしの帰結を公言することをいとわない。これは、矛盾極まりないことだ！ だから、全てに最初の原因がある筈で、それが神なのだ。

***何度もしつこく申し訳ないのですが、なぜ全てを創造したのが必ずしも神でなければならないのですか。僕たち人間には美しく複雑なものは創れないとでも言うのですか。たとえば、音楽やコンピューターなど...**

君たちにも創造の能力があるというのは確かだが、その能力があるのだとしたら、何に起因するのだろうか？

宇宙には、様々な進化段階にいる多くの存在がいて、その進歩の度合いによって君たちよりも能力が高かったり低かったりする。しかし、彼らに始まりがあったとするなら、原因と結果の法則において、それ以前の何かの工程によって創造されたと認めるべきだろう。したがって、実際には、被創造者の創造力というものは、すでに存在している法則に従って、他の創造物に対して発揮されるに過ぎない、と認めるべきだ。

よって、我々は、創造されたのではなく悠久の時から存在し、今後も永遠に存在する、全存在物の法則と規範を定めた最初の創造主を認めなければならないこととなるのだが、それが神なのだ。

***では、神が存在するという可能性だけは認めましょう。神の存在を仮定した場合、僕は、その掴みどころがなく、姿を見せない神とされるものが誰で、どんな様子なのかということに興味があるのですが。**

作品を見れば作者が分かるだろう。自分自身や自分を囲む世界を知れば、神が分かり始める。生き物は創造主の潜在能力を秘めているので、人間の善良なる資質の全てをできる限り完璧に想像すれば、今の君の力ではたいそう不完全なものだとはいえ、それが神のイメージには一番近く、神の輪郭を描き始めたことになるのだ。「神とはどのようなものか？」という問いに「その存在になれた時の君のようだよ」と答えるものがあるが、それが的を得ている。

***善良なる資質とはどういうものですか。**

愛、叡智、正義、真実、謙虚、寛大、誠実、繊細、理解、慈悲…。

***神の資質で僕たちが持てないものがありますか。**

あるとも。創造主は、不変で全能で創られることがなく、いつも存在する。

創造物は、終わりはないが初めはある。常に改善しようとしているので変移するし、絶えず拡大させている進歩の能力には制限こそないが、それは無限ではない。

***もし、神という存在がそんなにも完璧であるのなら、どうして、この世界に悪が存在することを許すのですか。**

神は、生き物が自由に体験し、間違いから学べるのを容認している。この世の悪は、神から生じたものではなく、霊的法則を知らないために他の被創造物を傷つける、進化の途上の人間が生んだものだ。

***それなら、それらの法則がどんなものなのか、教えて下さらなければなりません。僕にはまだ納得のいく答えが得られていない疑問が山ほどあり、この世界の非常に理不尽な出来事が理解できないので、その法則できちんとした説明が得られるのか疑問ですが。**

喜んで。用意はいいかい。話すことが山ほどあるよ。

「魂の法則」

第一の法則： 進化の法則

- 魂の目的は、果てしなく永遠に進化し続けること。
- 何において進化するのか？
愛と叡智において。
愛なくして進化はない。愛なくして叡智はない。
愛なくして幸福はない。
- 進化は、各人の意志と努力にかかっている。

靈的世界

***最初に、魂の命は生まれた時に始まるのではないと言われましたよね。
その通り。**

***生まれる以前には何があるのですか。**

死んだ後と同じ、「生」だ。物質界に縛られない生の期間と、赤ん坊に転生して物質界に戻ってくる期間とを、交互にくりかえしている。

***それでは、誕生をもって「生」が始まるのではないのですね。
それはちがう。**

***僕たちは皆、今生の前にも別の「生」を生きたのでしょうか。
そういうことだ。**

***それでは、生まれる前はどこにいることになるのですか。
靈界だよ。**

***そして、死んだ後はどうなるのですか。**

魂は肉体を離れて、元いた靈的世界へ帰る。つまり、物質に縛られることなく生き続けるのだ。

別の表現で要約すれば、靈界から来た魂は、生まれただけの赤ん坊として転生して物質界と繋がり、肉体の死を迎えるまで物理的に生きる期間を過ごす。死の瞬間に肉体との絆は切れて、靈界に戻る。

人がどこから来てどこに行くのかについての秘義は、「天に昇った者はいないが、天から降りてきた者はいる」という簡単だが非常に奥深くくだりによってイエスが公言していた。これは、ヨハネの福音書三章十三節(3, 13)に記載されているが、今までその意味が完全には理解されることはなかった。

***でも、どういう状態でその靈界に戻るのでしょうか。つまり、目覚めた状態なのですか？ 自分たちに起きた事を自覚しているのでしょうか、それとも複数の宗教で信じられているように「最後の時」のような事態になるまで昏睡状態でののでしょうか。**

昏睡状態どころか、転生している時より靈界にいる時の方が、現実をずっと良く自覚しているのだ。肉体を離脱することで、魂が意識を失ったり、寝ぼけたままの状態になるのだと考えてはいけない。各魂の進化

程度と死の状況によって期間が異なる、一種の混乱期を経るとは言え、魂は霊界で真の生を見出し、色々な事を自覚するのだ。その中には、何が転生の目的であったのか、ということも含まれる。

霊界は君たちの世界以上に実体のあるところなので、もちろん、他の存在と一緒に関わる業務もある。実際のところ、君たちの世界というものは、霊界の実像が歪められて投影されたものに過ぎないのだ。

*** でも、正確にはどこに行くのですか。**

普通はどの魂も肉体を捨てると、各自の進歩状況に応じた次元の霊界に行くことになる。そしてそれは、生存中にどれだけ「愛の法則」に見合う行為をしたかで決まる。魂の最終目的地は、いつも霊界の故郷に戻ることだ。

しかし、他の生き物を酷く苦しめる行為をした犯罪者の魂などは、その行いが足かせとなって、下層アストラル界の低い波動レベルに囚われてしまうのだ。

それとは全く逆に、我欲の大部分に打ち克つことができ、愛情に満ちた行動をした魂は、上層アストラル界の一番高い波動領域まで昇っているのだ。

この二つの極端な例の間には、無数の中間層が存在しているのだが、どこに行くのかは、それぞれの魂の霊性レベルと、どれだけ「愛の法則」に沿った行いをしたかによる。

*** 話が分からなくなってきたので、少し待って下さい。「波動レベル」が何を意味するのか説明していただけますか。それが、進化の状態とどう関係があるのですか。**

波動レベルは、魂の進化状態がエネルギー次元に反映されることだ。

愛がアストラル次元、つまりエネルギー次元で顕れると、波長が高いと言える。したがって高振動の波動は、愛の能力が高く、エゴを脱却できた進化した魂のエネルギー体のものだ。

低周波の波動は、まだ我欲で行動している進歩のみられない魂につきものだ。

この両者の間に、中間的な進化段階にいる魂たちが存在していて、波動レベルも中ほどなのだ。

どの魂も肉体を離れた後は、それぞれの進化レベルに応じて、自己の波動レベルに相当する次元に移行するのだ。

*** 全く理解できません。霊界や、波動レベルや、エネルギー次元や、下層・上層アストラル界についてのお話ですが、僕には定義が曖昧すぎて、正確には何を意味するのかも、何を言わんとするのかも分かりません。**

霊界というものがどういうところで、そのようなエネルギーの波動レベルがどこに位置するのか、また、アストラル下層とか上層とかが何を意味するのか教えて下さいませか。

肉体に制限されて全体を捉えられない者に、霊的世界を詳細に描写するのはとても難しい。それは、生まれつき眼が見えない者に、色とはどういうものかを説明するようなものだ。

だが、霊界については幾つかの点を、特に宗教上の観念や信念が実際とは異なる歪んだ概念を与えてしまった領域を、できる限り明らかにしてみよう。

まず最初に、霊界というものは、靈魂がどこに行ったらいいのかも分からずにさまよいつける形のない薄ぼけた空っぽな世界ではない、と言っておこう。霊界は実体があり、魂の本当の故郷で、常に存在し今後も存在し続ける触知可能な世界であり、始まりと終わりのある物質界と違って、破壊されることがない。

*** そんなに実体のあるものなら、どうして見ることができないのですか。**

君たちに見えないからといって、存在しないことにはならない。肉体を持っている時に君たちが知覚できるのは、物理的感覚で捉えられることに限定されてしまう。

たとえば、君たちは光を、様々な周波数で振動する波動として定義している。だが、君たちが見ることのできる光の範囲は虹の七色に限定され、下限の赤色から上限は紫色までの周波数に限られる。

しかし見ることはできないが、機器を使えば君たちにも察知可能な、この周波帯以下、あるいは以上の光も、同じように存在している。

紫色の周波数の上には、紫外線やX線やガンマ線がある。赤色の周波数の下には、赤外線やマイクロ波やラジオやテレビの波長がある。

霊的世界を知覚する場合も似たようなことが起こる。光の波長分析に従えば、霊界は君たちが知覚できない周波域内に存在していて、この領域の中にも高低まちまちの波長があると言える。

*** でも存在するのなら、何かによって構成されている筈ですが。僕たちの世界の物質は、色々な度合いや形状にまとまった様々な種類の原子から成り立っていて、それらの原子の組み合わせで物質が生まれ、それに**

よって特定の物理的な性質を持った世界が造られていますよね。霊界の場合には、全ての基となるような素材があるのでしょうか。

あるよ。「生命の本質」とか「魂の素」とか呼んで構わない。

*** どんな性質をしているのですか。**

それを説明するのは複雑だが、理解できるようなヒントをあげよう。

アルベルト・アインシュタインの研究とその後の量子物理学の進展により、物質とはエネルギーが凝縮された形態に過ぎず、原子よりも小さな粒子に分解でき、分解によって、物質の一部が光に変化することが分かった。

したが、光と物質が、別々の事物に見えるほど大きく異なる性質を持つとは言え、両者の違いは本質的なものではなく、構造と凝縮度合いの違いによるのだ。

理解し難いなら、水に起こることをイメージするといい。水は構成要素が変わらないにも関わらず、微粒子の動き具合やその振動状態の違いによって、固体（氷）、液体、気体（水蒸気）と、それぞれの状態で大変異なる性質を見せるだろう。微粒子は氷において最も静止しているが、液体の水ではそれほどではなく、水蒸気ではさらに活性化している。

この例をモデルにすると、物質世界というのは、「生命の本質」が最も凝縮された形態であって、物理学が見出そうとする諸法則に従った一連の性質は物質世界で顕れるのだと言えるのだ。

しかし純粋に霊的な世界と物質界との間には、濃度の中間的な階層が存在している。一番希薄なものから最も濃密なものへと、順に、霊界・メンタル界・アストラル（エネルギー）界・物質（物理）界にまとめられ、その各々に特性があり、独自の法則がある。これらの世界はお互いに孤立しているのではなく、完璧な相互関係があるので、凝縮された形態の世界が精妙な形態の世界と無関係に存在することはない。

*** それなら、「アストラル界」と「霊界」の定義には違いがあるのですか。時々、両者を同義語として使われているように思えるのですが。**

違いはあるよ。霊界というのは、全てが生まれ出る次元であり破壊されることはないが、アストラル界は、霊界がエネルギー次元に具現化したものだ。つまり、物質界ほどではないにしろ、ここでの「生命の本質」はもうかなり濃縮された形である。アストラル界は変容し、定期的な再生と衰退の過程がある。

確かに私は「霊界」という言葉を、君たちの世界を指す「物質界」の対比語として、君たちには捉え難い三つの精妙な世界（霊界・メンタル界・アストラル界）をまとめて指すために使用することがある。どの用語を使用するかは、文脈やどの面をどう強調したいかによる。

私は普通、「霊界」という言葉をより広い意味で使用するが、「アストラル界」は、物質界に近い見えない世界のことなので、より具体的な用語だ。

***少しはイメージできましたが、アストラル界と言う時は、具体的には何を指しているのですか。**

どの惑星もエネルギー的に対応するアストラル球体と繋がっている。

これは物理的な惑星の上に覆い被さっていて、大きさはずっと広いもののずっと繊細な性質をしている。物理的な惑星がコーヒーの豆粒ほどの大きさだとしたら、アストラル的惑星の大きさはサッカーボールに相当する。だがエネルギーの性質上、コーヒー豆はサッカーボールの中心となる。物理的な惑星は、アストラル的惑星からエネルギーを貰うことでその構造と機能を維持しているので、アストラル球体をなくしては存在できない。

このアストラル界には様々なレベル、つまり密度の異なる色々な波動層があるが、物理的な惑星の表面に近い層が最も濃密で、繊細になればなるほど表面からは遠ざかる。

それぞれの層には、独自の地質的な構造と自然がある。より精妙な層の自然の方が、粗雑な層のものよりも美しく完全だという差はあるが、どれもに谷や山や河があり、動植物もいる。物質界の自然は、アストラルの自然が不完全に投影されたものだと言えるし、物質界に存在するものは全て、それ以前にアストラル界で実験済みなのだ。

***アストラル的惑星には、生命が存在するのですか？**

アストラル球体または惑星は、生命に溢れ、地球と繋がりのある靈魂や転生していない様々な命の故郷なのだ。

君たちの物質界で生まれる大多数の者の源点であり、死ぬ者たちの目的地だ。先ほど、魂は肉体を離れると霊界に戻ると言ったが、通常は、自分の靈性に応じたエネルギーレベルに見合う、アストラル惑星内の波動レベルのどれかに移行するのだ。

今、私たちはその中の一つにいる。君が今、自分の周りで見ている自然は、この波動レベルに特有なものだ。

*** アストラル界に靈魂が住んでいて、それらが地球に生まれ変わるので
すね。その世界と住人についてや、死後にアストラル界のどのレベルに
行くかが何によって決まるのかについて、もっと知りたいのですが。**

そうだ！ それに、アストラル界の上層とか下層とかが、何を意味する
のかまだ教えて下さっていないので、早くそれを説明いただけませんか。

よし！ すでに言った通り、アストラル界の波動帯の各々には靈魂が住
んでいるので、彼らもまた天然の素材で独自の文明を創ったのだ。

魂が進化していくと、つまり、エゴを解き放って愛情深くなるにつれ、
愛に基づいた行為が自己の波動を高め、それによって、新しい進化レベ
ルに見合った振動領域へと上昇していくことができる。

この波動対応という法則によって、精妙な性質の進化した魂ほど、地
上表面から離れたさらに繊細な波動領域に住むこととなり、一方、段階
的により濃密な層へと降りるにつれて、だんだんと、進歩が少なく性質
の重い魂が住む共同体に行くことになる。結果として、精妙な層の方が
重たい層よりも、道德面でも技術面でも進んでおり、文明もより完全な
ものなのだ。

独断的な区分に過ぎないが、これらの異なる波動レベルを、振動が高
まり密度が薄くなっていく順番に、アストラル下層・中層・上層に分類
することができる。

アストラル上層の靈魂たちは、魂の目的が何であるかを完全に自覚し
ており、意識的な進化の段階にいる。彼らは、自己の意志と努力の全て
を靈的な進歩に向けており、多くの場合に気づいてもらえなくても、進
化の劣る他の魂の進歩を手助けすることに注力する。彼らは、基本的に
このことに時間を費やしているのだ。

下層アストラルには、靈性進化の乏しい靈魂がいるが、彼らは、まだ
若い魂だったり、進化の初期段階にいる者や、何度も転生して知的発達
は遂げているものの感情を育めなかった者などだ。

中層アストラルには、中間的な進歩段階の靈魂がいる。地上に転生し
ている魂の大半は、肉体を捨てた後にここに行くことになるのだ。もっ
ともそこに行き着くまでに、生存中の「愛の法則」への違反行為によっ
て、多くの者が一時的に下層アストラルに勾留されて、そこである程度
の期間を過ごす必要があるかもしれない。

*** お話を聞く限りでは、アストラル下層界は地獄、上層界は天国、そし
て、中間層は煉獄に匹敵するのではないですか。**

地獄、煉獄、天国などの概念こそ、私が話している霊的な実相が大いに歪められたイメージであり、実体と似ている点はほとんどない。

実際のところ、アストラル上層に達することができた魂は全て、昔は下層界にいたことがあり、中間層を通過してきたのだ。そして彼らが、上層に到達できたのは、自分自身の努力で、愛における霊的成長を遂げて波動レベルを高め、現在の領域に住むに値するようになったからだ。

そして下層アストラルの全ての靈魂も、充分成長できれば霊性進化の計画通り、いつかはアストラル上層域に住めることになるのだ。したがって、牢獄の役目をするように創られた場所など存在しないし、下層界にいることで経験し得る苦しみも、永遠には続かない。

***でもあなたが言う通りなら、「悪者」はアストラル下層部に行くことになり、その場所で苦しむのではないですか。**

そうではあるが、アストラル下層の全ての住人が「悪者」とは限らないし、「苦しむ」訳でもない。

また、「悪者」という定義も不完全なものだ。知力のみにおいては進歩したが愛に関してはほとんど成長していない、怠惰な魂、と呼んだ方が良からう。

先ほど話したが、霊的進化の初期段階にいる原初的な靈魂も、自由意志を持った個別の存在として、アストラル下部に住んでいるのだ。このような未熟な靈魂は、似た波動同士で集まり、同じ層に住んではいても怠惰な魂とは交流がなく、それぞれが別々に離れた地域に住んでいる。原初的な靈魂にとっては、そこが自己のレベルにふさわしい環境なので、アストラル下層にいることを不幸だとは感じていない。

苦しむのは、怠惰な魂の方だ。なぜなら、愛を与えなかったとは言え、原初的な靈魂よりも敏感に感じ取れるので、愛の欠如に気づくと辛いのだ。彼ら自身と同じように自我の強い者を仲間として暮らすのが、辛いのだ。より良い生を垣間見ており、自由意志を誤用し他者を傷つけたせいで自分が惨めな状態に置かれていることを知っているのだ、苦悩するのだ。

***あなたが言うことを想像するのは難しいです。**

アストラル下層界にいる原初的な魂と怠惰な魂との感じ方の違いが分かるように、君の世界での例を挙げてみよう。

密林に置き去りにされた猿人と西洋人との違いを想像してごらん。猿人はジャングルの中に溶け込んで完全に幸せに暮らせるのに、文化的生

活の利便性に慣れた西洋人にとっては、密林の中で生きるのは拷問のように酷く辛いことだろう。

*** そんなに酷い場所なら、どうして下層アストラルが存在するのですか。**

それは宇宙には、最も原始的なものから最も進化したものに至るまで、全ての存在にふさわしい場所があるからで、君たちと同レベルの惑星では、感情の学習の初歩段階にいる者の故郷が、アストラル下層だからだ。

また下層界は、「愛の法則」に反した行いをした魂に特別に設けられた場所でもない。それが酷いものなのは、入植者が環境を尊重しなければ天然の土地もゴミ捨て場と化してしまうように、そこにいる者自身の低い霊性から放たれる波動が、息詰まるような居住環境を生み出したからなのだ。

*** アストラル下層の靈魂についての話なので興味があるのですが、悪魔やサタンは存在するのですか。**

常に悪に従事する靈魂などいないし、サタンにつきものとされる全能的な破壊力を持つ者など、なおさらだ。

アストラル下部に住む靈魂は、感情面でほとんど進歩していない魂だ。それはもう話したように、彼らが幼い魂だったり、またはある程度古い魂であっても、感情を余り成長させることができなかったからだ。

アストラル下層にとっても知的な魂がいたとしても、その知能を他の魂に害を与えることに使用して、まだ感情を発達させていないのであれば、賢いとは言えない。なぜなら、叡智というのは感情を知ることによって生まれるものだからだ。そして、我欲にまみれて幸せを知らない彼らは不幸なのだ。

我欲を克服して愛を知った他の魂が、叡智と至福に到達したのを直感し、自分にそれらが無いのを嫉妬して、肉体に宿った同胞の霊的進歩を力の限り妨害し、愛から溢れ出る至福を他者にも味わわせまいとする。スペインのことわざにもあるように「大勢の人の不幸は愚か者の慰め（他人の不幸は密の味）」となるのだ。

そのため、組織的に肉体を脱いだ者の成長を妨げて、後継者を得ようとする。だが、肉体を持つ者に及ぼせる力は、肉体を持つ者が影響を甘受しない限り、かなり制限される。

しかも、彼らの存在できる領域は、低い周波帯に限定されている。高い域に達するには愛さねばならないのだが、それを拒否して、自分自身で低レベルに滞留するのだ。そして「全員がリーダーになりたい」という欲を持っているため、常に縄張り争いに悩まされている。

しかしこれらの魂は大変不幸なので、遅かれ早かれ、「悪者」でいるのが嫌になって、この状況から抜け出ようとする。すると、このような居心地の悪い領域に隣接した地帯に救助所を設けている、より高い領域の魂たちに救出されるのだ。

*** 幽体（アストラル体）離脱についての話の時に、肉体に宿った魂は、ひと度肉体から解放されると、ほとんど一瞬にして思考が赴く場所に移動できる、と言われましたよね。**

そうだ。だが、自分自身の振動レベルと同調できる範囲内だ。

*** 肉体から離れた魂は、アストラル界の異なる領域を自由に行き来することも可能ですか。**

高次元の魂ほど自由に動き回ることができ、君たちが沼地を歩く時のような不快感はあるものの、下のレベルに降りることができる。

下層の魂は自己の波動レベルを高めない限り、自分より上のレベルに行くことができない。霊的に進化した時にのみ、そうできるようになるのだ。それゆえ、違うレベル間での魂の交流は、常に、より進歩した者が低い域に降りることで成り立つ。

アストラル下層の濃密な地域では「アストラル物質」の振動数が大変低く、物資界に酷似しているので、ここに住む魂は、肉体を持った人間のように制約された暮らしをしており、周辺を移動するのが困難なのだ。

だが、アストラル上層の魂は、自由に移動できる。もっとも、アストラル下層に顕現してその住人に認知されるためには、波動調整をしなければならず、これは、君たちが煙に充満する部屋の空気を吸わなくてはならない時のように苦痛を伴うものとなる。

*** どうしてレベル間の区分があるのですか。**

アストラル界の性質上、元来区分けはされていて、それによって進歩の乏しい魂が愛が司る高い周波領域に介入して、その住人に害を及ぼすことを阻止しているのだ。

*** でも、これらの波動領域には何らかの接点があるのでしょうか、それともお互いに完全に分離しているのでしょうか。**

これらの区分けは急激なものではなく緩やかなものだ。大気の濃度が地表を離れるにつれて薄くなっていくのと同じように、「アストラル物質」の密度もそうなるのだ。

アストラル界の様々な共同体は、前に述べたような制限があるものの、お互いに交流し、魂も行き来している。つまり、進歩した者が自由に、

自己と同等、またはそれ以下のレベルの間を移動できる一方で、余り進歩していない者は、靈的に進化して波動レベルを高めることによるのみ、上方のレベルに達することが可能だ。

中間層の共同体は、さらに高度な靈的な法則に従って共同体を組織できるように、上層共同体から手助けされて、靈的・技術的なアドバイスを受けている。またその傍ら、中間層の共同体からは、下層界の波動領域を抜け出す準備が整った魂たちの救助隊が出動する。準備が整った魂は、自身が犯した罪を自覚して、後悔して改善したいと思い、その状況から抜け出せるように心から援助を要請したという訳だ。

*** 救助の任務とは具体的にどういうものですか。**

イメージが掴めるように言えば、進歩した魂の共同体は一種の靈的な NGO のように活動し、困窮状態に苦しむ魂を支援したり救出するために下層に降りる。戦闘員の待ち伏せによる爆撃で負傷した市民や、戦争や飢餓や自然災害などで荒廃してしまった地域から逃れて来た避難民を救出することに似ている。

このために、アストラル下層と中間層との境界域に、病院・避難所・学校などを造って、低い波動帯から救出されたばかりの魂の面倒を見て、再教育をする。救出された魂はこれらの場所に、自己のリハビリに必要とされる期間だけ留まるのだ。

そしてひと度回復すると、その多くの者が、下層の苦しむ魂の世話や救出という、自らも恩恵を受けたのと同じ仕事に就いて活躍する。それによって彼らは自分が役に立つのだと感じ、少し幸せな気持ちになれるのだ。なぜならそれは、自分がしてもらったことへの恩返しともなるし、身をもって体験したばかりなので同胞の苦しみ完璧に理解できて、心から助けてあげたいと願っているからだ。

他者に対する愛の行為は波動を高めるので、こうして自分自身をも助けることとなるのだ。そして、適切な振動レベルを取り戻した後に希望するのであれば、魂の故郷に戻ることができるのだ。

進化の構図

*** 輪廻転生の話題に戻りますが、僕たちが他の世を経験したことがあって、物理的生への誕生が始まりでないとするのなら、魂の始まりは、もしそれがあるとすれば、何なのでしょう。**

魂がいつ創造されるのかは分からない。実際のところ、「生命の火花」となる「魂の素」が創られるのだ。

原初「生命の火花」は、その後何百万年にもわたって、自己の進化レベルに見合う物質形態に結びつく経験を通して改善してゆくプロセスを体験する。

*** 「自己の進化レベルに見合う物質形態に結びつく」というのが何を意味するのか分かりません。もう少し教えていただけますか。**

転生のことを指しているのだ。「原始魂の素」が十分に進化して、それよりずっと高度なものになると、それを魂と呼んでいる。

魂は、体という物質形態に結びついて、その経験から学んでゆく。原初の段階では、「原始魂の素」は、より単純な物質形態に結びつく。

最初の形態は鉱物（第一段階）であり、次に植物（第二段階）、それから動物（第三段階）に、そしてさらに進むと人間の段階の魂（第四段階）となるのだが、それぞれの物理的な経験において学習するのだ。

学んだことは永久に魂に蓄えられるので、新しく転生する際には、おびたしい前世の経験を総合して得られた知識を携える。

*** 前世では僕たちが動物だったこともあり、もっと遡れば石に生まれたこともあるのですか。**

初期の段階では各存在の個性性というものが人間の段階ほどには明確でないので、そう言い切ってしまうのは正確ではないが、大体そういうことになる。個性性というのは、序々に獲得されるものなのだ。

*** どういう意味ですか。**

つまり、その段階では、「生命の火花」が独立した魂だとも、石が鉱物界で独自性を持つとも考えられないので、君の魂が石に転生していたというのは正確ではない、ということだ。石を二つか三つのかげらに割ってしまったとしたら、「生命の火花」はどうなってしまうだろうか？ 分割されてしまうだろうか？ そんなことはない。

しかし、犬の個別性の度合いは遥かに進んだものなので、「魂の原型」が犬に転生している、と言うことはできる。

***なぜ、「魂の原型」と呼ぶのですか。**

ここでは、人間の段階にいる魂と区別するためにそう呼んだのだ。これは人間の魂以前の段階で、独自性はかなり高いもののまだ自由意志を持たない、高度な哺乳類に宿る魂に相当する。

***そのような連続的な転生プログラムのようなもので、何を成し遂げようとするのですか。**

魂の存在が、知識においても感情においても進歩し、叡智と愛において成長することだ。

***どこまで？つまり、僕たちが到達できる限界の上限はありますか。**

段階的な進化を通して到達できる限界の上限は、神の能力だ。だが神の能力は無限なので、限界はない、という結論に行き着こう。それは、絶え間ない永遠の進化のプロセスだ。

でももし君が物理的な転生の過程に言及しているのだったら、魂が進化してゆくに従って段々と転生と転生の間が空くようになり、転生しない期間が増えていく。そしてついに魂は、進化のために物質界で転生をくりかえす必要のない段階に達して、より精妙な存在次元で進化を続けるようになる。

そうすると、まだその上に二段階あるのだが、第五段階に入ることになる。だが、地球の人類がこの段階に達するにはまだかなりの時間がかかるので、今そのことについて話をする意味はない。

***くりかえすことになるかもしれませんが、前よりさらに詳しく答えていただけるかもしれないので、同じ質問をします。魂に始まりがあるのなら、終わりもあるのですか。つまり、魂は死ぬことがあるのでしょうか。**

魂が死ぬなどあり得ない。魂が進化しようと大変な努力を払って、自己の一番高い進化段階に達した後で無に帰すのだとしたら、矛盾するだろう。

一つはっきりさせておこう。魂は不死だ。進化するために宿ったそれぞれの体が死ぬだけだ。

***でも、もし魂が高度に進化して神に近づいたとしたら、神と融合することがあるではありませんか。**

魂は進化すると神に近づくが、個性を失うことは死ぬに等しいことなので、神と融合して個別性を失うということはない。むしろ、その魂の意志が益々創造主の意志に近づき、自発的に神聖なる計画の一部となるのだ。

***魂の進化の工程を総括的に理解できるような、全般的な見解や例を示していただけませんか。**

いいだろう。魂の個々の進化は、人生における人間の進歩と似ている。生まれたばかりの赤ちゃんは自分では、生物的にプログラムされた方法で、有機的生命の維持に欠かせない機能を発達させるに過ぎない。自己決定の能力はなく、生き延びるためには両親に完全に依存している。

子どもは成長するにつれ、序々に自立してゆき、次第に両親に依存しなくなってゆく。そして思春期になると、各人は益々、自分自身で探求することの必要性や、決断を下すに当たって自由で自立できていることの必要性に気づくようになる。そこで、多くの場合、両親と対立することとなる。

両親が、年の功から助言しようとしても、若者には人生への干渉に思え、多くの場合、忠告にも関わらず、間違った決定を下してしまう。しかし、苦しむことになったとしても自分自身で体験することが必要なのだ。経験を積み、自分自身の決断がもたらした結果から学ぶにつれて成熟してゆき、両親から完全に独立できる大人の段階に達するのだ。

霊的進化の過程は、子どもが大人になるのと似ている。

最初、「原始魂の素」は、より進歩した他の魂の存在に完全に依存しており、進化も彼らに誘導されている。この段階での転生は、魂が経験を積んで、知力や感情などの特定の能力を開発させるために役立ち、将来、自己の意志を発達させる土台となる。

それは、小さな子どもにとって、まだ自分では重要な決断ができないにしろ、成長して話したり歩いたりするのを学ぶために、周辺の世界との相互交流が必要なものと同じだ。

魂の存在が進化するにつれて、自分で決断を下せるようになり、ある程度の自立性が獲得される。そして魂が十分に成熟すると、自己の運命を決める能力たる、自由意志を獲得する。要は、独立を確立し、自己の進化に関する決定を、自分で下せるようになるのだ。

この時点では保護者役の魂たちは、ある種の行動がもたらす危険性に関して忠告したり警告したりする両親と、同様の役目を果たす。だが彼らは強制はせず、各魂が自分の道を選び、何回でも失敗しながら体験か

ら学んでいくことを容認するし、体験を通して自己の進化の方向を修正するか否かを決めるのも魂自身であることを許容している。

*** これでは幾つかの疑問が晴れましたが、初期の「生命の火花」の段階や、鉱物・植物・動物界での転生が、まだ理解できません。これらの時期に、学ばなくてはならないこととは何でしょう。「原始魂の素」・「生命の火花」・「魂の原型」などとあなたが呼んでいるものは、自分のしていることを自覚していないように思えるのですか。**

進化の初期的な段階に転生する魂の存在が、生まれたての赤ん坊のように自分自身の存在すら自覚できなくとも、学習が妨げられることはない。学んだ事は魂に永久に記憶されるので、魂がもっと進化を遂げるまでは無自覚ではあるものの、新しい転生を始める時には、それまでの前世と転生間の期間との総体から得られた全ての知識を携えるので、ゼロからのスタートとはならないのだ。

初期段階での霊的な進化は、種の進化の過程を見れば理解できよう。君たち自身が、生命の起源というものを何十億年前に位置づけており、初めに地球に単細胞生物が誕生して、それが次第に複雑化して行って、植物界と動物界という最初の区分ができたとしている。そして次に、植物界も動物界も、生命形態は単純なものから多様化・複雑化して次第に数を増やしながら進化した。

たとえば、動物界は、初期の単細胞から多細胞へと変化した。時間が経つと脊椎動物が現れ、その中に魚類がいた。魚類から両生類が、両生類からは爬虫類が進化し、爬虫類からは鳥類が、鳥類からは哺乳類が、何百万年という時間をかけて進化した。

その後、最も進化した哺乳類から原人が誕生し、そこから原始人が次々と生まれ出て、ホモ・ハビルスからネアンデルタール人・クロマニヨン人の段階を経て、そのつど頭蓋骨の容量を増やしなが、現在のホモ・サピエンスに至ったのだ。

実は、こうした物理次元での進化の過程は、全て霊界側から誘導されたもので、進化する魂が、向上しつつある能力を発展させるためにふさわしい物理的な受け皿を見出せるようにするためである。魂の成長のためには、最も単純なものから最も進化したものまで、物質界の全ての形態を体験する必要があるからだ。

より適切な物的な乗り物を魂に供給する必要がある時に、さらに進化した種を物質界に顕現させるのは、進化した霊的な存在たちなのだ。それにより初期の魂は、学習を継続することが可能となる。新しい種は、

既存のものを改変することで生まれ、魂が次の種へと移行する過程が、急激ではなく緩やかになるように計られる。

*** それでは進化するためには、魂は全ての種に転生しないといけないのですか。**

同レベルの種が沢山あるので、全ての種に転生する必要はない。だが、全てのレベルを通過する必要はある。

*** 魂が進化してゆくにつれて、下等な種に転生する必要のある「魂の原型」が少なくなることはないですか。その場合、そのような種はどうなるのですか。**

魂を創造する工程は決して止むことがないので、常に様々な進化段階のものが存在し、物質界に転生して学ばなくてはならない。

だが、魂を創る活動に、生産の頻度が多くなったり少なくなる周期や時期があるのは確かだ。そのため、出生率が多く、人口爆発の時期と出生が下がる時期とを交互にくりかえしているのと同じように、時々、多量の魂やその原型が一時期に集中して、それ以前または以後では数が少ない、ということがある。

しかし全ては、宇宙の進化計画で予定されていることで、高次の霊的な存在たちが必要性を完璧に理解した上でそれを司っていることに疑いはない。同時期に同じ進化の飛躍を遂げる存在が大勢いれば、ある時期に用のない特定種が恐竜のように大規模に絶滅したり、さらに進化した新種が出現して増殖したりする要因になるかもしれない。

*** あなたのお話では、動物の魂も人間に生まれ変われるのですよね。**

すでに言った通り、魂は進化するに従って、さらに進化した物質的な体に転生する必要があるのだが、自分の能力からかけ離れたものでは、その状況が手に負えなくなるので駄目なのだ。

パイロット養成所の生徒も、いきなり旅客機を操縦して訓練したりせず、最初は飛行シミュレーターを使って学習を始め、次に軽飛行機を運転し、準備ができた時に初めて大型の機体を操縦し始めるだろう。

まだ完全な自由意志はないが、知的面でも感情面でもかなりの能力を備えた猿人に転生できた「魂の原型」は、次は原人に転生でき、学習するにつれて、自己の進化の必要性に見合った頭脳を持つ種に転生していく。こうして、動物の魂はヒト科の魂になるまで進化して行って、いつかは人間として生まれ変わる。

でもこれは、一回の転生で急激に起こることではなく、中間層の種に何回も生まれ変わってからののだ。小学一年生の子どもが全教科に受かったとしても、翌年に高校三年生にはなれずに小学二年に進み、後続の各学年を終了した後に、始めて高校三年の勉強ができる時が来るのと同じだ。

*** それではその反対に、人間の魂は動物に生まれ変わりますか。**

前に説明したように、それは進化を後戻りさせることになるので、人間から動物への転生は不可能だ。魂の進化が停滞してしまうことはあるが、すでに乗り越えた進化段階に逆行したり後退したりすることはない。

これは、試験に通らなかった生徒でも下の学年に落とされることなく、翌年に同じ学年をくりかえさせられるのと同じだ。

*** でも、誰もがかつては動物だったことがあって、動物が将来僕たちのようになるのだとしたら、特に進化の程度が近い高等哺乳類への僕らの行いを問題視してしまいます。たとえば、食用や皮革のために飼育することや、狩猟や闘牛のように動物の苦しみの上に成り立つ見世物などは、靈的にそれほど人間に近いのであれば、人を虐待するのと変わらないことになってしまいます！**

その通りなのだ。彼らは君たちの弟分なので、より大きな配慮や尊重に値するのだ。しかし大半の人は、人間の生命や権利すらも尊重していないので、取るに足りないと思われているものを尊重するように期待するのは、さらに難しいことなのだ。

それでも、昔の時代と比べたら、君たちは進歩している。洞窟に住んでいた人びとは人肉を食べることに全く抵抗がなかったが、カニバリズムは現在では、いとうべき非人間的な行為と考えられている。それはなぜだろうか？ そのような原始的な時代と比べて、他の人間に対する感受性が増したからなのだ。

動物に対しても同じことだ。大多数の者が動物の苦痛に敏感になって、彼らが進化上では肉体的にも靈的にも類似する兄弟のような存在なのだと思えば、動物を奴隷化したり虐待したり、殺して肉を食べたり皮で服を作ることなどを止めるだろう。

実際、多くの者がペットを食べる行為は常軌を逸すると考えている。また君たちの世界にも、動物の権利を守るために戦ったり、彼らとの絆を自覚できるほどに成長して食肉を放棄した多くの人がいるだろう。

人類が靈的に進歩してゆくにつれ菜食主義になり、動物の権利が尊重されるようになる。君たちより靈的に一段上の進化したヒトの文明においては、動物の肉を食べることは、君たちが人肉を食べるのをいとうように、忌み嫌われている。もちろん、君たちの世界のように、動物を檻に閉じ込めたり、虐待したり殺したりもしない。

***でも、健康でいるためには肉も含めて何でも食べなければならないし、肉を食べないと何らかの基本的栄養素が欠けて病気になる、といつも聞いてきましたよ。これは一理ありませんか。**

長らく肉を食べ続けてきた人が菜食主義に変わろうと決意する時には、生理的に慣れなければならないので、少しずつ段階を踏んでそうすることが確かに推奨される。

だが、菜食主義者に何かの栄養が不足するという事はない。豆類は、肉からは採れない豊富なたんぱく質の源なのだ。菜食は基本的栄養素が欠けるどころか、全くその反対で、より健康的なのだ。

菜食主義者なら、肉体器官の中で肉が腐ることから生じる多くの病気を予防できるし、進化上自分に似た存在を食べることでアストラル体の波動が狂い低下してしまうのを避けられる。

卵・菜食の食生活は、君たちの生物学上、完全に健康的であるし、体組織が必要とする全てを供給できる。

***魂が特定の種での転生を止めて、さらに進化した種に生まれ変わるの
は、何によるのですか。**

魂がその期間に遂げた進歩による。進化上同等レベルの種に転生しながら充分学び取らない限り、直ぐ上の段階の種に移行できないのだ。一番進歩が速いものが、現在よりも一段上の種に最初に転生できるのだ。

***それは人間でも同じなのですか。つまり僕たちが、肉体的に人間の種
の能力を超えて進化したらどうなるのですか。**

君たちはまだ身体器官の潜在能力をその四分の一も使っていないので、身体が増大する能力を支え切れないほど古くなったというには早過ぎるだろう。だが君たちの惑星の人間種は、その靈的進歩と並行して、ゆっくりだが揺るぎなく肉体的にも進化していつている。だから、自分の進化レベルに身体がついていかないことを心配する必要はない。

前にも言ったが、人間という段階は、魂の進化の終着点ではないのだ。現在の地球人のレベルでさえ、魂的にも肉体的にも、進歩したレベルとは言い難い。

かつて君たちの二段階下にホモ・ハビルスがいて、一段下にはネアンデルタール人がいたように、君たちの上にも霊的にもっと大きな愛と叡智の能力を持った四つのヒト科レベル（4.4から4.7）が存在しているのだ。これらの存在こそ、さらに進化したもっと精妙な身体が必要で、潜在力が発揮できるように君たちの身体よりも機能が低いものとなる。

***でも、そういうスーパー人間は、どこにも見当たらないのですが、どこにいるのですか。**

他の惑星には、あらゆる進化段階を網羅した全ての人類が住んでいるので、君たちよりも高次の存在もいるのだ。それらより進化したヒトの中には少数だが、君たちの進化レベルを高める手助けをしようと君たちに混じって住んだり、今も一緒に暮らしている者もいる。でも、この話はもっと後でしょう。

***僕たちの肉体的な進化はどこに向かっているのですか。つまり、僕らの肉体はどう変わるのでしょうか。**

それは、アルファ草で作った服から絹の服へと、コールテン・羊毛・綿という中間段階を経て衣服を変えていくようなものだ。身体はより精妙により軽やかになるので、刺激の少ない食事を必要とするようになる。また、エネルギー的になり物質的でなくなる。

頭脳の許容量は増し、もっと広い範囲の知力を発達させることができる以外に、テレパシー・透視能力・念動術などの超能力を発揮させることができる。これらの能力は今はまだ君たちの中では眠ったままで、大多数の人にはその存在すらも知られずに否定されている。実際、このような能力を開発できた少数の者は、それが生まれつきのものか本人の意志と努力によるものなのかに関わらず、他の人からは気違い扱いされている。

以上をまとめると、進化すると、きつい肉体労働には適さない、感情や思考に対してより敏感な身体となるのだ。

人間の構成形態

*** 肉体の物理的進化について話しているので、最初に触れた人間の形状のテーマに戻りたいのですが、それについて、もっと良く知りたいのです。**

転生する人間は肉体と魂とで成り立っていて、この魂の部分に一般的に僕たちが脳の属性だとする、知能や感受性や意識や意志などの全ての能力があるというのですよね、これであっていますか。

実際にはより複雑なものだ。

*** では、それを説明していただけませんか。**

いいだろう。宇宙の本質と構造について話した時を思い出してもらえば、「生命の本質」または「魂の素」は四つの異なる状態に濃縮されて、霊界・メンタル界・アストラル界・物質界を形成すると言っただろう。

人間という存在もこれらの性質を持っていて、肉体を持って転生した人は、相互に関与し合う四つの体から成り立っている。振動の低い順から、君たちの誰もが知っている肉体、そしてアストラル（エネルギー）体、メンタル体、霊体となる。肉体以外の体がより精妙なために、複雑な構造や組織を持たないのだと思っはならない。

*** これらの体の性質は何ですか。**

各々の体は、それぞれの遺伝コードを持ち、それに従って構成され、低級な体はより精妙な体に依存すると言える。つまり、それらは全て緊密に関連し合っているので、密度の濃い体は、それより精妙な体から独立して存在することはできない。

*** お話の意味が分かりません。**

物的な肉体は、実を言うと、アストラル体の構造で決定された型やタイプを基に成り立っているのだ。

そしてアストラル体は、メンタル体を構成した型が基になっており、メンタル体は、霊体が示した型に基づいている。

メンタル体は、霊体とアストラル体を橋渡しするもので、アストラル体は、肉体と上位の二体とを繋ぐものだ。

死が訪れる際に起こることは実際には、この四体のうちの一つである肉体が残りのものから最終的に分離することで、活力の供給を失うので、

腐敗するのだ。しかしながら魂の存在は、より精妙な三つの体を維持したまま生き続けるのだ。

*** アストラル体とは何ですか。**

アストラル体は、外見は人間の身体に似ているが、光り輝いていて半透明である。実際には、太陽からの高周波の光で活性化されたヘリウム・アルゴン・キセノン・クリプトンという四つの希ガスを組み合わせた、ガスエネルギーの流動体で構成されている。

転生した人間のアストラル体は、肉体の上に被さっており、肉体と密接に結びついているので、体組織の細胞の一つ一つに浸透し、必要な生命エネルギーを供給する。これらのガスの役目は、肉体が直接吸収できない生命エネルギーの物理的な担い手となることだ。つまり、ガスの微粒子は、太陽の生命エネルギーを取り込み波動を高めて、その後で振動数を弱めながら肉体に伝達するのだ。

受精したばかりの卵子に魂が結びつくと、そのアストラル体が、受精卵から成人に至るまでの肉体の発達と形成の原型となり、転生する魂そのものの遺伝因子の一部が受精卵に授与される場合すらある。

*** 僕は遺伝的な寄与は100%が両親からであって、それぞれの親から50%ずつだと思っていましたが。**

両親から継承されるのは遺伝要素の90%で、肉体に宿る魂は、アストラル体の遺伝的な構造を通して残りの10%を寄与する。

具現する魂は、毎回、自己のアストラル体に施した修正の一部を物理的な肉体に組み入れるので、これが種の進化を引き起こす主な仕掛けとなるのだ。アストラル体で改変されたものは、同時に、魂の進化に伴ってメンタル体と霊体で修正されたものが反映したものでもあるのだ。

*** アストラル体の構造と、それがどのように物理的な肉体と結びつくのかももう少し説明していただけませんか。**

良かろう。アストラル体は7つの層から構成されていて、その各々が異なる周波域で振動しているので個別の色と関連づけられ、肉体のそれぞれの機能と関係している。

アストラル体の構造は、身体に生命エネルギーを正しく供給する電気系網に似ており、無数のケーブルや電線（東洋ではナディスと呼ばれる）で構成されている。これらは、特定箇所で経脈と呼ばれる電線の束にまとまって、ここを大きなエネルギーの流れが通過する。エネルギーの入り口となる主要な中枢は、東洋医学ではチャクラと呼ばれるが、それらは七つで、脊髄に沿って存在している。

中核となるチャクラは、胸骨の奥の太陽神経叢にあるもので、エネルギーを受取り、残りの六つの主要チャクラに分配する機能を持つ。チャクラの各々は、アストラル体の各層と身体との繋ぎ目に当たるのだ。アストラル体の構成や、各層がチャクラや器官とどのように対応するかをより詳しく知るためには、Atzlánグループの『*El hombre, célula cósmica*』（英訳・邦訳なし）を推薦しよう。

***アストラル体は、輝いていて半透明であるとのことですが、それなら見ることができますか。**

適切な訓練をすれば、肉体からはみ出ている通常オーラという名称で知られる、アストラル体のエネルギーを見ることができるようになる。中には自然にこの能力が発達した人もいる。

人が肉体から分離している時にその全体像を見ることができ、見かけは本当に人間のようなのだが半透明で輝いている。通常、誰かが亡くなったばかりの親しい人を目撃したという場合に見られるのは、これなのだ。また、特定の器材を使えば、その振幅を察知したり測ったりできる。

このテーマをもっと広く扱うには、大気物理学者でNASAの調査員として働いたバーバラ・アン ブレナン (Barbara Ann Brennan) の著書を読むことを薦めたい。彼女は、君たちの世界でアストラル体が存在することを、科学的に証明しようと始めた研究者の一人だ。彼女はそれをヒューマン・エネルギー・フィールド (HEF) と呼んだ。

***オーラの色でその人の進化段階が分かるというのは本当ですか。**

本当だ。進化している者は、大きく輝くオーラを持つ。

「愛の法則」に反して行動している者のオーラは汚い。つまり、色が不透明だったり濁っていて、それぞれの色が黒と混ざったようなのだ。情緒的に落ち込んでいたり病気の場合もオーラの輝きは減少する。

***メンタル体と霊体とは何ですか。**

君たちが混乱してしまうので、これらの体の形状については詳しく話さないでおく。

重要なのは、メンタル体が思考の拠点であり、その一方で、霊体は意識や意志や感情の拠点であるということだ。

後ほど、感情の発達や、思考と感情がどのように関係し合うかについて深く掘り下げてみよう。これらは霊性進化の過程の鍵となるものだからだ。

人間の転生とそれが靈性進化に果たす役割

*** もう話に出てきているのですが、転生とは何かを、正確に定義していただけますか。**

輪廻転生は、肉体生または肉体化が何度も起きることを示唆している。つまり、ある身体を誕生から死に至るまで活性させていたのと同じ存在、または同じ魂が、新しく生まれる者に再び宿ることができ、物理的な世界での新しい人生を生きられるということだ。

*** 靈性進化における輪廻転生の目的とは何ですか。**

魂の学習は、学校での学習と似ている。

学校では、勉強をする期間と、生徒が学んだことを試される、評価または試験の期間が交互にくるが、靈性の学習でもこれと同じことが起きる。

肉体をまとわない時期には、魂は勉強をして靈的な準備をする。

肉体に宿っている間は、何からも強制されずに、顕現した魂の自由意志に基づいて、自分が習ったことを実践しようとする。

肉体化する一回一回が、特定の課程を評定する機会だ。その評価に合格すれば、次の課程の学習へと進め、靈的次元で新たな教えを学び始める。

そして、魂の準備が整い新たな知識が身につくと、実践を通してそれを自分のものにしようと、再び肉体に宿るのだ。

*** 中には、僕には乗り越える自信が持てないような厳しい試練に、人生で取り組む人もいるようですが。**

各魂はそれぞれの人生で、その転生に特有で自己の能力に見合った試練に直面する。魂は転生以前に、前進するにはどのような試練が必要なのかを理解しているので、肉体に宿る前の期間に、それらの試練を上手く乗り越えられるように念入りに準備をする。

それは決勝戦に参加するスポーツ選手が、偶然そこに到達できた訳ではなく、一年中熱心に努力をして、事前の様々な選別テストに通ってきたのと同じだ。だから、誰も、超えることのできない試練に直面することなどないのだ。

*** 転生の必要性が何なのか分かりません。なぜ物質界で、何度も生きる必要があるのですか。**

一年で育成される生徒がいるかい？ 一年で多くを学んだとしても、学べなかったことは常にあるだろうし、もっと時間が要することもあるだろう。進化途上の魂も生徒であり、それと同じように一年以上を要するのだ。つまり、必要とされ習いたいと思う全てのことを学ぶには、一度以上の人生が必要となるのだ。

*** ここで一度生きてから別の存在次元に行って、地球に戻ることなく向こうで進化し続けることはできないのですか。**

可能ではあろうが、たった一度しか着ていない服を捨てるのが勿体ないように、最大で百年しかもたない君たちの物理生を一回しか使用できないのだとしたら、何十億年という時間をかけて地球を形成し、生命を育む条件を発展させた物質界を、非有効活用することになってしまう。これは、資源の効率利用という問題だ。

一学年度だけしかない学校があるかい？ 君たちの世界では、生徒は学校を変える必要なく同じ校舎で六年間は過ごすだろう。たとえば小学校では、生徒は六歳から十二歳まで通う。そして、小学課程を修了して初めて、中等教育へ移り学校を変える。育成中の魂にもそれと同じことが起こるのだ。

君たちの惑星は、小学校にいる年頃の魂が学びに来る、初等教育の学校のようなものだ。この学校、この世界が教えられることを全て学習し終えた時に、さらに高度な教育を施す別の学校に移れるのだ。つまり、自己の進化レベルや学習の必要性に見合った別の世界へ転生することが可能となるのだ。それまでは、地球かまたは同等レベルの世界で、進化し続けるのだ。

*** 以前にも生きたことがあるのなら、どうして前世を思い出せないのですか。**

現在の君たちの進化状態では、そうすることが魂のためだからだ。

*** 過去の生とされるものを、どうして忘れる必要があるのですか。**

現在の人生の目的に集中するには、自由意志で行動する妨げとなる他の記憶をなくして、過去の行為に言動が制限されないようにする必要がある。

*** それでは永続的な進化の法則と矛盾するようですが。魂が前世で学んだことを思い出せないとしたら、毎回ゼロからのスタートに戻ることになりませんか。**

具体的な思い出は忘れてしまうが、霊的に学習した事は忘れない。それは魂の霊的な記憶として保管されるが、肉体の記憶には留まらないので、その意味ではどの転生も確かにゼロからのスタートとなる。

君たちに分かるよう、昨今の例を挙げよう。

ある人がコンピューター情報処理学の最初の課程を始めたとして、コース開始時に、練習したり問題や課題をメモリーに保存するために、パソコンを一台与えられたとしよう。コース修了時には、学生はコンピューター処理に関する一連の事柄を学んでいる。

翌年はクラスが変わり、パソコンも変わる。新しく与えられるパソコンはメモリーは空だが、より大きな処理能力を持ち、知識を増やしても対応できるもっと大きな容量がある。

その学生が、最初のパソコンのメモリーから二台目に、文書や課題を移せなかったとしても、情報処理について学んだことは忘れはしない。その知識を使って新しいパソコンを好きなように設定できるので、ゼロからのスタートとはならず、初年度で得た知識を駆使できるのであり、一台目のパソコンや作成済みのデータがどうなるかには影響されない。

魂が新しい肉体に宿る時の身体は、年初に学生に渡され学習に使用していくメモリーゼロの新しいパソコンのようなものだ。

肉体は時間と共に消耗していき、しまいには魂の進化を継続させるには役に立たなくなる。それが古いパソコンを「退職」させなければならぬ時で、つまり魂が肉体から離れる時なのだ。

物理的な記憶である頭脳は残りの肉体と共に消滅するが、霊的な記憶はそうならず、その人生で学んだ全てを記録する。魂は肉体から分離している状態では、肉体に能力が制限されることがないので、前世の詳細の全てにアクセス可能なのだ。

*** それでは、死んだら全ての過去生を思い出せるのですか。**

魂がこれまでの転生期間と非転生期間に経験したことは全て、個人的に利用できるように保存されるが、魂が余り進化していなければ最近の転生までしか記憶をたどることができない。魂が進化するにつれて、前世の記憶を遡る能力が増すのだ。

*** 前世を忘れる必要性がまだ理解できません。前世の記憶がどうして魂にとって不都合なのでしょう。僕には、どちらかと言うとその反対に思えるのです。**

魂が過去生の記憶を保持できれば、進化の工程にもっと自覚を持ち、転生を有効に活用して成長しようとしませんか。

君の理論は特定の進化レベルに達した魂にとっては正しいのだが、進歩の少ない魂は知識を適切に使えず、情報過多で発展が妨げられる怖れがあるので、有益にはならないのだ。そのため過去の情報は、魂が進化してそれを知る努力をしてゆくに従って、入手し易くなるという訳だ。

*** 過去生の記憶がどのように人の進化の妨げとなるのかははっきりしないので、理解できるような例を挙げて下さい。**

いいだろう。誰かが過去生で殺人を犯し、本人も、一緒にいた他の魂たちも、その人の悪業を覚えているとしよう。今この魂は、自分が犯した罪を反省し、新しく始める人生で償いをするつもりだとする。そして過去と一緒に暮らし彼がしたことを覚えている人びとの間に、再び生まれ変わったとする。

このような状況では、その人は自分の過去に刻印を押されてしまい、殺人をしたと覚えている人たちから軽蔑され続けるだろう。それは、彼らが霊的に進化していないために、誰もが過去に間違いを犯したことがあって更正の機会が無数に必要なのだ、と理解できないからである。だから、過去の落とし前をつけようと彼に復讐をしたがる者もいるかもしれない。

同じように、当人も周囲の重圧で自分を責め立て、最悪のケースでは、彼を追い込む者に仕返しをして再び犯罪行為に走ることもあり、その場合には、改善どころか霊的に停滞してしまうことになるのだ。

*** 過去生を忘れれば、どんなメリットがあるのでしょうか。**

魂が、証人保護プログラムで守られたとでも考えて欲しい。保護された証人はかつての犯罪者だが、正義に協力するので昔の仲間の報復から逃れられるように、新しい身分と別な場所での新職をあてがい、危険から遠く離れた新生活で社会復帰させようとするのだ。

転生することと過去生を忘却することでは、これと同じ、新しいアイデンティティを獲得するという効用が得られるのだ。

*** これはいつでも必ずそうなのですか。つまり死なずに生きている間は、過去生でのことを思い出せないのですか。**

決して思い出せない訳ではない。実際最初に言ったように、特に幼児期においては自発的に思い出す人たちもいるし、退行催眠術によって詳細を思い出せる人たちもいる。

東洋では、過去生を自発的に思い出す子どものケースが、西洋よりもずっと多い。これは、輪廻転生を信じる地域であるために、子どもたちが覚えていることを話しても親に禁じられないためだ。

しかし、過去の事が人を愛せない口実にされないように、愛の学びにおいて十分に進歩した魂が大多数生まれ変わる世界にならない限り、意識的な記憶を持つことは無理であろう。

我々が皆兄弟であり、誰しも過去に間違いを犯しており、更生するために無数の機会が必要とされたことを理解できた時に、思い出せるようになるだろう。より進歩した世界では、前世の一つや二つ思い出せるのが普通なのだ。

***引き合いに出されましたが、ヒンズー教とか仏教などの輪廻転生を信じる東洋の宗教が主流となる地域の方が、僕たちの地域よりいいとは思えません。**

ヒンズー教がいい例で、輪廻転生の信仰が人類の不平等を正当化するために利用されているじゃないですか。カースト制度のことを指しているのですが。

これは、魂を進化させるのは内面的な成長であって外面的な知識でないことを知る、いい見本だろう。輪廻転生の存在を信じていても、我欲を正当化するために、その意味づけを変えてしまったのだ。また、進歩の少ない魂は、知識を正しく使えずに情報過多で発展が妨げられてしまう、といういい例である。

カースト制度を正当化するヒンズー教徒は、魂の直近の過去も知らずに、不可触民階層に生まれた者は前世で悪行をしたと想定し、その人を助ける代わりに、その人生をできる限り困難なものにする口実としてカースト制を利用するのだ。物質的にもっと恵まれた階層に転生しているのに、恵まれない者に手を差し伸べる代わりに、自分で努力をしても窮乏から抜け出れないように踏みつけるのだ。不平等を正当化するのは、我欲に根ざした嘆かわしい結論だ！

こうして、物質的に恵まれているから優位だと思っていた者が、窮乏や人種差別や無理解を身をもって体験するように、次の転生では、不可触民のような悲惨な環境に生まれ出る羽目になるのだ。この経験の後で、

もう一度支配階層に転生するなどして、社会の諸相を変更できる立場になれば、不可触民の前世で内面的に学んだことを思い出して、カースト制度の廃止に尽力することになるかもしれない。

これと反対に、後世に生まれた仏教は、精神的にずっと進んでいるので、輪廻転生の信心を維持すると共に隣人愛の信念も取り入れていて、隣人愛を妨げる口実を探そうとはしていない。そのため、仏教徒は輪廻転生の信奉者だが階層主義者ではなく、カースト制度に反対なのだ。

霊界との交信

*** しつこくて申し訳ないですが、魂の進化を成し遂げるには、連続的な転生のシステムがどう機能するのかを、皆が自覚していた方がよくありませんか。**

魂の進化は、その魂自身が本当にそれを決断した時にのみ、本物となる。

魂が、成長を指導してくれる高次の靈魂の存在を常に意識してしまえば、指導霊がいるかどうかにかかわらず、自由に行動できなくなってしまおう。大人に対する恐れや尊敬から、親や先生の前で特定の行動を取ってしまう子どもと同じだ。大人がいなければ、いたずらをしてもしかる人がいないので、子どもはもっと自由な気分で、本来の姿に近い全く別の振る舞いを見せる。

後見役の高次の靈魂の存在がより明らかなのは、魂が肉体から解放されて霊界にいる期間だ。

記憶を失くして、監督されている確証もないまま物質界に転生するのは、魂が何の制約も受けずに完全に自由に行動できるため、自己の経験を通して自分自身でしたいことを決めるためだ。

*** それでは、肉体に宿っている間は、霊的な真相を自覚できないのですか。**

そうとも言えない。もしそうだとしたら、肉体に宿った状態の君と私とが、今そのことで話をしているということもあるまい。

霊的な真相を掘り下げたいと心から願う者は、必要な答えや霊的な援助を得るであろう。君自身の例を見てごらん。君は、本質的な疑問を自問し始め、心から探し求めたので、その答えを受け取りつつある。だが、大抵の人は違う方向を見ていたいのだ。

宇宙が物理的にどう機能しているのかを知りたい、という偉大な好奇心が、君たちを毎回、さらに重要な科学的な発見をするように駆り立てている。霊性においても魂が充足感を得るためには、自己の疑問に答えを見出す必要があり、因果関係を探求することで、表面的には隠れている事実を発見できるのだ。

*** それはどのようにするのですか。どのようにして答えを得るのですか。**

「魂の法則」は魂に刻まれているので、自分自身を掘り下げようと奮闘すれば、表面的には隠れている霊的な真相が分かるのだ。

魂には、目の前の偽物から本物を見極められる何らかの力がある。それは良心や感情のささやきであり、魂の進化が進むにつれて、益々明瞭なものとなる。時々立ち止まってそれらに耳を傾ければ、多くの答えを得られるだろう。

しかし自分の真実でもある霊的な真相を知っていくには、自分で努力してそう決意しなければならない。だから、古いことわざでは「汝自身を知れ、しかるに宇宙を知るであろう」と言うのだ。

***でもその方法では、両親に捨てられる小さな子どものように、魂を運命に委ねて見捨ててしまうことになりませんか。**

魂は見捨てられてはならず、ガイド役の霊たちが常に助けてくれている。自分で本当に解決できない問題がある時には、さり気なく答えを暗示してくれている。

ただ、君たちには多くの怖れやタブーがあり、自分の先入観や思い込みと折り合いがつかない回答を認めようとしないので、霊界にいる同胞は、なかなか支援できずにいるのだ。

*** どういうことですか。**

例を挙げようか？ 死に対する君たちの態度を見てごらん。今日では、死は西洋社会ではタブーであり、魂が肉体を離れる度に、家族や愛する者の間で、真の悲劇が繰り広げられる。どうしてだろうか？

自分のパラダイムを変えなければ説明がつかない、という理由だけで、君たちが死後に魂が存命する証拠を見ようとしなからだ。別の次元に渡った魂が、別れの挨拶をするためや愛する者を安心させるために何らかの形で現れる時、それが君たちの思考回路と相容れるものではないので、単にあり得ないと思いついて、見たり感じることを信じようとしなないのが常だ。そして頭では、ショック状態による幻覚に違いないと思いついてしまうのだ。

他方、宗教の影響もある。宗教は、実際の証拠や証言にはよらず、信じ難い馬鹿げた教義に基づいて、死や死後の説明をするのだ。また、彼らが承認していない霊界とのコンタクトは全て、単なる想像、あるいは過去の時代のように「悪魔のしわざ」だと断定し、あの世とのいかなる交信も恐れさせるのだ。

また、機器で計測できるものしか信じず、この件を真剣に調査することを拒否した物質至上主義の科学の影響もある。物質至上主義の科学は、

末期患者や臨死体験をした病人を診て、思い切って死のベールを剥がして真相に近づこうとする、少数だが勇気ある研究者の仕事を、あらん限り邪魔するのだ。

結果として、死の過渡期にいる人やその愛する者たちは、信じるに足る説明も慰めになる希望も見出せずに、情緒的には完全に見捨てられてしまうのだ。

***では、霊界から助けてもらうにはどうしたらいいのでしょうか。**

とても簡単な事だ。ただそう頼めばいい。心からの願いをテレパシーで霊界に送って、何が起こるかを待てばいい。ただ単純に、自分の状況や必要なことを話して、助けを頼むのだ。

指導霊たちは、これらのメッセージを受け取って対処するためにいるのだ。心から誠実に、霊的進歩を達成したいという思いで頼むのであれば、返答が得られるだろうかと疑う必要はない。

これが本当の祈りなのだ。神やイエスや聖母を崇め祭るお祈りを何回となくくりかえすのが祈りではないし、それは君たちとっても霊界にとっても全く意味をなさない。

***ガイド役の魂たちとはどう交信するのですか。僕は、言葉でもヴィジョンでも他のいかなる方法でも、ただの一度も聖霊と交信した覚えがないのですが、霊界からの援助とはどういうもののでしょうか。**

君は、私と交信を始めるまでは、と言いたいのだろう。今では私も肉体を持っていないからね。だがこれは通常の交信方法とは違うので、君の言いたいことは理解できるよ。

受け取る支援が明確でないとしたら、それは君たちの自由意志に干渉しないように、非常に精妙な方法で与えられるからだ。それに、魂が本当に必要としていて、受け入れ態勢がある時にだけ、手助けされる。

ガイド役の魂は、良心のささやきを介して、頭の中で君たちに話しかける。他の魂たちも頭の中で話しかけ、悩み事の種類に応じて助言する。よって、各人の良心の声の中には、ガイド霊や霊的な兄弟などの霊界からの声も一部に含まれていることになる。だが、無数の転生で培った叡智を宿した自分自身の魂の声も含まれているのだ。

いずれにせよ、この心の声は、問題を解決するための助言や援助となって、人生が辛かろうが幸せであろうがいかなる状況であろうと、そこから君たちが霊的進化のための最大の恩恵を引き出し、我欲を取り除く工程や無償の愛についての学習に役立つようにしてくれる。援助を受け

るには、それが可能だと確信し、答えを見出す必要のある質問をして、良心のささやきもたらす返答に耳を貸さなければならない。

*** これは、瞑想と関係しますか。**

瞑想も有効だ。霊的観点から言えば、瞑想は、日常の問題から頭を解放して内面の声が聞けるような冷静な状態に達することだ。それは、自分の欠点を見つめ改善し、気持ちを大切に始めるのに役立つ。

瞑想は、自分自身を知るために自己分析をすることでもあり、いつ我欲のままに行動し、いつ心に従って行動したかを認識できる。それが分かるのであれば、どんな瞑想法を用いるかは、重要ではない。見栄えが良からうが悪からうが、構わない。

人は往々にして、本質的なものではなく、表面的なものにこだわるが、何をするかではなく、どういう意図をするのかが問題となるのだ。

こんなことを言うのは、深い呼吸をしながら頭を空にして、何時間も蓮の姿勢のまま座って我慢してられる、大変器用で柔軟な人たちは沢山いるのだが、瞑想状態から離れるやいなや霊的な悪癖に戻ってしまい、特定の技法を行っているだけで自分をスピリチュアルだと思いついでいるからだ。それは瞑想ではなく、そのふりをしているだけなのだ。

*** でも、どうやって良心の声を聞くのですか。僕には大変難しいことに思えます。一体どのように、良心の意思と頭の中の他の一般的な思考とを見分けるのですか。全く簡単には思えませんが。**

良心の声を明瞭に聞くには、しばらくの間頭の中のおしゃべりを止めさせ、その間日常的な心配事から頭を解き放とうとしなければならない。一日に独りになれる静かな時間を設け、自分の欠点やその日の行動を内省してみる。そして、心から願えば、必要な答えを見出す助けや、試練にしかりと立ち向かえる力が与えられる。

良心の声は、我々をおだてるものではなく、ひいきもせず嘘もつかず、我々のエゴを不快にするようなことも言う。

霊的に交信できるチャンネルが開いている人もいるが、それは、この受信方法を信頼して能力を改善しようとしたからだ。そういう人は、自分で熟考して得た答えと指導霊たちから貰った答えとを見分けることができ、彼らと意識的に対話ができる。

*** これが、霊界側が僕たちを助ける唯一の方法ですか。**

いや、君たちは皆、睡眠中にもより直接的な援助を受けている。

身体が眠っている間、魂は物理次元をしばらく離れて霊的次元に行くのだ。そしてそこでガイドや親しい者に出会って、日々の諸問題を解決するために手を貸してもらい、頑張る気力を貰う。つまり、意識はしていないが、夜の間には皆がアストラル体で旅をしているのだ。

大抵の人は、睡眠中の霊界との交流体験をはっきり覚えてはおらず、夢として大まかなイメージや記憶が残る。夢には、覚醒状態では理解しづらい事柄を明確にしてくれる霊的な援助が、暗号化されて含まれているのだ。

だから、元気でいるには、十分に睡眠を取ることがとても大切なのだ。良く眠れないと霊界と直接交信できなくなって、物質界の試練と向き合うための助言や活力を受け取れないからだ。

*** それでは、夢はアストラル旅行（幽体離脱）の記憶なのですか。**

いつもそうではない。大半が精神的な心配事だ。しかし中には、幽体離脱の多少ははっきりとした記憶もあるが、その多くが暗号で象徴される。

*** それでは夢には解釈があるのですか。**

夢が霊界からの援助であれば、解釈できる。全ての夢に共通のシンボルがあり、通常はシンボル自体に解釈の鍵が存在する。

雄牛は試練や物質的誘惑を表し、子どもたちは感情を意味する。

水は、感受性だ。清らかならば、感受性もそうだということだ。水が濁っていれば、感受性にも何らかの翳りがあるのだ。利己的な意図を表す場合もある。

家は、霊的な内面を表す。ドアからではなく窓から家に入るのは、正直ではなく、何かを隠しているか操ろうとしていることだ。

徒歩や車で様々な困難がある道を進むことは、霊性の道程を表すことが多く、そこに出現する障害物が、これから遭遇する試練を意味する。

アイスクリームは自己満足を表している。

下に落ちることは情緒的下落、落ち込みを意味する。

*** でも、それぞれのシンボルの意味を知らなければどうしますか。**

シンボルの解釈は習うことができる。

通常は夢自体の中に解釈の鍵があって、魂自身が、その夢が重要なのかどうか、自分に関係があるのかないのかを感じ取る。

もし独りで解釈できないのなら、霊界が理解できるように必要なヒントをくれるだろう。だが初めに、自分を掘り下げたいと思う必要があり、それから睡眠中に、そのために役立つものを貰えるのだ。

***なぜ直接的ではなく、暗号で援助が与えられるのですか。**

魂の自由意志を侵さず、魂自身に自己発展の努力をさせるためだ。

いい数学の教師であれば、生徒に本当に力をつけさせたい場合は、問題の解答を直接与えてはならず、行き詰った時に適切で正確な説明を与えて、生徒自身で問題を解くよう手助けをすべきだと知っているものだ。

進化途上の魂にも同じことが言える。解答を直接あげてしまったら、自力で霊的な試練を解決しようとしないので、進歩がない。怠慢になり、ガイド役が自分の問題を解決してくれるのを待つようになるだろう。

その人自身が決めなければならないことを教えてあげることも、自由意志に関与することになるので、正当とは言えない。魂は自分で決断しないとイケないのだ。だが、自力で問題を解決するために知っておく必要があるのに独りでは気づけない重要な細部もあるため、ヒントは与えられる必要があるのだ。

魂が、自己の問題を完全に自覚しており、独りで解決する能力がある場合には、助けは不要なので与えられない。それは、裕福な人びとの地域に食料を配りに行くようなもので、彼らは配給される食料は独自に入手できるので、全くの無駄となってしまうのだ。

*** どうして僕たちは、睡眠中に離脱することを自覚できないのでしょうか。**

自分の意志で肉体から離れられて、幽体離脱の間に起こったことを完全に自覚している人たちもいるよ。

***人間は皆、アストラル旅行ができるのですか。**

無意識だが、睡眠中の特定の段階では皆が旅をする。突発的に離脱に成功して、そのことを自覚する者もいる。だが、意識的にできる人はほんの少数だ。

的確な訓練をして忍耐力を持てば、君たちの多くが、意識的にアストラル体での旅を実現できるだろう。だが、大多数がそれが可能だとは信じておらず、そのための練習もしないので、結局何も起こらないのだ。

進化した世界では、個人的な成長に役立てるために、子どもの時から意識的にアストラル・トリップを教えるので、誰にでもできるのだ。

***アストラル旅行がし易いかどうかの能力は、何によって決まるのですか。**

各人の魂の能力や、霊的に進歩したいという意志、霊性に関する自覚、生まれる前に選択したことなどによる。

身体から完全に離れる必要がなく、もっと直接的な方法で霊界と接触できる天性の能力を生まれつき備えている人もいる。そういう人を通常、霊媒と呼ぶ。

*** あなたにとって霊媒とは何かを、教えていただけますか。**

霊媒とはチャンネルを意味する。

霊媒は、他の人と比べて、より直接かつ明瞭に霊界と交信できる人で、一般人が普通の電話回線しか持っていないとするなら、インターネットの高速回線ADSLを持っているようなものだ。

大半の人は、自分の周囲からは、五感が捉えられるものしか感じ取れないので、物質界の向こう側に霊界が存在するというのに、全く確信が持てない。

だが霊媒は、あたかも強力なアンテナを持つかのように感度が高く、一般人の普通のアンテナでは捉えられない様々な周波域で送信されてくる放送でさえ、受信できるのだ。

*** でも、霊媒が皆同じではないし、その霊媒能力も違うと思うのですが。霊媒力には様々な種類があるのでしょうか。**

そうだ。その表現形態や霊界との主なコンタクトの種類で分類することが可能だ。

この分類形式を用いると、霊体を見ることのできる霊視霊媒と、彼らの話を聴くことのできる霊聴霊媒がいる。

自動書記は、筆記によってメッセージを受ける者のことで、自分が書く内容を自覚している場合としていない場合がある。

直感霊媒は靈感を与えられて、直接頭の中で霊的メッセージを受け取る者だ。

憑霊霊媒は、自分の身体や感覚の全体または一部を、肉体のない霊が物質界で具現するために一時利用できるように貸したり受容する者で、後で自分の身体のコントロールを取り戻す。

治療霊媒は、高次の霊から送られるエネルギーを流通させて、肉体を持った魂の生命状態を改善しようとする者だ。

過敏霊媒は、五感を使わずに、霊の存在やその状態またはメッセージなどを感知できる者だ。

予知霊媒は未来や過去の映像を捉えられる者だ。

*** それでは霊媒者は、自分のガイド役とずっと簡単に交信できるので、他の人よりも優遇されていますね。**

生来の霊媒体質というものは、他者を「肉体の有無に関わらず」助けるために使用されるべき道具のようなもので、それを利用してもっと速く進化が遂げられるように、特定の場合に必要な魂に与えられる。

だが、一旦生まれ変わると大半の者が、能力のない人びとに理解されずにその力を持たない方が良かったと思ったり、個人的な利益に力を使用しようとするのだ。

交信できる範囲は、指導霊に限定されずに霊界全般となるが、この世界も君たちの世界のように、皆が善人である訳ではないのだ。様々な進化段階にいる霊がいて、霊媒のチャンネルは全てに開かれているので、良い影響も悪い影響も受ける。霊媒がチャンネルをどのように使用したいかによって、高次あるいは低次の霊の影響を呼び寄せるのだ。

*** それなら低級霊も、僕たちに影響できるのですか。**

そう、低級霊もだ。肉体を持った者は全て、霊媒であろうとなかろうと、霊魂からの影響や助言を受けるが、それには低級霊も含まれている。だが高級霊の場合と同様に、彼らを甘んじて受けない限り関与されることはない。

低波長の存在は、自分が波動を下げた時にだけ同調してくる。魂の弱点や欠点のスキをつかれて、つけ込まれるのだ。有害な感情や「愛の法則」に反する行為などが、つけ込まれるきっかけとなる。

*** でも低次の霊は、いつも嫌がらせをするために、たとえば霊媒などに近づくのですか。**

そうとは限らない。辛い環境から抜け出すための助けを求めて、近づくこともある。彼らは、何かの理由で物質生に強く執着を残してしまった魂で、霊界から直接援助が提供されていることに気づけないのだ。

苦しむ彼らにとっては、霊媒は霧の中の灯台のようで、霊界の目的地に向かって彼らを前進させるために必要な援助を与える仲介役となる。

*** 霊媒力はこの世では余り評判はよくありません。**

そうだね。君たちの進化レベルの世界ではよくあることだ。

*** どうしてですか。**

色々な理由がある。

一つには、隠れた私欲を満たすために低級霊を引き付けて霊界との交信を利用しようとした者や、金儲けのためにいかさまをした者などが、悪い手本となったからだ。

また、地上の権力者にとっては霊媒力が発達してしまうと不都合だったので、あらゆる手段で弾圧し、蔑んだのだ。霊界から直接与えられる知識によって人類が覚醒してしまい、霊的な真相や人生の真の目的を自覚して進化を阻む鎖から解放されようとしたら、権力者は、私益のために人類を騙し操り搾取し続けてきた全ての影響力を失う羽目になるからだ。

***でも誰もが霊界との独自の繋がりを持っているのだとしたら、他者との媒体となる特別な繋がりを持つ人がいるのはなぜでしょう。**

全ての人間の霊界とのチャンネルが開いていたとしたら、他者のための媒体になろうとして、魂が転生する意味も余りないだろう。

だがこの世の多くの者は、意志力が足りないためか、疑念や怖れのせいか、自分の繋がりを作動させるのが非常に難しく、必要とする援助を受けられないでいるのだ。そこで霊界は、肉体に宿った魂に進化上必要なメッセージを伝えるという明確な使命を担って生まれて来た特定の魂を、代弁者として利用する。

はっきりさせておきたいのは、霊界と人間世界との交信は、常に存在し続けるということだ。どのようにどんな形でそれが行われるのかには関わらず、転生した魂は、霊的な援助を受けて進歩する必要があるのだ。

***でも霊界には、助けてくれようとする善意ある靈魂だけでなく、進歩させまいと画策する低級霊もいて、彼らも僕らと交信できるのですよね。**

相手がどちら側の者で、どういう意図があるのかは、どうやって見分けるのですか。

メッセージの質を吟味することが、相手の能力を把握する一番いい方法だ。

心に届き愛を育むために役立つ善いメッセージなら、善良な霊からのものに疑いはない。

メッセージによって我欲の感情が引き起こされるのなら、相手がイエスや聖母や聖テレサなど、どんなに偉大な名を語ったとしても、それは善い意図など持たない詐欺師だと考えて間違いない。

イエスが言ったように「実を見て木を知るのだ。健全な木に腐った実はないし、腐った木もいい実をならせることはできない」のだ。

***どの霊と交信するかは何で決まるのですか。**

霊との交信は、インターネット上の人と通信することに良く似ているが、それはどちらの場合も、話し相手を見ることができないからだ。両

方とも遠くの場所の人たちと連絡を取れるが、その人たちを知らないの
で、善意の人もあるだろうし、我々を騙そうとする悪意ある人もいるだ
ろう。

我々の興味の対象により、連絡する人のタイプが変わる。特定のテー
マに関心があれば、その話題のチャットや掲示板を求めて、同じ趣味の
人たちと交信するだろう。

たとえば、他者を支援する非営利団体に加入したいと思っている人は、
そのテーマのサイトや掲示板を探すだろう。これは、善意のない者が興
味を持つ話題ではないので、このような掲示板で悪意のある者に出くわ
すことは余りない。

だが、た易く金持ちになれると触れ込んだり、写真で恋人選びをする
ようなところであれば、何もいいものは得られないと確信すべきだ。

それと同じように、霊媒であろうとなかろうと、各人の思考や行為の
近似性によって、どういうレベルの靈魂の影響を招くのかが決まるのだ。

つまり、賭け事やくじにはまっている人は、死後も依存性が抜けない
賭博狂の靈の影響を引き付け、これらの靈が自分たちの期待を満たすた
めに当事者の悪癖を増長するのだ。

その反対に他者を助けたいと思う人は、善意ある靈魂の影響を受けて、
目的を果たすように支援してもらえるのだ。

したがって、高次で善意ある靈魂と通信するには、自他の魂の改善に
その交信を役立てたい、という誠実な思いを持つことが一番確実なのだ。
気高い気持ちや思考になると、チャネラーとその周りには高い波動が生
じるので、善意を持たない低波長の靈は近寄れなくなるのだ。

***でも、霊媒であろうとなかろうと、有害な靈の影響を被ってしまって、
更生したいと思っても、彼らのせいで正しい方向に戻れなくなることは
ないでしょうか。**

そんなことはない。どの道を選ぶかは自分次第だ。

確かに、いじめの対象を失いたくないがために影響を及ぼし続けよう
とする、昔の悪い仲間と手を切るのは難しいだろうが、各人の「自由意
志の法則」は侵害できないので、彼らは、本人の意志以上の影響を及ぼ
すことができない。

しかも話した通り、我々全員には、魂を指導し守護してくれる、高度
に進化した個人的なガイド靈がついているのだ。宗教では「守護神」と
呼ばれる者だ。

この存在は、多くの低級霊を束ねたよりも強い力を持ち、正しい道へと我々を導くために、常に我々の傍にいる。その気になれば、絶えず邪魔しようとしている低級霊たちなど、簡単に追い払ってしまえるのだ。

だが多くの場合、人はこの援助を欲しがらず、本人の自由意志が尊重されているので、「守護神」は自分の生徒が付き合いたい仲間と一緒にいることを容認し、生徒が再び意見を聞きたくなる時まで待機するのだ。

また、それほど高次ではなくとも、手助けしようと思ってくれる別の存在もいる。彼らは、愛する仲間や亡くなった家族や友人、または知らない人の場合もあるが、必要な者を助けようとする善意の霊たちなのだ。

しかし、くりかえすが、本人が彼らの声や援助を受け付けなければ、時が熟すのを待つしかないのだ。

*** どうしたらこのようなネガティブな霊の影響を振り払えますか。**

君たちの態度でだ。「愛の法則」に従って感じ、考え、行動しながら生きるようになればなるほど、高次の霊の影響を引き付けるようになるので、低級霊に嫌がらせをされる機会を与えなくなるのだ。

転生のプロセス

*** 初めに、死後あるいは肉体から離脱した後に、何が起こるかについてお話ししましたが、生まれる前のことをもっと詳しく知りたいです。**

どうやって転生するのですか。魂が生まれる前からあるとするなら、それが宿る肉体との関係には始まりがあると思うのですが、魂はいつどのように赤ちゃんの身体に入るのですか。

一般的に、転生する魂は、受胎前から未来の家族を訪問し始め、中には、母親と父親に子どもを持ちたいという欲求を呼び起こさせるケースもある。

受胎すると、魂は受精卵と結びつき、妊娠中はそれが正しく成長して発達できるように関与するので、肉体との絆は、魂が肉体から分離する時まで切れることがない。

妊娠中は、転生しようとする魂のアストラル体と胎児の身体が、段階的に融合していく。生まれ変わる魂は、胎児にされることや母親が感じ取ることなどを感知し始める。

この時期、魂はすでに肉体と結びついたとは言え、まだ充分自由に移動でき、霊界の友人やガイドとの交流もある。霊界から物質界、あるいはその逆を、魂が行ったり来たりしている移行期には、誕生に備えて、物質界での両親や親戚になる者たちと馴染んだりする。

しかしながら、魂が赤ちゃんの身体と合体するのは、通常は誕生の瞬間だ。

*** でも、子どもが欲しくないのに生まれて来てしまうカップルが沢山いますが、それはどうしてなのでしょう。**

避妊対策を講じている場合でも、両親の性欲を刺激して、うっかりさせるのだ。

*** 一方では、子どもが欲しいのに、どんなに努力しても生まれない両親もいます。**

君たちは、自分たちが転生の過程をコントロールしているとも思っているのかい？ そうだとしたら、間違っているよ。すでに言った通り、転生は、魂同士の転生以前の合意によるのだ。

肉体的に何の障害もないのに、子どもが欲しくてもできない場合がある。それなのに、別の場合では、その気がないのに思いがけなく子ども

ができてしまうことがある。だから「生と死は天の意思」いう民間のことわざは的を得ていると言えよう。

人間はこの世に魂がやって来るのを、妨げたり遅らせたりはできる。だが、霊界で予定されていなかったり、霊的基準に照らして妥当だと判断されなければ、魂が来るよう強いることはできないのだ。

また胎児には、善し悪しを知覚できる魂がすでに結合しているのだから、ずっと繊細に扱わないといけない。胎児は、愛情をもって受け入れてもらえると感じれば嬉しくなり幸せで、歓迎されなかったり中絶などの危害を加えられると感じれば苦しむのだ。

*** 親が望まない子どもや、育てきれない子どもは生まれにくい方がいいと考えたり、奇形があって生まれるとこの世で苦しむことになると考えて、妊娠中絶に賛成している人もいますが。**

それなら、子どもがすでに生まれていて面倒を見られなかったら、同じような理由で、捨てたり殺したりするのが正当だと思うのかね？

*** もちろんそうは思いませんよ。生まれたばかりの子どもを捨てたり殺したりするのは、非人間的な行為で犯罪になってしまう。**

それならどうして、子どもがお腹から出た後では犯罪で、お腹にいる時にはそうは見なされないのかい？

*** 子どもが形作られる前の、まだ胎児とならない妊娠初期の何ヶ月かの間に流産させる、ということなのだと思いますが。**

君の話の話を聞いていると、問題の焦点は、形成中の命が細胞の集合体から子どもと見なされる境界を越えるのはいつか、ということのようだ。細胞の集まりと考えられている間は、中絶は合法的だが、その固まりが子どもと判断されるなら、生命尊重の思想を真面目に検討しなければいけないと言うのかい？

*** そうだろうと思います。**

その考え方によると、胎芽が、細胞の集まりから子どもだと判断される境界を越えるのはいつかね？ 十日後か、一月か、三ヶ月か、五ヶ月か？

*** 分かりませんよ。いつから子どもだと見なすかについては、人それぞれ独自の意見を持っていると思います。**

もしかすると三ヶ月未満はそうではなく、それ以後は子どもと見なすのかもしれない。

実際のところ、中絶賛成派は、人間の命は誕生をもって始まり死によって終わるとする主義に基づいており、形成中の存在をいつから人間だと見なし始めればいいのか、はっきりと分かっていない。そのため、これと同じ人びとが、病の末期で苦しむ場合や寝たきりの重度の身体障害がある場合などに、安楽死を支持することになるのだ。

こうしたことが起こるのは、生命を物質主義的観念で捉えるから、つまり、物理的生命の存在しか認めず、物質界に具現するために使う肉体を、人間そのものと同一視しているからだ。

だからこの視点では、妊娠の初期の、胎芽の細胞がまだ赤ん坊の形態を取るほど分化していない段階では、人間だと見なししていないので、妊娠中絶に不都合を感じない。

しかし霊的観点から見れば、「魂の素」がなければ生命はあり得ないので、肉体そのものは、それが胎児のものであろうと子どもや大人のものであろうと、生命ではない。

生命とは魂の命であり、転生する肉体の命ではない。注目すべきは、肉体の発育ではなく、魂がいつ胎芽と結びついたかで、それが命の始まりであり、それはすでに言った通り、受胎の時点なのだ。

それゆえ、魂が肉体に結合した後に妊娠を中断させるのは、生まれ変わる魂の自由を侵すことになるのだ。

*** でも、この世の大部分の人は、生まれる前の生命の存在を信じてはいないので、物事をそのような角度から見るのは、母親にとって大変難しいだろうと思います。**

全ての人間は、よって、全ての母親は、肉体化がどのように行われるのかを本能的に知っている。肉体を持つ誰もが、数え切れないほどこの過程を経験してきたからだ。

良心の声は、中絶をすれば生まれ変わって来る存在の自由意志を侵すことになる、と忠告してくれる。

*** しかし、子どもが欲しいかどうかを決める母親の自由もあるでしょう。**

確かにそうなのだが、本当に子どもが要らないのであれば、肉体に宿る存在が登場する前に、対策を講じるべきだ。つまり、始まったプロセスを中断しなくてもいいように、避妊対策をするべきだ。

*** 避妊具を使って、出産を制限すべきですか。**

君たちの世界では、責任を取れる数以上の子どもは妊娠しない方がいいし、避妊は、転生する魂を損傷せずに妊娠を防ぐ手段となる。

進んだ世界では、魂を宿すには性関係以上のことが求められ、進化の必要性によって生まれる子どもの数が違うのだ。

***でも理由はともあれ、母親が子どもを欲しくなくて、でも対策を講じていなくて...**

それなら彼女は、将来また生まれ変わることになった時に、自分の母親が同じような理由で、彼女を中絶しようとすることに同意してしまうことになるのだ。なぜなら、因果の法則は、我々が招いたのと同じ状況に我々を置くものなので、前生で母親として中絶をした魂は、次に生まれ変わる時には子どもとして中絶されたり、妊娠することができたのに生む気がなかったので妊娠できなくなったりするのだ。

子どもと両親との間の問題の多くが、中絶したりしようとしたことから派生したものだとして知っているかね？ 転生する魂が充分進化していなければ、未来の親に生まれる機会を奪われたことを赦せず、霊界から悪影響を与えて復讐しようとするのだ。また、やっと転生できた際に、妊娠中の無意識下の記憶が自分や親への敵対心に変容することもある。それがトラウマとなり、精神的または肉体的な病気で生まれることもあるのだ。

***霊的観点から見て、中絶が容認されるケースは全くないのですか。**

母親が死ぬリスクがあるとか、強姦の結果としての妊娠とか、子どもが奇形を持って生まれてくるとか、幾つかの外的な要因を思いつきますが。

最初の二つのケースは、容認することができる。

特に、母親が死ぬかもしれない明らかな危険性がある場合はだ。まだ生まれていない者の命と、もう生まれている者の命とのどちらかを選ばなくてはならないとしたら、後者を選ぶ方が好ましいからだ。

強姦の結果妊娠した場合は、生まれる魂の権利よりも母親の自由意志が優先される。意に反して妊娠してしまった訳なので、母親には子どもを産まない権利があり、それは「自由意志の法則」に反する行為とは見なされない。

しかし強姦といったおぞましい行為に起因するものでも、霊界は、常に生命を育むように応援する。このような状況が偶然の成り行きである場合は少なく、魂の前世での行いのせいで対峙する状況なのかもしれないと理解すべきだ。どちらにせよ、一番しっくりする選択肢を選ぶのは母親でなければならない。

君が提示した最後のケース、つまり胎児が何らかの先天性の病を持って生まれてくる場合は他とは全く異なり、それを理由に中絶することは、靈的観点からは擁護できない。

君たちの物質主義的な視点では、何かの先天性の病を持つ人の人生は無駄であり、苦しみには意味がないと思われる。

しかし、靈界では、別の展望で物事を見るのだ。不完全な肉体の奥に、健全な肉体に宿るのと同じ魂がいることを理解しなさい。魂が、その力量に見合う道具を持たないために物質界で完全に自己表現できなくても、健全な身体に宿った存在と同じように感じたり気づいたりできない訳ではないし、自分自身で選択したであろうその体験から学べない訳でもない。

このような状況に生まれ変わる魂は、偶然にそうなのではない。君たちには多難で不可解に見えるかもしれないが、それは、転生する魂と受け入れ家族の靈的な進化に、貢献できる環境なのだ。

肉体または精神の障害というものは、肉体が死を迎えるやいなや消滅する、一時的な状況に過ぎないのだ。しかし、その体験を通して目覚め、補強された本人や他の人たちの感情は、靈的な成果として永遠に存続する。だから、このケースのような状況で中絶をすることは、一人か複数の魂の進化の可能性を断つことになるのだと気づきなさい。

***それなら、赤ん坊の先天性な病気を避けるために、卵子・精子・受精卵の選別などの技術を用いるのは、病気が進歩に役立つよう魂が選んだ状況かもしれないし、前世での悪行の結果かもしれないので、間違ったことなのですか。**

もちろん間違っていない。それは全く別だ。病気やその他の苦痛を伴う状況を予防しようと尽力することは、常に肯定できる。だがそれによって、別のもっと辛い状況を生み出してはならないのだ。病気を防ぐ行為が非難されるのではなく、命に反する行為が非難されるのだ。

前のケースでは病に苦しむという災いを避けようとして、生命の抹殺という別の災いを生み出しているのだ。

だが、この二番目のケースは全くその逆だ。命を生み出しながら病氣と闘うことで、命は破壊されないのだ、常に肯定できるのだ。

いかなる場合でも、助けが必要な人を、その人が誰であったか何をしたかに関わらず、助けてあげるべきだと心しなさい。人間を左右する理解し難い辛い状況が何に起因するのかという知識は、理解を深め、理解によって必要な人を支援できる力を得るために与えられるのだ。前世で

の悪事に見合っているという口実が、その人への支援を拒むために利用されてはならない。

*** 母親の体外での、試験管での受精の場合、胚移植されない受精卵はどうなるのでしょうか。**

魂は、冷凍された受精卵には結合しないので、心配無用だ。このような体外受精のケースでは、受精卵に成長できる可能性が全くなければ、魂は結合しない。魂は、受精卵が発育できるように子宮に戻される時に、宿るのだ。

だが、体外受精や人工授精であった場合には、両親の魂よりも霊的に進歩した存在が顕現する可能性は失われる。

*** それは、なぜですか。**

なぜなら、そうなるためには両親となる魂が愛し合う必要があるからで、受胎の性行為の間に、愛という高振動のエネルギーを蓄積させた瞬間に、ずっと進化した高波動の魂の入体を可能とするからだ。

*** 魂の過去の意識や記憶は、いつ失われるのですか。**

妊娠の過程で失い始めることもあるが、トラウマとなる急激な形ではなく、眠気を催した時のように、魂は徐々に昏睡状態に入っていく。進化の乏しい魂は直ぐに昏睡状態となる。

進化した魂は霊的により自立しているので、意識ももっと後に失う。誕生の瞬間まで自由自在でいられ、子どもとして何年か経過するまでは自由を完全に喪失しない場合もある。

*** 男性として生まれた魂が次に女性に生まれ変わることや、その逆も可能ですか。要は、魂は常に同じ性に生まれ変わるのですか、それとも転生から転生で、異なる性に変わるのでしょうか。**

純粋な状態では魂には性別がないので、性別とは、物質界で顕現する必要性から生じるものだ。よって、霊的な学びの必要性によって、同じ魂が一つの人生では男性であり、次には女性になることがある。

だが、転生にはどちらかの性をより熱心に選ぶ傾向が見られ、男女として一緒に転生することを決めた双子の魂がいる場合は、相手は反対の性を選ぶ。

*** でも僕の理解では、肉体から離れた魂が生きている人に現れる場合には、男性か女性かを区別できることが多いようです。魂に性別がないのでしたら、どうしてそういうことがあり得るのですか。**

肉体を離脱していても、魂がまだ人間の進化段階にいる場合には、性別を区別できる特徴をアストラル体に保ち、自己の進化状態に見合った外見や一番好きな姿で現れることができるのだ。

死後間もない魂は、少なくともしばらくの間は最後の生の容姿の特徴を保っている。だが、魂が進化していて、最後の転生の出来事から完全に解放されている場合には、その顔立ちはより美しく、老化の跡は見られないだろう。

とても高次の霊は、生きている人の前に現れる必要があれば、自分が果たさなければならない任務に最適に見える容貌を取る。

他世界での生

*** 最初に、万物の生命を包括する計画のことや、各惑星に対応するアストラル球体のことなどをお話し下さいました。．．． しかも、あなたの回答の多くに、「進化した世界で」起こることについての付け足しがあります。まだ取り上げられてはいないのですが、以上のことから、他の惑星には知的生命体がいるのだと推察するのですが。**

もちろんだ。宇宙は広大だ。宇宙全体には、絶えず進化し続ける無数の魂がいて、完全性を目指して進むために物質界で転生する必要がある。

*** どうして、地球外の文明や人類が存在するという確固たる証拠がないのですか。**

進化レベルが君たち以下、または同等の文明では、他の世界に旅したり交信したりする科学技術の手段を、まだ持ち得ていない。

また、より進化した人類は、君たちの惑星を訪れて交流する能力があったとしても、君たちの進化に干渉しないように心がけていて、もっと精妙な方法で関与している。

それでも、よその世界の存在からコンタクトがあった証拠は、大変古い時代から数多く存在し、多くの文明の聖典に記載されている。当前だが宇宙人という呼び方ではなく、神々とか神の使者としてね。現在でも、今の君たちの科学技術の成果を大幅に凌駕する移動能力を持つ宇宙船の目撃例は無数にある。また、君たちへの支配権を失う恐れからどの政府も隠そうとしているが、よその世界の存在とコンタクトしたという人びとの証言も無数に存在する。

*** あなたが、より進化した人類と言う時は、テクノロジーの面でもっと進化しているという意味ですか。**

霊性面で、もっと進化している人類という意味だ。もちろんテクノロジーの面でも君たちよりもずっと進化しているが。

*** 技術面では進化しているのに、霊性が僕たち以上に進歩していない人類とか文明もあり得ますか。**

そうだ、実際に存在する。だが「愛の法則」に従っていなければ、科学技術を内紛や近隣の文明に対して悪用して、結局は自己破滅してしまうのだ。

愛と自由意志の尊重を基盤に築かれた文明だけが、破壊活動には時間も資源も労力も浪費することなく、建設に専念するので、永続するのだ。

このように結局は、靈的に進化した文明の方が、科学技術面でもさらに進歩しているのだ。

***「愛の法則」に従わずに自己破滅してしまった文明に住んでいた魂は、どうになってしまうのですか。**

すでに言ったように魂は不死だから、もちろん、靈的次元で生き続ける。文明が破壊され遺物となった跡に転生して、進化を続けるのだ。

その惑星が完全に破壊されてしまった場合は、転生が可能となる自分の星に似た別の惑星のアストラル次元に移転させられるのだが、これは君たちの世界で、都市が洪水で壊滅した場合に危険の少ない地域に生存者を収容するのと同じことだ。

通常、最も進化が遅れている者は、生存環境がずっと苛酷なさらに後進の惑星に移動させられ、一度は手にしていたのに維持できなかったもののありがたみに気づくように学ばされるのだ。

***それでは、他の惑星出身の魂が地球に転生したり、逆に、地球のものが別の惑星に転生することもありますか。**

それはあり得るし、破壊された惑星のような極端なケースだけではない。自己の進化レベル以上の惑星には転生できないという制限つきだが、ある惑星から別の惑星への定期的な魂の移行は起こる。

移行できる星は、自分の出身惑星と同等か下のレベルでなければならないのだが、自分のレベルよりも後進的な惑星の場合には、同時に、波動対応の問題が生じる。つまり、進化した魂が下位の惑星に転生する時には、その星特有の肉体に顕現できるように、自分のアストラル体の振動パターンを再調整しなければならない。魂の振動レベルが惑星のものよりもずっと高い場合には、この調整は実質的に不可能となる。

君たちに分かり易く例えれば、普段着ているものよりもニサイズも小さい服を着ようとするようなものなのだ。だから、地球に転生できる進化した魂のレベルは、君たちよりほんの一段高いかだけに過ぎないし、特別の場合でも二段階上が限度だ。

***破壊されなかった惑星出身の魂は、どんな目的で別の惑星に転生するのですか。**

一般的には靈的進化を促進するためだ。進化した魂は、自分より進化の遅い惑星に転生して、その惑星生まれの魂の靈的成長を促進することができる。

ある魂がその惑星の魂の平均よりも速く進化してしまい、自己のリズムで進化し続けるには、そこが物足りなくなることもある。そうすると、

小学校の最終学年を終えると中等教育を受けるために学校を変わるのと同じように、自分のレベルに合うもっと進化した次元に転生する。

また、特別な時期には特定の惑星で、自分の能力を試して進化の工程を速められるような恵まれた環境が整えられる。ある惑星に、集団的な飛躍を遂げようとする魂が大勢いる場合には、その新たな段階に生まれてきた魂の要請に応じるために、惑星自体が再編される必要がある。ある惑星がこのような状況におかれている時には、同等な進化レベルにある他の惑星の沢山の魂が魅力を感じ、それを体験して自分の霊的成長に役立てようと、その星への転生を希望する。

*** 他の惑星の魂たちにとって、そんなに魅力的な環境とはどういうものですか。**

実は、君たちの惑星は、レベル変化をする可能性に近づいているのだ。第三レベルの惑星から第四レベルに移行するかもしれない。

もしも十分な数の魂が、魂の目的や魂が不死であることや、皆が兄弟であることを自覚し、愛を学びこの世の諸悪の根源である我欲を放棄して、霊的に進化するために転生するのだと気づけるなら、この飛躍を実現させられるかもしれない。

そのような存在は、物事を行う上での新しい方法を地球にもたらし、愛に基づいたやり方で、社会・経済・政治などの全ての面で世の中を変えようと力を尽くすことだろう。．．．しかし同時に、世界を操る権力者のように我欲を捨てたがらない者が大勢いるので、進化した魂による改革の試みを全力を挙げて阻止しようとするだろう。彼らは、同胞を搾取して得た権力や物的財産を放棄するのが嫌なので、何の変化も望んでいないのだ。

各々の魂は、愛のために戦うのか、それともエゴのために戦うのかを決断すべきで、選んだもののために精力的に活動すべきだ。

これは、愛の党派を選んだ魂の成長にとっては、特別なチャンス、素晴らしい環境となる。なぜなら、まだ我欲に執着してあらゆる手段を講じて目標を達成させまいとする者の無理解・中傷・暴力など、無数の障害と対峙しなくてはならないからだ。そして、これらのあらゆる種類の攻撃や屈辱や非難にも関わらず、愛を信じ続けられるならば、無条件に愛せるようになるという、魂の最大の目標に一歩近づけるのだ。

*** ええ、その事なら知っています。映画では善人が勝つこともあるのですが、現実では平和主義の善人は虐殺されてしまって、最後にはい**

つも悪人が勝つのです。歴史を見ればそんな話で一杯です。初期のキリスト教徒とか、カタロス派とか。 . . .

確かにこの戦いが永遠に延長されれば、利己的な集団は変革の全ての試みを永久的にボイコットするかもしれないので、愛情深い集団に霊的な停滞と、無益で不毛な苦悩をもたらすであろう。

しかし、このように熾烈な戦いは無期限には続かない。最終的には二つのグループの分離が必要となろう。

分離するということは、二つのうちのどちらかのグループが、自己の進化レベルの条件に見合った別の惑星に生まれ変わるために、立ち去らなくてはならないということの意味する。君たち人類は今、このような過程を経験していて、最終的には話しているような魂の選別が行われるだろう。

*** 聖書の黙示録の最後の審判を思い出しますが、何か関係があるのですか。**

聖書に記されている最後の審判とは、起こり得る地球の未来のヴィジョンとしてこのプロセスを垣間見た作者が、自分の能力の範囲で書き表わしたもので、個人的な解釈の一つと言える。

一周期のおしまいは、もちろん世界の終末ではなく、一つの段階の終わりに過ぎない。

また、今のところは我欲を放棄しないと決断していても、それが最終決定となる訳でもない。人はいつでも好きな時に意見を変更できるし、今その機会を活用しなくても、後でそうすることも可能だ。よって、「善人を右に、悪人を左に分ける」選択するのは神ではなく、自分自身の決断なのだ。霊界は、皆に同じだけの機会を与えているので、何をしたいのか、どんな世界に生きたいのかを決めるのは、自由意志を持った自分自身なのだ。

意志の力と努力がどちらに向いているかで、得られるものが決まる。愛の中で暮らしたい者は、愛に基づく世界に生きる。我欲の中で暮らしたい者は、そのように生きることが自分を不幸にすると気づいて変更を決意するまでは、エゴに基づく世界で生きるだろう。

*** それで、どれが去るグループでどれが残るグループなのですか。**

場合による。二つの選択肢がある。

進化できた魂の数が、惑星を愛の方へ向かわせるのに充分でなければ、惑星全体での進化の飛躍は遂げられない。惑星は現在の振動レベルを保

ったまま、飛躍を遂げなかった魂を留めるので、もっと高い進化レベルの惑星に移されて転生するのは、飛躍を遂げた者となろう。その場合、地球は相変わらず第三レベルの惑星であり続け、エゴからの脱却を望まなかった魂によって占住され続けるので、再び何千年もの間、克服できなかった試練と同じ類のものに向き合うことになるのだ。

一方、我欲の放棄を願った愛情深い魂は、各自が到達できた進化レベルに応じて上位の惑星に転生する。彼らはそこで、自己の内面と調和する他の存在と出会い、誰にも邪魔されずに自分の愛を表現できるので幸せになれ、さらに高次元目標に挑戦できるのだ。

前のケースと反対に、進化できた魂の数が、人類が「魂の法則」に従って前進し統治できるようになるために充分であるなら、惑星自体が進化の躍進を遂げるだろう。その場合は、進化の跳躍を遂げた者が地球に残ることになり、進化できなかった者が同等の進化レベルの別の惑星に移転させられて、そこで生まれ変わるのだ。

これが、イエスが山上で行った説教の中の「柔和な人たちは、幸いである。彼らは地を受け継ぐであろう」の意味である。この一文は、輪廻転生や、進化の法則や「霊的裁きの法則」の知識がなければ理解できないであろう。柔和な人びとが地を所有できるとは、どういうことであろうか？

我々は、压制者・権力者・暴君が、常に土地に対する権力と支配を誇示し、「柔和」な平和主義者は虐殺されたくなければ紛争から逃れねばならないのを見飽きてきたので、理解し難いだろう。

それは他ならず、イエスが、進化レベルに応じた選別の過程に言及しているからで、将来は地球に愛と平和において進歩した（柔和な）魂を連れて行く、という意味なのだ。一方、「愛の法則」に従わない者は自己進化レベルに見合った惑星で転生するように、移転つまり「追放」されるのだ。

***ここに留まれない魂は、どのように他の世界に移転するのですか。**

ゆっくりとした段階を踏むだろう。地球の波動レベルと調和できない魂は、死後は地上で転生するのを止め、自分と同じ進化レベルの他の惑星に生まれ変わるようになる。地球がレベルを上げた場合には、波動レベルの上昇自体が、その域に達しなかった魂がこの世に生まれ出ることを不可能にするので、彼らは自己振動レベルに相当する別の世界に生まれなければならない。ある時期からは、同じ波動パターンの子どものみが生まれることになるだろう。

*** それでは、別の惑星に移動するには、死を待たねばならないのですか。**

通常はそうなるが、常にそういう訳ではない。惑星レベルでの大災害の場合には、その惑星から別の星へと大規模に人びとを移動させるに足るテクノロジーを持った地球外文明の関与によって、肉体をまとった魂の移動が可能になる。それは、地球の特定の地域で天災が起こった際に、被災地の生存者を治療したり避難させるために、人道支援の任務を開始するのと似たやり方だ。

*** 進化の飛躍ができなければ、惑星が霊的に停滞することになるのでしょうか。**

全くそういうことはない。何千年か経てば、進化の飛躍をする別の似たようなチャンスが巡ってくるだろう。その時には、現在の自分勝手な魂の大半も愛に目覚めるに足る十分な経験を積んでいて、前回にはしたいとも思わなかった進化の飛躍が可能となるのだ。

地球には過去にも、このような集団的な進歩のチャンスが幾つかあった。人間が十分な進化を遂げた一番最後の時には、それが君たちの星では少数派だったために、別のより進化した惑星に移住させられ、地球は進化を成し遂げられなかった存在の住み家となったのだ。同じような状況をたどっていた他の惑星は、その時の地質学的な変動を利用して、惑星間の大移動を行った。地球は、それぞれの惑星で進化の跳躍ができなかった人類グループの避難所ようになったのだ。

*** それは、地球上の多くの種族が僕たちの惑星出身ではなく、他の世界からやって来たという意味なのですか。**

そういうことだ。またこの事から、君たちが全員兄弟であることを認識することもできる。宇宙の多くの場所での生命の発達形態は、地球のものと同様で、様々な惑星由来の種族間の違いも最小なので、お互いに交流し合って兄弟として共存することが可能なのだ。

*** そう認めるのは難しいですが。**

人類の歴史に関する君たちが知り得ない過去の事象が沢山あるので、そう思うのが普通だ。過去に犯した不正を人民に知らせず、過ちから学ばせまいとする様々な時代の支配者によって、歴史的な記録は、数え切れないほど抹消されてきたからだ。無知な民ほど扱い易いのだ。「歴史を忘れた民は同じ過ちをくりかえす」と、格言にもある。

だが良く観察すると多くの文化に、地球外の星々からやって来た人種がその民族や種族の起源だとする、世代から世代へと語り継がれてきた先祖由来の伝承が存在している。

***地球が経験するかもしれない進化の大飛躍についてお話し下さったので、その素晴らしい未来のことをもっと詳しく知りたいです。でも、現在の地球と人類の悲惨な状況からみると、それは随分先のことのように、正直言えば夢物語に思えます。**

実現しそうにないその未来こそ、何十億もの惑星では現実なのだ。確かに地球と人類の現状は嘆かわしいものだが、二百年の間に物凄い展開があり得るのだ。例を挙げようか？

人類の科学技術レベルを、西暦1800年当時と2000年とで比較してごらん。本当に驚くべき進歩を遂げた。しかし、君が二百年前に遡って当時の人びとにそのことを話したとしても、誰も君を信じようとはしないだろう。だから、人間が、知的・物的発展に注ぎ込んだのと同じ意志力と熱意を、靈的進展に応用したとしたらどうなるかを、想像して見たまえ。

地球は今、靈的覚醒の時代を生きている。覚醒したいと願う魂が全員目覚めて実行に移せば、物事は急速に変わるだろう。

***そうでしたら、僕たちが手本や模範にできるか、「愛の法則」に沿った進化した文明ではどのように暮らしているのかお話し下さい。**

喜んで。ちょうど、君たちより一段または二段上の進化レベルの文明について話そう。それ以上進んだ文明での暮らしを話したとしても、君たちには理解し難いだろうからだ。いずれにしても、完全に同一の文明はないのだと思っていなさい。

だが、進化した文明全てに共通する事柄はあり、それは精神面に関係するので、そのことについて説明しよう。中でも最も重要なのは、それらの文明が個人及び集団の靈性進化の工程を自覚していることで、全力を向けて、個々の住人や人類全体の靈的進歩に務めているのだ。そのため、全ての規則や法律、政治や資源管理の形態などは、「愛の法則」やその他の魂の法則に感化されたものだ。

結果的に、憎しみも、個人や集団のエゴも、いかなる暴力も存在せず、誰にも虐待されることがない。ゆえに、戦争やテロや犯罪行為は一切存在せず、皆が兄弟だと認め合っているのだ。殺人・売春・誘拐・独裁制・軍制・奴隷制もないのだ。

***まるでユートピアです。それで、どのようにしてそれを成し遂げたのですか。**

自分本位の考えは破壊や苦悩しかもたらさず、真に幸せになる唯一の方法は愛することだ、との結論に達することができたからだ。そして、彼らは、愛を育てることと心の中のエゴを徐々に除去することに全エネルギーを注ぎ、その世界を調和のとれた暮らし易い我が家へと変化させたのだ。

しかし、そこに到達するまでにバラ色の道をたどれた訳でなく、困難な進化のプロセスを経てきたのだ。彼らも自分たちの利己的な行為の結果を味わわねばならず、君たちのような苦難をなめなければならなかった。

利己的で愛が欠如している道を通ってはどこにもたどり着けないということにどれだけ早く気づけるかが、どういう世界になるかの違いだ。

***彼らの政府と政治・経済の構造についてお話ししますか。**

通常、どの惑星にも惑星全体の政府がある。地域ごとに歴史的独自性を保持し、中央政府に組み入れられている自治体はあるものの、独立した政府を持った国家や民族という区分は存在しないのだ。

中央政府は、公共の福祉を達成するために惑星の住人の必要性に応じて、生産手段の管理と運営をする。要するに、多くの人を犠牲にして一部だけを優遇する利己心がないので、民間企業は存在しない。したがって、企業利益を維持するために広告を通して、製品を消費するように過度に煽る必要性もない。

特定の消費財を購入できるように、労働時間に見合う労力の価値を測量する方法はあるが、それ自体に独立した価値があるお金そのものは存在していないので、銀行や証券などの投機的金融事業を通して利潤を追求する経済活動は排除された。それゆえ、インフレーションも通貨の切下げ・高騰もなく、利子という概念も存在しないのでその増減もなく、経済は非常に安定している。

ある製品の代価が変化するとしたら、それは生産に必要な資源の保管量だけが原因だ。しかし、事前に準備を整える能力が優れているので、特定の原料や枯渇燃料の依存からは脱却している。環境をととても大事にするので、汚染しない再生可能エネルギーを徐々に適用した。それらは僅かな残留物しか残さないが、それもほとんど 100%再利用される。

社会面では、食糧・住居・教育・仕事といった最低限の権利は、単に生きているだけで誰にでもその権利がある。したがって、飢えも「ホームレス」も、ローン・貧困・失業・未就学も存在しない。住民たちの物的生活レベルはかなり快適で、惑星全域のどんな場所でも住人でも似通

っている。これらの惑星の住人には我欲がないので、富や物的財産を蓄積したいという気持ちがないのだ。

*** 働くとしたらですが、人びとは何に従事するのですか。**

大多数の人は公益のために、教育や科学・テクノロジーの研究に従事し、全地域の全住人の生活レベルを可能な限り改善させ、個人と集団の霊性進化を促進させようとしている。

第一産業と第二産業、つまり農業と工業で一番負担となる労働は完全に自動化されており、専門家の仕事は生産過程を監督することとなる。一日の労働時間は君たちの惑星よりもずっと短い、不快な仕事に就く者も才能が活かされていない者もないので、ずっと生産的だ。また、自分の仕事で公共の福祉に貢献するのが皆の喜びなので、他人に食べさせてもらうような怠け者は一人もない。

さらに、社会形態自体が製品を宣伝する必要がないので、地球に存在する売買に関わる販売業や広告業などの特定の職業は存在しない。必要とされるものだけが生産され、もっと多くまたは少なく消費するとプレッシャーをかけられることもなく、各人が相応分を取る。

結果として流行は存在しないので、消費の傾向が気ままに変わることはなく、住人の健康や内的・外的な健全性が向上するより良い製品ができた時だけに関わることになる。余計な活動を取り除けば、個人としても物質的・破壊的で利己主義な活動に従う必要がなくなるので、世の中は、テクノロジーにおいても霊性においても急速に進歩できるのだ。

*** 説明を聞く限りでは、地球上の複数の国での共産主義または社会主義の経済システムに似ているようです。**

幾つかの点においては確かにそうだ。

*** でもこのシステムは、地球では完全な失敗に終わったのです。**

社会主義を導入した地上の国々では、暴力でそれを強行し、精神的な概念がなく物質面だけに基づいていたことを考慮すべきだ。その一見した集団性にも関わらず、実際には、不平等を生み出す基となる各人の我欲が、自己のイデオロギーを他者に押しつける優勢な階層を出現させていたのだ。

社会主義が本物となり機能するためには、物質面だけでなく精神面でもそうする必要があり、各自が納得して採り入れなければならない。君たちの世界で起こったように、力づくでの強制によってではいけないのだ。

つまり、各人の心から我欲を根絶して愛に置き換えなければならない、そうして初めて、内面の変化の論理的な結果として、集団レベルでの物的な変化が自然に現れるのだ。地上の利己的・物質的で無神論な社会主義に対して、これらの世界では「精神的社会主義」と呼べる生き方をしている。

*** それで、政府のシステムはどのようになっていますか。民主制や共和制や王制などなのでしょうか。**

これらの名称ではどれも適切に定義をすることができない。これは、最も進化した者たちの政府なのだ。叡智と愛において一番能力のある者に、最も責任を与えるのだ。

*** 地上に、それと似たような政府がありますか。**

一番似ているのは、長老会議を行うアメリカンインディアンの部族のものだ。

*** 統治者はどのように選ばれるのですか。**

それは各惑星で異なる。通常は、様々な分野の代表者からなる色々な審議会があって、その中での理事の投票によって調整役を決める。この調整役は交代制であったり、任期が長期に及ぶなど、惑星により様々だ。

*** どうやってこれらの閣議の一員となるのですか。**

幼児期に示した能力によって、特定の人に、指導業務に焦点を当てた教育を施す。そして、その能力が開発されていくに従って、段々と責任が大きい職に就き、幹部の役目の要請に応じるのだ。

*** 政府が階級組織化しているようで、余り民主的な制度には見えません。人民が選出するのではなく、上層の人たちが自分たちの後継者を選んでるように思えます。**

これらの世界の人びとは、政府が最も賢く愛情深い人びとの手中にあると知っているので、この政府の形態に合意している。

統治者には、君たちの世界のように、支配したり抑圧したり権力を濫用する意思などなく、全くその反対なのだ。彼らは、同胞の進化を助けるチャンスだと思い、自分の能力の最大限を発揮するのだ。統治者は、富や特権を積むために権力にしがみつくと気が毛頭ないが、思いもしないだけではなく、そのような役職に就いても、他の住人と比べて何の特別な恩典もないのだ。しかも、市民全体に影響を与えるような決定は、国民投票でなされる。

*** 少数の選ばれた者だけが統治できる寡頭政治に思えますが。**

確かに、それらの世界では、誰もが統治業務に参加できる訳ではない。だが、地球では権力エリート階層は、最も裕福で経済的な支配力を持つ家族で構成され、一般的に靈性が低く極端に自我が強く、権力と富に野心を燃やしているが、これらの世界では正反対なのだ。指導権はまさに、最も我欲が少なく、最も愛のレベルが高く、一番謙虚で智慧のある者たちに与えられるのだ。

*** それでも、同じ人たちが余りにも長い期間統治をする、階級制度化した政府組織に見えます。**

君がそう見るのも無理はない。地球では、権力の座に一定期間いた者は、最初はそうでなくても腐敗してしまい、自己の利益や特定の支配グループのためだけに権力を行使するので、君たちはその他の者が損害を被るのを見慣れてしまっているのだ。だが、あちらの世界ではそうではない。

*** まだはっきり分かりませんが。**

それでは、理解できるように君自身の世界での例を挙げてみよう。

君たちの世界ではある人が医者になるには、何年間もの専門教育が要求され、最低限の経験を積んだ後に専門家であることを証明したり、大変厳しい倫理上の規範を守る約束をしなくてはならない。こんなにも準備をした後で、四年毎にポストから外されるとするなら、それは大変な無駄となる。君が盲腸を患って手術を受けなければならないと想像したまえ。今話したような人が外科医であって欲しいと望むかい、それとも外科教育を受けていない人の中から執刀医が選ばれる方が好ましいのか？

君たちの世界は後者の例のように、良心の呵責のない人が誰でも統治任務に参入できるようになってしまっているのだ。だが、進んだ世界では、君たちが医者に要求するのと同じように、経験があり特定の愛のレベルに達していることを実際に証明してみせるよう、統治者に要求するのだ。

*** それでは、民主主義が進んだ政治形態だとは思われませんか。**

私の説明の仕方が悪かったのかもかもしれない。

特定の人に強制されることなく、人びとに政府を選ぶ力があるという点は、靈的にはやや進歩している。実際、先ほど説明した内閣は、それらの世界の市民に自由に選出されたもので、新たに導入される重要な変革には必ず会議と住民の賛同が必要だ。

しかし往々にして、代表者を選ぶために定期的に選挙をするということが、自由で民主的であることにはならない。もしかすると、裏で権力を操る者たちにとって都合のいい者の中から、候補者がある程度事前に出選されているかもしれないし、他を虐げて特定の政党をひいきする宣伝がなされているかもしれない。スターリンとヒトラーが候補者である選挙ならどう思うかね？

*** 白紙で棄権した方がいいでしょうね。**

ともあれ、地球の政治家層に蔓延する腐敗レベルを見る限り、同じ人を長い間権力に就かせておくのは好ましくないの、君たちの世界では今のところ、定期的な選出制度が一番進んだ政治形態だろう。

*** 待ってください。裏で権力を操る者たちについて何か言われていましたが、それはどういう意味ですか。**

時には政治の要職にある者が本当の統治者ではなく、取り替えのきく操り人形に過ぎない、ということに気づくべきだ。定期的に選挙をしたり野党が存在すると見かけ上は民主主義に思えるが、それは、人びとを無知蒙昧に放置したまま搾取し続ける目的しかない、エリート層の独裁の隠れみのに過ぎないのだ。

*** 教育はどんなですか。**

精神・頭脳・身体を総括して能力の最大限まで育成し、才能に応じて各人を指導する。これらの世界では、五感以外の知覚能力が大変発達しているので、そのお陰で教師も生徒をずっと良く理解し、個々の力量や才能や関心事を知ることができる。学業教育以外では、透視力・テレパシー・念動力など君たちが容認しないような個人の可能性を開発し、それによって生徒は高次の霊性との繋がりを発展させようとする。

*** それで、どんな信仰を持っているのですか。**

宗教自体は存在しない。宗教を、特定のドグマを信じ特定の規範を強要する、司祭や教義で構成された組織で、何らかの形でそこに入会しなくてはならないもの、と理解するとしたらだが。

先にも言った通り、彼らは、霊的な真相、各人の起源と目的地、宇宙を司る諸法則を明確に自覚しているのであり、それが惑星で実施される教育・経済・政治などの活動に反映される。

第二の法則：「自由意志の法則」

- 魂には、自分自身の運命を選び、進化したいか否かを決める自由がある。
- 魂が、自己決断で「愛の法則」と調和するときは、すなわち、この法則を理解し同意し、これに則って行動することなので、進歩する。
- 何の強制・強要にもよらず、魂が自分で進化しようと心に決め、努力した場合のみ、靈的に進歩できる。
- 進化は、自由の中のみにある。

*** 多くの説明の中で、自由意志を、尊重すべき重要なものとされていますが。**

その通りだ。

*** でも、厳密に言うと、自由意志とは何でしょうか。**

魂が、自分自身でしたいことを決められる能力だ。

*** それでは自由意志を尊重するのが、なぜそんなに重要なのですか。**

それが基本となる「魂の法則」の一つで、魂の進化向上の支柱となるからだ。

*** では、「自由意志の法則」とは何ですか。**

「魂の法則」の一つで、魂には自分自身で自己の運命を選ぶ自由がある、とするものだ。

*** なぜ、自由意志によって、魂が進化向上するのですか。**

なぜなら霊的な進歩は、本人自身の決断でそれを心に誓った時、つまり何の強制・強要もなく、魂の自由意志で進歩しようと決めた場合のみ、本物となるからだ。

*** なぜ、そうなのですか。**

進歩が強いられたものなら、強制または強要していたものが失われるや、魂は元の状態に戻ってしまい、あてがわれた環境には順応できないからだ。

*** 「自由意志の法則」が「魂の法則」なら、なぜ地上ではこれが適用されていないのでしょうか。**

適用されているよ。「魂の法則」は、各魂の真髄に刻まれている。

魂には、常に幸福を求めるように駆り立てる力があって、幸福を追求することによって進化する。魂は本質的に自由な存在なので、愛がなければ幸せになれないように、自由でいられなければ、霊的に完全に幸せでないのだ。

神が魂に自由であることを望まなければ、奴隷であっても幸せでいられるような性質に創ったことだろう。しかし、実際は、全くその逆なのだ。すなわち、魂は、どのような形であろうと隷属していると不幸なので、自由であるために創造された、と結論づけられる。宇宙のどこでもそうであるように、地球でも、魂は自由なのだ。

***しかし現実には、僕たちの惑星の大半の人は、自由に行動するどころか、無理をしてやりたくもない事をしたり、そうするように強いられたりしています。**

全くその通りだ。君たちの世界ではそうなのだ。

大多数の住人がほとんど進化していないために、「自由意志の法則」は、いつも守られることがない。それは、人がまだこの法則を知らないせい、自由意志を尊重するには我欲の放棄が不可欠なので、故意にこの法を尊重したくないかのどちらかだ。

霊的学習の狙いの一つに、他者の自由意志の尊重があるが、自分の自由意志も尊重しなければならないのだ。

***「自由意志の法則」は、もっと進化した他の世界では、住人側から理解され、尊重されているのでしょうか。**

その通りだ。これは、宇宙レベルの「魂の法則」なのだから。

そして、それらの世界では、他の「魂の法則」と共に、自由意志の尊重が重視されるがゆえに、君たちのよりもずっと幸せなのだ。

***彼らにこちらに来て、幸せの秘訣を教えてくださいませんか。**

進化した魂は、「自由意志の法則」を理解し尊重し遵守しているがために、進歩が少ない魂が住まう世界と関わる時は、特に、この法則に違反しないように非常に気を遣うのだ。

害を与えるつもりがなくても、関与し過ぎると、進歩の遅れた魂や文明がより高度なものに依存してしまい、その惑星の進化を停滞させてしまう。

そのため、霊界や高次の世界から下級界に与えられる援助は、いつもとても精妙でなければならず、絶対に要請側の意に反してはならず、その自由意志を無理強いしてもならない。それぞれが、支援を受けて成長したいという意志表示をする必要があるのだ。

***問題の焦点がはっきりしないのですが、分かり易く例を示して下さいますか。**

いいだろう。高度な世界から地球に人がやって来て、皆がその人の能力を認めて、地球の政府を明け渡し、全ての問題を解決してもらおうと決めたと思定しよう。

その出身地では、魂の諸法が理解され、動物を尊重し、その殺傷を禁じ、肉食主義であったとする。そのため、その人が、そのやり方を模倣し、狩猟や闘牛、肉の消費などを禁止する動物保護法の奨励を決めたなら、君たち地球人は、自ら進んでそれを放棄するだろうか？

*** どうするか、分かりません。賛同する者も反対する者もいると思います。**

どんなに甘く見ても、現状では人類の80%以上が、その方策に反対するだろう。そして新しい法律の導入を阻止しようと、地球上で、酷く暴力的な抗議運動や反乱が起きるだろう。

ジレンマに陥った主導者は、どうすべきであろうか？ 人民を満足させるために、自分自身の信念を放棄すべきか、またはその反対に、大多数が反対しても法律を押しつけるべきだろうか？

最初の選択をすれば、自分の意に反したことを行う必要があるので、自分自身の自由意志に背くこととなる。二つ目を選べば、民衆の意に反する法律を課すので、彼らの自由意志に背くことになる。

*** それは、解決策のないジレンマですね。**

実は解決法はあって、現にそうなっている。つまり君たちの世界では、進化した者が統治していない、ということだ。

君たちレベルの世界で、実際に進化した者が政治の要職に就いていないとしたら、それは単に、君たちの大半が彼らに指導されたくないか、それとも、その改革案を受け入れたくないからなのだ。そして彼らも、強制しても無駄なことを知っているのだから、自分たちの意志を強要しようとしなさい。

君たちの惑星の歴史では、ある程度正直な者たちが権力の高職に就いて、より良い方向に舵取りをしようと試みたケースが数多くあった。それなのに、どうなってしまっただろうか？ 短い期間しか存続できなかったのだ。周囲の者が、彼らを排除してしまったのだ。

だから進化した魂は、助言を与え、強要せずに手本を示して説得するに留まり、それぞれの人が、納得したものを選ばなければならないという訳だ。

*** 地上に「自由意志の法則」を適用して、進化した世界のように、僕たちがそれを守ることを決意したとしたら、どんないいことがありますか。**

隷属・強要・抑圧・懐柔・傷害のあらゆる形態がなくなるだろう。

進化した存在は、絶対に他者の生命の権利を侵すことがない。それゆえ、戦争や死刑、殺人や墮胎など、他人の命の権利を侵害する行為はなくなるだろう。子どもや大人への暴力や性的虐待もなくなるだろう。よって幼児偏愛・強姦・売春や、他者の意志を捻じ曲げたり強要する性行為—特にもっと弱く無防備な場合—の全ての形態が消滅するだろう。

思考や感情の自由な表現を阻む全てのものが消えるだろう。よって、検閲、操作、詐欺、弾圧や誘拐も存在しないだろう。

人種・宗教・文化・経済・政治やその他の違いから、他人への抑圧・攻撃・統制・暴力を正当化する利己的な宗教・哲学・学説は、どれも消滅する。それゆえ、人種差別、全体主義、ファシズム、宗教的狂信、軍国主義、帝国主義、資本主義なども、少数の者の利得がその他大勢の苦悩の上に成り立つイデオロギーなので、なくなるだろう。

魂を強要して隷属させる形態は、それが物的であろうと精神的なものであろうと、どれも失敗に終わるだろう。

なぜなら、魂の内面は、隷従させられるものに反抗し、遅かれ早かれ、自由を求めて全力で戦うからだ。魂の「自由意志の法則」を尊重しない教義・宗教・イデオロギー・政治及び経済体制の、どれもが不安定で短命なのはこの理由による。一方、「魂の法則」に基づいたものは、安定しており永続的だ。

家族の輪の内外を問わず、親が子をまたは子が親を、夫が妻をまたは妻が夫を、上司が従業員を、強者が弱者を、奴隷化したりや肉体的・精神的に虐待することは、全てなくなるだろう。

他の生き物に苦痛を与えたり殺したりする趣味や気晴らしは、どれもなくなる。特に高等哺乳類など進化が近い存在に対する、闘牛、狩猟、釣りや、発展国での畜産など、それをしなければ人間の生存が脅かされてしまうと反論できないような行為はなくなるだろう。

***でも、法則に従うには、それを知るのが大事ですよ。どうすれば興味のない人たちに、何らかの形で強要せずに、教えることができるのですか。登校を拒否する反抗的な子どもに、学校に行くよう強制するのと同じようにする必要はないでしょうか。**

「自由意志の法則」を守るのは、魂が自由に決断することを尊重するためだ、と言ったばかりだろう。どんなに霊性の高い法則でも、それを押しつけてしまえば、法則自体に違反することになるので、本質的にそうできないのだ。

強要するのは、最善策ではない。くりかえすが、押しつけたり強制して得られたものは、強制力がなくなると、失われるのだ。魂は本来の姿に戻ってしまい、あてがわれた環境には順応できないのだ。

輪廻転生をして前世の記憶を忘却するのは、まさしく、魂が自由意志を経験し、何の規制も受けずに自分の力で進化するためのものだ。そのこと、つまり前進するか否かや、進歩するための試練の種類を決めるのは、魂自身の自由であることは、前に充分話しただろう。

君が言った、子どもと学校の例に関しては、靈的に最も進化した教育の潮流では—それは君たちの世界にも届いているが—学習を退屈なものではなく魅力的にして、強制せずに子ども自身の能力を刺激する方法を模索している。義務ではなく熱意、それが、子どもが学ぶ一番いい方法だ。

*** それなら、どれが、「魂の法則」を教える正しい方法でしょうか。**

唯一の方法は、手本を示して説得することで、それが地球に転生した高次の存在が行ったことだ。

私は、「愛の法則」や「自由意志の法則」、その他の「魂の法則」を教えるために地上に転生した、イエスや仏陀やクリシュナ、ゾロアスター、アントリオンや、他の神格者など高次の者のことを言っているのだ。

彼らは、法則を個人的に適用した自分自身の生き方で、魂の諸法と協調した生活の手本を示した。しかし、それを真似するように人を強要することは決してなかった。

*** イエスの信奉者だとされる人たちには、「自由意志の法則」は、きちんと伝わらなかったようですね。暴力や強制や恐怖を通して、自分の信仰を、他者に力づくで押しつけたのですから。宗教裁判や十字軍を行った、カトリック教会を指しているのですが。**

それは、信奉者たちが、授かったメッセージのレベルに達していなかったのだ。しかしそれは、イエスやその他の神格者のせいではなく、総体的に進化が乏しい君たちの世界の我欲のせいで、それが特定の人たちに元は真実であった教えを独占させ、他人を支配し操るために、教え自体を歪めてしまったのだ。

押しつけたり強要する宗教や信仰は、魂を進化させることなどできないし、真実だとも、神や高次の靈性と調和しているのだとも考えられない。「自由意志の法則」を破る者は誰であれ、神の仲介者であろうと、神の意向に沿う者とも見なすことができないので、時間が経てば、成す術もなく地上から消えるであろう。しかし、それはかなり大事な話になるので、別の機会に特別に扱おう。

*** でも、高次の存在が関与してくれたにも関わらず、この世界で、物事が大きく改善されたようには見えないのですが。**

幾らかは改善されたよ。過去の時代には、人間が食用に、家畜のように飼育されたこともあったが、今の君たちには、嫌悪すべきことに思えるだろう。今日地上では、事実上、人肉食は淘汰された。

合法的な奴隷制度が存在し、全世界で奴隷の売買が行われていた時からまだ二百年も経っていない。現在では別の形の隷属化が存在するとは言え、少なくとも合法的な奴隷制は全ての国々で追及され罰せられたので、法の陰に潜んでいる。

世界ではまだ複数の地域で、宗教上の理由から迫害されることもあるが、激しさも残虐性も緩和され、宗教改革以前の欧州では想像もできなかった信仰の自由の権利を保障する法規が、多くの国に存在する。

懲罰の方法としての死刑は、多くの国で廃止された。

国連のような国際組織で、人権宣言憲章が草稿され承認されたことは、それが実際に遵守されている訳ではないが、蹂躪できない基本的権利に同意できる進化した魂が、君たちの惑星にも存在するのを示す明確な例だ。

その中では、自由意志の行使を保障する権利がはっきりと具体的に記載され、人類の自由意志を侵害するものを阻止する行動を確約するよう、諸国に要請している。

それゆえこの憲章は、「自由意志の法則」が上手く応用されたもの、と見なすことができる。十戒の中でも、「殺すなかれ」「盗むなかれ」のように、自由意志に言及した戒律が幾つかある。

しなくてはならない事がまだまだ沢山あるとは言え、過去の時代の状況と比較すれば、進歩しているのだ。

第三の法則：「靈的裁きの法則」又は 靈的な作用と反作用（原因－結果）の法則

- 他者にすることは、自分自身にもすることになる。
- 魂が自分の過ち（万物の生命に反する行為）を自覚し、それを償えれば、靈的に進歩できる。

***無神論者は、「神が実在するのだったら、この世の多くの理不尽を許す筈などない」と声高に主張していますが、これを、どう思われますか。**

そのような意見の者は、人の命が肉体の誕生と共に始まるという信念を持つために霊的な真相を完全に理解できず、それで、地上の一部の劇的な状況を理不尽だと解釈してしまうのだと思う。

人間の生が誕生をもって始まると見なせば、神が初めから一部の者だけを優遇して、その他の者を虐げているように見えるので、この世は不平等で、創造主がいても同じように不公平なのだろう、という避けがたい結論に行き着いてしまう。

生まれた時から、先天的な病気や極貧、歓迎されない家族の下に生まれるなど、災難が山積みの人生が見込まれる人がいる一方で、ずっと賢く美しく、深く愛され健康で、神のお気に入りと思える人がいないだろうか？

しかし我々が、今生は各人の生のほんの短いエピソードに過ぎず、今編は、今の魂の状況と内容的にきちんと噛み合うこれまでの連載ものの続編で、ふさわしい結末であると考えられれば、以前は理解できずに不公平に思えた事柄を、次第に理解し始めるであろう。

実に全ての魂は、同じ起源から生じている。魂という存在は全て、無知・無自覚な生命の素として等しく創造されたが、無数の転生経験を総合して、愛と叡智の最高次元に達するまで、絶え間なく永久に進化する可能性を宿している。

ある魂と他の魂との唯一の違いは、創造された時期、つまり魂の年齢による。魂の生命の創造過程は、止むことがないからだ。

あるものは、君たちの銀河系がまだ星雲になる以前の何十億万年前に冒険を開始し、物質界への数え切れない転生の歴史があるが、他のものはまだ進化を始めたばかりのいわば若い魂だ。

各々の行為と決断により、進化の道程は真っ直ぐにも、曲りくねったものにもなるし、遅くなったり速くなったりもする。

ほんの稚い幼児期から、愛と理解の偉大な能力を持ち、年齢に不釣り合いなほど精神的にとても成熟している人がいる一方で、肉体上では大人や老人になのに、まだ振る舞いが幼稚で、見かけほど年がっていないように思える人がいることに、気づいたことはないだろうか？

ある魂と他の魂との霊性能力の違いは、一見先天的なものに見えるが、魂の年齢差と、これまでの転生を霊的進歩のために有効活用してこられたかによる。

各人の今生の環境の違いは、宿命の産物に思えるが、実は、これまでの前世や肉体に宿っていない期間に、決断してきたことに起因するのだ。

***現在の人生での行いが、過去のものとどう関係するのですか。**

宇宙的な法則がある。それを「靈的裁きの法則」、「原因と結果の法則」、「靈的な作用と反作用の法則」などと呼べるが、その概要は、魂は与えたものと全く同じものを受け取る、というものだ。それは、我々が他者にすることは、実際には我々自身にすることになる、ということに等しい。

各魂は自らが創り出した状況に立ち向かわなければならない、というのがこの法則の結論であり、それゆえ、魂が人生で直面する逆境の多くは、前世で自分が作り出した原因の帰結、又はその影響なのだ。

***それがなぜ、宇宙的な法則なのですか。**

なぜなら魂は、宇宙の諸法や万物の生命に反する自分の行為や状況に立ち向かって、それを解決しない限り幸せになれないし、自己の靈的な進化においても前進できないからだ。

好きな道を選び適切な決断をする自由が、「自由意志の法則」で魂に認められているとするのなら、「靈的裁きの法則」では、自分の行為の一つ一つがそれぞれの結果をもたらす、遅かれ早かれそれらが自分に影響することを知らねばならない。別の言い方をすると、「種は自由にまけるが、刈り取る責任がある」のだ。

つまり、行為の担い手として正当に思える行いなら、受け手としてもそう見えるべきで、その逆も然りだ。だが、もし自分がしたのと同じことをされたくないのなら、そこにはあまり善意がないという訳だ。我々にとって善くないことは、他者にとっても善くないのだ。

イエス自身を含む多くの偉大な預言者が、「自分にして欲しいと思わないことは、他者にしてはならない」、「自分がして欲しいと思うことは、他者にもしなさい」と言っていたのを、君たちも耳にしたことがあるだろう。

「作用と反作用の法則」を知ったからには、これらの金言に、一文を付け加えて「自分にして欲しいと思わないことは、他者にしてはならない、なぜなら結局は自分自身にもしてしまうことになるのだから」、「自分がして欲しいと思うことは、他者にもしなさい、なぜなら本当は自分自身にするのだから」とするべきだ。

「私たちが他者にすることは、私たち自身にもすることになる」という至言に、靈的裁きの原理が含有されている。

*** どうして、「靈的な作用と反作用の法則」と呼ぶのですか。**

それは、ある意味でニュートンの第三の法則、つまり伝統物理学の作用と反作用の法則に似ているからだ。

これに馴染がない者に説明すると、この法則は、物体が他方にある力をかけると、同時に同じ大きさの力で押し戻される、ということだ。つまり、二人の宇宙飛行士が宇宙空間で手を繋いでいて、一方が他方を押したとしたら、自分自身も等しい力で逆方向に移動させられるのだ。

銃や同様の武器で撃ったことがある人なら、物理的作用・反作用の法則をよく知っている。射撃では、銃が弾丸に力をかけて、弾丸が物凄い速さで外に飛び出すというのは周知の事実だ。しかし実は、弾丸は、同時に銃に、同じ力を反対方向にかけるのだ。

作用・反作用の法則が存在するがゆえのこの反力は、銃器業界では「後退」として知られる大変強いもので、訓練できていない場合には、銃を支えていた部位が怪我してしまうこともある。

物理的な作用・反作用の法則に類似する「靈的な作用・反作用の法則」は、靈的な次元では、他者に行った全ての行為は同じ規模で我々自身に戻される、と言っているのである。それは実生活では、他者に行くことは全て、実際には我々自身に行くことになる、という意味である。

各人がそれぞれの行為と向き合うことになるというのがこの靈的裁きの基本であり、自分の行為の結果を経験した後で、その行為を修正するか否か決めるのは本人次第なのだ。

*** 他者に対する行為は、どのように靈的進化に反映されるのですか。**

それらの行為が「愛の法則」に反するものなら、魂が進化の高域へ上昇するのを阻むおもりのように重たいものとなる。反対に、「愛の法則」と調和した行為は、気球のバーナーの炎のように作用する。

炎は空気を熱すると、ガス粒子の振動レベルを増加させ、気球内部の空気濃度を希釈し、気球がもっと大気の薄い地帯まで上昇していくことを可能とする。

同様に、「愛の法則」に賛同する行為は魂の波動を高め、もっと高振動でさらに靈性が高いアストラル界域まで上昇することを可能とする。

*** この法則が一般的に適用されているようには見えませんが、世間に知れた殺人鬼や犯罪者や大量殺戮者が、一度も裁判にかけられないまま、年を取ってから、穏やかに亡くなってはいないでしょうか。**

特定の原因または行為に連結した結果は直ぐには顕れないので、犯罪者が生存中に罪を償うのを観ていない者には、裁きが存在していないような印象を与える。

確かに、特に地上の権力の座を占める者の場合には、ただ一度の人生では、その多くの犯罪行為が、裁きを逃れて終わってしまう。このような場合には、他者を傷つけて「愛の法則」に違反した者は、その後の転生で、自分の行為の結果と向き合うことになる。

戦争を招いた統治者が、大勢の人を拷問し死刑にする命令を下したと想定しよう。その権力がゆえに、地上のどの裁判所でも、絶対に裁かれることも有罪とされることもなかった。だがその人生で帳尻が合わされなかった借金は、以後の転生に持ち越され、かつての死刑執行人が、明日は一見無実な犠牲者となり得るのだ。

これが「義に飢え渴く人びとは幸いである、その人たちは満たされる」という一文の意味だ。地上での裁きが解決せずに残したものは、霊的な裁きが解決するというに、疑問の余地はないのだ。

だがそれでも、この仕組みは、懲らしめるためのものではなく、教えるためのものなのだ。いずれにせよ、悪いことをした魂は自分自身に負債を負い、前進していくためには、先ず自分が与えた害を自覚して、次にそれを償うことが必要となるのだ。

*** その対極には、生存中に多くの善行を積んだのに、感謝されるどころか、中傷されたり拷問されて、殺されてしまった人たちがいるのではないだろうか。**

「霊的裁きの法則」のコインの裏面も見なければいけない。

「愛の法則」に従って行動したのに、同輩から感謝されずに、無理解・拒絶・暴力・拷問や死を、善行の対価として受け取った者たちは、人間の独善的な法律に縛られない真の世である霊界で、行為の成果が報われるのだと確信すべきである。

これが、イエスの言葉の「心の貧しい人びとは（謙虚であるとの意味だ）幸いである、天の国はその人たちのものである。悲しむ人びとは、幸いである、その人たちは慰められる」が意味することだ。

*** なぜ、作用と反作用、つまり行為とその結果との間に、時間のズレがなければならぬのですか。行為と反動が連続した方が、もっと公正ではないのですか。**

反作用は行為の瞬間に起動するが、直ちに効果を発揮しないのだ。

行為が「魂の法則」に賛同するものなら、「霊的な褒美」を受け取り、反するものなら「霊的な負債」を負うと言える。

「収穫」は、魂が自分を試す期間が終わるまで、つまり人生が終わるまで延期されるだろう。それは、試験の際に、完全に終了するまでは成績を知ることができず、また、終えた問題を先生が採点し終わらなくても次に進んでいくのと同じだ。

請け負い仕事では、途中ではなく終了した時点で報酬を受け取るように、「魂の法則」に則った行為の場合も直ちにではないが、いつかは霊界で妥当な代償を授かる。この「霊的報酬」は、最終的に魂が肉体を離脱した時点で、もっと愛情深い霊が居住する高い次元まで昇って行くことを可能とする。

霊的な負債の場合には、償い自体は、魂自身の意志で自発的に損害を修復しようと決意するまで延期されるが、それは必然的に、魂が自己の言動を自覚したことを意味する。「自由意志の法則」により、償いを強いてはならない。いつその状況に立ち向かうのかを決めるのは、魂自身である。しかし霊的に進歩したいのであれば、遅かれ早かれそれに立ち向かい、犯した罪業を償わなければならない。罪の償いがされない限り、新たな試練には立ち向かえないのだ。

人生が終了すると、「愛の法則」に反した行為の重さで、似通った性質の魂が住むアストラル界の下層レベルに留まることとなる。「愛の法則」と調和できずお互いに傷つけ合うレベルなので、かなり不幸で苦悩に満ちた生活となるが、ここで更生の決断が待たれる。

***魂は、他者に与えた害を、どのように自覚できるようになるのでしょうか。**

魂は、肉体の死後のどこかの時点で、最後の転生中に起こった最も道徳的な部分に関わる事件を徹底的に振り返られる。魂は、この人生回顧の間に、それらの経験一つ一つにおいて、その時の自分の気持ちのみならず、自分の行為に影響を受けた他の人たちの感情や情緒も感じ取り、その人たちの喜びや不快を自分のことのように感じるのだ。

***具体的にどういう目的で、回顧するのですか。**

魂が、「魂の法則」や他者への行為に関して生存中に決断したことの重要性に気づいて、進化に役立てるのが目的だ。つまり、愛を持って行動したのか、我欲によって行動したのかを、顧みるのだ。

また、その転生で取り組んだどの科目に合格し、不合格なのはどれなのかを知るのが目的だ。今後の転生での試練は、これまでの転生での行動によるところが大きいからだ。

***最後の審判みたいではないですか。**

それに似てはいるが、魂を蔑んだり罰する意図は全くなく、「魂の法則」や万物の生命に対する行為を自覚できるようになるためなのだ。

***自分の行為が正しかったか正しくなかったかを、判定するのは誰ですか。**

高次の霊の手助けを得て、自分自身で判定するのだ。

***生存中に気づけなかったのに、自分の行動が不当だったかどうかを、どうして自覚できるのですか。**

高次の魂が助けてくれるので、自分の進化レベルではまだ持ち得ていない、霊的な洞察力が授けられるのだ。

***自分自身を裁くのでしたら、完全に公平にはなり得ないではありませんか。魂が自分をひいきしないように、どう阻止するのですか。**

今言ったように、魂は高次の存在に誘導されて、霊的に明晰な状態にいるので、自分をえこひいきするような行動はとらない。その状態で、現実をありのままに、完全に公平に見れるのだ。

***そして、どうするのですか。**

魂は、自分の悪い言動を修正してその後の転生で克服できるように準備をして、能力に応じた償いのための試練を選ぶのだ。

それは、魂が選びたい方法による。ゆっくりだが時間がかかる修復もある一方で、試練はきついがもっと速く進化するために役立つものもある。

***でも直後には何が起るのですか。つまり、魂は直ぐ次の生で、早速、前世の行為の修復に取り組むのですか。**

矯正する意図を全く見せない魂が沢山いるので、必ずともそうとは限らない。彼らはそのために、下層アストラル域に停滞してしまい、更生の前段階を踏まないで、再び転生して来てしまう。

また、魂が更生のプロセスを開始したとしても、初めは善と親和する意志力が弱いので、厳しい試練には耐えられない。よって、負債の償いに直面しない過渡的な転生をし、更生のための意志力と忍耐力を養う準備期間とする選択肢もある。

きつい試練に立ち向かう本当の贖罪のための転生は、魂に充分用意が整って、確固とした改善の意志を持った時にやって来る。

***「負債を持つ」魂には、どんな種類の試練が待っているのでしょうか。**

一般に、前世で自分が生み出したのと類似した状況を、自分が身を持って体験する。そして、「魂の法則」と何が調和し、何がしていないのかを自覚して、罪の償いに尽くす。

***理解できるように、例を挙げていただきたいのですが。**

良かろう。大農場と耕作奴隷を所有する、十八世紀の白人の家庭へ、ある魂が転生したとしよう。

おそらくこの魂は、両親の教育によって、農奴も自分同様に感じ苦しむ人間なのだ気づかない。また、物的なものかを問わず個人の利益のために、他の生き物の意志を蹂躪してはならないことや、それが自分と同じ人間の場合にはさらに悪質であることに気づけない。そのため、奴隷制は「愛の法則」と「自由意志の法則」に反する行為だ、と思わずにいられている。

大人になってそこの若旦那となったこの魂に、奴隷を所有するのがいいことかと尋ねたならば、「汚い無知な奴隷と立派な領主とをなぜ比較するのだ」と、彼の自尊心を怒らせるに違いない。「汚い・無知・奴隷」というのは、彼が積極的に維持してきた状況だ。もしこの状態が妥当だと思えるのなら、それは、逆の立場からもこの状況を経験することに、同意していることになる。

つまり、以後の転生では、自分の家族に隷属する農奴の息子または娘として生まれ、奴隷であることから生じる苦悩を、身を持って体験するのだ。そして今度は奴隷となった魂に、奴隷制は良いことかと尋ねてみれば、それは非人道的だと語り、「神よ、私が一体何をしたというのですか」と、自分の不運を苦々しく嘆くことだろう。

結局のところ、自分がまいた種を刈り取ったに過ぎないのだ。もし彼がこの経験から有益な教訓を引き出せたとしたら、たとえば再び大農場の領主に戻るなど、社会の諸相を変えられる立場になった時に、自分が前世で内面的に学習したことを思い出し、奴隷制度の廃止に尽くすかもしれない。

***この例から、奴隷は前世では、奴隷制を利用していただいた領主だったかもしれないと推測すべきなのですね。**

そう、そして領主が、奴隷なのだ。

自己の自由が尊重されるための最善策とは、どんな状況でも他者の自由を尊重することなのだ、と気づくに至るまで、同じグループの魂が、多くの人生で両方の立場を交代で経験することだろう。全てがこうなっているのだ。

***でも、自分がしたのと同じ目にあわせるのは、目には目を、歯には歯を、に等しいのではないですか。**

これは懲罰ではなく、学習形態なのだからと言っておこう。

正しい行いをしたと確信できるのなら、自分がしたのと同じことをされるのも、全く怖くはないだろう。そればかりか、その善行に見合う報酬を受け取ることを、待ち望むであろう。

しかしそうではなく、我欲によって、他者を足蹴にしたのだったら、自分がまいた悪い種を収穫する気には余りないだろう。

復讐の一種のように、違反者を罰することが目的だとしたら、「目には目を」だと理解できる。しかし、この法則の趣旨は罰することではなく、他人に行った行為を自ら体験して、魂の進化を促進させることなのだ。

別の言い方をすると、「霊的裁きの法則」は、我々が学び取れるような方法で、各人をそれぞれの行為と向き合わせてくれる。そして、自分が招いたものと文字通り同じ状態を経験する必要はないものの、それが最も速い習得法なので、惨めな霊的な劣等感から脱却したいと願う多くの魂がそうしている。

***それほど過激にならない別のやり方で、負債から解放される方法はないのですか。**

試練の厳しさは、本人がどれだけ早く霊的な借金を返済したいのかと、試練を乗り越える力があるかどうかによる。試練は、魂にそれを乗り越える準備が整った時にだけ訪れる。

利子の付かない銀行貸し付けに似ており、カルマの借金がある進化を望む魂には、負債を支払って更生するための選択肢が複数提示されるのだが、どれを選ぶかは自分の決定による。時間はかからないが高額な分割金で返済することも、時間はかかるが低額な分割金で払い戻すことも可能だ。

清算し終えるには、より多数の転生が必要となるが、霊的なガイドたちは、二番目の選択肢、つまり借金をより楽に支払う方を勧める場合が多い。

しかしながら大抵の場合、魂は、犯した罪の呵責で苦しむ状態から抜け出したいと急いでいて、カルマを素早く消し去ることができるように、より厳しい試練を選ぶ傾向がある。

いずれにせよ、魂は試練に向き合うことを承諾しなければならず、上手く乗り越えられるように、準備を整えるのだ。

*** 「カルマ」とは何を意味しますか。**

東洋起源の言葉で「霊的負債」ということに等しい。

*** でもある種の試練はとてつもなく辛そうで、そこからは、「人生は涙の谷である」という教訓以外は、引き出せそうにないですよ。**

原因を知らずに判断しているからだ。犯罪がお咎めなされた物語の冒頭部分しか見なかった多くの者にとっては、その人が裁きを受けなかったのが不公平に見えたらう。

だが観客が、その後の転生で勘定が清算される第二話だけを見ても、災いがどこに起因するのか理解できないので、そのような辛酸を味わわねばならない人がいることが、理不尽に思えるのだ。

しかし、もしその魂の犯罪に満ちた過去を知っていたとしたら、多くの者が、二つ目のチャンスをあげようとさえしなかったらう。霊的世界では、いつも次のチャンスがある、いや、更生の機会は無数にあると言った方が良い。

*** 霊的世界に改悔の機会が無数にあるのだとしたら、たとえばキリスト教義で見られるような、悪者に対する永遠の刑罰や懲戒の信念はどこから生まれたのでしょうか。**

永遠の懲罰の概念は、神聖な源から発したものでない。根拠に欠け、霊的な真相に一致していない。不合理な怖れで人びとを支配しようとした、聖職階層が導入した誤った教えの一つに過ぎない。

他者の霊道の探求に寄与する指導役を自負する者が、そうするどころか、人びとをさらに混乱させ、思考を操作して愚かにし、弱点を利用して自らの地位を上げたのだ。彼らは、嘆かわしくも、すでに十分に苦境に満ちたその道のりを、邪魔することに一役買ったのだ。

*** では多くの人が、人生の悲惨な出来事は、事前の打診もなく強制されたものだ、という感じを受けるのはなぜでしょうか。**

それは生まれ変わる前に決めたことで、魂は肉体に宿ると過去を忘れてしまうので、自分ではその決断に関与していないと思ってしまうのだ。

「魂の法則」を知らない者は理解できないだろうが、進化の一步を踏み出す決意をした多くの魂は、非常に困難な状況に立ち向うのだ。

多くの人は、何もしていない善人が、運命のいたずらのように、悲惨で不幸な数々に見舞われなければならないことが、理解できない。そし

て、善人がこんなにも酷く苦しまねばならないのだとしたら、真の裁きが存在する訳がないと結論づける。しかし、もしその魂の過去を垣間見ることができるとしたら、その原因を見出せることだろう。その魂は、「魂の法則」と同調できる前に、犯した罪の修復をし始めているのだ。

したがって、困難に立ち向かう人たちがいることを喜びなさい。第一にその人たちは、更生しようと深く肯定的に改心した魂であり、第二にそれほどの試練に直面すること自体がかなり進んだレベルに達したということで、負債を集中的に清算することにも成功する可能性があるからだ。

*** それでは、魂が会える否定的な状況の全てが、過去の行為の結果であると理解すべきですか。**

いや、そうではなく、その多くは今生の行為の直接的な結果だ。
また自分が生まれ変わった惑星の進化レベルに特有のものもある。

*** それは、負債がない魂でも、贖罪とは関係のない逆境を経験する可能性がある、ということですか。**

そうだ。それは頻繁に起きていることだ。しかし、そうするかどうかは、魂が自由に選択する。

*** そうすることに、どのような意味があるのですか。自虐的に思えます！**

魂は、苦しむのが楽しいからこの道を選ぶ訳ではないのだ。また、苦悩自体が全く不毛なものであり、霊的に何も成長できないのだとしたら、それもやはり意味をなさない。

しかし、それによって、愛の学びにおける霊的な進歩ができるのだ。したがって、真の幸福へと近づけるので、自己記録を更新してゴールした長距離選手がレースを頑張って良かったと思えるように、悲痛な状況を上手く乗り越えられると、努力の甲斐があったと思うのだ。

このような選択は進化した魂特有のもので、後進の同胞を助けるために転生して導こうとする、愛の行為なのだ。そして同時に、自分自身もさらに速い進歩を遂げようとする。なぜなら、後進の者の恩知らずな行為と不正の多くに耐えなければならないので、無償の愛の能力が試されるいい機会となるからだ。

*** 逆境は進化の役に立ち、その多くが過去の行為の結果であると言われても、前世のこととは切り離して、余りにも不平等で非人道的な耐え難い—たとえば飢餓や貧困や戦争など—許せない物事があります。**

それなのに、大変善良で能力が高いとされる存在たちは、人類のこの嘆かわしい未来を変えるために何もしてくれません。これにはどう返答されますか。

確かに、非人道的で許しがたいことは数多くあるが、それらは地球に転生した魂たちが生み出したもので、それらを自覚し、地表から撲滅する努力をするのは、その責任があり、そうすることができる人間自身でなくてはならない。

すでに述べた通り、霊的な進歩は、何の強制も強要もされず、それが魂自身の自由意志と努力で決断されて、内面に取り入れられた時にだけに起こる。これは、「自由意志の法則」という、霊的に進化した存在全てに尊重されている「魂の法則」だ。これが、神や他の高次の存在の、この世の不正を改善する姿が見られない理由である。

ある問題を解決しようと全能の存在がこの世に現れたとしても、その決断が全ての者の意向に沿う訳ではないので、それまで救世主を要請していた地上の者は、今度は自由が失われたと文句を言うであろう。

君たちの世界には、我欲を放棄する覚悟のある人も、自分のものだと思っている物を、それを持たない人びとと分かち合うことのできる人もほとんどいないので、どんな決定であったとしても、損をしたと思う不平分子は、常にいることだろう。

だから人間には、物質界で、制限なく自由意志を使う経験をさせて、自分が招いた状況に対処させるのだ。苦しみはエゴのせいであり、我欲が人類の心に君臨し続ける限り、戦争も飢餓も貧困も不正もなくならない、という結論に独りで達しなくてはならない。

全ての災いを根絶する唯一の方法は、一人ひとりの心から我欲を一掃することだが、エゴの毒を解毒できるのは、愛だけなのだ。

腕組みをしながら救済者がやって来るのを、待っていてはいけない。行動するのだ。そうすれば助けが得られる。「愛の法則」を信奉する高次の魂は、いつでも君たちを蔭から応援するために、傍に居るのだ。しかし、君たちの意に反することはできないので、君たち自身の意志で、率先して行わなければならない。

川に落ちてしまった者が助けを求めているにも関わらず、本人は腕を動かしてなんとか泳ごうともせず、浮ぶ努力さえしないのと同じことだ。

決断しさえすれば、君たちには、自分の運命の方向を変える力があるのだ。

間違いを犯す度に、父親が助けに来てくれるとしたら、一体どんな方法で進歩できると言うのだ？ 学びのためには、自分の決断が及ぼした効果を味わう必要があり、自由に行動して、一方の道を探るか、別の道を選ぶのかを決めなくてはならない。

*** 霊性がさらに進化している世界は、高次の霊性というものを示すために、どうして人を送って来てくれないのですか。**

そうしたいと思っはいるだろうが、何度とくりかえしているように、君たちの自由意志に干渉できないのだ。

進化した物質界の人は、進歩の劣る世界側の合意と同意がなければ、その世界の発展に、集団として干渉できない。そこで、目立たない方法で、軍隊を上陸させたりもせず、高次の人が地球に転生して手本を示すことで、援助をするのだ。そうすれば、その高度なテクノロジーの魔法に眩惑されることなく、感じ方や考え方の共似性によって、彼らの教えを取り入れてもらえるからだ。

テクノロジーで圧倒するケースは、「自由意志の法則」を尊重しない文明なので、国民は高度な文明に依存してしまい、破壊的な結果がもたらされるだろう。自主努力の成果でないものは簡単に忘れられてしまうので、達成できたと思われた革新も、彼らが立ち去ればたちまち元の木阿弥となってしまうのだ。

それに君たちは、現在は肉体を持たないガイド役や霊界の親しい者たちから、精妙な方法で、常に支援を受けている。援助を受けるために、どのように霊界とコンタクトしたら良いかは、もう充分話したろう。助けられるためには、助けが欲しいと願う必要があるのだ。なぜなら、孤独で世間からの孤立を願う者や、進化を望まない者には、その願いが尊重されるからだ。

愛における進化を、誰にも強制することはできない。自分の意志で進化しようと決意しなければ無駄であるし、おまけに、「自由意志の法則」に違反することになる。

*** もっと大きな災いを避けたり、平和や民主主義を守るためには仕方がない、と戦争を正当化する人たちがいますが、これに関してはどう思われますか。**

もし本当に平和や自由を愛するならば、自分が主張することと反対のことをしてはならないだろう。目的に対して手段が矛盾するのであれば、その人は嘘つきか偽善者なのだ。

手段は求める目的と合致しているべきで、目的によってその手段が正当化されることなどあり得ない。戦争によって平和は実現できないし、強制によって自由を得たり、不正によって正義を得ることも不可能だ。

***でも、大部分の人びとは平和に暮らすことを望んでいるのに、一部の権力者たちが戦争を決定してしまうではありませんか。**

それなら、なぜ君たちが望むことと反対のことをする者に権力を渡すのか？

君たちの世界の腹黒い支配者たちが、国民を戦争に招集したとしても、銃を取る者も他者に強要する者も誰一人おらず、武器を製造する者もないとしたら、彼らがいかに邪悪であろうと、何できない筈だ。

しかし、もしそれが可能だとするなら、それは君たちのエゴがそそのかされてしまうからだ。自分は他の者たちの殉教者だと納得させられてしまうから、羊は屠殺所に連れて行かれてしまうのだ。だからこれは、自分が同類の命を奪う権利があると信じて、他者も自分の命を奪ってもいいのだ、と納得させられてしまう者の問題なのだ。

***もし誰かが襲われて、自己防衛で加害者を殺してしまったとしたらどうですか。また、これは例ですが、子どもたちに危害を加える者がいて、加害者を殺さなければ子どもが守れない、としたらどうでしょう。**

いいかね、霊的世界では、出来事自体はそれほど重要ではなく、その時の意図が重要なのだ。

殺されるのを回避しようとしただけで、相手を殺すつもりがなかった者を、最初から殺意を抱いていた者と、同じように裁くことはできない。当人は、大きな損害を与えることなく被害を避けようと、できる限り努めるだろう。

しかし、これは戦争に行く人たちのケースではない。人が戦争に赴く時には、いつかは他の人間を殺したり、自分が死ぬ羽目になると、完全に自覚している。

神を信じる「愛の法則」の信奉者ならば、敵軍に転生した自分の兄弟を殺害に行くために、絶対に自ら進んで入隊などしない。殺人を正当化し得るほど高尚な理念や信仰は、何一つ存在しないからだ。

***でも、多くの人びとが意に反して徴兵されて、前線に赴くように強要されていることも、確かではありませんか。これについては、どうでしょうか。**

当事者の魂にとっては、進退窮まることなので、かなり大きな試練であろう。しかし、このような状況は偶然ではない、と知るべきである。このような試され方をされる者は、おそらく前世では、他者を同じ状況に誘導したのであろう。

これは、愛に賛同する自分の信念が試される、大変厳しい試練である。殺して殺人者になり果てるか、敵軍に拷問されたり傷つけられるか、造反者や裏切り者のレッテルを貼られ「友達」だった自分の一味から投獄・拷問されさらには死刑にされるか、を選択しなければならぬ。これらの選択には情状酌量の余地があるが、死ぬか殺すかの戦争に行くように他者を強要した者の責任はもっと重く、重責だとされる。

君たちの世界では、命を危険にさらして敵軍の兵隊を殺した兵士は、勇者である。一方、一人の敵兵も殺さないで済むよう自分の命をさらした者は、臆病者とされる。

しかしながら、霊的世界では、それが正反対となる。勇敢なのは、殺人に反対する平和主義者であり、造反者であり、裏切り者であり、兵役忌避者である。見知らぬ、おそらく別の信仰やイデオロギーを持つ者の命を守るために、死ぬまで自軍に迫害されることになるだろうと知りつつ自らの命を危険にさらすので、勇者なのだ。他方、どちらかの軍に自分が一番初めに殺されることを怖れて、他者の命を奪うために自分の命を冒す者は、勇者からはほど遠いのだ。

いずれの場合にせよ、どちらを選ぶかを決めるのは魂だ。兄弟の殺害を拒んだために、利己主義者に報復されて地上で一時的に苦しむが、霊界で報酬を授かるのか。それとも、戦争のヒーローとして地上で報われるが、兄弟を傷つけたために、後で霊界で苦しむのか。

***それなら、他国を侵略しようとする国や勢力があったとしたら、攻撃されたり侵略されることを防ぐために、他の国々は何をするべきなのでしょう。破壊されている間、腕組みをしてじっとしているのですか。**

ナチスドイツのケースが思い浮かびました。ヨーロッパやアメリカは、ナチスがその軍力で世界を征服するがままにさせておくべきだったのですか。

君たちが知り得る人類の歴史の知識は、過大に操作されたものだ。

多くの者が未だに、戦争には善い陣営があると信じ、神が応援するのは常に自分が所属する方で、もう一方の陣営は悪魔に支援されるとする。しかし、敵対する側でも全く同じ意見で、自分たちこそが善人で神は彼

らを支援しており、もう片方には悪魔に支援された悪人がいると思っている。

君が言及したような戦争は、一朝一夕にはでき上がらないのだ。実際には戦争というものは、武力抗争が始まるずっと以前から練り上げられるもので、嘆かわしいことに、将来的に敵対することになる二つの勢力はお互いが武装するために予め協力し合い、それから破壊し合うために敵対するのだ。

過激で暴力的なイデオロギーによって、国民は道徳的にも経済的にも退廃してしまうのだ。大規模な戦争は、国民が極度の困窮に陥るような、深刻な経済危機の後に起こってきた。

これらの経済危機は偶然に派生したのではなく、他者の不幸と苦悩の犠牲の上に私腹を肥やして、さらに大きな力を得ようとする経済的・政治的な大権を持つごく少数のグループによって意図的に誘発されたものだ。

彼らは、悪の根源は、人種・宗教・信仰・文化などの違いがある人たちののだと吹聴するために、自分たちの広報メディアに極端な理念を流布させているのだ。しかし、もしそれができるのなら、君たちの我欲をそそのかすことに成功し、君たちが我欲によって、他者の中に兄弟を見出せなくなってしまうからだ。

真に愛を信じる者は、自分の兄弟 —人類は誰でも兄弟なのだから— を殺すために、絶対に戦争に行ったりしないだろう。

君たちには子どもがいないのか？ 子どもたちに、戦争に耐え、傷ついたり殺されたり、飢えたり苦しんだりして欲しいのか？ 君たちの家や村や町が、破壊されたいのかい？ もしそうでないのなら、それは相手側にとっても同じことで、戦争をすれば、望まない苦しみ・死・痛み・破壊を与えてしまう、と考えてみるのだ。敵側にも苦しむ子どもがいて、その子たちは貧困・飢餓・痛み・苦悩・破壊と死を患うのだ。

君たち自身の子どもの望まないことは全て、他人の子どもにしてはならない、とはっきりと言っておこう。他者の子どもにすることは、実際には「霊的裁きの法則」によって、将来の君たちの子どもに対してすることになるのだから。

***お話によると、戦争の主な扇動者は少数で、残りは自分の我欲によって彼らに引きずられるままになるようですね。**

そうだ。

*** それなら、戦争の主犯者たちは、苦悩と破壊を大勢の人びとにをもたらすので、霊的に莫大な借金を負いますね。**

全くだ。反省して態度を改め始めてくれるかもしれないので、物質界の「権力者たち」が自身の借金をさらに増やしてしまう前に、言っておきたいことがある。

彼らは、侵略や戦争を企てて、躊躇せずに不和や憎しみを国民の間にはらまき、おまけに厚顔にもそれを、神や民主主義や自由やその他の高尚な名目の下に行って、それらの理念を汚がしているのだ。

彼らは、血の凍るような種をまいているのであり、来世では、地雷をまく指示をした国の不具の子どもや、飢え死にさせた国の腹ペコな子どもとして生まれ変わり、否応なくふんだんに苦い果実を取り入れなければならない、と知るべきだ。

物質界で権力があっても、霊界での地位は、お金や権力や影響力によるものではなく、どれだけ愛の能力を開発できたかだけで決まるので、現状は一時的なものに過ぎず、霊界でそれを維持することはできないのだ。

この世の主だと思い込んでいた者たちが霊界に移動し、現実をありのままに見て、自分のせいで死んだり苦しんだりした者たちが、霊的には自分よりも上のレベルにいるのを見れば、なんという失望を味わうことだろう！ 国家元首は凱旋で礼遇されなぞしない。その反対に、悪行の報復をしたがっている、大勢の劣った者たちが待ち構えているのだ。自分が招いた苦しみの分だけ、苦しみを受けるのだ！

*** 結果として、不具や貧困や飢餓、その他の困窮と辛苦を味わう羽目になった、武力抗争の犠牲者には何と言ってあげられますか。**

物質的なものを喪失することや、肉体の命ですら失うことに執着してはならない。それらは全て、仮初めなものなのだ。

君たちは不死で、誰にも君たちを殺すことができない、と思い出すのだ。君たちが本当の生である霊界に戻った時には、そんなことはどれもどうでも良くなる。そこでは、全ての苦しみが癒されて、全ての傷も治されるのだ。そして、愛のみが重要となる。

経験した災いの全てが、同胞の苦悩に敏感になることに役立ち、同じ経験を二度と誰もくりかえさないようにと願えるようになったのであれば、それは結果として、愛せるようになったということで、たとえ僅かであっても、無駄ではなかったのだ。

第四の法則：「愛の法則」

- 魂の目的は、自身の自由な決断で、無償の愛の経験を通して、幸福になることである。
- 愛なくして進化はなく、愛なくして叡智はなく、愛なくして幸福はない。
- 愛は、靈的宇宙を調和し躍動させる力である。

*** くりかえし、「愛の法則」と言われていますが、あなたにとって愛とは何ですか。**

愛は広義では、他者のことを自分自身のことのように感じる能力だと定義される。

*** でも、愛は実在するものですか、それとも単なる抽象的な概念なのでしょうか。**

愛は実際に存在し、「生命の本質」または「魂の素」の強い振動として顕れ、霊的次元からメンタル・アストラルを経て物質次元へと、全ての存在次元に伝わる。

愛の顕現は、エネルギー的には最高の振動エネルギーで、星の光のように最も明るい光となる。この振動・愛の波動は、光のものと同様に、伝送し知覚することが可能だ。

*** 愛として、具体的に経験できるものは何ですか。**

人は真の愛を体験すると、充足して完全な幸福を感じ、えも言われぬ波動と力と感覚で満たされる。そしてもうそれ以上、他には何も必要としなくなる。愛に感化された魂は、他者を自分自身の一部のように感じるのだから、他の人にも愛の至福を伝え、幸せになる手助けをしたいと望む。

愛に満たされると、アストラル体の振動が高まるので、オーラは非常に大きくなり、さらに輝きを増す。愛の度量が大きければ大きいほど、その人の波動は高くなり、伝送可能なエネルギー量も増える。

人が愛す時には、この愛の波動を相手に伝えているのだ。受け手が敏感であれば、熱くはないが温かい強いエネルギーが波のように押し寄せる感覚と、体中を巡る波動を感じる。それは、魂の気孔の一つ一つを満たすように、自分の一番奥深い隅々まで行き渡り、ぞくぞくさせ、平和と調和の雲に包まれている感じにさせる。

このように内面が安定した状態では、人は楽観的で朗らかで、寛いでいて冷静で、自分自身の問題はそれほど深刻ではないと理解するのだ。

*** お話を聞く限りでは、とても神秘的な体験のようです。僕たち人間に、どの程度達成可能なものか分かりません。**

手は届くのだが、君たちは非常に物質的になっているので、愛を直接与えたり感じたりする感受性に欠けている。ドリルが音を立てている脇で、ラジオを聴こうとするようなものだ。

そのため大半の人は、愛を感じるというよりも、愛がゆえになされる行為を評価する。もっとも、一体何が人をそう駆り立てているのかが理解できていないのだが。

*** 愛がなぜ、「魂の法則」なのですか。**

魂の内部に、そう刻まれているからだ。魂は、幸せになるために愛を必要とする。愛が欠如すれば、魂は、根っこから引き抜かれた花のように枯れてしまう。

「自由意志の法則」で、魂が幸せであるために自由が必要だとしたら、「愛の法則」では、魂が幸せするには愛することが必要となる。これら二つの法則を統合すれば、魂は幸せであるためには自由に愛することが必要となる、と言えるであろう。

*** 魂の幸福のために愛が必須であるなら、皆が愛せるように生まれついていないのはなぜですか。**

愛せる能力というのも、魂が自分の進化において、独自に発達させなければならない能力の一つなのだ。説明した通り、魂の火種は、創造された時点で無数の能力を秘めているのだが、それらを発達させる必要があるのだ。その一つが愛せる能力だ。愛すという能力を発展させることは、魂の進化の工程にとって最も重要な目標である。愛は、霊的宇宙を調和し躍動させる力である。

*** 愛はどのように、宇宙の調和に影響するのですか。**

我々霊的な存在は皆、愛の所業によって存在しているのだ！愛は、創造しようとする衝動の全てを養う力である。

愛は、宇宙の魂の連帯を支える基礎となるものだ。愛に感化された魂は、宇宙の全ての生命の進化を手助けし、愛から溢れ出る至福を誰もが体験できるようにと願う。本当のものと永続的なものは、愛の基盤のみ構築できるのだ。

愛 VS 我欲

***愛せるようになるために、最初にすべきことは何ですか。**

愛すためには、自分自身でいなくてはならない。そして自分自身でいるためには自分を知らなければならない。

他者を愛したければ、自分を知り、自分を愛することから学びなさい。自分自身を愛せない者には、他者を愛することができない。

***でも僕は、他者を愛すためには自分自身を放棄しなくてはならない、と理解していたのですが。**

絶対にそんなことはない。君がしなくてはならないのは、我欲を放棄することだが、感情を放棄することではない。

君たちは、愛とエゴとを混同しているのだ。愛についての概念が、間違ってしまったているのだ。自分を愛すというのは、自分が他者より優れていると思込み、利己的な気まぐれを満たすことに専心することではなく、自分の情緒的な必要性や感情を認めて、それを人生の原動力となるように発展させていくことだ。

だからこそ私は、真に愛すためには、自分自身を知ることが非常に重要だと言っているのだ。自分を知るということは、感情と思考とを区別できることを意味し、感情から生まれるものと我欲から生まれるものを認識できることだ。

***それでは、愛と、愛ではないものをどう区別するのですか。**

愛は、その最高の顕現において、無条件でなければならない。本当に愛する者は、何の見返りも期待しない。私益で行動する者は、本当には愛していないのだ。

愛は自由でなければならず、そうでなければ愛ではない。人を強制して、愛すように仕向けることはできない。

愛したいと願う者は、自我を放棄することも望まねばならない。愛と我欲は、お互いに両立し得ない正反対の概念だ。エゴとは実際には愛の欠如なので、エゴを放棄しなければ愛せない。愛すことを学ぶというのは、我欲からの脱却を学ぶに等しい。愛す能力を高めれば我欲は減少するが、その逆も、また然りだ。

***魂はどうやって、愛すことを学ぶのですか。**

それは、長い時間をかけて進歩させてゆく永続的な工程だ。魂は、人間の段階になる前に学び始めるが、愛に関して新しく学ぶことは尽きないので、この工程も決して終わることがない。

話すことを学ぶ時のように、他者との絶え間ない相互作用による以外には、愛を発達させることができない。

魂がほとんど成長していない初期の段階では、自分より進化している存在から受ける愛を情緒として体験する。それを快く感じるのだ。また、愛の欠如、すなわち自分のようにまだ愛することができない者の我欲も体験する必要がある。これは不快ではあるが、愛の欠如と愛の存在を認識して両者を区別し、愛の实在を評価できるようになるので、自分の感情を発達させるための刺激とはなる。

つまり、魂は、愛せるようになる前に、愛の送り手として手本を示してくれる、自分より進化した者の愛の受け手として、感受性を磨く。また、愛の欠如という手本を示してくれる、自分と同等、あるいはもっと利己的な者とも共存しなければならない。このような相互作用を総合して、魂は最初に情緒を、それから感情を、成長させることができるのだ。

魂が他者からの愛を認識できるようになるのは、愛の送り手になる準備が整った時だ。最初に初めての愛情が芽生えるのは、自分を愛してくれた人（通常は家族の一員）に対してであり、自分に利己的な態度を取った者には敵対心を抱き、関わりを持たなかった人は何の関心もないただの人となる。この段階での魂は、愛すと情熱的であるが、愛を失うと報復的で恨みがましい。

魂は、より進化した次の段階では、苦しみ自体が愛とは相容れない否定的なことだと気づく。そして、自分を傷つけた者に害を与えることを望まず、被った痛手を賠償させる手段であった復讐を放棄する。この段階を、進歩した条件付きの愛、と呼べるだろう。

そのうち魂の理解力と感受性のレベルがかなり高まると、自分を憎み蔑んで、耐え難い苦痛を与えた者たちも含めて、この世の全ての存在を愛す、という大きな飛躍を遂げる準備が整う。すなわち、イエスのような進化した存在たちが「汝の敵を愛せよ」と言って伝道したのと同じ、無条件の愛に達する最終段階に入るのだ。

もちろんこれは一朝一夕にできることではない。最初の段階から最終段階に到達するには、途方もない歳月が必要となろう。

*** 理解できるように、これらの段階を要約していただけますか。**

いいだろう。この道程は継続的なものだと言ったが、良く理解できるように、以下の段階に分けてみよう。

1. 愛の受け手としても、送り手としても鈍感。
2. 愛の受け手として部分的に敏感であり、送り手としては鈍感。
3. 愛の受け手として敏感で、送り手として部分的に敏感（条件付きの愛）。
4. 受け手としても送り手としても、とても敏感（進歩した条件付きの愛）。
5. 受け手としても送り手としても、完全に敏感（無条件の愛）。

*** 情緒と感情の源泉となるものは何で、両者はどう違うのですか。**

魂は進化の初期の段階では、情緒を感じることはできないが、通常、このような情緒は、外界からの刺激に反応しているに過ぎない。

情緒の感知力は、人間以前の段階から発達し始めている。実際、犬や牛や馬やイルカなど、多くの高等哺乳類が、様々な形でかなり深い情緒を感じたり表現したりしているのを、認めることができるだろう。

情緒を感じる体験を重ね、決断をする際に情緒に配慮するようになるにつれて、魂は感情を発達させ始める。感情は、情緒の進化した形態、と考えてもらって良いだろう。

*** 情緒と感情の違いと、両者の関係を、より詳しく説明いただけますか。**

情緒の継続時間は短く、一般的には、外部または内部の何らかの刺激によって誘発される。

感情はもっと長く続き、魂により深く根ざしており、外界からの影響を受けるとは言え、外部の誘因が必ずしもその原因ではなく、魂自体の意志による。

感情と情緒は緊密に結びついている。感情は、情緒を呼び覚ますことが可能だ。感情は、情緒を湧き出させる内なる泉のようで、その意味では、情緒は感情の表現形態の一つである。また、外界からの影響で感じられた情緒は、特に感情に影響し、感情を起動させたり抑制する刺激剤となる。

最も発達した感情は、愛である。無条件の愛の感情を体験するに至ると、それは永遠に尽きない感情なので、それを目覚めさせたり育てるために外界からのいかなる刺激も必要としなくなる。

*** 情緒や感情は、魂のどの部分で生まれるのですか。**

愛の情緒や感情は、霊体で生まれる。

利己的な情緒や感情は、霊体で感じ取られるものの、エゴ的な要素はメンタル体で付加される。

*** お話分かりませんが、利己的な感情や利己的な情緒とは何ですか。**

利己的な姿勢から生まれる、否定的な感情や情緒だ。実際には、利己的な態度は思考であるので、頭で生まれる。

*** それでは、感情と思考は、別々の源から生まれるのですか。僕はこれまで両方とも、頭脳の産物だと思っていました。**

それが実は、同じ源ではないのだ。

感情は魂（霊体）から生まれ、思考は頭脳（メンタル体）から生まれる。

*** 我欲は頭脳で生まれ、愛は魂で生まれるということでしょうか。**

そうだ。今言った通り、利己的な情緒や感情は霊体で感じ取られるが、エゴ自体は頭脳で生まれるのだ。

*** その点を明らかにして下さいませうか。どうしてエゴが頭脳から生じて、そういう利己的な感情や情緒は魂で感じられるのか、分からないのです。**

もちろんだ。ガラス張りの丸屋根の下で懐中電灯をつけている人を思い描いてみよう。

屋根のガラスが透明ならば、懐中電灯が発する光も、外から内部に入る明かりも、ガラスを通して変化することはほとんどないだろう。しかし、丸屋根のガラスが透明ではなく不透明だとしたら、内部から外部へ出る光も、外から丸屋根の中に入る光も、そこを通過することで屈折してしまう。

懐中電灯を持った人は霊体に相当し、ガラスの屋根はメンタル体に相当する。丸屋根の不透明さが我欲を象徴している。

利己主義は、他者の感情や情緒（入ってくる光）をそれらが霊体に届く前に変化させてしまうので、その捉え方が変わってしまうだけでなく、霊体から生じる感情や情緒（発信される光）やそれらの表現の仕方さえも変えてしまい、頭脳を通過する際の利己的要素にまみれたままで、他の人に受け取られてしまう。

*** 愛と我欲の関係が、人間の本質にどう作用するのか、まだ良くイメージできません。一体なぜ人は、愛することも利己的になることもできるのですか。この点を、どうか明らかにして下さい。**

ああ、もちろんだ。人間というものが玉ねぎで、芯に愛という光を放つ魂を持っていると想像してみなさい。

中心の光の発信元は何重もの層に包まれていて、その各々が少しずつ光の進行を妨げるので、全部の層に覆われてしまうと、外に出て行く光はほぼ完全に遮られてしまう。

これらの層の一つ一つは我欲を表しているのだが、最終的に愛という光を輝かせ、その最高の表現が可能になるように、序々に取り除かれていかねばならない。層を除去していくにつれて、内部の光（愛）は外に出易くなる。

一番外側の層は、最も原始的で表面的な我欲に相当する。それは、虚栄心である。中間層は自尊心であり、一番内側のものは尊大である。

人はそれぞれ、我欲を消去する工程の様々な地点にいる。

地球に住む魂の大半は、最初の層の幾つかを除去できたに過ぎない。中間層の何枚かを取り除くことに成功した者もいるが、我欲の最も深層部を排除する過程にいる者は僅かである。

この工程は連続的なもので種々様々なレベルの魂がいるとは言え、大きく三つのグループに種分けしてみることができる。

層の除去段階に従って、親切で見栄っ張りな魂、寛大で気位の高い魂、愛情深く尊大な魂に分けられる。

***なぜ、肯定的な形容詞と否定的な形容詞の二つを使って分類するので
すか。**

分類によって、魂の利己的な部分を際立たせるのではなく、各段階の魂が発達させている資質も認めるようにしたいからだ。最初の形容詞は、魂が愛の育成に努める際に到達可能な代表的な資質を表し、二番目の形容詞は、魂の我欲の段階を示している。

虚栄心に満ちた者は大変親切になれ、自尊心の強い者はとても寛大に、また尊大な者は、自我に打ち克ち感情のために戦おうとする時には、とても愛情深くなれるのだ。

我々一人ひとりの中に我欲が存在することを認めて、それを自覚して克服するために定義づけをすることは、何も悪いことではない。

魂にとって悪いのは、自我の存在を認めようとしめないことだ。つまり、本当に愛し真に幸せになるために除去すべき利己的な部分を全員が持っている、という現実を認めないことである。アルコール中毒者が自覚し

ない限り治療できないのと同様に、認めないものを克服することはできないので、我欲を認識できないと靈的に停滞してしまう。

*** あなたが、虚栄・自尊・尊大と呼んだ我欲の三つの顕現形態のそれぞれの特徴について、さらに詳しく説明して下さいますか。**

いいだろう。虚栄心・自尊心・尊大という風に、最も低俗なものから巧妙なものへと、少なくとも三つの形態に我欲を分類することが可能だ。

我々は、通常の会話の中でこの三つの言葉を頻繁に使用しているが、これから見ていくように、靈的な概念はずっと幅広く奥深く、多くの面で通常使用する意味とは異なっている。これからその一つ一つを定義して、顕現形態を分析してみよう。

*** 虚栄心とはどういうもので、どんな顕れ方をするのでしょうか。**

虚栄心は我欲の最も原始的な形態だ。これは、若い魂と、知的面では充分進歩したにも関わらず、感情面ではまだ初心者の魂に特有なものだ。

虚栄心の最大の特徴は、自分本位なことだ。特に自分が必要とすることや基本的欲求を満たすことに熱心で、他者の必要性にはほとんど、あるいは全くというほど関心を示さない。多くの場合に、他者の自由意志を侵害していることには気づかず、自分の自由意志ばかりを優先しようとする。

見栄っ張りな人は自分が中心であろうとして、他の人たちから注目されることを望む。愛をほとんど知らないで、真の愛とおだてとの違いが良く分からない。愛よりも要求が多い。それゆえ、人間関係では、愛され愛すことよりも、知名度や賞賛や賛美を求め、おだてられたり自分の要望が叶うことを好む。

見栄っ張りな人は常に自分と他者とを比較し、いつも人よりも上位に立とうとする。能力や物的面で自分より下だと見なした者を馬鹿にしたり蔑むことが多く、自分にとって有益だと思う人を過剰に賞賛する。

常に自分の利益を優先し、不公平な行動を取ることが多い。そして、利己的な行為をカモフラージュしようと、しょっちゅう事実を曲げる。感情が未発達なので自分自身に不満を覚えることが多く、孤独になるのを極端に嫌う。

他者を大いに必要とし、自分の必要性のみならず趣味や気まぐれまでを満たそうと、しばしば相手を操り思い通りにするので、周囲の人を肉体的にも精神的にも隷従させてしまうほどだ。しかし、期待する満足感

が得られなければ、直ぐにその人間関係に飽きてしまう。そのため、家庭では伴侶や子ども、仕事では部下などの弱者を、自分の影響下から逃れられない所有物のように見なし、蹂躪することがしばしばである。

自分に値すると思っていた注目が得られない場合には、被害妄想や攻撃、脅しや嘘など、思いつく限りの策を弄し、いかなる手段や代償を払ってでも、注意を引こうとする。

この欠点が顕著に顕れると、そのネガティブな息詰まる波動で周りの人びとが消耗してしまうので、虚栄心というものを知らず、どう扱っていいのかわからなければ、長時間我慢できる人など滅多にいないだろう。

これが、彼らには知人は多いのに、余り友人ができない理由だ。誰も何もせず自分だけがどれほど頑張っていることか、としょっちゅう自慢するにも関わらず、努力が要ることには直ぐに飽きて、他者に責任を負わせようとする。

私心なく人にさりげなく尽くすことは稀で、いつもそれを誇示し、一般的に自分の行為以上の返礼を見返りに求める。見栄っ張りな人は、善い人になるつもりはなく、そう見せかけようとしている。

*** それなら、そんな人が余りいないことを願いますよ。**

実のところ、人類の四分の三はまだこの初期の進化段階にあり、君たちの世界の政治家層の一番の欠点が虚栄心なのだ。もっとも、自認できること自体がより進歩していることになるので、今話したことが自分に当てはまると言う人はいないと思うがね。君たちの惑星がこんな状態なのも、そのせいだ。

*** そんな風に利己的な人と暮らすのは、耐え難いでしょうね。**

このようなものや、もっと目立たないエゴから、君自身が無関係だとも思っているのかね？ 進化していない人と一線を画そうとして、理解しかねると言い切ること自体に、君自身の我欲がチラついている。

虚栄心の段階は、その後の自尊心と尊大という段階と共に、完全性への道程において、全ての魂が一つ残らず通過しなくてはならないものだ。

これらの段階を超えられた者は、ある時点で自分の欠点に気づき、克服の努力をしたのであり、高次の人の見習うべき手本のお陰で、それを成し遂げることができたのだ。進化した魂たちが自分たちだけで前進して、進歩の遅い同胞を見捨てたとしたら、一体どんな愛を育てていると言えるのだろうか？

このように露骨な説明をしてしまうと、大変手厳しく思えるだろう。しかし私には、誰かを差別したり除外する意図はなく、君たちが虚栄心という我欲の形態を理解し、その知識を自己改善に役立てるよう望んでいるのだ。

*** この場合は、虚栄心になって顕れる我欲のことですが、魂は、自分のエゴをどのように自覚して、克服していくのですか。**

通常は、自分と似たレベルの者の利己的な行為を、身を持って痛感することによる。「霊的裁きの法則」は、他者の行為を通してであろうと、各人を自分の行為と向き合わせ、自己改革のために最大の恩恵が得られるようにする。

魂は実際に苦しむことで感受性を高め、特に自分と似通った状況を経験した他者の苦悩を、より敏感に感じ取れるようになる。その者に対して芽生える連帯感は、愛の萌芽なのだ。

*** 魂は、自分の行為が生み出した苦悩を必ず実体験して、それらの行為が他者に有害であった、と学ばねばならないのですか。**

いや、自分の行動が他者に与えた害を自覚でき、自分の過ちや他者の経験から学ぶことができれば、理解したことになるので、その必要はない。しかしそのためには、感受性や愛が十分に発達していなければならない。なぜなら、愛がある場合にのみ、他者の気持ちを苦悩も含めて、自分のことのように感じられるからだ。

初歩段階の魂の場合は、自分の利己的な行為を自分自身が味わって苦しんだ方が、速く進歩することができる。一方、愛を育むことができれば、自分の過去の体験や他者の体験を理解することで、もっと速く進歩できるのだ。

*** 理解によって、虚栄心を克服するにはどうしたらいいのですか。**

最初の一步は欠点を自覚することで、その次は態度を是正することだ。

自分の欠点を認識したからと言って、それが表面化しないようにできる訳ではない。自覚し認めるだけでなく、我欲に従った行動を避け、その言いなりにならず気持ちに従って決断するなら、我欲は次第に力を失い、最終的には克服されるだろう。自覚すれば、虚栄心がどのようなものを深く認識でき、それがどのように自分に顕れ、何によって増長されるのかを知ることができる。

幸せになるためには周囲の注目の的となるのが重要で、皆から褒められたえられたりちやほやされて、喜びや贈り物や注目を山ほど貰うのがいい、と信じることで、虚栄心は増大する。

虚栄心は、幸せになるためには、物であろうと人であろうと身の周りの全てのもを所有する必要がある、と自分にも他人にも思い込ませるように現実を変えてしまう傾向となって顕れる。

虚栄心は、進路にある全てのもを吸い込む掃除機みたいに自分に溜め込みはするが、持っているものを何一つ評価しない。それは、見たところ世界一素晴らしくそれなしには幸せになれそうにないおもちゃを買ってくれと、地団太踏んで親に要求する子どものようだ。だが、おもちゃを手に入れると、何分とも遊ばず、直ぐに飽きて壊してしまう。

したが、感情を呼び覚ます努力をせず、自分の気まぐれを満たすことばかりに夢中でいる限り、彼らは常に不満・空虚・不幸であり、他者から愛されてもそれが分からず評価もできない。

自分自身の努力や意志によって成し遂げることでなければ、それを本当に理解して評価することも楽しむこともできないが、虚栄心の強い者は、何に対してもほとんど努力をせず、他人が自分のためにしてくれるのを望む。

目的を持った場合には、外見的・物質的・表面的なものが多く、魂の内面的目標であることは滅多にない。

見栄っ張りな者は、自分で火を起こすのが面倒なので、いつも隣人の焚き火で暖を取る人に似ている。常に他人に依存し、自分自身では何もしない。自分に独自の火を起こせば、他人に頼って暖まる必要はない。この火は、霊的次元では愛の炎であり、魂を慰め暖め、進歩して本当に幸せになる力を与える。

***でも、幸せになろうとして成功を求める人は大勢いますが、彼らに言えることはありますか。**

自分自身を偽っていると言いたい。成功は虚栄心を満足させるが、感情にとっては落とし穴となる。幸福を勝ち取る唯一の方法は、自分を愛で満たすことだ。

***理解を通して虚栄心を克服するにはどうするべきかを、短くまとめていただけますか。**

いいだろう。虚栄心の強い者が欠点を克服する第一歩は、幸福は外部にあるのではなく、内面次第なのだとして理解することだ。

我々全員が学ぶべき大切な教訓は、真の幸福とは、他者が自分を愛すかどうかで決まるのではなく、自分が愛せるかどうかによるということだ。だから幸せになりたければ、他者が自分を愛してくれるのをがむしやりに求めるのを止め、自分自身の感情を目覚めさせるようにしなさい。

*** 見栄っ張りな人にはどう助言して、自己進化に役立ててもらえますか。**
他者の賞賛や慈しみ、成功や信任を得ることでは、絶対に幸せになれない。

自分の人生に不満足で、孤独感や虚無感があるとしたら、不幸の原因を外部に探さないことだ。原因は外にあるのではなく、自分の中にあるからだ。

満ち足りることは絶対がないので、他者の火で暖まろうとしてはいけない。他者が君のためにしてくれたりしなくなることに自分の状態が左右されないように、自分自身の炎を起こしなさい。

利己主義は脇に置いて愛しなさい。内面の虚無感を満たす唯一の方法は、無条件に愛することなのだ。

*** 今言われたことは、前に話されたことと矛盾しているようです。他者から愛されることを放棄したとしたら、どうして自分を愛せるのでしょうか。**

説明が良くなかったかもしれない。愛されるのを放棄する必要はない。間違ったやり方で幸せを求めている、と言いたいのだ。天秤の片方の皿にだけ重りをかけて、均衡を保つように要求しているのだ。

*** どういう意味かがはっきり分かりません。理解できるように例を示して下さいますか。**

良いだろう。世界にある全ての愛を分配するために、全人類を巨大な広場に集合させたとしよう。

そして先ず「愛が欲しい人はいますか」と聞くのだ。すると、100%の人が「僕だ、僕だ。最初に僕だ。僕が最も必要としている」と訴えながら手を挙げることだろう。

しかし次に「愛を与えようという人はいますか」と聞けば、広場は直ぐに空っぽになり、手を挙げようと居残る者は僅かだろう。

分与できるものは何か？ 少数の者が与える愛だけだ。

これが君たち人類に起こっていることで、大半は愛を受け取るつもりしかないので、世界を支えているのは僅かな者の愛なのだ。しかも大半の者は、愛を受け取っているのではなく、主に我欲を満足させているだけなのだ。

我々は主体性に欠け、愛が外からやって来るのを待っているのだ。外部からの愛が、あたかも魔法のように我々に達して幸せにしてくれて、秘薬のごとく何をする必要もないと思いつこんでいるのだ。

しかし、必要なものを全て受け取っても、受身であり続けて我欲を克服しようと努めないのであれば、内面の全てを与えて君を愛してくれる存在が現れても、「まだ足りないよ。僕はまだ幸せではない。もっと愛してもらい必要があるよ」と言うだろう。そして、絶対に内面の虚しさを満たすことができないので、もっともっと、と要求するのだ。

くれたものは決して評価せずに、貰っていないものばかりにこだわる。人生のどんなに些細な障害であろうと、文句の口実となる。朝起きた時に、曇り空なら寒いとぼやき、天気良ければ暑いと愚痴るのだ。

これは、幸福の求め方が間違っているからなのだ。自他に対して能動的に呼び起こす愛のみが、空虚な感覚を満たすことができるのだ。それゆえ、幸せになるためには、愛を受け取るだけではなく、愛を与える必要があるのだ。

*** 虚栄心の問題に戻りますが、虚栄の段階にいる全ての人に同じ特徴があるとは言えないと思うのですが。**

同じ特徴ではなく、虚栄には様々な段階がある。

虚栄の初期の段階では、我欲は、強欲（自分の持っているものを他者と分かち合いたくない）、貪欲（他者を犠牲にしてもどんどん欲しが）、羨望（自分が欲しが）る物的なものを持つ人を拒絶する）といった、より原始的で物質的な顕れ方をする。

魂が感情面を認識して進歩した次段階では、物質的な利己心は、霊的なものへと変化する。この段階での魂は、まだ我欲にしがみついているが、同時に感情も発展させ始めている。まだ愛を与えようとはしないが、愛の存在を認知し心地よいと分かっているの、愛を受け取ろうとする。

強欲が執着（特定の人からの思いやりや愛を他者と共有したくない）に変わるのはこの時で、貪欲は独占（皆が自分だけに注目して優しくしてくれるのを望む）に変わる。一方、羨望はもっと上手く化けて、自分にはないが欲しいと思う美德を持つ人たちに対する反感へと変わる。

感受性が強くなって正義の概念はもっと発達するものの、我欲から離れられていないため、損得が絡むと、故意に自分の得になる不公平な行動を取ることが多く、自覚している分だけ余計に罪深いと言える。

*** 根本的にどのように進歩すれば、虚栄心の段階を克服したと言えるのですか。**

虚栄と自尊とを区別する主な進歩は、魂の愛を目覚めさせることである。

虚栄心の強い者は一方的に愛を受け取るだけだが、自尊心の強い者は、もう愛の送り手となれる魂である。それは、かなりしっかりと主体的に、本当に愛することができる能力を獲得したことを意味する。

*** 虚栄心の強い者は愛することができない、または愛を体験したことがない、ということですか。**

もちろんそうではない。全ての魂は愛することができる。実際、自尊心のレベルに達した魂は、全てがそれ以前に、虚栄心の段階を経ている。

また当然のことながら、一夜にして愛の発信者となったのではなく、愛の炎を灯すか消すかという、感情の発露とエゴとの葛藤が長く続いた期間があったのだ。

虚栄心の強い者の炎は弱く、絶えずついたり消えたりをくりかえす。感情面で努力する確固たる意志に欠け、利己的な気まぐれを満たすことにまだ一生懸命なので、炎を育むことに力を注がないのだ。

別の言い方をすると、虚栄心の強い者がまだ自分の炎を灯せず活性できずに、他者の火で暖まろうとする一方で、自尊心の強い者は、すでに自分の内面に炎を起こす方法を発見している。また、その火が力強く燃える時に生じる真の愛の片鱗を認識し経験したことがあるので、より鮮明な体験ができるように、確固たる意志で炎が消えないように努力している。

*** 魂はどうやって、自分の火を起こす方法を学ぶのですか。**

自分自身の体験と、進化した魂たちを手本にして学ぶのだ。

虚栄心の強い魂は、通常、身近に転生した愛の送り手となるもっと進化した魂によって、手ほどきを受ける。それは自分のパートナーであったり、父親や母親、息子や娘、兄弟や姉妹などの家族である。多くの場合、他者が自分に尽くすことに慣れ切っている進化の遅い魂は、その時点では与えられていることを自覚できずに、もっともっとと要求し．．．遂には失う羽目になる。

その時になって失われた愛を懐かしみ、かつての愛を再び味わいたいと願い、愛されていたのに評価できなかつたことを自覚し認識し始める。この欲求によって、自分をそれほど愛してくれた人たちに対する最初の感情が芽生え、それが以後の転生に持ち越される。つまり、人が愛を与えられるようになるには、最初に愛を受け取れなければならない。

要求ばかりしていた魂は以後の転生では、自分より進化の劣った者と身近に共存する体験を課され、過去に他者に求めたのと同じように要求されるであろう。こうして、他者の利己的な行為の中に自分のエゴを認識し、自分自身と向き合うことになるのだ。

この学習は、愛の受け手または送り手という、主な役割を転生ごとに交代しながら、数え切れないほど継続することもある。送り手として与えれば与えるほど、受け手として受け取れるようになる。

愛の道を歩むのか、それとも我欲の道を続行するかは、魂の意志次第なのだ。

*** 虚栄の段階を超えた魂は、他にはどんな進歩ができたことになるのでしょうか。**

虚栄心から充分に解放され、完全に自尊の段階に入った魂が成し遂げたことを大まかに説明しよう。それは、しっかりとした愛の送り手になり、感情を理解できる魂になったことで達成できたものだ。

先ず、正義の概念がもっと進歩している。自尊心に達した人は、外見的なものよりも本物で公正なものに気づいている。一般的に気位の高い者は、より公平に行動する。不平等になりそうな場合は、自分が得しようとはせず、他者が被るであろう損害も考慮して決断する。

もはやちやほやさされたいとは思わず、真に愛され愛すことを求める。

気位の高い者が獲得した見栄っ張りとは反対の資質は、控えめになることであり、目立つことはしようとせず、公正で寛大であることに満足を感じる。

自尊心の強い者は、自分が愛する者には寛大である。それゆえ、人間関係においても注目の的になろうとはしない。百の表面的なつき合いよりも、一つの本物の友情を望むのだ。

*** 気位の高い人は、見栄っ張りな人よりも霊的に進化しているので、進化の仕方も速いということでしょうか。**

そのようなことはない。進化の速度は、我欲から脱却して愛そうとする、魂の意志と力のかけ方によるのだ。

自尊心の強い者でも進化が止まってしまって、多くの転生で停滞したままになることもあるし、虚栄心に満ちた者でも大いに努力して、素早い進歩を遂げることがある。

だが、感情面の知識や自覚が大きいので、進化した者の方が能力があることも確かだ。彼らは進化しようとする意志がより一層固く、停滞すると苦しみが募るので、その不快感に後押しされて前進する。

多くの転生経験を持つ進化した魂と、まだ若く余り進化していない魂とを比較することは、七歳の子とも十五歳の若者に同じ知能検査をして、その結果の有効性を信じることにように、馬鹿げている。七歳の子がどんなにIQが高くても、普通は十五歳の方がいい結果を出すだろうが、それは、その子の方が年上で学習にかけた時間が違い、肉体的にも精神的にももっと発達しているためで、比べることには何の価値もない。

それゆえ、他者と進化度合いの比較はするべきではなく、自分自身が前回からどれだけ進歩できたのかを比べるべきだ。進化のレベル差は、どれだけ速く学んだかだけで決まるものではなく、魂がどれだけ時間をかけて進化してきたのかにもよるからだ。

霊的な年齢は人それぞれだが、一般的には、古い魂の方が若い魂よりも進化している。それは進化にかけた時間がその分長いからだ。

しかしながら、若い魂が大変速く進歩して、自分より年上の魂を追い抜くという特別なケースもあるし、その反対に、大変古い魂が霊的に長時間停滞してしまって、もっと若い世代の魂に追い抜かれるということもある。

*** 進化レベルと進化速度との違いがはっきりする例を出していただけませんか。**

同地点からスタートする二台の車のうち、一台が、もう一台よりも一時間早く出発するようなものだ。初めは二番目に発車する方が遅れているが、もっとスピードを上げれば、いずれ一台目に追い着けるだろう。

走った距離が魂の進化レベルに相当し、速度がその時々進化のリズムだ。

*** 自尊心の問題に戻りますが、自尊とは何で、どういう顕れ方をするのでしょうか。**

自尊心の強い者の最大の問題は、他者に感謝されなかったり、利己的に振舞われたり、愛してもらえないことを、なかなか受け容れられない

ことだ。特に、愛情の絆を築いてしまった場合は、そうすることが難しい。

気位の高い者は、自分を愛してくれる者は容易に愛せるのだが、自分を愛してくれない者を愛することがまだ難しい。そのため、自分が好きな者を在るがままに認めようとはせず、その美德にも抵抗があるが、特に欠点は認めがたい。

また、自分の考えが間違っているかもしれないと認めるのが、本当に難しい。

報われない愛、すなわち、どんなに愛しても利己的な態度を改めてもらえないことが、我慢できない。両親・兄弟・伴侶・子どもなど、非常に身近な家族の場合は、特にだ。彼らを変えようと自分が努力して変化を期待するのだが、何も変えられないと絶望し、気落ちして怒ったりする。

思いやりのあるちょっとした態度を示されると意のままになるのに、操られていたと気づくと激怒し、その人に恨みを抱く。

表面的には自分の行為の代償は求めているが、感謝されなければ、たとえば、相手を助けようと一生懸命やったのにその代わりに殴られたりすると、気持ちをどう整理していいのかまだ分からない。

そのため、気位の高い者が感謝をされなかったり、失恋したりという目にあうと、自尊が次々に形をとって顕れる。感情を害されたり傷ついたりすると、自分の殻に閉じこもり、人間関係から孤立する。そして、怒り・憤り・無気力・意固地・恐れ・罪悪感が目覚める。

自分の奥深い感情を傷つけられるのが怖いので、気持ちを表現するのを恐れ、感情や情緒を隠そうとする傾向がある。憐れみの対象になりたくないなので、否定的な感情は抑圧し、弱みにつけ込まれ傷つけられるのが嫌なので、他人に弱さを見せようとしなない。一方、見栄っ張りな人たちの嫉妬を買って睨まれたくないので、肯定的な感情も抑制する。肯定的な感情を抑制しがちなことで、彼らは不幸な気持ちになる。

否定的な感情を抑圧したり隠したりして黙って耐えると、突発的に、激怒・憤り・怒りなどが爆発してしまうが、その後で罪悪感を覚える。

人を信用せず、いかなる問題も自分だけで対処できると思い込む態度が、最も他の人たちから孤立させることとなる。

***自尊心が最も有害な形で顕れるとどうなりますか。**

自分には、真に愛されたり愛を受ける価値がないと信じ込んで、愛することも無意味だと思うようになる。これは、自分自身で孤立してしまう

態度で、寡黙で無気力、臆病、陰気、憂鬱で怒りっぽく、生きる気力のない人へと変貌させてしまうこともある。

前に、虚栄心の強い者は愛されてもそれを評価できないと言ったが、自尊心の強い者は、愛されることを拒んでしまう。だから、どちらの理由であろうと、その人たちは欠点のせいで、愛されていても愛されていると感じられないのだ。

虚栄心の強い者は、愛情を受け取るよりも、自分の我欲を満たしてもらうことに夢中だからだ。そして自尊心の強い者は、傷つけられるのを避けようと自分の殻に閉じこもってしまい、どんな愛情ですら受け取ろうとはしないからだ。

それは子どもの時から、僅かな注意を引くために、あらゆることをする必要があったためかもしれない。だから、もっといいことはないし、在るがままに愛されることもない、と自分を納得させてしまったのかも知れない。

そしてどうなると思うかね？ 自分が何をやるかに関係なく、無条件に在るがままに愛してくれるという人が現れると、驚いて自分の内に隠れてしまうのだ。ただ単に信じられないので、拒絶してしまうのだ。

「僕を利用しようとせずに、愛してくれるなど信じられない。これはきっと罠に違いない。受け入れようと心を開けば、きっとグサッと刺されて、もっと苦しむに違いない。だから心を開く甲斐はない」と思うのだ。

こうして幸せになるために必要とされるものがあり、それを評価できるにも関わらず、気位が高いとそれを拒んでしまう。そして、苦しみたくなくと苦悩し、感情を優先しなかったことで苦しむ。

*** 自尊心を克服するにはどうしたらいいでしょう。**

虚栄心の場合と同じで、最初の一步は欠点を自覚することで、その次は態度を是正することだ。

欠点を認識してそれがどのように具現するかの知識を得ただけでは、その出現を防ぐことはできないが、認識できさえすれば、人生で決断を下す際に、自尊心に従った行動を回避する助けにはなる。我々が心が命じるままに決断するとしたら、自尊心は徐々に弱くなり、最終的には制覇されるだろう。

自覚すると、自尊心とは何か、自分にどのように顕れるか、何がそれを増長させるのかを深く知ることに繋がる。

自尊心は、恐れ・不信・自己充足から発展し、孤立や感情の抑制という形態で出現する。自尊心は、魂の感受性にとっては鎧のようで、難攻不落の城壁のごとく魂を取り囲み、感情の出入りを妨げる。それゆえ、この鎧を剥ぎ取る努力をせねばならない。

気位の高い者が自尊心を克服するために最初にするべきことは、自分には愛される資格はないし本当に愛してくれる人に出会うこともない、という思い込みから自由になることだ。真の相思相愛を求める者は、遅かれ早かれそれを見つける。似通った魂はお互いを探し求めるし、出会った時にお互いが分かるからだ。

だが、悪いことから身を守ろうとして扉をピツタリ閉じてしまうと、固く閉じ過ぎたがために、善いことも経験できなくなるので、辛抱強い揺ぎない努力が必要だ。危害が及ばないように慎重になるのは良いが、感情を放棄しては駄目なのだ。

忘恩を忘恩で返したり、憎しみを憎しみで、恨みを恨みで返すのも良くない。我々を苦しませることは、他者をも苦しませるからだ。感受性が発達して苦悩をより良く理解できた者は、自覚がないままに苦痛を与える者よりも、苦しみを生み出す責任が重い。

すでに言ったが、くりかえしておこう。君たちは独りではないのだ。我々は一人残らず全員が、神や守護霊やその他無数の霊的存在や友人、そして肉体の有無を問わず霊的な家族に、深く愛されているのだ。しかもそれだけではない。つまり君たちの一人ひとりには、魂の伴侶である双子の魂が存在し、それを介して、純粋な無条件の愛の目覚めを体験するのだ。ただ、そのことを自覚すればいいだけなのだ。

また、自分を傷つけた恩知らずでも、赦すことを学ばねばならない。気位の高い者は、まだ気づけていない者を理解する力があるので、かつては自分も同じ状態であったと認識すべきなのだ。

同時に、本当の自分自身になる恐れを手放さなくてはならない。

口では愛していると言いながら、従わせたいだけの人が仕掛けた罠からは自由にならねばならないが、反対の道を選んでもいけない。つまり、苦しみを恐れて、人間関係で孤立するのも良くない。

愛して欲しいと望むのは悪くはないが、皆の愛の能力が同じではない、と知っておかねばならない。報われたいがために、親族だからとか一緒に暮らしているからという理由だけで、相手に自分と同じ強さで、愛したり尊重してくれるように要求してはならない。

愛情がない場合に、もっと責任が重いのはどちらだろう？ 愛すことを知らずに愛さない者（虚栄心が強い者）か、それとも愛せるのに欠点のためにそうしない者（自尊心の強い者）だろうか。

自己の自由意志を放棄してしまうことになるのであれば、他者を喜ばせるために過大な努力をしないことも大切だ。相手のまだ目覚めていない感情を覚醒できると信じて、報われないのに過剰な努力をすると、いずれ失望や悲しみ、幻滅や苦々しさ、怒りや無力といった形のつけを払わされる。

すでに言ったが、真の愛は、何の見返りも期待もせずは無条件に与えるもので、お返しする気のない人や全く与えることのできない人に、愛を強要できないのだ。

*** 進化に役立ててもらえるように、気位の高い人に簡潔に言えることはありますか。**

悲しみや虚しさを感じる時には、自分自身に閉じこもらないように。

感じさえしなければ苦しみが緩和されるだろうと考えて、感情を抑圧してはならない。そうすればもっと苦しむことになるし、解消できない不毛な苦悩となるからだ。

考えたことではなく、感じたことに従って生きようとしなさい。他者を思いやらねばならないが、その期待に沿おうとするのではなく、自分の気持ちに従うこと。

人から傷つけられたことを口実にして、自分の不信感や孤立を正当化してはならない。自分の感情を利用したいのだと思う者には慎重になり、誠意を持って近づいてくる者には心を開くのだ。

*** 人の意のままにならずに、他者を傷つけないようにするにはどうしたらいいのですか。**

相手の苦悩が我々の利己的な行為によるものなのか、それともその人自身の我欲、つまり我々の意思や自由意志を尊重したくないためなのかを知る必要がある。

我々の利己的な行為が原因なら、我々が是正の努力をするべきだし、相手の我欲のせいなら、苦しみを生み出しているのはその人自身なので、その人が改善しなければならぬ。他者のせいで苦しんでいると思っても、独りで苦しんでいるのだと知るべきなのだ。

*** でも、その人が変わりたくなければ、どうしますか。**

その人にとって自己改善することが有益であっても、そう強制すれば本物ではなく自由意志を侵害してしまうので、相手に強要はできない。そうは言っても、その人に、他の人の意志を曲げる権利がある訳ではない。だから、自分本位な人の利己的な態度に従わされている人は、自分の感情や信念を曲げるべきではないのだ。

***たとえば、ある人といざこざがある場合に、相手がその人自身のエゴで苦しんでいるのか、それとも僕の利己的な態度によって苦しんでいるのか、どうやって見分けられるのでしょうか。**

相手の立場になって、どう感じるだろうか、その状況でどうして欲しいだろうかと分析してごらん。

自分が発信者・執行者となって行おうとしていた行為についての判断が、その行為の受け手となれば変化するのなら、君の態度に何らかの利己心や不公正な部分があったということだ。送り手としても受け手としても同じ姿勢でいられるのなら、公正に近い判断だ。

でも大抵のケースは様々だ。つまり、両者に利己的な部分があり、双方が自分のエゴを改めねばならないのだが、自我によらなければ確固とした態度を保ち、相手の利己的な行為に屈してはならない。

最終的には「自分にして欲しくないことは他者にしてはならない」と「苦悩の原因であり意志の侵害だと知っていることを、他者が、自分や自分の庇護下の者にしないように尽くせ」という金言に要約できるだろう。

***よく理解できるように、例をいただけますか。**

よろしい、例を挙げよう。教育の一環として子どもを叩く母親を想像してごらん。子どもに与える肉体的・精神的苦痛を考慮していない母親によると、それは、子どもを従わせる方法だそうだ。

もし本当にその方針が正しいと信じているのなら、自分が夫に殴られることも問題なく容認できるということで、彼女が子どもに使ったのと同じ論拠を夫が持ち出して正当化しても、承服できることだろう。だが誰でもそうだが叩かれれば痛いので、彼女はこの状況を苦々しく嘆き、当然だが非常に苦痛なので、夫が殴り続けることには同意しないであろう。

この母親は、夫に殴られて痛いのであれば、彼女がそうする時も子どもは同じように痛いだらうと気づくべきだ。そして現実から学ぶ気があれば、叩くことは苦痛を生み正当化できないので、それ自体が悪いことだという結論に達するであろう。

この女性には、どんな解決策があるだろうか？ 子どもに対する暴力の行使を放棄するのだ。そうすることによって、自分自身のエゴを克服し、力づくで弱者の意志を曲げようと懸命になることもなく、同時に、自分の自由意志を踏みにじる、暴力的で利己的な夫の支配から逃れることに力を尽くせるのだ。

攻撃する者がいじめる対象を失って苦しむのであれば、それは相手に苦しめられているのではなく、他者の意志を力づくで曲げたいという我欲を放棄するのが嫌なだけなのだ。

***先ほど、他者を喜ばせようと過剰な努力をしてはならないと言われましたが、誰かを愛すと、その人が幸せでいられるようにあらゆることで喜ばせてあげようとするのと、矛盾しませんか。**

喜ばせてあげればあげるほど愛していると考えるのは、大きな間違いで、善意ある者の多くが陥る大きな罠だ。

愛している人には、その人を喜ばせる以前に、援助し、理解し、尊重しなければならぬ。

喜ばすのと支援することの違いを知っておくことは大切だ。と、言うのは、誰かの機嫌を取る時に、手を差し伸べる代わりに弊害を与えてしまって、喜ばせたのは相手の我欲だけだった、ということもあるからだ。しかも、自分の自由を失って、相手の我欲に自分の意志を服従させて機嫌を取る時は、自分自身を犠牲にしているのだ。

***手助けと機嫌取りとを、どう見分けるのですか。**

自分で超えなければならない試練や状況を背負っている人を、喜ばすだけで助けなければ、能力を試す機会を奪うことになるので、その人の魂の停滞に一役買ってしまう。

真の手助けというものは、その人自身で試練や状況を解決できるように、支え励ましてあげて、前進できるようにしてあげることだ。

***援助することと機嫌を取るの違いがはっきりする例を挙げて下さいますか。**

そうしよう。先生に学校の宿題を家でするように言われた同じクラスの二人の子どもをイメージしてみよう。二人ともずっと遊んでいたいし宿題はうんざりするものなので、しないで済ませようとする。

一人の父親は、息子が怒らないように、しかも宿題をやらずに学校に行くという羽目にならないように、自分が代わりにやることにするが、その間子どもは楽しく遊んでいる。

もう一人のお父さんは、子どもがしばらくの間遊びを止めなくてはならなくても、子ども自身が宿題をするように、一緒に座って手伝ってあげることにする。

最初のお父さんは、息子が嫌いな作業をしてあげているので機嫌を取ってはいるが、宿題は子どもに課された状況であり、その子の学習に必要なものなので、援助をしてはいない。この父親は、息子が怠惰で依存的で我がままになり、どんな状況でも自分の問題を解決してくれる人を求めるようになることに、加担してしまっているのだ。

二番目のお父さんは自分の姿勢によって、遊びを中断したくない息子が怒る可能性を冒しているので、機嫌を取ってはいない。だが、子どもが学んで自己責任を受容することに寄与しているので、子どもを援助していることになる。

***それなら愛する人を喜ばすのは、いけないことなのでしょうか。**

いつも悪いとは限らない。自分自身の自由を犠牲にしてしまう場合と、相手が独力で超えねばならない試練の肩代わりをして魂の停滞に加担してしまう場合が良くないのだ。

***自尊心についてに戻りますが、自尊の段階を超えた魂は、どんな進歩を遂げたことになるのですか。**

魂はもっと自信に満ち、自分の感情を自覚し、幸せに生きるためには気持ちに従って生きねばならないことを認識している。

自分をありのままに見せることを、以前ほど恐れない。そのため、以前より打ち解け、明るく、自然で自由で、感情の防壁が少ない。

自分の内にこもらなくなり、感謝をされなくても気にしなくなる。

他人に、より共感できるようになる。

ご機嫌取りに過大な努力を払わない、つまり、人の思い通りにされることが少なくなり、簡単に言いなりにならないので、恨みや怒りを覚えることも減る。

愛しても見返りを期待しなくなる。

心を開いて自分に向けられる他者の愛を感じ取り、心を許して自分の愛を他者に与える。

否定的な状況にあまり影響されなくなり、以前より受け容れることができる。

肯定的なことをもっと楽しめるようになる。

*** 自尊から次の尊大への移行を決定づけ、両者を別々の段階とするものは何ですか。**

自尊心の強い者は、愛を与え受け取る能力があるのに、傷つくのを恐れるがためにその両方を抑制し、自分の周りに無感情という鎧を作ってしまう。この無感情という鎧が、気位なのだ。

この鎧をほぼ完全に消滅できることが、次の段階への移行となる目印だ。

*** 無条件の愛への道のりの最終工程に到着しつつあるようですね。**

まだそうではないのだ。

魂が自分の抑圧や恐れから十分に解放され、感謝されないなどの否定的な態度を受容できるようになったとしても、その工程を完全に克服できたことにはならない。自尊心を乗り越えた魂はまだ、自尊心が進化したもっと巧みな自我の形態である尊大を克服する必要がある。

*** 尊大というものが何で、どういう特徴があるのか説明して下さい。**

尊大とは謙虚さに欠けることで、君たちが誤って「自己愛」と呼ぶものが過剰にあることだ。

この段階の魂に残された二つの克服すべき主要課題は、謙虚でないことと、執着、つまり愛する者の愛を分かち合うのが困難なことだ。

尊大な者は自信に満ち、他者を必要とせず、全てにおいて自己自足的である。

他者を助ける気はあるが、助けを求めるのは弱さの証拠だと思う欠点があるので、本当に助けを必要としても自分では援助を頼むことが滅多にない。そして、他者を優先してしまう。

自分の必要性や弱さや欠点、気落ちしていることなどを隠しがちで、「どうしたの？何かできることはない？」と聞かれることがないように、誰にも気づかれないようにする。そして気づかれると神経質になり、自分が自己充足できていないことを認められずに、腹を立てる。つまり、不信感・怒り・傲慢が表面化するのだ。

尊大な者は自尊心の強い者よりも感化されにくく、忘恩で報われても傷つくことも少ないのだが、中傷されたり裏切られたと感じると、自分の計画通りにいかなかった時のように、怒りと傲慢が頭をもたげてくる。

たとえば、理解して助けてあげようとしている者から軽蔑されたりバカにされたりすると、怒りと高慢が目覚め、「俺が誰なのか分かってる

のか」とか「よくそんな真似ができるな」、「そんな口を叩くなんて、一体何様のつもりだ？」などと返答をする場合がある。

謙虚になれず、感謝されないことや侮辱を受容できない場合には、他者を種別して偏見を持ったり、接し方を変えたりする。自分のエゴを自覚し克服できなければ、助けて欲しいと近づいてくる人がいても、不信感に支配されてしまう。自分の偏見で特定の人が苦手になり、それぞれの必要性に応じて公正に平等に援助するのではなく、各人への不信感・恐れ・不得手の程度で判断することとなる。

尊大な者は独りでも平気だと思っているが、認め難くても実際には皆と同様に、幸せになるためには、愛し愛されていると感じる必要がある。

そのため、感情面で自信がなくなると、独りで大丈夫だという外づらが崩れてしまう。確信していた愛を失う恐れは、不信感を募らせ、悲しませ、絶望的で無気力にする。こうなるのは、まだ執着心に苦しんでいるからで、愛する者の愛を共有するのが困難なためだ。

*** 僕には、ごく普通の反応に思えますよ。愛する者の愛を失うのが怖いのは、皆に共通することではないですか。**

無条件の愛の経験に至っていたなら、本物の愛は絶対に失われないと知っているので執着で苦しむこともないし、何も怖いものがないだろう。

*** ではどうやって、尊大の段階を超えるのですか。**

くりかえしになるが、愛して理解し、欠点のままに行動するのを避けるのだ。

魂が謙虚さを増し執着をなくすにつれて、傲慢も少なくなるだろう。この二つの資質は、見返りを期待せずに他者を心から助けるといふ、隣人愛の実践を通して発展するのだ。

尊大な者が、失望や屈辱を味わうことを怖れて、自分が与えることのできる援助を惜しめば、欠点を増長させることになり、停滞してしまうだろう。だが、自分の恐れや偏見を克服し、気持ちに従って行動すれば、進歩できるだろう。

*** 進化の視点からは何が我欲の起源ですか。つまり、魂の進化のどの時点で、エゴが生まれるのですか。**

利己主義は動物的な生存本能の延長であり、魂が自分自身で決断し、自由意志で経験し始める時点で出現する。

進化が人間の段階に達した魂は、自由意志の力を発揮し始めたばかりだ。知能は基本的に発達しているものの、感情面がほとんど発達してい

ないため、本能に影響されて決断することが多く、その中でも生存本能に支配されている。その状態から、感情の学習を通して、自分の意志で決めながら独自の道を模索するという、本能から完全に独立した進化を遂げていくのだ。

*** もう少し詳しく答えていただけますか。まだ理解できないのです。**

もちろんだ。魂が獲得したばかりの自由意志を行使し始める時は、本能に基づいて行うが、本能は、動物界での進化段階で「魂の原型」が培った知識を集めた生物的プログラムの一種であり、人間の独立意志が発展する元となるものである。

本能は欠陥を補う仕組みであり、まだ自分自身で決定することのできない諸問題に関して、自動的に決断を下してくれるプログラムである。それは自動操縦装置のように、操縦できなくても進路を修正してくれるのであり、まだ機体の舵取りを学んでいる段階でも、衝突せずに運転することを可能にしてくれる。

本能の中には、どんなに過酷な状況下であろうと、肉体の死を避ける手段を探すように転生した魂を駆り立てるプログラム、とも言える生存本能と、種の存続には欠かせない生殖本能とがある。

しかし魂は、同時に、初めての感情的な欲求を満たさねばという未知なる衝動も感じるので、満足はできない。だが、感情について無知であるため、これまで通りに本能を過大に満足させていればいいと思ひ込み、他の存在に与える害悪は考えずに知能をそのために使用する。

*** お話によると、我欲は、進化の発展上に元々備わっていたように思えます。**

完全性へと向かう過程において、魂がある程度の期間にわたり利己的な段階を経ることと、それが多くの転生で継続し得るのは避けられない現実だが、それは有益であるとも言えるのだ。なぜなら、自分の個性や意志を再認識して、愛がない時の気持ちを味わえるし、愛を感じられるようになるにつれて、愛がある時の感情をありがたく思えるようになるからだ。

そのため、初期的虚栄心と名づけられる我欲の最初の顕現形態は、若い魂に特有なものなのだが、基本的に物質主義で、最も原始的な本能を充足させることに向けられる。

物質主義・消費主義・快樂主義といった姿勢につきものの貪欲・強欲・色欲が目覚める。そして集団的には、帝国主義・植民主義、つまり権力や物質的な富を切望して他者を搾取する態度となって現れる。

人類の大部分はまだ靈的な思春期に浸りきっているので、君たちの惑星では未だにこの段階が優勢である。

魂が感情についての知識を得るに従って、このような物質的な我欲は靈的な我欲へと変容していく。それがより発展した虚栄心の段階だ。

その段階でも魂は我欲にしがみついているが、同時に、感情も発達させ始めている。与えることにはまだ抵抗があるが、愛が存在するのを認識できてその恩恵も分かるので、愛を受け取ろうとする。

強欲は執着に変わり、貪欲は独占に変わる。だが、それは一夜のうちに変化するのではなく、段階的にそうなのであり、中間的な虚栄心という過渡期が存在する。

中間期には、我欲のあらゆる顕現形態（貪欲・強欲・執着・独占）が様々なレベルで混在しており、これが現在の地球の支配的な状況なのだ。

これらの我欲のうちの一つから脱却するのにも、計り知れない歳月がかかることがある。しかし魂が我欲を自覚し、それに流されれば他者を傷つけると認識した時から、自己の行為にもっと責任を持ち、自分がもたらす苦悩に関しても敏感になる。するとある時点で、魂は感情に目覚め、愛す必要性を感じ、幸福になるためには愛さねばならないと気づく。

***それからどうなるのですか。**

愛を追い求め始めるのだ。そして自尊の段階が始まる。

この時期に魂は、愛を受けるだけでなく与えることも模索し始めるが、多数の障害に遭遇する。感じたり自覚をし始めるが、理解されないことや感謝されないことを身を持って体験し始める。それは、人類の四分の三という大多数が、まだ虚栄のどれかの段階に陥ったままだからだ。未だに自尊の前段階の因果を体験し、何が起きているのか理解できないのだ。

だから世の中全体を敵に回したように感じ、改善して愛し愛されたいという自分の思いが拒絶される気がする。感情的に失望してそれに負けてしまうと、我欲が頭の中で再び勢いを得て、発見したての感情を傷つけられまいと、自分の心を覆ってしまう。そして孤立することが苦悩を回避する手段だと思って、再び不信・内向・孤独に陥る。

苦悩を避けるために諦めるという手段を選ぶ場合もある。利己主義者からの攻撃をかわそうと、その期待通りに自分を変えようとするのだ。靈的な病の中では最悪なものが芽を出し始めるのだが、それは、多くの肉体的な重い病の原因ともなる。つまり、自分の意欲と自由意志を放棄

することであり、極端な場合には、魂はありのままに行動することも生きることでもできずに、完全に周囲に隷属し、強制されたことを自分が望んでいることだと信じ込むに至る。

しかし、これでは苦しみたくないがゆえに苦しむことになり、それは何の霊的な成長ももたらさない不毛な苦悩である。

人類の四分の一ほどが、この自尊心の段階にいる。虚栄心から自尊心への段階の移行も突然起こるものではなく、その過程は緩やかであり、かなり長期にわたって両者の欠点が共存して顕れる。

***それで、この話はどう続くのですか。どのようにこの段階を超えるのですか。**

愛すこと、それだけだ。愛のみが自尊の殻を破れるのだ。

説明した通り、気位の高い者の方が、見栄っ張りな者よりも理解力があり、自分を傷つける者の仕打ちを受け止められるのだ。つまり、愛のない利己的な者は単に進化途上のまだ若い魂に過ぎず、感情の学びと我欲の放棄には時間かかるので多数の転生が必要かもしれないが次第に学んでいこう、と理解できるのだ。

一つの人生で目立った変化が見られなかったとしても、進化していないことにはならない。今生での善人は、前世の知恵を鞆に詰めてやって来た生まれつきの善人なのだ。一つの転生でも大きく進歩できるとは言え、一夜のうちに海賊から聖人へ変わるように求めるのは無理だろう。

子どもが一日で話せるようにならなくても、言葉は何年もかけて習得していくものだと分かっている絶望しないでいられるのなら、幼い魂が愛せるようになるのに霊的に何年かかったとしても一何回も転生することだが一焦ってはいけないのだ。

それゆえ、感情についてもっと理解できている魂は、たった一度の人生で自分と同レベルに達するように、自分以下の者に要求してはならないのだ。自分も多くの転生と努力を要したからだ。だから、その人の能力と意志力の許容範囲で学べることで良しとすべきだ。かつては自分もそれと同じ程度で、傍らでは、もっと進んだ者たちが、利己的な態度を我慢してくれていたのだと思い出すべきなのだ。

***そして、それを全部乗り越えたらどうなりますか。**

最大の難関に立ち向かう。まだ謙虚になることと執着を手放す必要がある。つまり、愛情を共有する際に寛大になるという、尊大の段階で乗り越えるべき目標が残っているのだ。

尊大な魂は、平均的な魂と比較すると大変進化したもので、君たちの若い惑星では僅かだ。大半はより進化した他の惑星を故郷とする魂で、進化にかけてきた時間が長い。地球の平均的な魂よりも、霊的な年齢では何千年も年上かもしれない。

彼らの惑星はもっと発展しているので、事実上不正も存在しないし感謝されないということもないので、自己の欠点を呼び覚ます厳しい状況に遭遇することがない。地球に来るのは、自分の短所を表面化させるにはちょうどいい環境だからだ。地球は不正や忘恩に満ち溢れた惑星なので、これらの魂は自分の欠点と意志力を試そうとするのだ。こうしてより厳しい試練を通じて、より速い進化を成し遂げるのだ。

彼らは能力が高いので、余り進化していない惑星への転生に際しては、他者を霊的に援助する使命を果たすように要請されることが多い。謙虚さに欠けて愛情の共有が困難である、という自己の欠点を克服するためには、他者を援助して鍛錬することが役に立つのだ。

*** これまでの説明を伺って、もっとずっと沢山の疑問が湧いてしまったので、それらを明らかにして下さればと思うのですが。特に、情緒と感情、我欲の様々な具現形態（虚栄心、自尊心、尊大）に関するものです。それらをもう少し知りたいのです。**

遠慮なく質問してごらん。

*** 以前、感情と思考とは起源が異なり、我欲は頭脳から生じると言われましたが、考えるのはそれ自体が悪いという意味でしょうか。**

とんでもない。言いたかったことは、感じることと考えることとの区別ができるようになる必要があるということだ。君たちを混同させるような利己的な考えは、頭を介して魂に入ってくるからだ。

感情を抑圧しない限り、思考自体は悪いものではない。思考が気持ちと調和していれば、感情を愛の行動へと変容させるための貴重な道具となる。

君たちの世界の問題は、感じないまま考えることを教えたことだ。感情に基づかない思考は、我欲を増長させる。愛における進化とは、我欲ではなく感情の力で、思考を修正することを学ぶことにもなるのだ。

*** お話がまだ理解できないので、例を挙げて下さいますか。**

もちろんだ。とっっても好きな人に会ったと想像してごらん。君は男性で、彼女は女性で、長いこと会っていなかったとしよう。

その人に対する愛情から君は喜び、ハグしてどれだけ好きだか表現したい衝動に駆られる。しかし、君が性的偏見を持った人たちと一緒にい

て、彼らには異性間の深い友情関係が理解できないことも、後で批判され中傷されることになるだろうことも知っていたとする。この不都合のせいで、君は気を変えて感情を抑え込むので、愛する人に出会っても人にどう言われるかを恐れて、そっけない素振りで礼儀正しく握手をするだけなのだ。

この場合、脳で状況分析された思考は、感情を変えてしまったのだ。つまり、最初の感情は喜びであったのに、頭で自制した後に冷淡に振舞ってしまい、感情を押し殺してしまったのだ。

***でも、その人を好きなのなら、不必要に感情を表せば迷惑をかけてしまうかもしれないので、引き合いに出された状況では、慎重にならざるを得ないと思います。批判的な目のない場所で、より適切な瞬間を待って、気持ちを表せばいいと思います。**

確かに、慎重は美德だ。多くの場合、人の意見は理解も尊重もされないのだから、他者の自由意志を尊重する場合には、慎重でなければならない。だが、怖れに慎重という衣を着せないように注意しないといけない。

慎重であれば、適切な状況でなければ感情の表現方法を変えるかもしれないが、感情を押し殺すことはない。だが、怖れはそうする。人は怖れに捉われると、実際には危険も脅威もなくとも、怖れが頭の中でそれを現実化してしまい、感情の表現を抑え込んでしまう。他者の反応を恐れる余り、自分自身の人生に関して決断しなくなる時から、感情の抑圧が始まるのだ。

***頭はどうして感情を抑圧するような規制をすることになったのですか。**

一部は我欲自体から生じ、残りは幼児期からの教育のせいだ。君たちの惑星での教育は、感情を強く抑制するものなのだ。

長い間、君たちの教育方針は頭脳を発達させることを重視し、頭脳そのものを利用して感情の育成を抑えてきたのだ。子どもたちは、感じたり感情を表現する大きな能力を携えて、在るがままの姿を表現しようと、心を思い切り開いて生まれてくる。しかし、愛情や喜びや自発性を抑制され、喜びを味わうたびに罪悪感を覚えるように、小さい頃から愛の代わりに執着を体験させられてきたのだ。

何世代にもわたって、子どもたちに教えてきたものは何か？ 良い子というのは言うことを聞く子で、親や教師や大人の意志や、社会の規則や便宜の奴隷であるということだ。

子どもがどうしてそうしなければならないのか分からず、その理由を尋ねた時に「父親の私がそう言うからだ」と返答したことがどれほどあ

ろうか？そして両親が不機嫌ならば、子どももそのイライラを我慢しなくてはならない。命令と厳格さばかりで、自由が少ない。

親や大人に聞かずにしたことは、全て悪いことになる。笑うことも、泣くことも、話すこともいけないことで、親の許可を得ずに黙っても悪いとされる。「私が認める人とだけつき合い、その人を好きになって、言う通りにしなさい。お前のためだよ」と言うのだ。

非常に宗教的な社会では、全てが罪悪だ。いかなる喜びの表現や、ハグやキスといった愛情表現も罪となる。それら全てに、罪深く、卑猥で、暗く、悪魔的なものを見出し、幸せに感じると罪悪感を覚えなくてはならない。犠牲者を刑事に、無実な者を罪人に変えてしまう。

そのために子どもは、苦しまずに済む唯一の方法は、感情を殺すことだという結論に達してしまう。本来の自分とは似ても似つかない、他者が求める自己像を世間に示すことを覚える。そして、社会の規制は余りにも厳しく、演技をし続けたいいけないので、大人になると、見せかけてきた自分を本物だと思い込んでしまうのだ。

大半の子どもが大人になった時には、在るがままに愛してもらおうことなどなく、ほんの少し愛してもらうためにも必ず何かいいことする必要があるので、という結論に無意識に達してしまっている。

つまり、支配的・条件的・強制的・利己的で偽りの愛である執着を信じ、無条件で自由で自発的な愛を放棄するように、子どもたちを教育してしまったのだ。その結果、愛を信じ、愛に生き、そこから湧き出る幸福をほんの少しでも体験できる人は僅かなのだ。そして、愛がないために、我欲とそのいとうべき表現形態が我がもの顔でのさばるのだ。

君たちの世界の悪者の中で、子どもだった時に可愛がられた者は少ない。「父母を敬え」という訓戒があるのに、なぜ「子を敬え」という教えがないのだろうか？

君たちの世界の弊害の多くは、まだ感情に鎧を着せていない子どもたちを愛せば、解決されることだろう。愛せば、愛を許容するだろう。子どもたちを一代にわたって愛せば、世の中は一世紀も経たないうちに天国へと変わるだろう。

***感情を熟知していても、つまり愛の能力があっても、それを抑制してしまって、感情のない冷淡な人として社会に出る人もいる、と言いたいのですか。**

そういうことだ。多くの人は、苦しむのが怖く、愛情不足だという弱点を見抜かれたくないために気難しい。そしてそのため、鎧兜の中世の騎士のように、衣や鎧で自分を隠す。

こうして、苦しみたくないということで苦悩する。愛し愛され、幸せになるために不可欠な愛情を避けるがゆえに、苦しむのだ。

孤独を恐れる人が大勢いるのは、なぜだと思うかね？ それは、本当のところは自分自身と向き合うのが怖く、「自分は空っぽだ」という大きな真実を発見するのが怖いからだ。

そのため自分から逃避して、多くの頭痛の種をもたらず物質的・精神的な対象へと逃げ込んだり、頭を過度に刺激する娯楽を求めて、真の回答には絶対にたどり着けない言い訳とするのだ。そうして、感情の声を黙らせるほど、頭の声が大きくなるのだ。

しかし、良心の嘔きを永久に黙らせることは不可能なので、頭脳が油断をしたり、予定外なことやトラウマとなるような事件が原因で考えられなくなると、内なる声は再びこう叫び出すのだ。「私は空っぽだ。感じられないから虚しいのだ。見せかけの自分とは違うから虚しいのだ。外見とうわべだけになってしまった。自分自身であることを放棄し、愛し愛されたい存在であることを諦めてしまったので、不幸なのだ」と。

現実を自覚するのは痛みを伴い、衝撃的なこともある。この時に多くの者は、事実を覆い隠してしまえば苦しみが軽減し、全てが通常に戻らうと間違った思い込みをして、愛情の欲求を放棄してしまったことをなんとかか正当化しようとするのだ。

「人生は僕にこんなに辛く当たった！」「なんて悪い人たちと一緒になったんだろう！」「両親すら僕を愛してくれなかった！」「なんで僕がもっといい人にならないといけないんだ？」などと言うことになる。

そして、憤り・恨み・不信・悲しみ・孤独が彼らを内部から蝕む。

子どもができると、子は弱くなすがままになるので、「人生とはどういうものか教えてやろう」となどと理由をつけながら、自分のフラストレーションの復讐をするのだ。この時に、再び愛のない方向へとネジを締め付けてしまう。

***でも、人生で酷く苦しんだ人が、何の努力の甲斐もない、という結論に達してしまうのは、良く理解できることだと思います。**

確かに人生とはとても厳しいものなので、心で感じようと努力する者は、他者から理解されずに、多くの障害に遭遇し苦しむだろう。しかし

それは状況による外部からの苦痛で、結果的にその人が感じたり愛せるようになるとするなら、その価値があるものだ。

だが愛情を避けようと苦しむのは、自分自身が生み出す内部の苦悩で、感情や愛を進歩させることには役立たない。全くその反対なのだ。

人は苦痛に浸りきってしまうと、他者にも痛みを味わわせていいように感じてしまうし、自分が与える損害を考えてみようとしてもしないので、多くの苦悩と苦痛を生み出してしまうことがある。

***でも、人は苦しみに慣れてしまうと、苦痛が全く普通のことに思えるのです。多くの人が「苦しみを乗り越えられるだろうか、愛することができるだろうか」と自問するではないですか。**

しかし私は、「僕が経験した苦しみは全て、もう沢山だ。自分にも他者にも、もう結構。少しは人生が分かったよ。自分がされて苦しんだことは、他の人にはしないようにするぞ。父母に求めて貰えなかった愛の全てを、僕は、自分の子どもや近親者や人生に現れる全ての人に与えるぞ」と言う人はいないものかと思うのだ。

変わろうという意志と感情の力によってのみ、人生というものは逆転し、憎しみの連鎖を断ち切れるのだ。こうして、固く締められていたネジは緩み始め、愛のない方向へ回されたネジは一つまた一つと反転して行き、最後には完全に引き抜かれるのだ。

苦痛を感じ愛のない状態にいる人の全てが、このような決断をしたとしたら、世界は一世代で変わるだろう。両親から愛された子どもは、保身の鎧を被らない世代であり、愛されて育てられたので、愛すことを恐れない世代となる。

前に言った通り、愛せる能力とは、魂が生まれ持った資質である。そのため、誰にもその能力がある。それを発見し、発達させることだけが必要なのだ。そうだと信じれば、そうなるのだ。そしてすでに言ったように、これは、他者を愛すことだけではないのだ。つまり、自分自身を愛すことから手がけねばならない。

***でも、自分を愛するとはどういうことですか。**

もう説明したよ。自分自身を愛するというのは、自分の愛情の欲求と感情とを認め、人生の牽引力となるように、それらを発展させることだ。

***それなら、自分自身を愛するのはいいことなのですね。**

もちろんだとも。自己を尊重することは、幸せになるために欠かせないのだ。

もう一度くりかえそう。人が放棄しなくてはならないのは我欲であって、愛ではない。自分自身を好きでなければ、どこから他者を愛すために必要となる力と意志とを引き出すのかね？

愛さずに生きるというのは、死んでいるも同然だ。そのため、愛さずに生きている多くの人たちが、死んだら苦悩が終わるのではないかという幻想を抱いていて、死にたいと思うのだ。そうして自分たち自身で、君たちが病気と呼ぶ、肉体の自己破壊の過程を開始するのだ。多くの病気は、その人が自分自身を愛せないことから生じる。

自己尊重レベルのとても低い人たちが、白血病やリンパ種などの免疫系の病気や自己免疫疾患に罹りやすい。自己免疫疾患というものは、根深い罪悪感にも関係している。その人たちは非常に気落ちしているため、他者に捧げるのは難しい。先ず初めに、自分の尊厳を回復しなければならない。

***では、自分自身を愛すには、どのような手順を踏んだらいいですか。**

最初に、自分に愛情の欲求と感情があることを認め、それらが表出するがままに委ねて、自覚を高めていくのだ。つまり、それらを抑制するのを止め、代わりに発展させることで、人生の原動力へと変えるのだ。

次に、行動する際には、気持ちに基づいて行い、思考によらないこと。教えられたことでも、それが気持ちに反するならば、正しくはないのだ。あまたの理由に左右されてしまう思考に、君たちの感情が抹殺されるのを甘んじてはならない。

***多くの人が、その価値があるのかと悩むだろうと思います。**

価値があることは請合おう。感情に従って行動していくにつれて、愛だけが与えてくれる内面の真の幸福を、少しずつ体験し始めるからだ。

また、こうして霊的にも進歩できる。感情は絶対に放棄してはならない。それは努力し生きる甲斐のある、唯一のものだ。

最初は、ネジが固く締められているので一番難しい。ネジが緩み始めるまで、非常に努力せねばならない。しかし、その後で道は楽になり、経験していく感情が君たちの心を（もちろん、愛で）満たし、それまで味わったことがなかった気持ちにしてくれるので、継続する力を与えられるだろう。

***では、他者を愛すにはどうしたらよいのでしょうか。**

他者を自分と同様に見なすのだ。彼らも、同じ内面的な必要性を持った同じ本質の兄弟なのだ、と自覚するのだ。我々は皆、同じ資質を持ち、幸せであるには、完全に自由に愛し愛される必要がある。

炎天下を水も飲めずに長く歩いて来て、自分がのどが渴いているとしたら、これと同じ状況にいる人は誰でもやはり水を欲している、と思いつかないだろうか？

水と同じことが愛についても言えるのだ。愛を奪われると、我々は全員苦しむ。愛が与えられると皆、元気づけられる。それゆえ、愛情に渴えている人を見かけたら、その人に愛の水を飲ませてあげなさい。我々が愛に飢えていた時に、その水を飲ませてくれた人たちがいたように。

***でも、他者にいいことをしようと思っても、感謝されなかったり、軽蔑や嘲笑されたとしたらどうしますか。**

誰かに害を加えられたら、その人が愛において進化不足なのだと理解して、その状況を自分自身を改善させる機会として利用すべきだ。

我々の中で何か否定的なものが目覚めたとしたら、それは我々自身にまだその要素があるということで、排除しようと努力しなければならない。

前に言ったが、愛を無条件で与えられるようにならない限り、課題を終了したと見なすべきでない。感謝されないことを容認できない人は、まだ与えるもの見返りを何か期待していることになるので、ゴールに行き着いてはいないのだ。

***それなら人は、「なんてこった。自分が変わろうとしても他の人たちが変わらないなら、どんな目にあわされるだろう。そんな甲斐があるだろうか」と思うのではないですか。**

人に叩かれるのはかわすことができるのだから、自分自身に叩かれるよりいいのではないか？ 愛がない生き方をする者は、自分自身を叩いているのであり、愛そうとしてくれる人を近寄せないのだ。

***お話をもっともですが、まだ疑問が湧いてきています。**

自由に話してごらん。

***先ほど、感情を押し殺さずに表現することの重要性を強調されましたね。でもその一方で、他者の愛情の欲求や感情を配慮することも大切だとお話されています。そこで質問なのですが、憎しみ・憤り・怒り・恨みなどの否定的な感情は、それらを表現すると他者を傷つけることになりませんか。他者を傷つけずに感情を表現するにはどうしたらいいですか。両方を尊重するのは、難しいのではないですか。**

君の焦点の当て方では、確かに矛盾してしまう。

全く反対のことなのに、言葉不足のせいで、感情という同一の単語を使用してしまったからだ。混乱を招かないように、もう一度その概念を明確にする必要がある。

前に、感情に委ねなければならないと話した時は、愛から生まれる感情に言及していたのだ。これらはもちろん、常に肯定的だ。区別できるように、「愛的感情」と呼ぶとしよう。

我欲から生まれるもの、または愛と我欲の葛藤から生じるものは、否定的な感情で「エゴ的感情」と呼べる別物であり、違う方法で扱う必要がある（それは後で話そう）。「エゴ的感情」の意のままに行動するのは、他者に多大な弊害を与えるので、確かに避けるべきだ。

どちらの場合にせよ、感情を抑圧しても碌な事がない。自分の内部を傷つけるだけだ。

*** 「エゴ的感情」についてお話し下さいますか。**

「エゴ的感情」は我欲が具現したものなので、虚栄心・自尊心・尊大について話した時に、その幾つかは扱っただろう。だが、執着心のように複雑で理解が混乱するものを特にもっと深く掘り下げて、今からそれらを見てみよう。

以下が最も重要なものだ。

A) 強欲・貪欲・淫乱・憎悪・攻撃性・羨望

B) 執着・独占・嫉妬・怒り・恨み・無力感・色欲・罪悪感・怖れ・悲しみ

*** これらは七つの大罪を思い出させますが、関係はありますか。**

確かにこれらに翻弄されれば、尊重されるべき「愛の法則」や「自由意志の法則」に反する数多くの罪を犯すことになるだろうが、これらは罪ではなく我欲の顕現形態なのだ。

*** どうして二つのグループに分けたのですか。**

最初のものは、より原始的な我欲の形態だ。

二つ目も我欲が顕現したものだが、感情というものを言わずもがなに認識しているという要素が付加されている。

*** より正確なイメージが持てるよう、「エゴ的感情」の一つ一つが何から成り立っているのか定義して下さいませうか。**

よろしい。強欲と執着から始めよう。執着は強欲から発展した形態なので、まとめて分析するとしよう。

強欲－執着

強欲とは物財の蓄積を過度に熱望することだ。

欲張りな人は、物的には与えられるものを沢山持っているにも関わらず、自分の物だと思っている物を他者と分かち合うことを拒否する。魂の感情認識が進んでも共有ができない場合には、物的な強欲は、靈的な強欲へと変化する。

靈的な強欲とは執着であり、不当に自分の所有物だと考えている人たち、たとえば子どもやパートナーなどの愛情を分かち合うのが難しい。

執着に苦しむ者は、少数の人しか愛さず、その人たちにも同じことを強要する。

多くの人が、誤って「愛している」のだと思い込み、相手を強く愛するがために苦しいと言うが、実際には愛着による執着から苦しんでいるのだ。

魂が進歩して初めて、愛と執着との区別がつくようになる。

* 愛と執着との違いを説明いただけますか。

人が愛す場合は、愛する人と自分の自由意志を尊重しようと努める。自分がその人と一緒にいられなくても、愛する人が自由で幸せでいられるように尽くすのだ。

執着を患う場合は、愛す人のためになることよりも、自我を満たすことを考える。そのため、愛している筈の人の自由意志を侵害する傾向にあり、その意に反して自分の近くに置こうとしたり、自分のやりたい事を強要したりして、相手と「自分の競争相手」と見なす他の人との関係を最大限妨害しようとする。

本当に愛す者は、愛する人を所有しようとはせず、愛する人が他の人たちを愛しても不快に思わない。執着は底をつくかもしれないが、本当の愛・真実の愛は決してなくなる。より沢山の人を愛せるようになっていったとしても、その他への愛が減る訳ではない。しかし執着は、そうだと思い込ませるのだ。他の人たちに与えられる愛は、自分から奪われると思わせるのだ。

執着がある者は、感情を要求し強制し強要するのだ。自分がすることの見返りをいつも求める。要求し受け取ることばかりを考え、与える時には利益と引き換えて、最初に自分が頼んだことをしてくれるのが条件だ。執着すると、自分の自由意志すら侵害し、したくないことをするように自己を強要する。

真実の愛を感じる者は、無条件に与え、感情を束縛しない。強制も強要もせず、愛する人に何の見返りも求めず何の要求もしない。

*** 違いが明らかになる例があればいいのですが。**

いいだろう。鳥を愛していると公言する二人が出会ったとしよう。

一人は、冷房の効いた部屋の美しい金のかごの中で鳥を飼っている。高品質のえさをやり、瓶詰めのおき水を与え、定期的に獣医に連れて行く。もう一人は、単に食べ物を公園に持って行くだけで、鳥が止まればなでやり、怪我をして飛べない時は世話してやる。

最初の人、「僕はなんて鳥たちを愛しているんだろう。野生であれば得られない快適さを楽しむように、鳥たちには多額を費やしている！でも直ぐに死んでしまうんだ！いつも病気で、薬や獣医に金を使っても早死にしてしまう。それが酷く辛い！どうしたらいいだろう？」と言う。

二人目は、「僕が世話する鳥たちは、僕のものではない。かごに閉じ込めてはいないし、自然の中で生きている。鳥が僕と一緒にいてくれるのは、かごの格子から出れないためではなく、そうしたいからなので、僕は幸せだ。自由に飛び回り、望むがままに生きているのを見られるので、嬉しい。友よ、君の鳥は自由でないから、悲しみで死んでしまうのだ。好きに羽ばたけるようにかごを開ければ、自由になれて幸せになるので、生き続けるよ」と言う。

最初の者は「かごを開ければ逃げ出して、二度と会えなくなるじゃないか！」と答える。

二人目は、「逃げたとしたら、それは意に反して捕らえられていたからで、隷属した生活から離れたいのだよ。僕の鳥たちは、好きな時に行ったり来たりできると知ってるから、逃げたりしないよ。その反対に、僕が公園に着くのを見ると、直ぐに寄って来て取り囲んでくれて、僕の上に止まるよ」と応じる。

一人目は「それが僕の望みだ。鳥たちに好かれたいんだ」と言う。

二人目は、「強要してでは、絶対に君の望みは叶えられないだろう。君は、彼らが最も切望することの埋め合わせのために、快適さばかりを与えたのだ。鳥は自由に飛びたいのだ。鳥を本当に愛しているのなら、自由に生かしてあげなさい」と返答する。

***愛しているのは誰で、執着しているのは誰ですか。**

鳥をかごに入れておきたい人に執着があり、鳥を自由にさせておきたい人が愛しているのだ。

***執着によって他の人の自由意志をどのように侵害してしまうのか、例を示していただけませんか。**

子どもが大きくなって、恋人ができたからとか、家から離れたところで勉強や仕事をしたいからなどの様々な理由で独立したがる際に、自分のそばに引き留めようとする母親には執着心がある。執着のある母親は、子どもといたいという欲求を押し通そうとし、独立して自分の人生を歩みたいという希望を尊重しようとしない。そして、それが叶わないと感情的に傷つけられた気がして、「子どもは私を愛していない」などの発言に至り、子どもをそばに置こうとする余り、彼らに罪悪感を抱かせるように仕向ける。

「この職業に就きなさい、あの専門を学びなさい」と子どもに要求して、そうしなければ相続権を奪う父親には執着がある。

恋人に着ていい服といけない服や、何時に家から出入りすべきだとか、つき合って良い人と悪い人を指図する人には執着がある。

この偽りの愛が執着であり、それは執着の対象を閉じ込めておく監獄や刑務所のように、執着に負けた者を牢屋番に変えてしまう。鳥をかごに閉じ込めていた人のように、執着で苦しむ者は、生きることも生かすこともできないのだ。

***執着によって他者の自由意志を踏みにじるといえるのは理論的ですが、自分自身の自由意志も侵害するかもしれない、ということには驚きました。執着がある時に、どのように自分の自由意志を侵してしまうのか、例を出していただけませんか。**

いいだろう。たとえば、前例の母親が、家族以外の人を支援することなど、自分の心が求めることに時間を割きたいと思っても、そうすると子どもや夫の面倒が見られなくなると考えて、自制してしまう場合だ。

執着を乗り越えなければ、内面を充足させることをする際には罪悪感を覚えるだろうし、その罪の意識によって、そうすることを自分に禁じてしまうかもしれない。

***この例のような執着の顕れ方には驚かされます。家族に尽くす人は、一般的に愛情に満ちた人だと思われていることが多いからです。**

それは、執着というものが君たちの文化に深く根づいており、頻繁に愛と混同されているからだ。多くの人は、授かった教育のせいで執着が大層深く、それを自分の個性の一部に同化させてしまっている。

女性には、自分の時間の100%を夫や子どもや仕事に捧げなければ罪悪感を抱かせる。家族以外の人に時間を費やすと、味方である筈の家族からさえも口さがなく批判され、「自分の家族よりもあの人たちの方が大事なの?」とか「一体何でそんな事に関わるんだ? おまえはここに家族と一緒にいるべきだろ」、「人にどう思われるだろうか!」などのコメントで罪を意識させられる。

男性は、慣習的により大きな自由を謳歌してきたが、執着の感情から免がれている訳ではなく、家族でも友達でも同郷（同文化）でもない人に手を貸そうと時間を割くと、特にそれが何の経済的なメリットにもならない場合には、他の人の執着によって非難される。

***でも、家族に専念していても、そこには愛があるのではないですか。**

もちろんだ。一方を取ると他方をなくす訳でない。

すでに言ったがくりかえしておこう。真実の愛はなくなることがないのだ。愛す対象が段々と増えていっても、それで家族を愛さなくなる訳ではないのだ。

だが愛の能力が大きいと、大勢の人との約束も多くなるので、自由時間も多くの人と分かち合わねばならない。それが、執着に苦しむ者には、前より少ししか愛してもらえていないと受け取られるのだが、実際にはそうではない。

***人が変わろうと決意すると、家族はどうなるのですか。他者を支援することに時間を割くようになると、自分の家族に手がかけられなくなるのではありませんか。**

いいかい、自己変容したいと願い、内面の話ができる他の人たちと集まりたいと思う者が出くわす最もきつい障害は、周囲の人たちに理解されることがなく、その人たちに、家族の義務を果たさないという罪悪感を、弄ばれることだ。

良く観察すれば、誰かが週に一度二時間かけて、おまけにお金も使って、サッカーの観戦やディスコやバーに行っても、その人が家族をないがしろにしているという印象を持つ者はいないと分かるだろう。しかし、同じ人が、自他に役立つように内面に関する話を二時間しに行く場合に

は、あらゆる難癖をつけられるので、家族を放任してしまったという罪悪感を覚えてしまうのだ。

これは要するに、分かち合うのが困難だという執着のせいだ。執着は愛ではないし、この障害を克服できなければ、君たちは停滞してしまうのだ。

*** それでは、家族は靈的進歩の障害となり得るのですか。**

いや、障害となるのは、自己成長する気がなく他者にも成長させまいとする魂たちの理解のなさだ。彼らは、進化を願う者を、それが家族のように血の繋がりがあがる者であっても、手中の全ての武器を駆使して押し留めようと努める。

理解のある家族と暮らす者にとっては、家族が靈的な発展を遂げるための支えとなる。しかし、地上の人類はほとんど成長していないために、靈的な覚醒に取り組もうとする者は少数である。しかも、同じ家族の中に似通った魂がいて、靈的進歩に取り組むつもりであっても、同時に覚醒できることは非常に稀だ。そのため、先陣を切るのが一番難しいのだが、それができる人が、他の者のために道を切り開かないといけな

かのイエスでさえこれと同じ問題を克服し、執着による家族の理解のなさを乗り越えなければならなかった。イエスの家族は彼を理解できなかったので、靈的事柄に応じるために家の義務を投げ出している、と常にイエスを非難した。気が狂っているとけなし、罪悪感を覚えるように仕向け、ヨセフが亡くなって彼が大家族を養う責任を負う羽目になってからは、特にそれが高じた。だが、それは真実ではない。イエスは、母親と兄弟姉妹が自立できるまで物質的支援をしたのだ。

しかし、彼の使命は、全人類の家族というもっと広範に及ぶものだった。イエスが体験した自分自身の家族の理解の欠如は、福音書の次の一節に反映されている。

そしてイエスは言った、「預言者はどこでも尊敬されるが、自分の郷里と家族の間では敬われない」

*** でも、無条件に愛するためには、家族を放棄する必要があるのでしょうか。**

霊界が家族の放棄を要求するなど、どうして信じられるのかい？ 家族は、魂の最初の感情を刺激する手段として、まさに霊界で創られたのだよ。

夫婦間の愛情や親子間の愛情は、魂が最初に出会う感情で、交配本能や子に対する親の保護本能から発達したものだ。

唯一伝えたいのは、愛において前進するためには、心を開いて分かち合い、家族の概念を広げて、全ての霊的存在がその一部であると考えねばならないということだ。

いいかね、人が愛す時にカテゴリーを設けるとしたら、真の兄弟愛の実現は不可能だろう。自分の家族を一番先にして、同じ故郷・国・人種・文化・宗教の者を優先し、それで残ったものがあれば他者にあげる、となる。

何の見返りも期待しないで与える代わりに、常に何かと引き換えなのは、我欲がカモフラージュされたものなのだ。そのため、与える際にはリストを作成し、最初に自分に沢山くれそうな人を載せ、次にそれ以下の人を記載し、何もくれない人は欄外とするのだ。

このような利己的な態度は、どんなに会員だけの連帯を正当化しようと頑張る人たちがいようと、「愛の法則」を侵害している。連帯する権利から誰かを外してしまった瞬間に、連帯という言葉は意味を失うのだ。

このような集団的エゴがどこまでエスカレートできるのかという例は、ナチズムに見ることができる。人種による見せかけの結託を謳い、他の人種や信仰の権利と個人の自由意志を粛清したり排除して、それを捏造したのだ。

*** 執着は、虚栄の段階にも尊大の段階にも見られると言われましたが、これは克服するのがかなり難しい「エゴ的感情」のようですね。**

その通りだ。執着は虚栄の段階に始まり、尊大の段階の最後まで克服されることがない。

*** それなら、執着に関しては、虚栄から自尊を経て尊大へと霊的に進化していても、何の進歩もないのですか。**

もちろんあるとも。しかし、進歩は常に緩やかなのだ。

虚栄心の強い者の執着は、自尊心の強い者や尊大な者の執着と同じ強さではないし、同じ要因で増長される訳ではない。虚栄心の強い者は感情が余り発達していないので執着心はずっと強く、他者の自由意志への配慮がなく、甘やかされたり構われたいという思いや進化への意志の弱さなどでそれが増長される。

自尊心の強い者と尊大な者では、執着心は徐々に愛に変化していつているので（愛と執着の両方が混在している）それほど強くないが、愛されないという怖れや愛する者を失う怖れによって増長される。

***強欲と執着は、どう克服するのですか。**

強欲の反対は寛大なので、強欲に打ち克つためには、物的・靈的な寛大さを発展させる必要がある。強欲と執着は、物的面・靈的面で、自分が持っているものを他者と分け合うことで、乗り越えられるのだ。

貪欲－独占欲

貪欲とは、所有したいという過度の欲求が回を追うごとに募るもので（欲するものは物財でも他のいかなる性質のものでも良い）、それによって他者が損害を被っても構わない。

貪欲な者は、自分の持ち物では決して満足できずに、いつも持っていないものや他者のものを欲しがり、それを手に入れるまで留まるところを知らない。貪欲な者は、自分のものを評価しないので浪費癖のある魂であり、いつも他者の持ち物を切望しているので羨み深い魂である。

魂が虚栄の初期段階から発展段階へと移行すると、物的な貪欲さは靈的な貪欲さ、つまり独占欲へと変化していく。

人が意識してかしないかで、自己満足のために他者の注意を引こうと、相手の自由意志を侵害したり強要してしまうことには頓着せずに、できるだけ長く自分に構ってくれるように人の感情を操る場合は、独占欲だ。独占欲に支配されている人は、自分の事しか考えないことが多いので、他者を尊重することが非常に難しい。

独占欲の強い者は、どんな手段を講じてでも注意を引こうとし、そのため、頻繁に犠牲者の振りをする。

独占欲は執着心との関係が深く、この二つの我欲の形態は、同時に同じ程度の強さで顕れることが多い。つまり執着心に苦しむ者は、独占欲も強い場合が多いのだ。

嫉妬は多くの場合、執着心と独占欲の混ざったものだ。貪欲－独占的な人には羨望、つまり自分にはない欲しいものを所有する人たちへの反感、が目覚めがちである。欲望の対象となるのは、貪欲であれば物的所有物であり、独占欲では靈的所有物となる。

***それなら、愛して欲しいので構ってもらいたいと頼むのは、独占的になるリスクがあるので、正しくはないのですか。**

その逆だよ。我々は皆愛される必要があるのだ。自分の必要性を認めて頼むのは、自己の感情表現の一部を成すので、良いことだ。

***それなら、愛して欲しいと頼むのと、独占的になることとの違いは何ですか。**

強制せず、騙さず、操らず、誠実に頼む場合は、独占的ではない。

独占的なのは、強制し騙し操った時、要するに、他者の自由意志を侵害した場合だ。しかも多くの場合が、愛を求めているのではなく、ちやほやして欲しいだけなのだ。

愛とは自由に与えられなければならない、強制すればそれは愛ではなく、義務となってしまう。そのため、家族や近親者なので自分を愛したり面倒をみる義務がある筈だという思い込みだけで、特定の人たちに愛してくれと要求するのは間違っている。

***霊的に進化するにつれて、独占欲はどう変化しますか。**

執着と似通った方法でだ。

すでに話したことだが、独占欲は貪欲から派生して虚栄心の発展段階で始まり、尊大の段階の最後まで完全には克服されることがない。

魂は、愛せる能力を獲得するにつれて、自分自身の感情で満たされ始めて情緒的に他者に依存しなくなるので、感情面で寛大になると、独占欲は徐々に力を失ってゆく。自尊と尊大の段階では、独占欲は次第に減少してゆく。

攻撃欲（憎悪・恨み・憤り・怒り・無力感・罪悪感）

攻撃欲の分野には、憎悪・恨み・憤り・怒り・無力感・罪悪感など、自他を問わず痛めつけ傷つけたいという衝動と関連した全ての「エゴ的感情」が含まれる。

攻撃欲は、一般的に外部からの刺激で目覚めるが、自分が攻撃された場合や、自分の欲求や願望の障害になると思える状況が要因となる。攻撃欲とは、劣悪化した生存本能である。

攻撃欲は我欲のどの段階にも見られるが、それが誘発される原因は、各レベル毎で異なる。

虚栄心の強い者では、注意を引いたり注目の的になろうとしたのに失敗した場合や、欲求を満たせなかったり、人の意志を曲げられなかった場合などに表面化する。そして、自分の要求を他者に押しつけようと、攻撃的になる。

自尊心の強い者や尊大な者に攻撃欲が顕れるのはより限定的だが、もっと過激なケースとなり得る。確信していることが正しいと認めてもらえなかったり、望み通りに物事が運ばず途方に暮れた時や、やりたい事をしたり表現するのを抑制されてしまったり、感情が傷つけられたと感じた時などに、攻撃性が起動する。憤怒すると虚栄心の強い者よりも暴力的になり得るのは、ストレスを蓄め込む傾向があって、自己コントロールを失うと突然爆発するからだ。

虚栄心の強い者と自尊心の強い者の攻撃性の違いは、ライオンとサイとに例えられる。ライオンは肉食で、他の動物を餌とし本質的に攻撃的なので、攻撃欲も生来のものと言えよう。この攻撃欲が、虚栄心の強い者の攻撃性なのだ。

だが草食動物であるサイは、食べるために狩をする必要がないので、乱暴に振舞う習性はない。脅かされたり怪我した場合など、ごく特別な場合にのみ攻撃的になる。これが、自尊心の強い者の攻撃性に似ているのだ。

尊大な者の攻撃欲は、自尊心の強い者の攻撃欲に似ていて、単にその度合いが違うだけである。尊大な者は滅多に感情を損うことがないので、攻撃性が触発されることも稀だが、爆発した場合には、他の者たちよりもずっと破壊的になり得る。

攻撃欲には、憎悪から恨み・憤りや無力感に至るまで色々な異形態が見られ、それぞれに独自の特徴がある。

憎悪は、他者に向けられる非常に強烈で持続的な攻撃欲である。これは、最も愛からかけ離れ、最も有害な、一番原始的で致命的な「エゴ的感情」である。宇宙の生命存在への分離と拒絶感情の最たるものだ。

憎悪は、愛の学習が遅れている最も未熟な存在に特有のものだ。憎む人を「嫌悪する者」と呼ぶとするが、この人はいつも、自分の憎しみは正当なものでコントロール可能だと信じているのだが、しまいにはより多くの人を憎むようになってしまい、周囲の人に隔絶感をまき散らす。

憎悪に身を委ねてしまう者は、暴力的で不公平で狂信的で冷酷で、全てのものを破壊してしまう。普通の人たちからは避けられてしまうので、孤独を感じないように似た者を探そうとする。

「嫌悪する者」は、異種と見なした者への憎悪を正当化する、過激で暴力的な活動に参加しがちである。しかし魂は益々孤独になり、この世

の他の存在からも離れてしまうので、憎しみ自体が彼らを破壊してしまう。とどのつまり、それが彼らが望んだことだったのだ。

怒りや腹立ちは、持続しにくい攻撃性で、その程度が大きい（怒り）か小さい（腹立ち）かの違いである。

憤りと無力感は、強く長く持続する攻撃性が内側に向けられた状態で、他者や自分が逆境に陥った際に起動する。無力感の場合は、物事の流れを変えるのは不可能だと感じる欲求不満が、状況を悪化させる。

怒りっぽいイライラした人は、些細な事が原因で攻撃的になり易く、不機嫌であることが多く、自分自身と人生とに不満である。自分の不快感の原因は外のもので内にはない、と自己を納得させるために外部のせいにして、不快感の本当の原因を探ろうとせず、進歩を拒むので苦しむ。恨みはこうして生まれる。

罪悪感というカテゴリーに入るのは、攻撃欲や無力感が自分自身に向けられた場合である。

自分への攻撃性が蓄積されると、アストラル体レベルの均衡を崩し、その状態が長く続くと肉体的な病気を引き起こす。

たとえば、抑圧された憎しみは、肝臓や胆嚢の病を引き起こす。

無力感は、消化器系の調子を狂わす。

抑圧された憤りや恨みが蓄積すると、歯牙の問題（歯痛や虫歯）が起こる。

攻撃性が自分に向けられた罪悪感は、自己免疫疾患を生じさせる。

*** 罪の意識、つまり罪悪感はどこで生まれるのですか。**

感情と思考に葛藤がある場合に、感じることと考えること、つまり魂と頭脳との戦いの中で生じる「エゴ的感情」が原因だ。

思考の中には、それまでに授けられた全教育が影響していて、社会規範や規制、利己的な考えなども含まれる。

人は、気持ちに反して考えに従って行動すると、罪の意識を感じることもある。それは多くの場合、愛に反した我欲での行動を意味する。たとえば、思考が発端となる利己的な行動をとった時に、魂が良心によって霊的な視点からは誤りだと感知すると、罪悪感が生まれる。魂は頭を咎め、感情が思考に異を唱えるのだ。この場合は、自分の間違いを認識することができ、成長の指標ともなるので、このような罪の意識は肯定的なものだ。しかし、その逆も起こり得る。

人は、気持ちを感じてしまうことに罪悪感を覚え、思考の代わりに感情に従うことを悪いと思う場合がある。この場合は、頭脳が魂を咎めるのであり、思考が感情を検証する。とても強い偏見や制約があって、特定の感情が悪く誤りだと思い込んだ場合だ。そして残念なことにそれが原因で、人は善悪を混同し、人生を混乱させる感情は悪いものに違いない、との結論に行き着くのだ。こういう罪悪感は、霊的進歩と感情の発達を阻むので、大変否定的なものだ。

***二つ目のケースがよく分かるように例を挙げていただけますか。**

よかろう。人を好きになったとしよう。最初の衝動は、そういう気持ち芽生えた人に、意思表示をしようと近づくことだ。これが、気持ちのままに行動するということだ。

だが今度は、頭がその思考回路に沿って、感情を分析することとなる。これは、それまでに授けられた偏見と禁制に満ちた教育の全てに条件づけられてしまっており、そこから感情の表現を咎める一連の思考が生まれる。

たとえば、その関係が発展するために悪影響を与えるような不都合（年齢差・人種・社会層・宗教・信仰・好みや趣味の違いなど）を示唆したり、拒否される怖れを増長させる（彼女は同じ気持ちではない、NOと返答するだろう、滑稽な真似はやめろ、何て思われてしまうだろう、など）。

思考が感情を負かし、心で感じたことをするのを止めてしまうと、気持ちに従わなかったことで罪悪感を覚える。

感情に委ねたとしても、自分の気持ちに適合するように思考を完全に修正できなければ疑心暗鬼になり、再び思考に攻撃され、考えたことではなく感じたことをしたことに罪悪感を抱かせられる。

***罪悪感はどのように克服できるのですか。**

利己的な行為を認識することで罪の意識が生まれる場合には、落ち込んだりがっかりせずに、新たにそうならないように積極的に行動することだ。たとえば、傷つけてしまった人に謝ることから始めるなど、自分がしてしまった悪いことを可能な限り修復しようとするのだ。そうすれば、罪悪感は消えるだろう。

気持ちに反して、考えに従って行動したために罪悪感が生まれる場合には、初めに、自分が感情に則った行動をしていないことを認識すること。次に感情に従う勇気を持ち、感じるままに生きることで、そうすることを阻む抑圧的な思考回路を壊すことができる。

このプロセスを開始し、気持ちに素直に生きて行動し始めてはいるものの、まだ頭の制約が強く、その努力を放棄するように悩ませられている人には、非常な忍耐力が必要だ。自分の気持ちに大いに自信を持って、それに従って行動する固い意志が必要となる。

苦しむとしたら、それは感じることのせいではなく、考えることのためだと知るべきだ。それゆえ、感情ではなく、思考を修正すべきなのだ。

心で感じる事が分からない人たちによって責められたなら、過去に自分もそうであったように、その人たちがまだ利己的で偏見に満ちた考えに捉われているのだと理解すべきだ。彼らには、忍耐と理解を持って接する必要があるが、影響されてしまってはいけない。

*** 恨みとは何ですか。**

恨みとは時間が経って薄れたものの、憎悪が長期にわたり継続するものだ。通常は、反対されたり被害にあったせいで、自分の不運を招いた責任者だと判断した特定の人に向けられる。

攻撃欲が目覚めるきっかけとなる事件は、かなり以前に遡る場合もある。しかし恨み深い人はこの件をずっと記憶し、攻撃的な衝動を育み、復讐すれば不快感を軽減できるだろうと思って、その機会を待つのだ。

*** 恨みはどこで生まれるのですか。**

気持ちに従って生きてこなかったという不満や、やりたかった事を実行しなかった欲求不満、また自分が遭遇した逆境を受容しなかったためや、自分自身の欠点（怖れ、安楽さ、意志力の欠如、無理解、怠惰など）に負けてしまった後悔などから生まれる。

恨みは一般的に、気持ち通りにできなかったことに加担したり協力した人たちや、やりたかった事に反対した人たち、自分の困難な状況に責任があると思う人たちに、誤って向けられる。

*** どうやってそれに打ち克つのですか。**

外部に責任者を探そうとする代わりに、内面の不快感がどこから生じるかに気づいて、別の問題を誘発する可能性があるとしても、人生の中の好きになれないところを修正する勇気を持つこと。

運命のいたずらに思えるネガティブな状況は、時には、欠点を乗り越えて無条件に愛す能力を高めるために、自分自身が選んだ試練の場合があることを理解するように努めるのだ。

*** 前にした質問をもう一度くりかえすことにはなりますが、憎悪・憤り・怒り・恨みなどの感情を表に出せば、他者を傷つけることにはなりかねま**

せんが、溜め込んでしまえば自分自身を痛めつけることになります。ですから、こういう感情はどうしたらいいのですか。

根本から断ち切ってしまうのだ。それらの感情が内部に目覚めないように努めるのだ。攻撃欲が外部ではなく内部に生まれることを認識して、それが目覚めたのだとしたら自分の中に存在している我欲が顕れたのだと気づくのだ。

自分の取り柄が表価されないために我欲が目覚めるならば、まだ虚栄心を克服できていないのだ。感謝されなかったり中傷されたために苦しむのであれば、自尊心や尊大を超える必要があるのだ。

攻撃欲が外部ではなく内面に起因するのは、どんなに酷い無礼や非難をされても、忍耐も笑顔も絶やさずに耐えられる人たちがいる一方で、どんな些細な事にも制御不能なほど激怒してしまう人たちがいるのを見れば明らかだ。

最初の人たちは、自己の攻撃性の根絶において、靈的に進んだ人たちだ。二番目の人たちは、そう努めようとし始めてもいない。

ほとんど影響を及ぼすことのできない外側の世界を変えられないからといって、欲求不満になってはならない。自分が全権限を有する、内面の世界を変えるように努力するのだ。そうした時に、外でのことは、もう怒りの原因とはならなくなるのだ。

*** 攻撃欲はどう乗り越えるのですか。**

まず自分にそれがあつことを認め、次に理解によって克服しようとするのだ。

*** 何を理解しないといけないのですか。**

自分自身を理解し、他者を理解し、直面する状況を理解する。

自分が間違っていると認めるのが嫌で、自分自身の利己的な態度を認めたくないがために、怒ってしまう場合があると理解すること。

また、自分の意見を抑圧するために攻撃的になるのであれば、在るがままに自分を表現するように努めるのだ。

誰かに傷つけられてそうなるのであれば、それは相手の魂の成長が足りず、愛の認識に関してほとんど進化できていないためなのだとして理解すべきだ。かつては自分も同じように靈的に無知な状態で、今されたことと同じことを人にしていたのかもしれないと気づきなさい。自分の利己的な行為が理解されることを期待するのなら、他者の利己的な行為に関しても寛容な態度をとらなくてはならないと理解すべきなのだ。

我々が直面する逆境の多くは、我々に嫌がらせをするために出現したのではなく、愛の学習と我欲の克服を促進させるためのもので、その多くは生まれる前に自分自身で選んだものなのだとして理解するのだ。そして大半を占めるその他のものは、自分の頑固さ・不寛容・羨望や、他者の欲求や意見を尊重・理解しなかったために、我々自身が招いてしまったものなのだ。

*** 攻撃欲が触発されてしまった場合に、誰にも迷惑をかけずに、不快感から解放されるにはどうしたらいいでしょうか。**

他者を傷つけずに不快感を解放する、いい発散方法がある。

それは、どう感じているかを言い表わすということで、自分にわき起こった感情を認めて、そうなった理由を述べるのだ。聞き手は、傷つけないように当事者以外の穏やかな人が好ましく、攻撃欲には簡単に屈しない信頼できる人でなければならない。

不快感を表現するだけで、攻撃欲から生じた不快が和らいでかなり楽になる気がするし、もっと冷静に理性的になれる。

その後でさらに落ち着けば、けんかをした人との話し合いを試みて、解決策を模索することが可能だ。しかし、それには時と方法を選ばねばならず、怒りや激情で爆発しそうな時は、絶対に避けねばならない。そうなるまえに、自分が受けたのと同様かそれ以上の苦痛を相手に与えて、大いに傷つけてしまうかもしれないからだ。

悲しみ・絶望・苦々しさ・自暴自棄・諦め

悲しみは、士気の喪失と低下という情緒的な状態だ。

悲しみは、攻撃性と同じ原因や状況で生じがちだが、感受性をもっと強い人の場合にそうなのであり、我欲に由来していることが攻撃欲ほど明白ではないので、捉えるのが難しい。

実際、無力感や罪悪感や、場合によっては憤りと自棄も、本当は攻撃性と悲しみの入り混じったものだ。

悲しみは、自分が求める成果が見られなかったり、結果が期待したものと違ったりして、憔悴したりがっかりした際に表れる。

悲しみには色々な形態があり、それぞれに特色がある。

苦々しさは恒常的な悲しみで、長期に及ぶ。日常生活の妨げとはならないが、とても深く内面に根を張っているので超えるのが難しく、悲しみによってその人が少しずつ死んでいくような印象を与える。努力する動機づけや生き甲斐がないというのが特徴である、絶望と諦めという悲

しみの形態にも深く関連しているが、後者は通常、認めたくないような状況から生まれる。

自暴自棄は、鋭く強烈な悲しみの極端なもので、日常的ないかなる仕事も行えなくなり、精神不安定になって自分の命や他者の命を奪うなど、致命的な行為に及ぶことがある。

*** 悲しみが我欲の感情だと思われているのは、予想外でした。**

ところがそうなのだ。人が時々悲しくなるのはとても普通のことだ。だが、諦めて投げ出してしまって、悲しみがその人の日常的な状態になってしまうと、それは停滞した状態なのだ。悲しみは、霊的成長の努力を怠る口実となるのだ。

*** 悲しい時に、誰かに何か悪いことをするとでも言うのでしょうか。**

悲しみは自分に有害であるし、間接的には他者をも害する。悲しみのせいで、自分の務めが果たせなくなる場合があるからだ。悲しみや落胆に沈んでいる人と一緒に暮らすのは、とても疲弊することなので、大変強い意志力を持たない限り、うつ状態の人と暮らす者たちにも容易にその状態がうつってしまう。

悲しみが蓄積されると、攻撃欲と同じように、多数の病気を引き起こす。悲しみに病気になる死んでしまい、今生で取り組んでいた試練や使命を途中で止めてしまう人は大勢いる。そうした人たちは、同時に、他の魂たちを助けるという約束も投げ出しているのだ。たとえば、悲しみに蝕まれて死んでしまう父親や母親は、子どもたちを見捨てているのだ。

*** 悲しみはどう超えたらいいでしょう。**

攻撃性と悲しみを生み出す要因は大変似通っているので、攻撃性を乗り越えるために処方したレシピを、ほぼその一点一点、悲しみを克服することにも適用できる。

それゆえ、悲しみを乗り越えるための基本となるのは、理解である。自分自身への理解、他者への理解、我々の人生の状況への理解。

我々が直面する逆境の多くは、愛の学習と我欲の克服という工程の一部を成しており、その多くは生まれる前に我々自身で選んだものだとして理解するのだ。そしてその他のものは、他者への不寛容・頑固さ・無理解などで、我々自身が招いたものなのだ。

時には、自分が間違っているのを認めたくなかったり、自分自身の利己的な態度を認めたくないために、悲しくなる場合があるのだと理解すること。

誰かに傷つけられて悲しくなるのであれば、それは、その魂の成長が足りないため、愛の知識をまだほとんど持たないためなのだと理解するのだ。

自分らしさを抑圧したり、意志を黙殺して悲しくなるのであれば、自分を在るがままに表現するよう努めて、悲しみを超えるのだ。

*** あなたのレシピは、諦めを勧めているようですが。**

とんでもない。理解と諦めは全く異なるものだ。諦める者は、匙を投げ、理解を放棄し、自分の意志を否定する人だ。もうどうでもいい、と生きる希望を失い、落ち込むのだ。

もう言ったことだが、諦めも、悲しみに関連する我欲の一形態なのだ。それは苦しみを避けるために頑張らない、というやり方なのだ。しかし、この方法では、別の理由でだが、もっと苦しむことになる。

理解は、生きる希望と悦びを失わずに、努力し続けて前進する鍵となるのだ。以前は分からなかったことにも、意味を見出すことを可能とするからだ。

*** 諦めと理解の違いがはっきりする例を挙げていただけますか。**

例を挙げれば、死に対する姿勢だ。

君たちの世界の大半の人は、死に対して諦めの態度をとるが、それは死の意味を理解しようとしなからぬ。君たちは生きている間は、死と向き合うことを避け、懸念を直視しようとしなからぬ。

この話題について真面目に話をしたがる人に出くわすと、冗舌家か頭のおかしい人に思えるのだ。本当は君たちは怖いので、この話題を避けて、日々の雑事に没頭しているのだ。理解しようとはせず、ただ避けているのだ。

そうするうちに、愛する者が突然死んで、驚愕するのだ。この状況は、悲しみ・苦々しさ・憤怒・無力感をもたらす。そして、このどうしようもない事実を変えることが不可能なので、最後に諦めてしまうのだ。諦める者は、仕方がないので受容せざるを得ないものの、理解できていないので、不機嫌に暮らし無益に苦しむのだ。

死は単なる移行期で、実際に死ぬのは体だけで愛する者は生き続け、遅かれ早かれまた一緒になれる、と理解できる者は、もう生きる希望を失うことがない。そればかりか、再会の時が来たら大いに楽しめるように、物質界で何もやり残さないようにと、もっと頑張る生きようとする。

進化した世界では、人が死んでもそれが肉体からの離脱のプロセスだと皆が理解しているので、誰も、悲しんだり、絶望的になったり、苦々

しく思ったりしない。その反対に、仲間が魂の真の故郷である霊界に戻るのだから、喜んであげるのだ。

淫乱と色欲

セックスへの依存は、虚栄心の顕れでも自尊心の顕れでもある。

だが、人がセックスを常習するようになる原因は、それぞれの場合で異なる。そのため、見栄っ張りな者に特有の淫乱と、自尊心の強い者と尊大な者の特徴である色欲という、二つの表現形態に区別してみよう。

淫乱とは、セックスの悦びへ過度に傾倒することだ。虚栄心の強い者のセックスへの依存は、他者から認められたいという欲求と関係している。つまり、セックスを通して人から認められたり、称賛されたりちやほやされることを期待しているのだ。彼らは、自分自身を満たす手段として性的快楽に溺れるが、他者の欲求を配慮することがほとんどない。しばしばセックスを利用して人を独占し、意のままにしたり優位に立とうとする。

感覚が飽和しあきあきしてしまうと、性欲をメンタルに駆り立てる手段として新しい刺激を探す。それは、パートナーを頻繁に変えることであったり、サディズムとマゾヒズムなどの墮落した性様式に訴えたり、他の人たちをその意に反して乱交に巻き込んだりといったものだ。

一方、自尊心が強い人のセックスの常習は、愛せる人がいないことを認められないとか、特定の人への愛情を抑圧したり認めようとしなないなどの、愛情の空虚感や欲求に起因している。

つまり、自尊心の強い者が本当に必要としているのは、愛され愛すことなのだが、自分の愛情欲を認識せずに抑圧してしまうことが、安全弁のように、セックスへと逃避させてしまうのだ。要は、愛の欠如をセックスで補っているのだ。そのために過度の性欲があるが、虚無感は、性的なものではなく感情的なものなので、性関係では満たすことができずに満足できない。

そこで、益々セックスを求めるようになる。そうすることで、この空虚感を癒そうとするのだが、上手く行かずに、前述のような墮落した様式に至る場合もある。

*色欲はどう克服するのですか。

色欲に関しては、セックスによって満たそうとしている内面の虚無感は愛情の欠如によるもので、愛情だけがそれを満たすことができると認めることが、それを克服する唯一の方法だ。

***淫乱はどう克服しますか。**

それが虚栄心の反映したものだとして認識して、それでは絶対に幸せにならないことに気づくのだ。

残念だが淫乱のケースの大半は、若さや肉体美や性力などの衰えが顕れ、性的魅力を失ったり、体が精神的な性欲に応じられなくなった時に、自然に消滅するのだ。肉体の衰えにより、自分の取り巻き連中は消え、それまでの人生の主要な刺激剤も失われる。

こうして人は、便宜上の虚しい関係を築きながら、無意味な人生を送ってしまったという、厳しい現実と直面するのだ。肉体的な魅力だけで寄って来る人たちに囲まれていたが、魅力が失われるや、その人たちは魔法のように消え失せるのだ。その人の我欲にも関わらず、本当に愛してくれた何人かが残ってくれるかもしれないが、彼らに注意を払ったことなどほとんどなかった筈だ。

虚栄心を満足させるために使用した外見美という武器が失われてしまうと、真相にずっと近い新たな局面と対峙しなければならない。そこでは、人を惹き付けるためには、自分の内面から何か美しいものを引き出さねばならないのだ。こうして、便宜上の関係と気持ちの通う関係との違いを評価できるようになり、後者を尊重することを学ぶだろう。

***でしたら、美しく魅力的な人たちだけが淫乱なのですか。**

そうではないが、その多くが淫乱の深みに陥り易い。

魅力がないその他の見栄っ張りな人たちは、そうしたいと思っても、欲しいものを手に入れる餌としては、肉体的な魅力を利用できないからだ。そういう場合は、虚栄心が羨望を呼び起こし、自分が持たない美貌を獲得したいという叶え難い欲望にかられ、体重を落としたり、整形手術を何度も受けようとする考えに取りつかれ、自分をより魅力的に見せようとする。

肉体的に魅力的なのに、完全な肉体を持つようとする執念に捉われてしまう人は多く、それは「ナルシズム」または「肉体信仰」と呼ばれる虚栄心の具現形態の一つである。

***ナルシズムまたは「肉体信仰」がどういうものなのか、もう少し広く説明いただけますか。**

それは、今言ったように、虚栄心の表現形態の一つであり、自己の肉体美が望み得る最大の価値を持つものとして傑出するものだ。

自分の体で満足できずに「完全な肉体」を求めることは、脅迫観念へと変わる。これは精神的な病気であり、食べることを止めたり、あらゆる

る種類の痩身サプリ・強壯剤・興奮剤などを摂ったり、自分の命を危険にさらすことさえいとわず、様々な人工物をインプラントするといった、常軌を逸脱した行動を取る。

ナルシズムに感化されてしまった人は、絶対に自分の体で納得しない。時間とエネルギー、意志とお金の全てを、肉体の改善へと費やしてしまう。肉体自体が自分自身だと思い込んでいるのだが、実際には、物質界で動くために使用する衣服に過ぎない。

いつかは理想的な肉体を手にして幸せになれるのだ、という偽りの幻想を抱いている。そして幻想を利用して儲けている、エステ産業や化粧品業界や消費主義によって、その信念が益々強まっていく。だが、その幻想は我欲が仕掛けた罠に過ぎず、それでは幸福にはなれない。幸福は、愛を育むことでしか獲得できないのだ。そのため、不満はどんどん膨張する。

そして、体内時計が老年へと向かって情け容赦なく進んで行くにつれて、あんなにも一生懸命になって得られた成果が、老化という自然現象に台なしにされていくように思える。人生はこうして過ぎていき、かつては美しかった肉体を完全に去る時が来て、非情にも自然の腐敗プロセスが宣告される。

魂は霊界に戻ると、今や墓の中で朽ちた自分自身ではなかった肉体を美しくしようと無駄に時間と努力を費やしたことに気づき、魂という永続する本当の自分を改善することにはほとんど努力しなかったことに気づく。

しかし、手遅れなことなどない。魂の命は存続するので、再び生まれ変わって、着ている肉体を自分だと思い込んで無駄にしてしまった人生でやらなかった事を、もう一度やり直せるのだ。

*** こういう見方をすると、肉体美は魂の進歩にとっては障害だと言ってもいいですね。**

私の話から、美しさはそれ自体がネガティブな特性なのだと思わないで欲しい。その反対に、魂が進化していくにつれて内面の美に呼応して、魂が宿る肉体はより完全により美しくなるのだ。そして実際に、君たちよりも霊的に進化している物質界では、そうなっているのだ。

しかし、進化の乏しい魂たちが支配する後進的な世界では、確かに諸刃の剣となる。虚栄の段階から抜け出せない進化の乏しい魂にとっては、肉体的な魅力は虚栄心の奔放を許す武器となり、そのために使用される。気紛れ・下品・不躰・横柄に振舞っても、自分の肉体美が欲しいものを

与えてくれると知っているのだ。それは、称賛してくれる者やちやほやしてくれる人たちだ。目も眩む体の美しさで欲しいものが手に入るのなら、なぜ善い人になる努力をする必要があるのか？

...こうしていつしか老年になり、自分の唯一の魅力を失い、独り取り残されて、自分のモラルの貧しさに失望する。美しく魅力的な外見を維持することばかりにかまけていて、内面を改善しようと努めたことが一度もなかったからだ。

***ナルシズムはどう克服しますか。**

自分は肉体ではないので、肉体にそれほど煩わされるべきではないと認識するのだ。人が幸せになるためには、自分自身を、つまり自分の内面を耕さねばならないのだ。

肉体美という罠に陥った多くの魂がそのことを知っている。そのため、自分の体ばかりを眺めて人生をそれ以上浪費したくないので、直ぐ後の転生ではありがたいの少ない肉体を選ぶのである。我欲を克服して人間として改善したいので、美しい肉体を持つことが誘惑の原因となるのであれば、現状では持たない方を選ぶのだ。

***それでは自尊心の強い者は「肉体信仰」に陥らない、つまり、自分の体に不満を覚えたり、魅力的で美しくなりたい、と熱烈に願いはしないのですか。**

もちろん願いはするが、見栄っ張りな者とは違う要因でそうするのだ。

気位の高い者は、称賛の的となるよりも、愛されることを求めているのだが、もっと美しくなればもっと愛してもらえると間違っ信じて込んでしまうのだ。

自尊心の強い者がハンサムな場合は、周りの人たちは自分を好きでそばにいてではなく肉体やその他の魅力に惹かれているからで、飽きたりもっと素敵な人に出会えば簡単に捨てられてしまう、と知ってしまうと失望する。

***僕たちは、本当は魂であって肉体ではないのに、どうして自分の魂を意識せず、身体ばかりを自分と同一視するのでしょうか。**

それが君たちの世界が教えることだからだ。魂は存在せず、人とはその体であると教えている。君たちの快樂主義の世の中では、評価される資質とは物的なもの（肉体美・富・権力）で、内的な資質（感受性・慈悲深さ・謙虚さ・慎み深さ）は軽視されるのだ。

霊界では、それと全く逆だ。全ての霊的な資質が評価される。中でも謙虚さは最も評価される資質の一つだが、外的な資質は、魂個有のものではないので、何の価値もない。外的な資質は、劇の作品が変われば俳優の衣装替えがされるように、ある人生から他の人生で変化するので、状況的な付随物だと考えられている。人は、今生では外見的に美しくても、次の転生では醜いかもしれないし、今回は金持ちでも、次回は貧しいかもしれないのだ。

魂は、肉体から離れている間は、その違いが明確に分かっていて、霊性の改善のためにこの世にやって来ると知っている。しかし肉体に宿ると、身体との一体感や過去の忘却や、転生先の文化の影響などで、霊的に改善する目的意識の低い魂は、自分を完全に肉体と同一視してしまう。そして、魂が顕現するということには、個人的に経験したことも他者の経験も、頭から否定するのだ。

***魂の顕現とは何を意味するのですか。**

魂の存在とその能力を示す全てのものだ。それらはたとえば、肉体を持たない存在たちとの交信、幽体離脱、自他の気持ちを直感すること、五感以外での超感知などだ。このような体験をした多くの人が、頭がおかしいと見なされる。だから、自分の靈感に自信のあるかなり進歩した魂でなければ、自分が気が狂っていて精神療法が必要だと信じ込むに至るだろう。

怖れ

怖れとは、懸念・動揺・不安の感情であり、自分や自分が愛する者への危険や脅威を感知して生まれるが、危険自体は、現実的なものである場合と、想像上のものである場合がある。

怖れに脅かされている者は、自分に全く自信がなく無防備であると感じ、大事な決断では、感情または肉体を傷つける悪い結果になりはしないかといつも迷う。しかも怖れは怖れを呼ぶ。つまり、怖れは頭を過度に刺激して、現実の状況を、空想上の脅威が出現する架空の状況に創り変えてしまう。しかも、それを本物だと信じてしまい、現実の脅威だけではなく想像上の脅威によっても、自分の怖れを増大させてしまうのだ。

怖れは心配も引き起こす。頭の中で、脅威となり得るあらゆる状況を予め想定して、その全てから無傷で逃れる方法を探そうとするからだ。

恐怖とパニックは、強烈で鋭い怖れの感覚で、非常にトラウマとなり易い。

怖れは、自分が在るがままに振舞う妨げとなるので、霊的進化に最も有害な感情の一つである。進化する意志のある善意の魂でさえも、怖れを乗り越えられなければ、長期にわたって成長が滞ってしまうことがあり得る。

***でも、全ての怖れが同じだとは思わないのですが。**

もちろん違う。だが一般的に、怖れは魂を抑圧して、気持ちに従って行動できなくさせ、感情を窒息させて完全に抑制してしまうことさえある。そのため、停滞してしまうのだ。

***しかし、正確には何を怖れているのですか。**

最も一般的な怖れは、自分への他者の否定的な反応をこわがるものだ。この定義から派生する怖れとしては、愛してもらえない怖れ、理解してもらえない怖れ、拒否されたり軽蔑される怖れ、攻撃性（肉体的・精神的暴力）への怖れ、孤独になる怖れなどがある。

ところで、自分への他者の否定的反応が怖いと、その怖れが、在るがままの自分を表現する怖れをもっと増長させてしまう。そして、これに負けてしまうと、他者が望む自分らしくない振舞いをしてしまう。他者とはこの場合、身近にいる人で、愛する人や家族（母親・父親・兄弟・伴侶など）のように、少なくとも愛情を期待できる人のことだが、全般には、どんな人間関係にも当てはまる。この怖れは、家族内外を問わず、こどもが肉体的・精神的な暴力や虐待の対象となった幼児期に由来することが多い。

前述のカテゴリーに入らない怖れとしては、未知なものへの怖れ、死への怖れ、苦痛（肉体的または精神的）への怖れがある。

未知への怖れは、不安を呼ぶ。人は、知らないものについて、多大な脅威や危険を想像してしまうものなのだ。実際のところ、死の恐怖というものは未知への怖れであり、死後に起こり得る未知なるものへの怖れであるか、無というもっと冷酷なものがやって来ることへの怖れである。

まだもう一つ別の怖れがある。人間にとっては最大の怖れで、他のものはそこから派生するので、特別に言及しておく必要がある。それは、自分自身を知ることへの怖れであり、自分の欠点や美德も含めて、自分が本当はどういう人なのかを発見する怖れである。

我々は、我々自身の欠点を知るのが怖い。我々は、自分にエゴがあることや、自分の災いのほとんどが自我のせいだということがなかなか納

得できないために、欠点を認識すれば余計に苦しむに違いないという誤った思い込みをしているのだ。気づきは、我欲の一形態に過ぎない「自己愛」を苦しませはするが、幸せになろうとして我欲からの解放を望んでいる魂を痛めることはない。

エゴから解放されるためには、先ず自分自身にエゴがあることを認めて、次にそれがどう表面化するのかを認識しないといけない。認めるのを怖れてはならない。我欲は全員に存在していて、それからの脱却の過程のどの地点にいるかが違うだけなのだ。だが、自分自身を知ることが怖れて長期にわたって我欲を覆い隠してしまうと、我々は停滞してしまい、ずっと苦しむことになるのだ。

同様に、我々は、愛情・感受性・謙虚さ・優しさ・同情・博愛など、自分の美德や愛の表現を発見することを恐れる。実際にそうすることで、傷つけられたり利用されたりして苦しむのが怖いのだ。そしてそこから、自分に対する他者の否定的な反応への怖れが生まれるのだ。

しかしそれにも関わらず、この怖れに打ち克ち、自分自身になって、愛情深い自己を目覚めさせるために戦えば、内なる幸福が大変強くなるので、外部からのどんな苦痛や攻撃にも屈しなくなる。

死に対する恐怖も、自分自身を知る怖れから生じている。死が終わりで、意識である自分自身が抹殺されると信じているので怖いのだ。自分を深く見つめる怖れを失えば、心の奥底で「死は存在しない！君は不死身だ！」と叫んでいる魂の声を聞くことができよう。その時に、存在しなくなることへの怖れ、つまり死の恐怖は、消えるだろう。

***怖れは、魂の進化に、具体的にどのように影響しますか。**

すでに言ったが、怖れによる致命的な影響は、魂が自分を在るがままに表現するのを止めてしまい、気持ちに従って行動するのを抑制してしまうことだ。人は自分自身でいなければ、自由意志が囚われているので、霊的に成長できない。自由に決断ができず、いつも怖れにさいなまされる。恐れに支配されるのだ。そして、失敗すると思い込むので、霊性進化に有益となり得るどんな状況にも立ち向かおうとしない。

怖れとは、地球の権力者たちが、人類を操り、霊的に停滞した状態に保つために利用する感情だ。彼らは、人間が取り組もうとする霊的な挑戦には、必ず架空の敵という脅威を創り出し、偽りの安全と引き換えに、挑戦を止めさせるのだ。

それは、彼ら自身も怖いからだ。人類に靈性・愛情・兄弟愛が目覚めて彼らの悪行が明るみになり、自分たちの犯罪が裁かれ有罪となり、特権や全財産が剥奪されたり、他の人間を騙し抑圧し搾取して獲得した権力を奪われるのが怖いのだ。

***例を挙げて下さいますか。**

たとえば、人類全体の友愛に賛同する全ての運動に対する恐れを作り出し、非常に有害な勢力を作りあげ、その純真さを利用して、恐怖体制を敷く。全人類のための連帯と協力に基づいた、もっと公正な政治・経済体制を導入すれば、その後で混乱・無秩序・騒動や経済崩壊が起こるだろうと脅かして、恐れを生み出す。彼らは、自由は奔放となり、自由思想は厄介な考えをもたらし、自由な感情は悪習・墮落・不道徳をもたらすと予告する。

地球の人類が、他の惑星にも愛に生きる人類がいることを発見して、それを見習ってしまうことを恐れている。そのため、地球外生命の証拠はどれも隠蔽し、他の世界の生物と接触することの危険性を映画を通して助長する。映画では、宇宙人は忌まわしい姿（昆虫、爬虫類、ウィルス）をしていて、体内に入り込んだり、人類を滅亡させる悪意を持っているのだと思わせようとする。

人間が不死であることや、人生の目的は愛を深めながら靈的に向上することなのだ気づかれて、その努力を始められるのが怖い。そのため、死後の生の存在を示すものは一切否定し、物質主義の科学教義の中に逃げ込む。同時に、肉体の死後に起こることを追求したり、霊界と交信したりすることの恐ろしさを、映画を介して助長する。その中では、生きている人間の魂を支配して苦しめる、幽霊・悪魔・血に飢えた吸血鬼やゾンビなどという恐怖の存在を創り出して、死後の命をどれもおぞましく描いているのである。

それに一役買っているのが、恐怖の産業（映画やテレビ）で、最も愚劣な脅威を映像に仕立て上げ、ほぼ全世界で見せることによって、全ての人の脳にそれが浸透し、頭の中で現実が変わるようにするのだ。全映画の90%は、テロリスト・連続殺人犯・レイプ犯・麻薬密売人・宇宙からの侵略者・ゾンビ・様々な精神異常者といったあらゆる邪悪な存在に姿を借りた恐怖を、何らかの方法で波及させるのが目的だ。こうして、子どもや大人の想像力を過剰に刺激し、各人独自の怖れの上に、もっともっと沢山の恐れが外部から加わるようにする。

*** 怖れはどう克服したらいいでしょう。**

自覚と勇気を持つのだ。先ず、自分が怖れているということと、何を怖れているかに気づくのだ。

深く分析して見れば、怖れの一部には根拠がなく現実的な脅威とは結びつかないことや、少なくとも思っていたほどではないことが分かるだろう。現実の脅威に根ざした怖れの場合には、それを生み出した状況や環境に勇気を持って立ち向かい、決断を下す際に、恐れに負けないようにすれば乗り越えられる。

「怖れがなく、完全に自由だとしたらこの気持ちをどうしたいと思うだろう」と自問してみるのだ。それが、選択されるべき正しい決断なのだ。試してみる価値はある。絶えず努力すべきなのだ。

怖れと対面し勇敢な決断をしていくにつれて、自分の内面が進歩するのを感じ、怖れは力を失い、代わりに自信と明晰さを得る。そしていつの日か、過去を振り返り「何であんなことが怖かったんだろう。今ならはっきり分かるぞ」と言えるようになるのだ。

*** 自分自身を知る怖れを乗り越えることで、特に配慮すべきことがありますか。**

自分自身を、美德や欠点も含めて、在るがままに見るのは何も悪いことではない。自分を在るがままに受け容れるのだ。

改善途上であることを認め、自分に嫌なところを発見しても落胆しないこと。自分の汚れたところに光を当てて欠点を認識することは、最初は苦痛を伴い不快かもしれないが、そうする価値はある。それが霊的な成長の道における最初の一步になり、成長するには、我欲を排除することと同様に、感情を発達させることが不可欠であるからだ。

自分の感情を怖れず、それが現れたり表したりするのを怖れず、そうする時に嬉しく感じるのを怖れないことだ。悪い事を恐れるだけで沢山なのだから、その上、良い事を恐れるのは止めとしよう。

*** 同じ質問をしたかもしれないのですが、我欲とその具現形態である「エゴ的感情」に関してのお話を全部まとめる意味で、もう一度質問をしたいのですが。**

質問したまえ。

*** 一般的に、自我とその形態を克服するにはどうすればいいのですか。**

最初の一步は認識すること。アルコール中毒であった者は、中毒を克服する最初の一步は、自分がアル中だと認めることだと知っている。これと同じように、虚栄心・自尊心・尊大に打ち克つための最初の一步は、

我々一人ひとりに出現する我欲を識別することで、自分の我欲を認識することだ。

そのためには、それぞれの欠点がどういうもので、どう表面化するのかを詳しく知る必要があり、今まで君と私はそれに取り組んできたのだ。

***それは難しく思えます。**

それほど難しくはない。我欲自体が難しく見せているのだ。

他者の誤りや欠点はあんなに簡単に見えるのに、自分自身のものを認めることはなぜこんなに大変なのだろうか？（隣人の目の中のおが屑が見えるのに、自分の目の中の丸太に気づかない）。我々がここにいるのは、自分を受け容れてそこから改善するためののだと理解できれば、後は簡単だ。

***我欲自体が混乱させようとするのでしたら、どのようにエゴを認識できるのですか。**

有効なのは、自分の行動をあたかも他者のもので、自分が受け手であるかのように分析してみることだ。つまり、自分と他者とを置き換えるのだ。それから分析してみる。公正で正直な振る舞いだったろうか？それとも、利己的に動いたろうか？

ある言動に対して、それをする時とそれをされる時とで、自分の意見が変わらなければ、客観性に近いのだ。しかし同じ言動であっても、自分がした時には容認して、他者がした場合に告発するのであれば、それは不公平なのであって、自我に翻弄されているのだ。それゆえ、自分の欠点に気づくためには、他者を分析する場合と同じ客観性を持つ必要がある。

***そしてどうするのですか。**

次のステップは、態度を修正することだ。自分の利己的な思考を認識しても、それが出現しなくなる訳ではない。自我があることを認識して受容するのは大切だが、その意のままに行動することを避けて、エゴに屈しないことだ。

別の言い方をすると、自分自身に「僕の中にエゴがあるのは知っているけれど、それに左右されずに行動して、愛に基づいた行いをするようにするぞ」と言うのだ。

態度を変化させることで、我々は少しずつ、自分自身や他者への言動や行為を修正できるようになる。利己的な態度は、自分にとっても他者にとっても有害なのだ。

*** どういう意味で自分に有害なのですか。**

愛を感じられなくなるからだ。愛は、人が味わえる感情の中では最も素晴らしいもので、我々を真に幸せにしてくれるものだ。

*** 態度を変えることは、欠点を認めることよりもずっと難しく思えます。利己的な言動を改めるための助言をいただけますか。**

行動するには、次のような内省が役立つだろう。「僕がそうされたら、どんな反応をするだろうか？ 僕だったら、その人にどうして欲しいだろうか？」こうして、他者も我々と同じなのだと思えば、自分に災いを望む人は稀なので、自分の他者への否定的な態度を感知できる。

こう推察することで、「汝の隣人を愛せよ」という金言が生まれたのだ。もちろん、簡単ではない。改善しようという揺ぎない規律と意志が必要とされる。しかし辛抱強く続ければ、短期間のうちに別の心持ちになり始め、もっと内面と調和して幸せに感じられるので、前進し続ける励みとなる。

*** 「エゴ的感情」は、どう扱うべきでしょうか。**

それも、同じようにだ。最初に、我々皆が「エゴ的感情」を持っており、自分にもそれがあるのだと認めること。それらが、我欲が顕現したもの、または、我欲と愛との内面の葛藤が表面化したものだと思えるのだ。

次に、自己分析と内面の意識的な改革を通して、それらを打ち負かす方法を見出すこと。

*** 内面の意識的な改革とはどういうことですか。**

それは、自分自身が指導する内なる魂の改革のことで、改革の目的（愛における進歩と我欲の排除）が明確で、欠点がどういうものでどのように具現するのか、根絶する手段は何なのかがはっきりしている。

完全を目指す道程では、他者の美德や欠点から学ぶことができるのと同じように、自分の美德や欠点を観察することでも学ぶことができるのだ。

一日のうちで自分と繋がれる静かな時間を作り、欠点についてや、その日の自分の態度や他者の態度について振り返ってみる。自分がどの程度愛に基づいて行動し、どれほど我欲によって行動したのか、また、他の人たちはどれほど愛または我欲によって行動したのかを、内省してみるのだ。こうして正直に考えてみれば、進歩に必要な答えを見出すことができ、確固とした意志を持って試練に立ち向かう励みとなるのだ。

他者の利己的な態度に気づいても、それらを理解していれば受け容れることが容易になり、敵対的な態度を取らないでいられる。自分自身の利己的な態度に気づけば、流されてしまったと分かるが、自覚することができたので、いいことだ。次の機会には、エゴは減らしてもっと愛ある気持ちで行動しよう、と固く決意するのだ。

こうして、毎日少しずつ前進して行ける。君たちが、内面の意識的な改革を忍耐強く続けるのなら、いつか過去を振り返った時に、見違えるような自分を見出し、驚くべき肯定的な変化を遂げたと気づける日が来るのだ。

***でも僕は、いい人である条件の一つは他者を批判しないことだと思っていたのですが、いい人になるには自分の欠点だけでなく他者の欠点も見ることが必要と言われるのと、矛盾しませんか。**

それは一般的に、人が他者の欠点に焦点を当てる時は、批判したり嘲笑したりするためだからだ。人は悪い意図を持っていると、とても不公平になり易く、嘲笑の対象となる者を罵倒しようと現実を曲げて大げさにして、何の配慮もしないものだ。

もちろんこれは嘆かわしい態度で、イエス自身が何度も「隣人の目の中のおが脍が見えるのに、自分の目の中の丸太に気づかない」と咎めている。このため、多くの善意ある者が、欠点について話すのは悪いことだと信じている。

しかし、ここで欠点について分析するのは、批判するためでも嘲るためでも誰かを非難するためでもなく、それがどう作用するかを理解して我々自身が改善するためと、他者も改善できるように助けるためである。ここでは、現実を、誇張も隠蔽もせず、在るがままに見ようとしているのだ。

実際、この舞台では、人類の大半が同じ欠点を共有しており、それを排除することが進化の工程の一環となっている。それに、初めに認識することなく、どうやって利己的な行為を修正できるというのだろうか？

***我欲に触発されて攻撃してくる人がいたら、その人を許さないといけないのだと思っていました！**

許すためには理解が必要で、理解するにはどうして攻撃したのか、つまり、原因となる場面ごとの我欲についても掘り下げる必要がある。

たとえば、他者の欠点に焦点を当てて、公衆の場でそれを批判して中傷する者は、虚栄心の顕現形態の一つである羨望という欠点の下に行動しているのだ。

霊性進化の工程や克服すべき我欲の段階と、我欲がそれぞれの段階でどのように顕現するのかが理解できなければ、羨望・嘲笑・批判・中傷などや、もっと酷い利己的な態度を許すことはとても難しいだろう。

*** それでは、自分自身が我欲のどの段階にいるのかを知ることは可能ですか。つまり、自分の能力や霊的發展レベルがどの程度なのかを知ることはできるのでしょうか。**

ああ、知ることは可能だ。自分自身を知ろうと努力して、霊的に成長しようという誠実な思いがあれば、自分がどの地点にいて、今生で取り組むべき霊的な課題が何であるかが分かるだろう。

ここでは、美德も欠点も含めて、自分自身を理解できるように幾つかの指標を与えようとしているのだ。手助けがなく、自分を理解することはかなり難しい。だが、我々には旅の道連れがいるのだ。

もう話したことだが、一人ひとりにはガイド役がついていて、助けて欲しければ、自分独りでは気づくのが困難なことを見せてくれるように手を貸してくれるのだ。また、肉体を持った人の中にも、その内なる能力によって、君たちに手を差し伸べられる人がいる。

しかしこれも全て、各人の意志による。我欲に捕らわれていて前進したがない者は、自分の欠点も認めようとはしないし、いかなる助言も受け入れようとはしない。そのため、霊界から与えられる助言にも、もっと高次の同胞の意見にも、耳を貸そうとしない。嘆かわしいことに、君たちの世界では、大半の人がその状況にいるのだ。

自分が目も耳も不自由だと嘆いているが、目隠しを取ろうとも耳栓を除こうともせず、「目隠しも耳栓も取りなさい。君は目が見えないわけでも耳が聞こえないわけでもない」と言ってくれる人を聞こうともしない。要は、自分の不幸を嘆いているのだが、自分が幸せになるのを阻む主要因たる我欲を放棄したいとは思わず、幸福になるために必要な支援を受けるつもりもないのだ。

人間関係と「愛の法則」

*** 愛についての話で思い出したのですが、僕たちには全員双子の魂がいるのだと言われましたよね。**

その通りだ。

*** 双子の魂は存在するのですね。**

そういうことだ。

*** 想像の世界の中の幻想で、ロマンチックな夢とばかり思っていました。**

そうではなく、実在するのだ。ただ、君たちが想像する通りだとは限らない。

*** それでは、双子の魂とはどういうものですか。**

お互いを補い合える、100%似通った魂のことだ。双子の魂は、愛で結びつくように創造され、完全に幸せになるためには、お互いを必要とし合うのだ。

*** 各人の双子の魂は一つだけですか、それとも複数存在するのですか。**

とても似通った魂は複数あり得るが、100%類似するたった一つのものだけが、双子の魂だ。

*** 双子の魂は、どういう目的で創造されるのですか。**

誰もが絶対に、孤独を感じることをないように。自己覚醒を促し、愛の道を歩むよう突き動かしてくれる自分と同じ存在がいるためだ。双子の魂は、君の理想のパートナーで、永遠の伴侶だ。

*** それは、双子の魂は一緒になるために同時に生まれ変わる、という意味ですか。**

多くの場合にそうだが、いつもそうとは限らない。魂の発達に求められることによる。たとえば、自己の意志力を発展させて相手に依存しないようになるために、独りで物事を経験しなければならない場合も時にはある。

*** 一緒に転生する場合には、カップルとして暮らすためにそうするので**

すか。
それは理想的な状況で、多くの場合にそうなるように転生が準備されるのだが、必ずしもそうなるとは限らない。また一緒に転生しても、カ

ップルとしてではなく、身近な家族や別の関係に生まれ変わることもある。

魂の成長のために要請されることや、魂自身の選択にもよる。転生した後で、一緒にならない選択をする可能性もあるのだ。

*** では、今生で関わる人たちが選ばれるのは、転生前の決定なのですか、それとも生まれ変わってから決めるのでしょうか。**

家族構成や特定の友人や将来のパートナーなど、一番身近な人間関係は、転生以前に話し合われる。これに関しては、生まれ変わる魂たちの間で、それぞれの使命や試練においてお互いに助け合う約束がなされる。たとえば、将来生まれ変わって来る子どもに対して親になる約束をすることなどだ。ただ、その約束がのちに果たされるかどうかは別物だ。

*** 転生以前の約束は、大抵守られるのですか。つまり、ある人とカップルになる約束をしたのに、のちに生まれ変わってから、違う人を相手に選んでしまったり、ある夫婦が二人の子どもを持つ約束をしていたのに、一人しか、あるいは一人も生まなかったということもあり得るのですか。**

君たちの世界ではごく頻繁に、転生以前の約束が破られている。

*** 約束が破られてしまう原因は何でしょう。**

通常は、本人自身の欠点である我欲に身を委ねてしまい、頭で決断を下すからだ。頭は、君たちの住む物質界のありさまに多大に影響されている。物質の獲得にのみ努力すること（消費主義）や、物質的な喜びを味わうこと（快樂主義）にだけ焦点を当てた生活へと誘導され、自分の志や霊的な約束を忘れてしまうのだ。

*** 魂は転生以前のことを全く覚えていないのに、転生してから、生まれる前の霊的な約束がどんなものだったのかを、どうやって知ることができるのですか。**

霊的な直感に従えばいいのだ。人は、心で感じた通りにする時には、どの道を選ぶべきか察している内面の声に従っているのだ。そして、当初の目的を果たしていくにつれて、もっと幸せになり、さらに自信がついて落ち着いて、人生での次の目標が明らかになってくる。

心の声に耳を貸さなければ、頭脳のみで導かれるが、頭脳は感情とは異なり、純粋に物質的な目的を追うように仕向けるので、人は虚無感を覚え、自分自身と折り合いがつかず、不満足で自信がなく、人生に意義を見出せないのだ。

*** 具体的なケースで説明下されますか。**

生まれる前にカップルになる合意があった二つの双子の魂が、今生で出会ったとしてみよう。双方の魂はお互いを認識し、両者に愛情が芽生えたとする。しかし、一方がひどく自我に洗脳されていて、今生での決定を下す際に、その我欲のままになったとしよう。

我欲は頭の中で、物的に不利な状況を悪影響を与えるために利用し、あらゆる方法で感情を無視させようとする。「いい相手じゃない、お金がない、学歴がない、社会層が違う、肉体的魅力がない、家族は反対するだろうし面倒はご免だ、遠くに住んでいる、これこれしかじかの人ではない」などと。

こうして、本物の感情を味わって、真の幸福の一端を共に経験できる霊的に似た人と暮らす機会が現れたというのに、その機会を見送って、気持ちに反した選択をして、双子の魂との転生以前の約束を破ってしまうのだ。

我欲の言いなりになると、自分の気持ちには従わず、知的・物的な期待に沿って相手を選ぶことだろう。こうして、肉体的にもっと魅力的な人やもっとちやほやしてくれる人、もっと経済力がある人など、別の人を優先し、表面的にはもっと刺激的な生活や安楽な生活を送るだろうが、感情的には虚しいのだ。

*** 本当に約束を果たそうとする人たちはどうなるのですか。たとえば、前のケースで拒絶されてしまった人は、どうなるのですか。**

Bプラン、つまり代替計画は常に存在する。霊的なガイド役たちは各人の能力を把握し、その限界が分かっているのだ。霊的にはそれほど類似していなくても、我欲のためにではなく、感情のために努力する気のある別の人と人生をやり直すことが可能だ。

*** それでは、たとえば、未来の両親がもう転生していて、彼らが打ち合わせとは違う選択をしてしまって、それぞれが別の配偶者を見つけて最終的に一緒にならなかったとしたら、二人の子どもになろうと決めていた魂はどうなるのですか。生まれ変わるのを止めるのですか。**

眠っている間に、魂はほぼ毎晩霊界に戻っているので、転生していても、霊的世界から切り離されてはいない。他の魂が関わることは、その状態にいる時に決めることができる。

たとえば、最初に準備した計画とは異なるものの、将来子どもになる筈だった魂と、かつての約束を再考することもできる。両親になる予定だったどちらの親も引き受けない場合には、その魂が子どもとして生ま

れ変わることに同意してくれる、似た特徴を持ったカップルを代わりに探す。

ガイド役たちは、生まれ変わった後で人間が考えを変えやすいことを知っているのだから、進化の代替プランを数多く用意してくれている。こうして、選ばれた環境が、転生前の計画からどんなにかけ離れてしまっても、進化のための選択肢が残るように努めてくれているのだ。最初に描いた「ルート」から逸れてしまったら、自分が選んだ道から新たな「ルート」を再検索するのだが、目的地は同じである。

*** 約束を果たさなかったことは、魂に影響しますか。**

一見すれば、その人が幸福への最短距離から逸れてしまったかのごとく、否定的なことに思えるだろう。しかし、好きな時に考えを変える自由も、味わってみなければ自覚できない状況を経験することも、自由意志の一部なのだ。

それに、ある方法で学ばないことは、別の方法で学べるのだ。同じ場所に行き着く道は色々あって、それぞれが異なる選択肢だが、体験することと学ぶことは同じなのだ。

*** 転生する魂は、自分の家族や近親者となる人たちを前世から知っていたのですか。**

それは、色々だ。同じ家族に生まれた人の中に、前世での仲間がいるかもしれないし、別のケースでは、同じ家族と一緒に生まれ出るの初めてかもしれない。

*** 家族構成、つまり、父親や、母親や、兄弟を決めるのは誰ですか。**

通常は、一緒に生まれるそれらの魂自身が、霊的ガイドの支援や助言を得て、相互に合意して決めている。

*** 家族関係は何によって決まるのですか。**

贖罪や使命など、転生する魂の進化に求められることによる。

*** 進化に求められることがどのように家族構成に影響するのかと、贖罪と使命との場合で、どう異なるのかを教えてください。**

よかろう。兄弟・親・子を問わず家族の構成員が前世の天敵で、憎悪や報復欲や恨みに駆られて酷い危害を加えた合った過去を持つ場合がある。これらの魂は、血縁から生まれる愛情を奮い起こしてお互いの傷を癒すという目的で、一緒に生まれ変わる。つまりこの場合は、前世でお

互いに傷つけ合い「愛の法則」に反したために、彼らの間に清算すべき負債があった訳なので、一種の贖罪となるのだ。

使命の場合には、魂は帳尻を合わせるために集まるのではなく、愛し合っているからであり、より進んだ霊的な目的を果たすために助け合おうとして一緒に転生する。このような霊的な目的は、進化の遅れている人たちを支援することに関係しているが、同時に、自分たちの霊性向上にも役立つのだ。

この二つの極端なケースの間に、我欲と愛情、贖罪と使命とが混在する、色々な意味合いの中間的な状況が存在する。魂は、霊的進化の道程を進んで行くにつれて、支払うべき借りが少なくなり、無条件に与えられる愛が大きくなるのだ。

***でも、家族関係が贖罪の場合には、逆効果にならないでしょうか。つまり、憎しみ合っている人たちが同じ屋根の下で共存を強いられたら、虐待・暴力・緊張・口論などが絶えないのではありませんか。**

共存を強要された訳ではない。自分たちの悪感情を克服するために、彼ら自身が霊的ガイドの提案を受け入れたのだ。

君が言う、虐待・暴力・緊張・口論は、これらの魂がまだ霊的な悪習にしがみついております、自己改善をしたくないから起こるのだ。

***どちらにせよ、憎み合っている人たちを同じ家族に入れるのは、過激な療法に思えますよ。それでは、危険な囚人をまとめて同じ独房に入れるようなものではないですか。しまいにはやり合いませんか。こんな状況から愛が生まれるとは思えません。**

家族の全員がお互いに仲が悪いとは言っていない。たとえば、父親と息子の間で衝突が起こるとか、兄弟間の仲が悪くても、他の家族とは問題がないケースだ。通常、このような家庭には、より進化した魂が転生し、愛情に満ちた行いとはどのようなものであるべきかの手本を示す。似たような欠点のある魂と一緒に転生するのは、まさに一方が他方の鏡となるためであり、自分と似た人との共存体験から学ぶためだ。

***この経験から学ぶべきことは何ですか。**

一番大切なことは、我々は皆兄弟だと知ること。これは、まさに文字通りだ。前世で最も憎むべき人が、次の転生では君の兄弟となり得るのだ。

一つははっきりさせよう。一部の人だけを愛して、その他を憎んでいては、進化はできない。憎悪を愛に変えない限り、前進できないのだ。

だから、憎しみによってしてしまったことを償う必要があるのだが、一番苦手で最も借りのある人に償いをするのが理想的なのではなかろうか。

また、我欲が顕現したものが欠点だが、我々と同じ欠点を持つ他者のエゴを認識したり、それを身を持って体験してみることも有益である。

我々は、隣人の目の中のおが屑が見えるのに、自分の目の中の丸太に気づかない傾向にある。要は、我々は、特に嫌いな人の欠点には、非常に注意を払うのだが、それと似ていることが多い自分自身のものは見ようとしないのだ。

他者の我がままのために実際に苦しんでみれば、欠点がどう影響するのかを体験できるので、欠点を自覚でき、それをなくすべきだと考えるだろう。

*** 人間関係のテーマに戻りますが、どういう理由で二人の人がカップルになるのでしょうか。**

愛によって、霊的な進化の必要性によって、あるいは執着によって。

最初の二つの理由は、霊的な判断に従ったもので、転生以前に取り決められる。

最後のものは、転生してしまってから本人が選択するもので、霊的というより「現世的な」理由によって決められる場合が多く、転生以前に交わした魂の約束が何度も変更される。

*** これらの結びつきの種類による違いを説明いただけますか。**

最初のもは、愛情の結びつきと魂の類似性によるものだ。

霊的な進化のための結びつきは、互いの学習上の必要性によるもので、通常、課題が残っている魂の間や、特定の欠点・美德に共に取り組むことで霊的に向上し得る魂の間で見られる。

三つ目の執着による場合は、肉体または性的な魅力、知的・物的な目標が似ていること、物質的な必要性、愛情の欲求や、一緒になる二人の便宜・義務などによって結びつく。

*** 子どもたちの転生が、霊界で決められることは理解できるのですが、二人がカップルになるというような決定は、生まれ変わった後に、いつも物質界でなされるのではないのでしょうか。**

確かに最終決定は転生してからなされるが、見ず知らずの二人が、何十億という人の中で出会うというのは、どれほどの確率だろうか？ 偶然であろうか？ その環境が整うには、つまり、特定の人たちが出会って知り合う機会ができるには、無数の状況が重なる必要があり、実はこれが霊界で調整されているのだ。

それに、自分の人生において、ある人が重要な人になると予感できるのは、前世の記憶からの感覚によるのだ。

*** お話から推察すると、各転生で違うパートナーになるかもしれないのですね。**

もちろんそうだ。君たちの進化レベルの世界ではそれが普通であるし、おまけに多くの場合、霊性進化のために変える必要があったり、前世の行為の結果として変わることがある。

*** どういう意味ですか。**

霊的に完全に似通った双子の魂の場合でも、愛情よりも欠点が勝ってしまって、それを認識も修正もしたくなければ、一時的であるにせよ、別れてしまうこともある。人は、失ってから初めて大切なものに気づくことがあるからね。そうして、次生では余り似てはいないが、悪習を修正するために役立つ人を相手に選ぶことになる。

君たちの世界では、大半の人が内面をほとんど気にかけていないので、愛によって結びつくカップルは非常に少ない。大多数は、物的または情緒的な必要性や便宜、性的な魅力などによって一緒になり、魂の要請に従って結びつく者はごく一部だ。

我欲の大部分を取り除き、魂が気持ちと一致している進化した世界では、大半の結びつきが愛に基づくものだ。それは、類似する魂同士が相手を見間違えることがないためであり、物的な欲望がどれほど満たされようと、相互の愛情ほど幸せを感じさせてくれるものはない、と知っているからだ。その世界では、私欲によって相手を選ぶ男女は皆無だし、双子の魂ではないカップルには滅多にお目にかかれぬ。

*** 「人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません」という有名な言葉があるので、世間では、ただ一人だけを伴侶にすることが最も霊的だと思われてきました。それなのに、あなたは、多くの相手を持つのが「普通」で、霊的にも有益となり得ると言われました。矛盾するではありませんか。**

愛の絆と結婚の絆とは別物なのだ。

ある程度の時間が経つまでは夫婦にははっきり分からないものの、地上の90%の結婚に真の愛は存在しないのだ。だが、一枚の紙に署名してしまったために、どうやら人には、考えを変える権利がないようだ。

自分たちの関係を感情に基づいて選ぶようになれば、進化した世界のように、君たちの関係も永続的なものとなろう。しかし、その世界で二人を結びつけているものは、義務ではなく、愛情なのだと知らねばならない。

人には誰にも、相手を選ぶ自由と同じく、自分で決意するなら別れる自由があるし、自己の決定については誰にも言い訳をする必要がない。

はっきりさせておきたいのは、二人を結びつけるものは相互愛であるが、それぞれが個人の自由を完全に保持しているということだ。司祭の前であろうと宗教遺物と花で飾り立てられた祭壇の前であろうと、サイン入りの契約書では結びつかないのだ。そのようにして二人を結びつけているものは神ではなく、君たちが作り上げた法律や習慣によって、君たち自身がそうしているのに過ぎないからだ。

神が本当に与えてくれたものは、愛せる能力と、愛を体験して幸せになるための双子の魂であり、自らの運命を決定できる自由だ。

だが、君たちの世界では、愛情で結びつく僅かな夫婦も、まだそれぞれの我欲を克服する必要がある。多くの場合に我欲が勝ってしまい、感情を押さえつけるからだ。

それゆえ、「人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません」という常套句は、真の幸福を体験したい者の助言となり得る、「愛が結び合わせたものを、我欲が引き離してはなりません」というより適切な文言に置き換えられるだろう。

*** それでは、霊的な観点からは、離婚は肯定できることなのですか。キリスト教の大半が離婚に反対なので、いつも悪いことなのだと思います。**

宗教と霊性とは異なるものだ。

誰と一緒にいたい、またはいたくないかを選ぶ自由があるのは、いつも良いことだ。自由意志を行使できるので、肯定的なことだ。霊界は、いつも自由意志の味方なのだ。

ただ紙に署名をしたというだけで、なんの愛情もない相手といることを強制したり、気持ちはあっても、理由はともあれ、一緒に暮らすことが不可能な人を強要することは、自由意志の侵害となる。

君たちは、夫婦になるということは、自由意志の一部を放棄することだとまだ思い込んでいるが、そうではない。たとえば君たちは、結婚したり同棲すれば、絶対に果たすべき義務であるかのように、相手と性関係を持たねばならないと思っているが、それは違う。人は、嫌だったり望まないのであれば、ただ結婚しているという理由だけで、性関係を義務づけられたりはしない。

また、単に性関係を持ったというだけで、その相手と一緒にいる義務もない。さらに、どんな状況で一緒になったにせよ、自分にはない気持ちを感じなければならない義務もない。

そして、これが一番重要なのだが、そのために罪悪感を覚える必要はない。感情とは強制されるものではなく、自発的に湧き出なければならないのだ。霊的な観点からは、全ての上に自由意志があり、他のあらゆることに勝るのだ。

執着を手放さない限り、愛の至福を味わえはしない。愛にとっての執着とは、鳥にとっての鳥かごなのだ。

***性関係を持つ人たちが、愛し合っているからではなく、単に楽しいひと時を過ごしたいのであれば、何らかの霊的な法則に背くことになりませんか。**

いや、その人たちが自由にそう選択したのであれば、全く問題とされない。

ただ魂は、進化すると性関係以上のものを期待し、ただの肉体関係だけでは満ち足りなく虚無感を覚えるものだ。しかも、お互いに性的に惹かれ合っても、魂の類似性がなく内面の気持ちがなければ、単に性関係だけの結びつきでは、しまいには飽きてしまう。そのため、長続きしないことが多い。続いたとしても、二人の絆はとても弱いものなので、不安定な関係となり、いざこざが絶えないことだろう。

魂が成長していくにつれ、性関係は、本能という生物的な欲求から、気持ちを表現する手段へと変わる。原始人の性は、基本的に本能的なものであり、好きでもない人と性交しても、まだ感情がほとんど発達していなかったために、空虚感を覚えることもなかった筈だ。

愛の能力の高い進化した魂ならば、本能を満足させるだけの性関係には、大きな虚無感を覚えるだろう。進化した魂にとっての性的関係は、親密な愛情表現なのだ。

性関係を持つ魂が、霊的に似ていて互いに愛し合っている場合には、その深い愛情が、性関係にも反映される。肉体の交歓と共に、お互いの

エネルギーが交流し、活力を与え満たし合うのだが、これはアストラル体・メンタル体・霊体が交わることから生じるのだ。

それに反して、完全に性的な関係、つまり、性行為に及ぶ男女が双方ともに愛情を感じていない場合は、肉体が満足しても、アストラル体・メンタル体・霊体などの精妙な体の交じわりに欠ける。その結果、虚無感と不満感がもたらされるだろう。

進歩した世界では、一緒になろうと魂を奮い立たせるものは、純粋に内面に感じる愛だけで、その他の理由で二人が結びつくことは、極めて稀である。また、そこでは洞察力が非常に発達しているので、地球で良くあるケースのように、外見に惑わされたせいで思っていた通りの人と違って、後で騙されたり失望したりすることがない。

*** 性の問題をどう解決できますか。**

君たちの性の問題は、その大半が、ほとんどなんの愛情も感じない人と性関係を持つということに由来している。君たちは、まだ肉体の部分しか見ておらず、性の悦びの最たるものは、肉体的に非常に魅力的な人と関係を持つことだと思い込んでいる。

大多数の人は感情面を認識しようとはせず、霊的に似ている愛する人と一緒にならない。そのため、愛情がないことから問題が生じる。内面が満たされたと感じられないことが問題なのだ。愛のない性関係を持つことで一番苦しむのは、進化した魂だ。

愛情がないことが問題なのだ気づき、気持ちに従って行動すべきだと認める代わりに、同じように愛のない別の人との体験を求め続けたり、セックスを魅力的にしようと色々な要素を加えてみるが、相変わらず虚しいのだ。こうして、感情でしか埋められないものを、物質で埋めようとするので、悪循環に陥るのだ。

*** それなら、映画で見る関係のように、ロマンチックな愛は、僕たちの世界には不足しているのですか。**

この場合は男女の愛のことだが、問題は、愛というものの君たちの概念が、霊的な視点からの愛から歪められていることだ。

君たちが誤って「情熱的」な愛とか「ロマンチック」な愛と呼ぶ、強い肉体的な魅力からの関係は少なくはない。それは、花火の光のようで一瞬は強烈だが、その後は完全に消えてしまう。

そのため、物的な調味料で感覚を過剰刺激（高価なレストランでのディナー、豪華なプレゼント、五つ星ホテルのスイートルームでの一夜、

樂園のような島でのバカンス)して、なんとか継続させようと無駄な努力をする。そしてこれら全てを、君たちはロマンチックな愛と呼ぶが、実際には、ひと度性欲が満たされるやだんだんと薄れていく、強い性的魅力を指しているに過ぎない。

情熱に関しては、多くの場合、愛とは何の関係もなく、誰かを所有したいという満たされぬ欲求であり、我々が執着と呼ぶところの自我が顕現したものだ。人は物ではないので、所有できないし、本人以外の誰にも属さない。愛すことと所有したいこと、愛と執着とを、混同してはならない。

はっきりさせておこう。誰かを愛すように強いることはできない。愛が自由でないならば、それは愛ではないのだ。

感情は強要することができない。感情は提言・操作・強要・命令に従わない。愛されたいのであれば、何の見返りも期待せず、無条件に愛すのだ。そうすれば、いつか、原因—結果の法則が、与えたものをもたらすだろう。

「愛の法則」から見た病気

*** 肉体的な病は、特定の感情やそれを抑圧することと関係がある、と何とも言われませんが、それを掘り下げてみたいのですが。**

そう、感情を黙殺してしまったがために魂が病気になった人は多く、魂が病気になると、肉体も魂と緊密に結びついているので、病気になってしまうのだ。

*** 肉体的な病気が、感情面に起因しているのですか。**

その通りだ。君たちの世界では感情を抑圧することが、精神的にも肉体的にも病気の最大の原因となっている。

*** 精神病に関してならそれに同意できるのですが、癌はどうでしょうか。癌は遺伝子の異常で起こる、と科学的に証明されませんでしたか。**

遺伝子の異常は癌の全てのケースに認められるが、多くの場合、それが最初の要因ではない。

*** では、最初の要因は何ですか。**

話した通り、原因は精神的なもので、霊的内面を抑圧したことと関連がある。

人は感情に従って生きて行動しなければ、内部に深い不快感が生じて苦しむのだ。それが、恐れ・憤り・憎しみ・悲しみといった精神的に有害な「エゴ的感情」を生み出し、それらが病気の原因となるのだ。

直面できないような困難な状況に出会うと、それが外因となって、不快感が増長される場合がある。そうなった状態を感情的トラウマと呼ぶとしよう。

*** 感情的な不快感はどのように肉体に影響し、最後に病気となってしまうのですか。**

精神的に調子が悪い時には、霊体とメンタル体との間でショートが起きていて、それがエネルギー体もしくはアストラル体に伝達されて、その構造を乱してしまい、波動を下げてしまう。

この「エネルギー低下」は、送電系の一部が停電したように、アストラル体の特定の箇所に影響してしまい、そこと繋がっている身体の部分にきちんと活力を与えられなくなってしまう。こうして生命エネルギー

が不足して活力をなくした領域が、身体の他の部分と連動しなくなり、その結果、活力を失った細胞組織は、他と調和して機能できなくなってしまう。

エネルギーの供給が途絶えると、通常の細胞機能はその影響を被り、遺伝子異常が起こり始め、細胞が破壊されて進行性の病となったり、細胞が制御不能なほど増殖し始めて癌を発生させる。

***この話は、アストラル体について話していた時に推薦下さった、物理学者パーバラ・アン・ブレナンの著書、「光の手」と「癒しの光」の中で、病気について書いてあったことを思い出させます。**

彼女によると、精神的・感情的な問題は、暗いまたはくすんだ色合いの部位としてアストラル体に現われ出て、その原因は、当事者が抱いていた否定的な考えに根づいているとのこと。これが消えずにアストラル体に留まってしまうと、当人の肉体にも遅かれ早かれそれが顕現して、病気を引き起こすのだそうです。それでは、これは正しいのですか。まさにその通りだ。

***新ドイツ医学を宣言したドイツの医師、ライク・ゲールト・ハマー (Ryke Geerd Hamer) の推論も思い出されます。**

ハマー医師によれば、癌やそれと同等な病気は全て、独りで経験しなければならなかった極度の感情的トラウマから発症するそうです。そして、トラウマの種類によって、癌が発生する器官が異なるそうです。それに、感情の葛藤があると先ず脳に影響して、そこで一種のショートを起こし、それから、その脳の部位に対応していた肉体領域が病気になるとのことです。また、原因となった感情的トラウマを解消すれば病気が治癒する、と主張しているのですが、この医師の言っていることは正しいのでしょうか。

100%ではないが、彼が言っていることはかなり正しい。全ての病気が感情的葛藤から生まれる訳ではないのだが、大半はそうなのだ。

***では、感情の葛藤を解消すれば病気を治せる、ということについてはどうですか。**

それは正論だが、葛藤を解決できるためには、本人にかなり深い変化が起こらねばならない。「エゴ的感情」にしがみついたままで、感情を抑圧し続ければ、一つの病気が治っても、また別の病気になる。それは、特定の葛藤を解消できたとしても、同じような「エゴ的感情」を引き起こす別の葛藤が再び現れてしまうからなのだ。こうして病気の根本的な原因に行き当たる訳だ。

本当に病気を発病させる原因とは、我欲とその顕現形態なのだ。そして、治癒効果があり健康にするのは、愛とそれを表現することなのだ。これは、確実に断言できることだ。

***しかし僕たちには、大なり小なり、そういうことが起こるのではないのでしょうか。つまり、ほとんどの人に、憤りや悲しみや攻撃欲を目覚めさせて不機嫌にさせるような物事が、人生では色々と起こるのではないのでしょうか。**

僕は、感情の抑圧についての説明がかなり自分に当てはまると思いましたが、癌に罹っていないのはなぜでしょう。

確かに、君たちは時々病気になるのだが、癌のように本当に重い病に罹るには、感情的な不快感に「囚われて」いなければならない。囚われるというのは、不快感が恒常的な固定観念に変わり、「エゴ的感情」に支配されるがままとなり、相当長い期間そのままの状態にいるという意味だ。長いこと、眠りの妨げとなる場合もある。

また、そういう感情を発散させたり表現する、全ての手段を抑制した場合である。

***では、癌になり易い性格というのがあるのですか。**

そうだ。「エゴ的感情」（憤り・憎しみ・悲しみ・怖れ）に流される人と、感情の授受や表現が抑圧されていると感じている人だ。

***それなら、病気は、物事に正しく対処しなかった罰だという結論になりませんか。**

罰ではなく、内的な感情的苦痛の結果である。

病気を生み出すのは当人であり、癒せるのも当人である。そのために、魂の本当の姿を抑圧せずに表明して、我欲から愛へと自分自身を変化させるのだ。

***でも、もう苦しんでいるのに、そのような重い病になることには、どういう意味があるのですか。苦しむだけで充分ではないですか。**

肉体の不快感は、内面の不快感の反映だということに気づきなさい。

この場合、肉体的な病気は、当人に内面の病を気づかせ、変化を促すためのアラーム音のように作用する。

***でも当人が、肉体的な病気が内面の病と関係していると連想できなければ、どう自己変革できるというのですか。**

肉体的な病気は、内なる魂を出現させまいとする頭脳の防壁を弱めるので、自己の感情のみならず、他者の感情や苦悩についての感知力が高まるのだ。そして、これが、人に変化を促すのだ。

*** 自分が変われば、病気は治るのでしょうか。**

大半は治るが、全てのケースがそうではない。肉体レベルで修復不能な病害もあるのだ。

*** 治らない人たちは、死んでしまうこともあるのですか。**

そういうことになる。

*** 自分を変えても治らずに、どうせ死んでしまうのなら、病気にどういう意味があるのですか。**

霊的視点では、肉体の命は本当の命のほんの一瞬に過ぎず、肉体の死は終わりでも悪いことでもなく、より制限のない別次元への移行期だということ思い出すのだ。

病気は、人がより高次の理解・愛・叡智へと進歩するために役立つ手段なのだ。すでに述べたように、肉体の病は、内面の感受性の表現を妨げる頭脳の障壁を弱めるので、実のところ、進化に寄与するのだ。

人が、愛における進化で成し遂げた変化は、失われることがない。どこに行こうと、自分と一緒に持って行ける。これは、人生で得られるものの中では、最も貴重なものだ。生涯を通しての目標に掲げることができ、もしそれを達成できたとしたら、魂は自分の仕事に満足して、穏やかに霊界に戻ることができるのだ。実際、自分の魂に成し得た変化だけが、死ぬ時に持って行ける唯一のものだ。なぜなら、物的な成果は全て、物質界に残るのだ。

イエスの次の言葉はそれに言及しているのだ。

「自分の宝を地上に積むのはやめなさい。そこでは、虫とさびでキズ物になり、また盗人が忍び込んで盗み出したりする。自分の宝は、天に蓄えなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が忍び込んで盗むこともない。自分の宝のあるところに、自分の心もあるからだ」（マタイ6・19～21）

*** でも、死んでしまったら、学んだことをどう実践できるのですか。**

魂は体に宿っていようと離れていようと、生き続けるのだと気づくのだ。どちらの場合でも、学んだことは魂の一部となり、継続して進化していく役に立つ。

***でも、家族や愛する人たちはどうなるのですか。過酷な病気になって、必死に頑張っ自分も変えたのに、その上、愛する人も失ってしまうのは、ショックが大き過ぎやしませんか。**

病気であろうと自然死であろうと、愛する者たちとの別離は一時的なものだ。向こう側では、我々は皆、愛する者と再会できる。

物質界に生まれ出る時には、その転生と一緒に生まれ出ない愛する者たちと、同じように別れてやって来るのだと気づくのだ。しかし、彼らにとっては、それはトラウマとはならない。一時的な別離だと分かっているし、生まれ変わる魂は靈的に進歩するためにそうするのだと理解しているからだ。そのため彼らには、君たちのような喪失感はない。

君たちが、生命は決して尽きることがなく、肉体の死は終わりではなく靈的次元への移行段階に過ぎないと会得できれば、愛する者が死ぬことで生じる問題・トラウマ・落胆の多くのものが、消え去ることだろう。

***自分の葛藤を解消できずに、病気のせいで死んでしまう人たちはどうなのですか。**

試練を乗り越えて自分に打ち克つために必要だった変革を実現できなかったので、靈的に停滞してしまったのだ。彼らは靈的に超越する戦いで「匙を投げた」のである。つまり、靈的に進歩できそうになかったので、彼ら自身が靈界へ戻れるようにしたのだ。次回の転生では、同じ試練を携えて来て、それを乗り越えようとするであろう。

***病気の原因の話に戻りますが、表面上は、何の感情的な葛藤もなく比較的幸せなのに、癌のような病気を患う人がいませんか。**

それに、感情的トラウマを体験するほど十分な自覚がないのに、先天的な病気を持って生まれる子どもについてはどうなのですか。

いい質問だ。生まれたばかりの子についてだが、魂は胎芽に結びついた時点から、周囲で起こる全ての事や母親の気持ちを感知できるのだから、妊娠期に感情的トラウマを経験し易く、それが肉体的な病気の発症原因となり得るのだ。

しかし、どんな感情的トラウマとも関係のない病があるのは確かだ。したがって、感情的トラウマが全てのケースの要因とは言えない。

遺伝的要因を持つ先天性の病と呼ばれるものがそれに当たるが、他の病気の原因は、感情要因と遺伝的な性質が組み合わさったものである。

*** 先天性の病気の場合、何がその原因ですか。**

前世での行いに原因がある。病気は、我欲に駆られて犯した、「愛の法則」に反する行為で貯った負債を清算するための試練なのだ。

*** 言われることが分かりません。病気が過去の行いとどう関係するのですか。病気をどのように前世から他生へと繰り越すのですか。もう少し教えていただけますか。**

人は「愛の法則」に違反すると、「霊的な作用と反作用の法則」により、その行為が心理的毒素となって魂に浸透し、振動レベルを下げ、その様相を乱すのだ。

波動低下に呼応した乱れは、しまいには、メンタル体や将来の肉体の型となるアストラル体などの、より濃密な体を変化させてしまうのだ。転生時に、まだアストラル体が乱れたままだと、肉体の遺伝子コードに変異を起こしかねず、先天的な病気を引き起こす。

だから、たとえ前世のものであろうと、病気の要因が我欲であるというのは、やはり正しいようだ。

*** でも、継承すると分かっている遺伝的変異、つまり、両親の遺伝子を受け継ぐための変異もありますよ。だから、転生者のアストラル体が原因のように思えませんが。これに関してはどうでしょう。**

両親からの遺伝で受け継いで、特定の病気になり易くなるというのは、極めて確かなことだ。だが、転生する魂は、その状況を知っていて同意したのだ。肉体または精神の障害が、前世の行為の結果であり、通過すべき試練だと知っているのだ。また、過去に、そのような状況を経験することを同意した両親にとっても、試練となるのだ。

*** 本人や愛する人がこのような状況を経験している人に、こんな話をしても、受け容れはしないと思いますよ。「こんな目にあうなんて、僕らは一体何をしたんだ」と考えるに違いないでしょう。**

そういう風に考えるのが普通だ。なぜなら、総括的に理解するには、誕生以前に前世が存在していたことや、魂がその時に以後の転生で直面する状況を創り出したことを、認める必要があるからだ。

生命はその人生の後も存続するので、病気も結局は一時的な状況に過ぎない。その一時の経験からは、愛の学びを積むことができ、病気はそのためのものなのだ。

*** 先天的なもの・事故のような状況的なものを問わず、普通の生活を営む上で妨げとなる、精神または肉体の障害を持った子どもや家族のいる人には、どう声をかけられますか。**

普通の子に接するように振る舞いなさい。実際、普通の子どもなのだ。外見で判断してはならない。肉体の奥底に、皆と同じような魂を見出すだろう。その子、その愛する者の中に、不完全な肉体を見るのではなく、完全な魂を見るのだ。そしてその魂の通りに、完全な存在として扱ってあげなさい。不良品の衣装の下には、健全な肉体の人と同等かそれ以上に力強く生き、感じ、気づくことのできる人がいるのだ。

音楽を理解している者ならば、音楽は楽器が奏でるのではなく、それを弾いている音楽家の心で生まれるのだ、と言うであろう。ヴァイオリンが未調弦であったり壊れていても、弾き手自身が演奏できない訳ではないし、一時的に思い通りに弾けないだけで、手元の楽器がどのように調弦されているかに関わらず、自分の音楽の才能を伸ばすことができるのだ。

それと同じように、楽器となる肉体が一時的に調子外れだからといって、愛という心の曲を聴き取り、それを表現する可能性を魂から奪ってはならない。普通の子どもに接するように、その子に話しかけたり、気持ちや愛情を表して伝えたりすることが、不毛な努力だと思ってはならない。

人は、肉体の感覚によって感知できなければ、魂の感性を介して感受するのだ。特に愛の行為に対しては、もっとずっと感受性が強い。健常人の反応をしなくても、感じていない訳ではなく、その子の身体が、魂が望むがままに物質界で表現することを、妨げているだけなのだ。その子のために心からしてあげることで、無駄になるのは何もない。霊界では、愛のためや愛を抱いて行うことで、失われるものはないのだ。

すでに言ったが、くりかえしておこう。肉体的または精神的な障害は一時的な状況で、それはひと度肉体が消滅するや、終わるのだ。だが、その体験を通して、その人本人や周囲の人びとに目覚め、強化された感情は、魂の糧となって永続する。そして、それが真に大切なことなのだ。

*** でもそれによって、何を学べるのですか。**

自他の苦悩に敏感になれる。おそらく前世では、今苦しんでいる人たちが、他者に同様な苦しみを与えていたのだが、自分がどれほど傷つけていたのかを自覚しようとしなかったのだ。

愛への第一歩は、他者も自分と同じ感情を持ち、自分が苦しむのと同じことで苦しむのだと認識することだ。

*** 先天性の病気に霊的な意味があるとしたら、それは何でしょうか。**

このケースでの病気は、魂が高次の霊的進化を遂げる妨げとなる心理的毒素を、肉体に転写するプロセスなのだ。肉体は病気になることで、その毒性を緩和し、吸い取りスポンジのように吸収し、毒素の除去に貢献する。つまり、魂は毒素を肉体に渡し、肉体は汚れをふき取る雑巾のような働きをする。この「汚れ」が肉体レベルでの病気の要因であるが、病気は、排水システムのように、より精妙な霊体を清めるために役立つのだ。

また、人生の最後で、この排水システムを利用して毒素を一気に洗い流そうと、病気になることを選択する魂もいる。つまり、生涯で重い病を患わなくても、肉体との分離の時間が近づくと肉体は不要になるので、霊的な体に蓄積されていた心理毒素の一部をそれに転写するために利用して、浄化しようとする。

このようなケースは頻繁に見られ、この場合には死を避けようとどんなに頑張ってみても、全く効をなさない。なぜならそれは、現在進行中の感情的な葛藤とは無関係で、霊的な浄化だからだ。

*** 魂が「愛の法則」に違反すると、次の転生で病気にならされるのですか。**

いや、そうではなく、心理的毒素を除去する方法は幾つかある。

悪かったと反省することを愛の行為で償っていけば、病気を体験することなく、魂の毒素を取り除ける。だから先ほど、病気の原因がエゴであれば、愛が諸悪の解毒剤と処方箋になる、と述べたのだ。

したがって、必ずしも病気になって毒を消散させる必要はないのだが、それが一番手っ取り早い方法なので、多くの魂がそう選択するのだ。

明らかなのは、毒素の負荷を取り除くために何かをしなない限り、それは残存してしまい、より高次の愛と幸福へと魂が進むことを阻止してしまうということだ。

*** 感情要因と遺伝的な性質が組み合わさった病気もあると言われましたね。**

その通り。

*** もう少し説明いただけますか。**

特定の試練に立ち向かうために生まれて来た魂は、物質主義に流されて転生の目的から外れてしまわないために、病気を記憶の喚起剤として利用するのだ。つまり病気は、ドライバーに車線を逸脱したことを警告する路肩のランブルストリップスであるかのごとく、魂が事前計画から逸れてしまった場合にだけ起動する。

同じ状況でも重病にならない人がいる一方で、遺伝的な性質で特定の病気になり易い人は、アラームが鳴り易いのだ。言い換えれば、それほど強くない感情の刺激でも、病気を誘発させるには充分なのだ。

*** 病気の原因が、今生の感情トラウマの場合には葛藤を解消することで治癒できたり、浄化の工程であれば先天的な病で治らないことがあるのなら、現在用いられている薬学療法は、たとえば癌などの場合で、何かの役に立つのでしょうか。**

現在の治療法、つまり、化学療法と放射線療法は、細胞の増殖という症状をなくそうとするが、病気の原因には作用しないので、病気を回避することはできない。

また、遺伝子を損傷してしまうので、細胞を酷く傷つけ、多くの場合にそれが永続して再生不能となる。君たちは、癌が遺伝的変異に起因すると思っているのに、どうして変異を誘発させる薬をその治療に用いるのか、理解に苦しむよ。

*** 薬は悪いのですか。**

全部がそうではないが、攻撃性が過ぎるものは、効用よりも弊害をもたらすので良くない。

特定の場合には、抗炎症剤やコルチコイドや、ある種の免疫調整剤などは有益である。薬学を正しく適用すれば、人生に病が訪れる際に、健康を回復するために役立ち、治癒を可能にする。また、治るの見込みのない病でも、症状を和らげ、生活の質を向上させる助けとなる。

*** では、薬学治療をして、癌が治る人がいるのはなぜですか。**

治ったとしたら、原因となった感情面の問題を解消できたからか、実は良性だったからで、症状を排除したためではない。

感情的または霊的な毒素が残留すると、最初に冒された組織を切除していれば近部になるかもしれないが、癌は別のところに再発してしまう。

*** 癌を治すために有効な、肉体上の助言がありますか。**

質素な菜食主義とビタミンを多く摂ること。異常細胞の除去に身体が専念できるように、休息を多く取り、平穏でいること。体器官を傷めずに回復できる、身体にやさしい治療法を使用すること。

*** お話のように、「エゴ的感情」が残留することによってアストラル体が力を失い、それが長期的には肉体的な病気を誘発するのだとしたら、健康を回復するために、アストラル体をエネルギー的に綺麗にすることは可能でしょうか。**

可能だ。特定の運動（ヨガ）をしたり、人がパイプとなってエネルギーを供給（レイキ）したり、生体エネルギー発生装置などによって、悪い流れを取り去り活力を与えることができる。

エネルギー治療は、アストラル体レベルに作用し、疲弊したエネルギーを洗い流し、そこに新しい活力を供給し、気の流れを修復する。生体エネルギーを用いた治療は、病気の回復を促したり、症状を緩和させることに貢献する。

だが、エゴ的な感情を放棄できなければ、アストラル体の乱れが再発し、その結果、肉体の病も再び出現することとなる。それゆえ、霊体・メンタル体・エネルギー体・肉体を総合して、治療に取り組むべきである。

*** レイキとは何なのでしょう。**

レイキとは、宇宙の生命エネルギーを利用する自然療法の一つで、肉体的・精神的な病気の治癒に役立つ。レイキは、宇宙の生命エネルギーを意味し、それを発見した日本の先駆者に命名された。

現在ではその名前で有名にはいるが、健康改善を目的としたエネルギーの授受は、何千年も前から、磁気やプラーナなどの様々な名称の下に行われてきた。それは、「奇跡の癒し」と呼ばれたイエスの手かざしのことなのだ。

*** レイキは何を基本としているのですか。**

レイキのセッションは、不快感や病を緩和したり除去するために、送り手またはパイプとなる人が、自分の手を通して、生命エネルギーを受け手に伝達するのが基本だ。受け手となるのは、自分自身でも他者（人・動物・植物）でも良い。

レイキは、アストラル体でのレベルに作用し、エゴ的な感情に起因するエネルギーブロックの除去に役立つ。

だが、外傷または中毒など、完全に肉体的な原因による不調の場合には、損傷を受けた部位の気の流れを再動させ、痛みを緩和し、体組織の再生を促進させる。

アストラル体の構成についてや、気の流れやチャクラの知識、及び感情的問題と影響を被る肉体箇所との関係を理解するのは、正しい位置に手を置く助けとなり、損傷を受けた部分の気の流れを再生できる。

***でも、癒しのエネルギーは、どこから出るのですか。送り手からですか、宇宙からですか。**

生命エネルギーは、宇宙のどこにも存在し、レイキの担い手は、それを必要としている人に集中してエネルギーを向けようとする。時々、送り手となる人が周囲からエネルギーを結集できなかった場合に、自分自身の生命エネルギーを譲り渡してしまうことがある。

また、霊的な存在にエネルギーの伝達を手助けしてもらっている人も多く、その人の能力が非常に高められる時もある。この場合は、意識の高い仕事は精霊たちが行っており、レイキの送り手は、癒しの魂たちが、肉体とエネルギー次元に接近できるための道具のように機能する。

***人が自分自身のエネルギーを与えてしまうについては、どんな理由があるのでしょうか。**

過度に力を投入する、集中力の不足、リラックスできていない、私心なく助けようとしていない、精神的・肉体的な悪習、などが原因だ。

レイキのセッション中に以上のようなことがあれば、送り手は疲れきり、エネルギーが不足し、受け手の不快な症状まで自分で感じてしまったりする。

***レイキができるようになるためには、何が必要ですか。**

レイキが効力を発揮するために最も重要となるのは、送り手が、仲間を助けようとする意志を持つことと、愛を実践して自分のアストラル体の波動を高めることだ。

積極的にエネルギーを受け取ろうとする受け手の姿勢も大切だ。その人がどれだけ素直に信頼できるかによるからだ。受け手が、レイキに効き目がある筈がないと思ったり、送り手を信用していなかったり、愛に賛同し我欲を捨てる自己変革をする意志がなく、エネルギーを拒否すれば、その人のチャクラは閉じたままで、送り手にどんなに力があろうと、気は流れない。

ラジオで起こることに似ているのだ。放送番組を聴くためには、強力な信号を放つ優秀な発信機が必要だが、受信機をつけて正しい周波数に調整するのも、同じように大事なのだ。

その後は、スポーツと同じで、継続して練習することで、回を追うごとにエネルギーの伝達能力が高まり、もっと大きな波動になるのだ。非打算的に助けようとする意志があれば、いつも最善の結果を得ることができる。

さらに、肉体を浄化させれば、エネルギーが身体を通過する際に、波動が低下してしまうこともない。そのためには、菜食と、身体の器官にとって有害となる、アルコールやタバコ、その他全ての薬物の消費を控えることが必要だ。

*** エネルギーを伝達できるようになるためには、レイキの師匠がその人のチャクラを事前に開ける必要があるというのは、本当ですか。**

その必要はない。伝達能力は、魂の進化の力量と、他者を助けようとする意志と、練習とによる。私利私欲をなくして行うほど、霊界からの援助は大きくなる。

先生の役目は、生徒の潜在能力を開花させることだが、独学も可能だ。スポーツのように、練習すれば能力は増す。そして、他者を助けようという意志があれば、霊界から必要な援助を授けられる。エネルギー伝達の真の達人がいるのは、霊界なのだ。

*** レイキの段を取るための有料の講習がある、と話しているのを耳にしましたが、その件に関して、どうお思いですか。**

お金と引き換えに、天国に行けると文書で約束した免罪符と同じような商売だ。最初にそれを再発見した者（臼井）が無償で行ったのに、その継承者たちがどうしてお金を取るのだろうか？

くりかえすが、レイキを始めるために、イニシエーションをする必要などない。どれほど有名であろうと、見返りとしてお金を要求するような人から受けるイニシエーションであれば、なお更だ。なぜなら、それでお金を儲けようとしているのなら、自称するほどレベルが高くはないからだ。

真の師匠は、万人のエネルギーでお金を取ろうとしない。伝達者に過ぎず、謙虚であるので、師匠と名乗ろうともしない。

ここに、イエスの手本がある。エネルギーで多くの人を癒し、弟子たちにも伝授したのだが、誰からもお金を受け取らなかった。

*** 講習だけでなく、レイキのセッションでお金を取る人もいますよ！
これについてはどう思われますか。**

宇宙エネルギーは、伝達する人の所有物ではなく、お金を払わずに使用できるものなので、同じく無料で与えねばならない。

レイキでお金を取る人たちは、自分自身のエネルギーや自分が努力して周囲からかき集めたエネルギーを扱うのだろう。

だが、高波動の霊的存在たちからの手助けは期待できない。彼らと同調するためには、心を浄化し、他者を助けたいという無私の思いが必要となるのだが、お金を取る者には無私の志はなく、金銭的な利益を得ることに関心があるからだ。

*** でも多くの人が、レイキで儲けようとしているのではなく、それで時間が取られるとサラリーマンにはなれないし、何かで暮らしを立てる必要があるから、と言っていますよ。**

それなら、エネルギーの伝達では生計を立てようとしなないことだ。経済的にやっていけるように、他の活動で報酬を得られる仕事を持ち、自由な時間にレイキをすれば良い。これは、意志力の問題だ。

しかし実際には、レイキでお金を取る者の多くが、生活を維持するだけでなく、それによって儲けようとするのだ。レイキの料金は、オーラを綺麗にするというよりも、それにひっかかった愚か者の財布の中身を綺麗にしてしまうほど高いことがあるからだ。

イエス自身も、「神のものは神に、皇帝のものは皇帝に返しなさい」と言っている。

物質的に自立する必要があるのなら、物的な仕事でそうするように努めなさい。霊的な仕事を介してはならない。霊性にお金を関与させるのは、止めなさい。霊性が穢れてしまうのだ。

君たちを助けている霊的なガイドたちは、君たちからお金を取るのだろうか？ 彼らがそうしないのならば、彼らを見習い、君たちもそうしてはならないのだ。しかも、自分に能力があるのだからお金を取る資格があると思っていると、本当にそうなって、自分自身のエネルギーしか使えなくなるのだ。

「神と富とに兼ね仕えることはできない」ということを肝に銘じて欲しい。現在の言葉に置き換えれば、愛と我欲とに兼ね仕えることはできないという意味だ。それらは、相容れられない対立する概念なのだ。

*** エネルギーを貰う代わりに、お金であろうと他のものでであろうと何かを引き換えにあげる必要があるので、これは交換をしているに過ぎない、と言う人たちもいます。**

それならその人たちは、無条件の愛という、何の見返りもなく与える行為を知らず、また理解したくもないのだ。見せかけの霊性で外側を装おうとしていても、見習うべき手本とはならない。

それを忘れないようにしなければ、霊性復興運動も、ついにはキリスト教と同じことになってしまう。つまり、皆の大師匠だと勝手に名のり出る者が現れて、自分の富と権力への渴望を満たすために、聖なる教えを管理し操作し始めてしまうだろう。

*** でも、有料レイキに効果はあるのですか、ないのですか。**

効果はあるかもしれないが、無料で行うレイキよりは、常にずっと貧しい結果しか得られない。効果は、助けたいという意思の力次第なのだ。

大半の場合は、他者を助けたいという思いと、何かと引き換えに行おうという我欲とが混在している。善意によって得られる効用も、私欲で失われてしまう。

一つはっきりさせるが、我欲があると、与える以前に貰おうとしてしまうので、癒しにはならないのだ。我欲に委ねる人は、本当は他者を助けようとは思っていないので、助けてあげることができないのだ。

お金を取っているならば、それが他者を助けるためなのか、自分が有名になるために他者を利用したいのか、あるいは自己の物質的な欲求や期待に沿うためなのかを、分析してみるがよい。

イエスがあれほど優秀なエネルギーの担い手であり、奇跡と思われたほどの素晴らしい、強力で迅速な結果が得られたのは、一体どうしてだと思っているのかね？ それは彼が、無条件の愛を感得するに至った魂だったからで、その愛がエネルギー次元で顕現する時に、高振動のエネルギーとなり、それに肉体的・霊的な障害を癒す力があったからだ。

多くの者が、イエスがしたことをできるようになりたい、と思っているが、彼らには本質的なものが欠けているのだ。それは、無条件に愛するという一方で、我欲を—虚栄・自尊・尊大を—放棄しなければならないのだ。

イエスがしたことをできるようになりたいのか？ それなら、他者に何かをしてあげる度に、集金してまわるのは止めなさい。イエスが癒しに対してお金を取っていたとしたら、高次の存在ではあり得なかったし、高次の精霊たちからも支援されなかったので、癒しそのものが不可能だったろう。

***病気とその意味について、最後に言っておきたいことはありますか。**

病気は、運命のいたずらでも神の罰でもなく、霊的成長の糧となるものだ。

今生で患う病気は、今回の転生で立ち向かわねばならない試練を知らなかったり受け容れようとしなかったのが原因か、または心に従って行動や生活せずに霊的な内面を抑圧したのが原因だ。

この場合、肉体的な病は、内部の病気の警報として作動し、自分を変えるように誘導する。

先天性またはカルマによる病気のケースでは、原因は前世での行為の中に見出せる。それは、溜まった負債を清算するための試練であり、魂が霊的により高い段階へと昇るために障害となる心理的毒素を肉体に受け渡すプロセスなのだ。

イエスの地上での使命

*** イエスが言ったとされる言葉と関連させて物事を説明されることがあることに気づきましたが、どうしてそうするのですか。**

その場を借りて、ついでに君のもう一つの質問にも答えようとしているのだ。ナザレのイエスの真相について知りたいと思っていたのは、君ではなかったかね？

*** そんなことも知っているのですか。**

もちろんだ。

*** この話が出たので、ナザレのイエスについて、聞きたいことを言います。彼が本当のところ誰だったのか、地上での使命があったのだとしたら、それが何だったのか知りたいのです。**

良かろう。生まれてから二千年も経つのに、彼のメッセージはまだ正しく理解されてはいないのだ。

*** どういう意味ですか。**

彼の死後、あたかも彼のものであるかのように、無数の付け足しが盛り込まれていって、携えられた教えの本来の意味が徐々に歪められてしまったのだ。

イエスの使命を理解するには、彼が言ったように、「麦粒」と「麦殻」、つまり真実と偽りとを区別する必要があるのだ。

*** それで、彼の任務は何だったのですか。何をしに来たのですか。**

霊的進化の道を教えに来た。「魂の法則」を教えに来たのだ。

中でも「愛の法則」の伝道に力を注ぎ、「汝の隣人を自分のごとく愛しなさい、汝の敵を愛しなさい」という無条件の愛のメッセージをもたらした。

*** ナザレのイエスは、神自身の生まれ変わりだったのですか、それとも神の子だったのですか。**

ナザレのイエスは、非常に進化した魂が転生したものだった。

*** では、神の生まれ変わりではなかったのですね。**

そう、神の生まれ変わりではなかった。だが彼は、自分が神であるなどとは、一度も言ったことがなかった。そう断定したのは、イエスの後にやって来た、別の者たちだ。

***少なくとも、神の子ではあったのですね。**

そう、君たちと同じように真の神の子だ。違いと言えば、彼はそれを自覚していたが、その他の人たちには自覚がない、ということだけだ。

***それなら、イエスはそれほど超自然的でも神聖な存在でもなく、僕たちのようにただの人間だったのですか。**

君たちのように正真正銘の人間だったが、もっと高度に進化していた。進化することで段々と神に近づけると理解するなら、イエスは君たちよりも神に近かったと言えよう。

***でしたら、僕たちも進化すれば、イエスが転生した時の進化レベルに到達できるのでしょうか。**

そうだ。しかも、同じレベルに限らず、もっとずっと高いレベルに達することも可能だ。霊的進化の工程は、止まるところがないのだ。

だが、それがただ一度の肉体生では無理なのは明らかだ。イエスと同じ域に至るには、君たちも多数の転生をして、無数の体験をする必要があろう。それに、君たちがそこに達する頃には、イエスも他の全ての魂と同じように進化を続けているので、さらに高いレベルに進んでいるであろう。

***イエスも進化するために、輪廻のサイクルを経験しなければならなかった、とほのめかしているのですか。それは、かつては僕たちのように全くの未熟者だった、という意味ですか。**

そう示唆しているのではなく、断定しているのだ。イエスも君たちと同じように、物的界での経験を通して改善せねばならなかった。そして、自分の意志力と個人的な努力によって、地上で果たした任務を遂行する上で求められた進化のレベルに至ったのだ。

君たちはイエスが行ったことに強い衝撃を受けたが、それをほとんど理解することができなかった。

***イエスは、進化を続けるために、肉体に宿って十字架上で死ぬ必要があったのでしょうか。**

いや、すでに何のカルマも負債も背負っていなかったのだから、その必要はなかった。あれほど酷な最期を迎える必要もなく、自己進化を継続で

きたであろう。だが、それがどんな影響をもたらすかを知っていたので、好んでそうしたのだ。

イエスが偉大なのは、カトリック教会があれほど強調してきたように、十字架にかかって死んだことではない。もしもそれがイエスの功績なのだとしたら、その時代にはそれが罪人の処刑法だったので、同じ形で死んだ何十万人の人びとにも、功績を認めなければならないだろう。

イエスの最大の功績は、携えてきた愛のメッセージを布教した果敢さと勇氣にあるのだ。そうすることで、多大な苦悩や死さえも被ることを知っていたにも関わらず、誰の脅しにも屈せず、自分の考えを変えることがなかった。

***では、何のためにそうしたのですか。**

後進の同胞への愛のためだ。イエスのように無条件の愛を知った魂は、償いの必要性のためではなく、遂行せねばならぬ任務のために行動するのだ。通常それは、どのように愛をもって生きるかの手本を示すことと関係している。

魂は、ある段階からは、愛だけを動機として行動する。多くの魂が、発展の遅れた世界への転生を希望し、後輩を支援して愛に生きることで、もっと速く幸福に到達できるようにする。

この場合に遭遇するネガティブな状況は、贖罪のためではなく、靈的に劣った世界自体に元来備わっているものだ。だが彼らは、苦痛も死も怖れていないので、そのような苦悩を味わうことや殺されることすらいとわない。高次に進化しているので、死が存在しないことを知っており、肉体の命は魂の命のほんの一瞬に過ぎない、と分かっているのだ。

***では、劣った世界に転生する高次の魂が、学ぶためにではなく、教えるためにだけやって来るのだとしたら、その人生では余り進化できないのでしょうかね。**

いや、そうではなく、人生のいかなる試練からも学び取ることができるので、教えるためだけではなく学ぶためにもやって来るのだ。そして、自己の愛と理解の度量を常に試されることになるので、自分と同等レベルの世界にいるよりも、速く進化できるようになるのだ。

さらに、愛に満ちた環境では露呈せず、極限状況でなければ表面化しないような、奥深く隠れた自分の欠点を浮き立たせてくれる。こうして、欠点を改善する機会が得られるので、我欲を除去する面で前進できるのだ。

*** イエスの話に戻りますが、彼はどこからも援助を受けずに、独りで仕事をしたのですか。**

人が愛に突き動かされて尽くす時には、さらに進化した靈的存在からの影響を受けるにふさわしくなる。イエスの場合は、その中でもロゴス・キリストに影響された。

*** ログス・キリストとは誰ですか。**

君たちの惑星の進化の最高責任者となる靈的な存在だ。

*** でしたら、聖なる三位一体の三人とは、神とキリストとイエスなのですか。**

それは分からない。そう言い出した人たちでさえ、それが何を意味しているのか知りはないと思うからだ。

断言できるのは、神が唯一であることと、キリストとイエスが、神とは異なる別々の存在であることだ。それゆえ、彼らは神でも神の顕現でもないが、御心と調和しているので、神の代理人とか神の使者、などと捉えることは可能だろう。つまり、彼らは「愛の法則」を遵守する者で、進化の計画に自主的に参加しているのだ。

*** キリストはイエスを通してどのように行動したのですか。**

イエスはある時点から人生の最後の数年間は、ロゴス・キリストにインスピレーションを与えられ、励まされて、行動した。実際、イエスが任務を完了できるためには、その必要があったのだ。

*** でしたら、話していたのはイエスですか、それともキリストですか。**

二人で行動していたと言っておこう。キリストから閃きを与えられて、イエスが話していたのだ。だが、イエスは決して自分の意識や個別性を失わなかったし、自由意志を失いもしなかった。

*** イエスは、地上に再び生まれ変わるのでしょうか。**

キリストは必要とあらば、人間の進化段階にいる魂を転生させて、いつでもそれに顕現するだろう。イエスの前にもそうしたことはあるし、地球の靈的進化が求めるなら、今後も再び、そうするであろう。転生するのがイエスであるか、別の似たような進化程度の者であるかは重要ではない。

予め言うておけるのは、新たな救世主・預言者・アバターなどとして生まれ変わる際には、キリスト教徒が待ち望むように、茨の冠に十字架を背負ったナザレ人としてではないし、釘で血にまみれた手もしてはい

ないということだ。外見的には、普通の人であろうが、通常の域を超える、愛と霊的叡智の能力を備えていることだろう。だがそれは、隣人愛のメッセージと霊性進化と同調できる者にしか感知されないのだ。

またイエスが現代に転生した場合に、最初に彼を攻撃して布教させまいとあらゆる手段を講じるのは、イエスを旗印にしている教会そのもののお偉いさん方だろう。なぜなら、彼の教えが地球の人類の心に浸透してしまえば、彼らが宗教的貴族でいられる日々も数えるほどとなり、凡人に帰してしまうからだ。

*** イエスについて最初に話された時に、彼の本来のメッセージには多くの付け加えがされて、伝えなかったことを歪めてしまった、と言われましたね。当初の教えと、後世の追加事項とを、どう見分けるのですか。**

ごく単純に、「魂の法則」に反する信念はどれもイエスの教えではない、ということになる。イエスはこれらの法則を熟知しており、聞く耳を持つ者に伝達しようとしたのだ。

*** イエスの真の教えの中で、最も大切なものを幾つか挙げていただけますか。**

もちろんだ。

1. 全ての人間は、人種を問わず、性別や宗教を問わず、同じ本質である。すなわち、皆、進化途上の魂であり、それゆえ、兄弟である。

この根本的な教えは、以下の金言に収められている。

「神の御言を聞いて行う者こそ、わたしの母、わたしの兄弟なのである」(ルカ 8, 21)

「誰でも天におられるわたしの父の御心を行なう者が、わたしの兄弟、姉妹、また母である」(マタイ 12, 50)

このことから、魂の進化の工程から除外される者など一人もいないことが分かる。どんなに酷い罪業を犯したにせよ、決して見捨てられはせず、永遠に有罪とされることもない。改悛して、真の幸福に到達する機会はいつでもあるのだ。そしてこれは、福音書でも次のように表明されている。

「もしある人に百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷った羊を捜しに行かないだろうか。そしてもし見つけられたなら、その人は、迷わずにいた九十九匹のことよ

りも、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」（マタイ 18, 12-14）

2. 魂の生命は永遠であり、死は存在しない。

「体を殺しても、魂を殺し得ぬ者どもを、恐れるな」（マタイ 10, 28）

「天に昇った者はいないが、天から降りてきた者はいる」（ヨハネ 3, 13）

二番目の節の意味については、前にすでに話している。これは、出産を経て物理的に生まれ変わる全ての人は、霊界（天）からやって来て、肉体の死後はそこに戻るという意味だ。

3. 地上の人間の務めは、無条件に愛すことを学び、我欲から解放されることだ。魂がどれだけ成長したかは、愛の力量だけで量られる。愛が我々を進化させる、つまり、神へと近づけるのである。

「あなたがたも聞いている通り、『隣人を愛し、敵を憎め』と言われている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。天の父は、悪人の上にも善人の上にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからだ。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ 5, 43 - 48）

「わたしの戒めは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ 15, 12）

4. 霊的進化は、自分自身の努力にかかっている。人間の死後の運命は、生存中の「愛の法則」に基づいた行為、あるいは反した行為によってのみ、決定される。

「しかし、真理を行なう者は、光の方に来る」（ヨハネ 3, 21）

「まことに言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、みな天においてもつなぐれ、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう」（マタイ 18,18）

5. 各人は、それぞれ神との独自の繋がりがあるので、仲介者に依存して霊界と交信すべきではない。

「そこで、あなたがたに言うが、祈って求めるものは何でも、すでに叶えられたと信じなさい。そうすれば、その通りになるであろう。また祈るとき、誰かに対して恨み事があったら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの過ちを赦して下さるだろう」（マルコ 11,24-25）

「そしてこれが、神に対する私たちの確信だ。すなわち、何事でも神の御心にかなう願いをするのなら、神はそれを聞きいれて下さるということだ」（ヨハネによる第一の手紙5章14節）

「そこで、あなたがたに言う。求めよ、さらば与えられん。捜せよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。すべて求める者は得、捜す者は見出し、門を叩く者には開かれるであろう。．．．このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い物を与えることを知っているのだ。とすれば、あなたがたの天の父はなおのこと、どうして求める者に聖霊を下さらないことがあろうか」（ルカ 11,9-13）

6. 魂の成長は、ただ一度の肉体生では終わらず、高度な霊性を獲得するには、多数の転生が必要となる。

イエスは彼に答えて言った、「よくよくあなたに言うておく。人は誰でも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」ニコデモは言った、「年をとっているのに、人はどうして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることなどできましようか」イエスは答えられた、「よくよくあなたに言うておく。人は、水と聖霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生れる者は肉であり、聖霊から生まれる者は霊である。あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。（．．．）天に上った者はいないが、天から下った者はいる」（ヨハネ 3,3-13）

7. 「靈的裁きの法則」または原因—結果の法則。自分がまいたものを収穫する。

「人を裁くな。自分が裁かれないためである。あなたがたが裁く通りに、あなたがたも裁かれ、あなたがたが量る通りに、あなたがたも量られるからだ」(マタイ 7, 1-2)

「だから、何事でも人びとからして欲しいと望むことは、人びとにもその通りにせよ」(マタイ 7, 12)

8. この他にも人が住んでいる世界はあり、ここと同じ目的がある。すなわち、靈性進化の学校として役立つことだ。

「わたしの父の家には、住まいがたくさんある。もしなかったならば、そうあなたがたに言っておいたであろう」(ヨハネ 14, 2)

*** イエスの発言に言及する時に、どうして福音書を引用するのですか。**

福音書に収集されたものに限定されずに、イエスの教えを説明する方が、私にとっては簡単だ。だがそうしても、イエスが語ったものだと君たちが認めないであろうから、文献に記載されている彼の言葉を使用することに留めるのだ。そうすれば、私が勝手に創作しているのではないことが、君たちにも分かるだろう。

*** 靈的な観点からは真実ではなく、イエスの死後に付け加えられたキリスト教の信念を、幾つか挙げていただけますか。**

沢山あるが、靈的進歩に一番悪い影響を及ぼす、最も重要なものを挙げてみよう。

- 1) 宗教儀式の執り行いに道義的・精神的な何らかの価値があり、死後に天国での特権的地位の確保に役立つという信心。
- 2) 聖書や他の聖典が神の御言葉であるという信念。
- 3) 教会や聖職者が、地上における神の仲介者だと信じること。
- 4) 悪業を清算するには、告白が必要であり、司祭から免罪されれば解消されると信じること。
- 5) 最期に後悔すれば罪があがなわれる、という信念。
- 6) イエスは十字架上で死ぬことで、人類の罪をあがなったと信じること。
- 7) 原罪への信念。
- 8) 性が何か罪深いものだと信じること。

9) ただ一度の人生で、魂の行く末が永遠に決められる（救われる者には永遠の天国と栄光が約束され、罪人には永遠の地獄と罰が待ち受ける）と信じること。

10) キリスト教徒と信者だけが救われるという信念。

11) 肉体の蘇りを信じること。

*** 元々のイエスの教えにはこれらの信念がなかった理由を、一点一点、説明下せますか。**

よし、そうしてみるとしよう。これらの信念に、どうして「魂の法則」と矛盾する点があるのか、一つずつ順番に説明してみよう。

*** 最初のものから始めましょう。霊的視点からは、儀式や聖礼には何の有効性もないと言われましたね。**

その通りだ。

*** それは、どうしてですか。**

霊道に、近道などないのだ。我々を霊的に進化させる、すなわち「救済する」唯一のものは、自己改善であり、我欲を手放し愛の能力を成長させることだ。それ以外にはない。

*** でも多くの人が、それを最も重要な事柄の一つだと信じていますよ。**

自分自身を騙しているか、そのように騙されたいのだ。

*** では、救済には儀式が不可欠である、という信念は、何に由来するのですか。**

様々な教会の指導者たちが、人びとの霊性を監督し、私益に利用しようとしてきたからだ。「我々の言うことを聞けば、善人にならずとも、天国で優遇してやる」、と要請するようなものなのだ。

*** でも教会は、善い人にならなくてもいい、などとは言ってませんよ。その上で、戒律も守るようにと、要求しているだけではないですか。**

言葉ではそう言っていないのだろうが、既成事実がそう言っているのだ。

儀式や聖礼や式典 – 派手であれば派手であるほど良い – に従うようにあれほど強調するにも関わらず、隣人の支援に力を入れていないのなら、そう言っているのと同然なのだ。

*** それなら、宗教に儀式があるのは、良くないことでしょうか。**

人びとの霊性進化を操作したり逸脱させるために、儀式を利用するのは、良くないことだ。必要ないのに、どうして儀式を行い続けねばならないのだ？

*** 霊的なメッセージを喚起させる手段として、設けられたのではないのでしょうか。**

だが歴史を見ても、儀式や象徴は、メッセージを喚起するために役に立つ代わりに、代弁していた筈のメッセージ自体に置き換わってしまうことが多い。そして、それらの儀式や象徴を楯に取り、従うべき信仰にはことごとく反するという、さらに大きな過ちを犯してしまうのだ。

その一例が、十字軍と宗教裁判だ。胸元に目立つ大きな十字の印を付けた服を着た人たちによる、大量虐殺や殺人だ。彼らは毎日、聖体を受けていたのだが、手には聖書を握ったまま、死の宣告を行ったのだ。隣人に対する愛の教えは、一体どこに見出せるのだろうか？

*** でも、聖餐式のように、イエス自身によって伝達された儀式もありませんか。**

いいや、そうではない。イエスが、自分が処刑されるまでに時間が残されていないと悟り、別れの晩餐に弟子たちを集めたことは本当だ。だが彼は、聖餐の儀式だけでなく、その他のいかなる儀式・式典・聖礼も確立しようなどと考えてはいなかった。

さらに言えば、たとえ象徴的であろうと、キリストの肉体や血を口にするのは、カニバリズムを連想させ、イエスはそれと何の関係もない。

*** では、聖餐式の儀式は何に由来するのですか。**

それ以前からの宗教儀式が、キリスト教に組み込まれたのだ。実際のところ、そういう式典は全て、イエスの使徒を指すキリスト教徒の名称や彼らを象徴する十字の印と共に、後世に導入されたものなのだ。

*** でしたら、十字の印もイエスに由来しないのですか。**

十字架というものは、イエスの時代には、今の電気椅子と同じように、人を処刑するために用いられていたのだよ。正常な判断力があれば、自分の信仰の象徴に十字を使おう、と思いつく者など誰一人としていなかったろう。イエスが現代に生まれ電気椅子で処刑されていたとしたら、ペンダントとして電気椅子をぶら下げようとする者がいないのと同じことだ。

*** このようなお話はかなりショッキングで、キリスト教徒やカトリック信者には、なかなか受け容れられないのではないかと思います。**

そうかもしれないが、それが真実だ。またこの場では、霊的な真相に目を開くように、努めているのだ。

イエスの地上での任務が、霊性進化の道を示すことであったと思いついてごらん。あの時代の宗教組織は、多くの迷信と偽りで人びとを怖れさせ、自らの富と権力への願望を満たすために神の名を利用して、長きにわたって、人びとの霊的な成長を阻止してきたのだ。複雑な儀式制度で気を逸らし、自分たちの思いのままにお金を巻き上げることに利用し、人びとを犠牲にして、派手な暮らしをしていたのだ。そして、イエスがその事実を明白にしたので、彼を殺したのだ。

当時のユダヤ教会は、イエスの人物像を利用して教えを操り、人類の霊的な成長を阻んで生き永らえてきた今日の教会の姿と、非常によく似ていたのだ。もういい加減に、きちんと正されるべきだろう。

*** 儀式に反対なあなたの論拠はどれも大変結構なのですが、キリスト教徒からすると、聖書に記載されていないことは...**

それなら、マルコの福音書の第12章(29-34節)を調べてごらん。そこには、ほぼ同じ教えが収められている。

彼らが論じ合っているのを聞き、一人の律法学者がやって来て、イエスが巧みに答えられたのを認めて、彼に質問した、「すべての戒めの中で、どれが第一のものですか」 イエスは答えられた、「第一の戒めはこれである、『イスラエルよ、聞け。われらの主なる神は、ただ唯一の主である。心をつくし、魂をつくし、意志をつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』この二つより大事な戒めは、他にない」そこで、律法学者はイエスに言った、「先生、仰せの通りです、『神はひとりであって、その他に神はない』また『心をつくし、知恵をつくし、力をつくして神を愛し、また自分を愛するように隣り人を愛する』ということは、すべての燔祭や犠牲よりも、はるかに大事なことです」 イエスは、彼が適切な答をしたのを見て言われた、「あなたは神の国から遠くない」

*** 第二点目では、聖書や他の聖典が神の御言葉である、と信じることは間違いだと言われましたね。**

そうだ。

*** では、聖書が神の言葉でないのであれば、何だと思いいになっているのですか。**

旧約聖書は何冊かの本がまとまったもので、イスラエルの歴史の一部が収められているが、指導者たちの征服欲を正当化し、それが「神の意志」であったと見せかけるために都合がいい修正がされている。

また、平均よりも霊的に進化した存在、つまり預言者たちのかなり正しい教えも記載されているが、それはすでに、宗教的な信仰が狂信的に操作されていることを警告しており、真の霊性とはいかなるものかを見間見ることができる。

一方、新約聖書は、イエスの生涯で最も特出した事実、特に最後の数年間の公での説教、に関する口頭伝承を収録しようと試みたものだ。イエスが伝えようとした教えを部分的に収めた「福音書」と、以後の使徒たちの生活「言行録」と、人類の未来に関する著者の一連のヴィジョンを集めた「黙示録」とから成る。

*** 「文書」に関して余り良い心象がないようですが、論拠を裏付けするために、折に触れ、新約聖書の文言を引用されていますね。**

全てが偽りだとは言っていない。各々の事柄はそれぞれ正しく評価されるべきだ。

山上での説教のようなイエスの公での宣教を著わした章句や喩え話の多くは、イエスが言ったことをかなり忠実に再現している。それで、私は引用しているのだ。

イエスが演説に比喩を用いたのは、偶然ではなかったのだよ。そうすることで、教会に不都合であった多くの部分が改変されてしまうことから救ったのだ。人には比喩の意味が良く理解できなかつたので、教会の検閲に引っかからずに済んだのだ。

*** 例を挙げて下さいますか。**

たとえば、輪廻転生の概念は、新約聖書の二つの章に巧みに収録されている。初めのヨハネの三章は、もう見た通り、イエスとニコドモの会話の中でだ。

イエスは彼に答えて言った、「よくよくあなたに言うておく。人は誰でも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」ニコデモは言った、「年をとっているのに、人はどうして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることなどできましようか」イエスは答えられた、「よくよくあなたに言うておく。人は、水と聖霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生れる者は肉であり、聖霊から生まれる者は霊である。あなたがたは新しく生ま

れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。(. . .) 天に上った者はいないが、天から下った者はある」(ヨハネ 3,3-13)

二つ目は、マタイの17章、10-13節だ。

そこで、弟子たちは、イエスに尋ねて言った、「いったい律法学者たちが、エリヤが先に来るはずだと言っているのは、どうしてですか」イエスは答えて言われた、「確かに、エリヤが先に来て、万事を元どおり直すのだ。しかし、あなたがたに言うておく。エリヤはすでに来たのだ。ところが人びとは彼を認めず、彼に好き勝手なことをしたのだ。人の子もまた、彼らから同じように苦しみを受けることになるだろう」そのとき、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。

*** それなら、聖書自体を読んだり、聖典とされるもの全般を読むことに関しては、どんな姿勢でいるべきですか。**

いいかね、全ての宗教には、神、または神の使者の手によるとされる聖典があるのだ。そうしなければ、自分たちの神聖を正当化できないからだ。

だが、霊的に進化している者や高次の霊に感化されて書かれた可能性があるものが存在していることは確かだが、現実的には、君たちと同じような人間によって書かれたものなのだ。

いずれせよ、著者の名前には惑わされず、常に内容を吟味してみることが、騙されないための一番良い方法だ。メッセージの質を見れば、作者の霊的レベルが分かるであろう。

また、一人の著者のものだとされていても、同じ書物が何人もの手によることもあるのだ。千余年にもわたって原本が偽造・改変されてきて、聖なる仲介者だと勝手に名乗り挙げる者の利益となってきたのだ。それゆえ、ある段落は霊的に進化した者によって書かれたが、その次のものは詐欺師の手によるということもあり、偉大な真実のすぐ脇に大嘘が書かれている可能性もある。そして真実は、徹底的に中味を分析して、「麦殻」を捨て「麦粒」だけを集めることによってのみ、知る得ることができるのだ。

*** 地球には多くの宗教がありますが、その多くが一神教で、かなり厳しい戒律を設けています。権威者によるとそれは神の意志だそうですが、それをどう思われますか。**

魂の「自由意志の法則」を尊重せず、権力者の見解による教義を押しつけて成り立つ学説や宗教は全て本物とは言えないし、神や高次の霊性からの恩寵だと見なすこともできない。したがって、これらの宗教の権威者たちを、真の霊道の導き手だとは見なせない。なぜなら、霊性の指導者は、絶対に力を行使したり操ろうとすることがなく、特定の掟を強要することもないからだ。

*** 地上の宗教は、神の意志を代弁してはいないので、本物ではないと言われるのですか。**

全ての宗教には、高次の存在から閃きを得た真実の一部と、多くの虚偽とがあるのだが、後者は、地上の利益に左右された者たちが付け加えたのだ。

*** 例を示して下さいますか。**

よろしい。たとえば、旧約聖書の中の十戒はかなりの的を得た規律であり、霊的に進化した存在の教えに忠実だ。

十戒の一つに「汝殺すなかれ」がある。それなのに同じ旧約聖書の中には、神と称する者が、仮定上の「約束の地」を征服するために、イスラエルの民を他民族の攻撃に派遣するくだりがあるのだ。

当然だが、このような戦闘では、人びとはお互いに戦って人を殺す羽目になるのだ。つまり、そのくだりが本当であるなら、神が民に「殺せ」と命じたのだと推測できるのである。その場合、この（殺せという）メッセージは、最初の「殺すなかれ」と矛盾する。

それでは、この明らかな逆説をどう解決すべきだろうか？ 神が矛盾したことを言ったのだろうか。でも、けた外れに進化した存在に、それは認めがたいであろう。それなら、二つの指示はそれぞれ異なる動機を持った別々の者に由来するのだ、と認める必要があるのではなからうか。

では、「殺すな」というメッセージと、「殺せ」というメッセージとでは、どちらが常識的に見て、霊的に進化したものだと言えるだろうか。

*** 僕にとっては、「殺すな」の方ですが。**

この教えが高次の霊性からであることを認めるのであれば、その反対のものは、同じ源から生じてはいないのだ。

*** では、どこで生まれたのでしょうか。**

侵略に興味があった者たちによるのだ。

***でも、それは過去の事例ですから。**

現在でも同じことがくりかえされているのだよ。

表向きは熱心な神の信奉徒とされ、いつも「神のご加護がありますよう」という言葉で演説を終わらせているのに、自国民を他国の侵略に派遣するのをいとわないリーダーが、現在の地球には沢山いやしないだろうか？何百万もの死者を出し、何百万もの家庭を何世代にもわたって破壊しているのに、聖書の詩篇や「神を信じる」・「神は我々と共に！」などの言葉を、自分たちの行為を正当化するために利用してはいないだろうか？

はっきり言うておこう。神や高次の靈性を持つ存在は、紛争の一方の側を味方することはないし、いかなる侵略も征服も支持することはないのだ。もしそうするのであれば、神自身が、宇宙に設けた諸法則の一つの「愛の法則」を侵すことになるからだ。

前述のような人たちは、ユダヤ教徒やキリスト教徒が守るべきだとされる「主の名をみだりに唱えてはならない」という戒律を侵しているのだ。それなのに、あたかも神が、神の子を蹂躪することに同意したかのごとく、その名を利用して、自分たちの非道を正当化しようとしているのだ。これが、神の名をみだりに唱えるということで、一部の者が思っているように、俗っぽい話の中で「神」という言葉を使用することではない。

***それでは、神によって選ばれた民ということについてはどうですか。**

神に優先される民族や人間など存在しない。神や高次の靈性は、他の者を虐げて特定の民族や人種と特別に結びつくことなどはせず、全ての人に進化の計画を推し進めるように呼びかけるのであり、それに協力したいかどうかを決めるのは、各魂である。もちろん、神の法則に従うようにと、誰にも強いられることはない。

望みとあれば、各人の意志と能力に応じて、個人や集団での人類の進化計画で、具体的な役割を果たす約束をすることが可能だ。これが、魂の選択なのである。

ゆえに「選ばれし者」とは、自分の内面を高次の靈性に開き、「愛の法則」に従った人生を送る約束をした者に過ぎず、それによって、自分を成長させるだけでなく、まだこの呼びかけに心を許していない者の手本となるのである。

*** そのように、靈的な世界からの呼びかけに心を開く人たちは、神秘主義者や預言者と関係があるのでしょうか。**

靈界との直接的な交信は、ごく一部の人たちだけの特権ではないのだよ。すでに言ったことだが、全員が個々に、神や高次の靈性や自分のガイドとの直接的な繋がりを持っていて、それぞれが独自の方法で、それを体験していくのだ。

大切なのは、誠実に謙虚にコンタクトを求めるといふことと、魂を成長させるという目的が、探求の動機づけであることだ。もしそうであれば、各人に、それぞれが必要としているものが与えられるであろう。体験の華々しさが重要なのではなく、その経験を、欠点を正当化するためではなく、愛における進歩のために役立てることが大切なのだ。

不幸なことに、「アセンデッドマスター」やその手の重要な人物だと思われたいという欲望から、自己暗示による経験を本物だと思い込み、他の人を騙してしまうような人が沢山いる。また、本当の靈的な交信をした後で、その経験を、自己進化や他者の援助に活かす代わりに、偉ぶって、自分は優れていると思い込み、他者に神のごとく扱われることを要求する人もいる。

自分をどう改善するかを追求するよりも、他者の称賛を求めてしまうのは、虚栄心からの欠点だ。残念だが、これは君たちの世界ではごく頻繁に見られる現象だ。

*** 預言者とは何ですか。**

預言者とは、靈界の真実を教え、「愛の法則」に反する行為がもたらす結果を各時代の人びとに忠告するために、高次の靈性から送られて来る者である。一般的に、転生する惑星の平均よりも進歩した魂だが、そうでなければ、委託された使命を遂行することができないからだ。

他者を助けると同時に、自己を進化させることができるのだが、それは一般的には、生まれ出た社会から拒否や拒絶をされ、虐げられたり罵倒されたり馬鹿にされたりするからで、そのために、自己の愛の力量が試されるからである。彼らは、通常考えられているように、特別で神聖な特権を持つ存在などではない。

その靈能力は、輪廻のサイクルの中で—他世界での転生であったかもしれないが—自分自身の功績によって獲得されたものだ。あらかた、年下の生徒を手助けする年上の生徒といったところだが、それと異なるのは、他の人と同じ条件で転生して来るので、肉体的にも年齢からも、彼らを識別できない点だ。

いつか、君たちの惑星の住人が十分に進化を遂げる日が来たら、その中から、進化の遅い人類が住む世界で預言者の役目を果たす者が出ることだろう。

***でも、偉大な師匠だと思われていた人が、後から、実は詐欺師で、人びとの純粹さにつけ込んで大金を貯え込んでいた、と発覚することがよくありませんか。**

その通りなのだ。多くの者が猫をかぶっているのだ。

だがその一方で、初めは良く、いい線を行っていたので、必要な靈的援助が与えられた、という者も沢山いる。問題は、その者たちが、人びとに与える効果に目が眩んでしまうことだ。

本当に答えを探し求めている人は、内面を覚醒してくれる人に出会うと、その人にとっても感謝して、それを大げさに表現しようとするものだ。そのため本人も、本当は靈的知識の光を届けているだけの筈なのに、自分自身がまぶしく輝いているのだと勘違いしてしまう。人びとも間違っ、その人を神のように奉り始める。

我欲とその顕現形態をまだよく知らず、自分でも克服の努力をしないのであれば、我欲は増大し、自分が全ての者に勝ると思いつむに至るだろう。そして、他者に奉仕する代わりに、その反対となってしまう。道義上の家来か奴隷のように仕えてくれることを人に要求し、どんな決断や願望であっても決して問い正さずに、盲目的に自分に追従することを求める。

こうして、光は段々と消えて行き、最初の思いは失われ、インスピレーションもなくなるのだ。靈的な閃きが消えると、我欲が頭脳を支配し始め、その時から、受け取るメッセージは混乱し、矛盾したものとなる。そして、本物になり得たであろうことは、守りきれずに失われてしまったものの混沌とした記憶として残り、我欲の高揚を正当化する多くの嘘で固められるのだ。

*** 真の預言者と詐欺師とを、どのように見分けるのですか。つまり、真の預言者・ガイド・靈的な使者に必要とされる条件とは何ですか。**

肉体を持たない靈的なガイドは、何の分け隔てもせずに、全ての魂を支援する。真の靈性というものには、国境も経済格差も、人種や宗教やその他のいかなる違いも存在しない。それゆえ、富める者と貧しき者、白人と黒人、信者と非信者とを差別しない。これらの違いは、一時的な条件や状況に過ぎず、転生から転生で変化するものだからだ。

靈的な教えを普及するにふさわしいと自認する者は、それと同じやり方で行動しなければならない。肉体を持つ真の靈的指導者は、「魂の法

則」に従い、目立たず謙虚に生きようとし、何の見返りもなく、他者を援助し啓発しようとしている。

それゆえ、霊的な真実らしきものを公開することで、金銭的な、またはその他の代償を貰おうとする者たちは、全て、真の霊的な指導者だとは見なせない。「会員だけ」の真実というものは存在しないからだ。

真のマスターは、自由意志を尊重する。つまり、絶対に自己の見解を押しつけず、自分が手本となって宣教し、提供するものを受け取るか取らないかは、他者の自由に任せるのだ。したがって、権力主義に訴えて正当化することはなく、絶対に「俺の言う通りにしろ。俺はマスターで、悟りを得た神の使者だぞ」などと言ったりしない。

心を開いた者を説得するには、メッセージの質が高いだけで充分だ。それに関心を持たず説得できない人たちがいても、彼らにはそうして独自の道を歩む自由意志があるのだ。好きでもないものを信じたり同意したりを、義務づけられることも強要されることもない。

*** 偽マスターや見せかけの霊性に引っかからないための助言がありますか。**

どんなに高次に思える宗教や政治・哲学的思想であろうと、その信仰のために、絶対に君たちの意志を放棄してはならない。信仰のために意志の放棄が求められるのであれば、そうするには値しないものだ、と確信しなさい。

伝達者を偶像化せずに、メッセージを分析なさい。メッセージに納得できなければ、疑問を表明し説明を求め、それでもその教えと同調できなければ、それを拒めば良い。理解できなくても信じることを強要する信仰のドグマによってでは、一切、何も受け容れるべきではない。

自分自身の経験・感情・理解・分析によってではなく、神聖だとされる人がそう言ったから、という不可解な外からの押しつけによって同意してしまうことは、権力主義に従うだけで、進化のためにも幸せになるためにも役に立たない。魂は自由でいる時だけが幸せなのだ。

したがって、妄信的な信仰も、霊性を管理し操る社会層も必要ない。答えは自分の内に探しなさい。君たちの内面は、霊的ガイドや高次の霊性と直接繋がっているので、思っているよりもずっと賢いのだ。

*** でも多くの宗教では、霊との交信は、悪魔のすることだと思われていて、それをしようとするのは、有害で邪悪なことだと考えられています。聖書がこのような交信を禁じているとのことですが、聖書が神の言葉で**

あるのでしたら、神自身がこれを禁止したことになるのでしょうか。これについてどう思われますか。

各人が高次の霊性、それを神や霊的ガイドと呼ぶが、と独自の繋がりを持つことを認識してしまえば、教会権威者たちは、主役の地位と権力を失うこととなり、そうなれば、信者を気の赴くままに操ることができなくなってしまふ。

彼ら自身が矛盾しているのだ。なぜなら、彼らの聖典を、神から閃きを得た人によって書かれた御言葉なのだと見なすのなら、それは、霊界と霊的な交信を持ったことになるのだ。しかし、信者にはそれと同様な交信は許さず、彼らが崇める本を書いた過去の著者だけの特権としているのだ。

イエスや他の進化した預言者は、高次の霊性との接触を求め、そこからインスピレーションを得て任務を支援してもらった訳だが、それは、肉体に宿った者が肉体を離脱した魂から助言と支援をしてもらうという、完全なる霊界との交信なのだ。

霊媒力を非難するのなら、イエス自身をも批判することになってしまう。イエスは、霊界の教えを当時の同胞に伝達するという、大変強力な霊媒として、活動したのだから。

*** その通りですね。でも彼らは、「イエスは神の子だったから、閃きを与えたのは神自身で単なる霊ではなかった」、と言うことでしょう。**

全てを盲信させて教えを分析することも認めていないのに、二千年以上も前の預言者にインスピレーションを与えたのが、神か、聖霊か、それともサタン自身であったのが、どうして分かるのだね？

実際、教会権威者たちが御言葉だと崇め奉る旧約聖書を書いた、本物の預言者の一人が今生まれ変わって、前世の業績を解析したり豊かにする新たなお告げを書いたとしても、昔のようにそれを公言すれば、権威者たち自身がその人を嘲り、メッセージを吟味することさえ許さず、その人が狂っていて悪魔の類と交信しているのだと思わせようとするだろう。

だから、常識的に判断しよう。相手の能力を知る唯一の手がかりは、メッセージの質なのだ。

現在、メッセージで暴力や戦争や他者を憎むことを奨励している人を、神の使者だと信じられる者などいるであろうか？ 同世代の人をそう認められないのであれば、どうして、いかに古かろうと、過去の著者を神の使者だと認めなければならないのだろうか？ 過去の作家が特別な存在であるのは、とても古いためだからだろうか？ それなら、神々の代わりに

恐竜や鮫や蟻を選ぶとしよう。それらは、古代の作家の誰よりも前に、この世に出現していたのだから。

イエスのメッセージが人類にこれほど大きな影響を及ぼしたのは、イエスがそう言ったからではなく、無条件の愛を示すという教え自体が、偉大であったからだ。しかしこの世の権力者たちは、布教に歯止めをかけることができなかつたために、自分たちの特権や搾取が終焉を迎えることを恐れ、イエスの人物像と教えを手中にし、その内容を著しく侵してしまったのだ。そして、元のお告げそのものと矛盾し、イエスが一度も口にしなかつた言葉を、特権と権力を維持するために彼が言ったことにして、教えと反対のことを我々に信じ込ませることにほぼ成功したのだ。

*** キリスト教徒にとっては、イエスは神同然か神の子なのですから、イエスがすることなら何でもいいではありませんか。一般人が直接霊と交信することを、認めるつもりがないのでしょうか。**

初期のキリスト教徒の間では、慈善的な霊との交信がごく頻繁に行われていた、と知ったら驚くであろう。襲いかかる酷い迫害に耐えることができるように、彼らはこうして霊界から勇気づけられていたのだ。

初期のキリスト教徒は、愛をもって祈れば、高次の聖霊から応援されて近くに来てもらえることを知っていた。新約聖書自体の使徒言行録の中にその例があるが、イエス自身が肉体を離脱した後に霊となって、使徒たちの前に随意に現れたり消えたりしたことがうかがえる。

それ以後、教会自体がこの種の顕現を敵視した。なぜなら、そこからまた愛の種が生まれ、再び人びとの心の中で発芽し、当時の人類が宗教組織によっておかれていた霊的な闇から解放されてしまうことを怖れたのだ。

イエスは戻って来なかつたが、霊界と直接交信ができる非常に高度な魂たちがやって来て、恵まれない者を癒したり面倒を見たり、多くの善をなしたのだ。だが、その多くの者は、魔術使いや異端の罪状で、宗教裁判で火刑とされた。

*** でも、悪霊を呼び出すために集まって、他者を支配したり、富や権力を獲得する能力を授けてくれる魔法の力を得ようとした人たちも実在するようですが。**

そのような交信は行われていたし、我欲に満ち溢れ富と権力を渴望する魂がこの世に存在する限り、今後も行われることだろう。だが、そういう意図で行動すると、同レベルの低級霊の都合のいい餌食にされて、あらゆる手段で彼らの支配下に置かれてしまい、隷属させられて、もつ

と酷いことをさせられてしまう。だから、このような接触は非常に危険で、全く奨励できないものだ。

しかし、他者に害を与えようとして、霊媒力を使って下級霊と通信する者がいるからといって、霊媒を介した霊界との交信の全てが有害だ、と結論づけることはできない。それとも、悪意のある目的にインターネットを使用する人がいるので、ネット上の全ての通信を政府が禁止することが理にかなっているのだろうか？ 理論的に考えれば、使用を制限すべきなのは、社会の健全性が狙われる時だけで、全体を禁じてしまう必要はない。

*** でしたら、なぜ世間では、霊との交信がこれほど反対されるのでしょうか。**

それは、この世の宗教権威者やその他の権力者たちの多くが、人が自力で神や守護霊と交信することを阻むことによって、支配力を維持しているからだ。

霊界との接触を怖れさせようと、明確に意図して作成された映画は無数にある。それらは、ダイアリー・オブ・ザ・デッド (Diary of the Dead)、ポルターガイスト (Poltergeist)、エクソシスト (Exorcist) などの恐怖映画で、全ての交信が恐ろしいものになる、と思い込ませるのだ。

こうして、誰もが怖れによって自分自身を異端視し、直感や夢などであろうと、霊界からのメッセージかもしれないと思う度にそれを抑圧したり、誤った解釈をしてしまうのだ。

*** 教会や司祭が地上での神の仲介者である、という信仰は正しくない、とも言われましたね。**

そうだ。

*** 何を根拠にそう言われるのですか。**

イエスと当時の司祭層との関係を正しく読み取るのなら、イエスには、司祭という身分を創る意図も、カトリック教会が創ったような階層制度を設ける意志も、絶対になかったという結論に至る。カトリックのヒエラルキーは、その時代のユダヤ教会をかなり忠実に模倣したものだ。

イエスは、一人ひとりが神と繋がっていると教え、司祭を介してのみ神と交信できるという誤った考えを覆しに来たのだ。

実際、イエスは、公の説教のかなりの部分で、ユダヤ聖職者たちに応酬している。イエスのやることの全てが彼らを逆なですることだったの

で、聖職者たちはイエスを手強い競争相手だと見なしたのだが、それは誤りではなかった。イエスは、次のメッセージを形を変えて何度となくくりかえしたからだ。

「聞きなさい。彼らは神の仲介者などではない。なぜなら、適切な霊的援助を差し伸べることよりも、君たちを犠牲にして経済力を失わないことの方に一生懸命だ。馬鹿げた法律で君たちを混乱させてしまったが、そんなものは必要ない。天の国に入るために唯一必要とされることは、愛することだ」

このメッセージが聖職者階層の目に留まり、人びとが覚醒してしまえば自分の仕事がなくなってしまうと考えて、イエスを殺してしまったのだ。

***カトリック教会は、なぜそれほどユダヤ教に似てしまったのでしょうか。**

最初はそうではなかった。なぜなら、キリスト教徒は、初めはユダヤ人、後にはローマ人から絶えず迫害され、常に危険に身がさらされていたので、イエスの愛の教えの信奉者となるには、大変な覚悟が必要だったからだ。

しかし権力者たちは、私益に有害な思想の支持者を抹殺しようとしたにも関わらず、信徒が増え続けるのを見て、「敵をやっつけられないのなら、取り込んでしまえ」という戦略に切り替えたのだ。

全ローマ帝国をキリスト教に改宗すると布告したコンスタンティヌス皇帝以後は、多くの者が信仰によってではなく、キリスト教徒にさせられた。そして、大半が強いられたものであったために、全てを台なしにした。隣人愛は、そこでおしまいになったのだ。

それ以前の宗教の高位神官と信者たちは鞍替えをし、何の霊的改変もないままキリスト教に移り、重要な職に就き始めるようになった。宗教の元最高神官が、キリスト教の一信者で我慢するなどとは、君たちでも思わないだろう。彼らは、権力の持ち分を維持したかったのだ。そこで、神官の帽子を、教会の司教の帽子に変えたのだ。いや、実は帽子でさえも変えはしなかった。法王と司教のかぶるミトラさえ、別の宗教に由来しているのだ。ミトラと呼ばれるのは、ローマ人が崇めていた神々の一つ、ミトラへの古代信仰の神官たちがかぶっていた物だからだ。

キリスト教にはそれ以前の宗教儀式が沢山取り入れられ、元来の隣人愛のメッセージは、それに反する概念で侵されてしまった。カトリック教会とは、このようにして生まれたのだ。神と金とに兼ね仕えることはできない、とイエスは言っただろうが、カトリック教会は、二千余年も前のユダヤ教会のように、ほぼ最初からお金の方に加勢したのだ。

*** でしたら、法王の絶対的權威と地上における神の代表という...**

もちろん全て嘘だ。法王も普通の人間と同じように間違えることがある。法王と靈界との繋がりは、他の人のものと比べて何も特別なものではない。

高次の靈性との繋がりは、無条件の愛を努力することによって段々と強くなるもので、どれほど立派な肩書きを受けられようと、それで繋がりが深まる訳ではない。

*** では、どこからそんな考えになったのですか。**

先に言った通り、教会の首長自身がそう言っている。通常それは、権力や富への野望にそそのかされた行為を、誰にも見破られないように正当化するための手段なのだ。

救済には彼らが不可欠だ、と人びとに確信させることができれば、教区民を犠牲にして、誰にも咎められずに暮らせる筈だからだ。「神の任命した者たち」に従わなければ「永遠の罰」だぞ、と言っていつでも脅すことができた。それは「神の代理人」の命令に従わないのであれば、という意味で、つまり、彼ら自身のことを指していたのだ。

*** 悪業を清算するには告白が欠かせず、司祭から免罪されればそれを解消できる信念に関しては、どうですか。**

靈的に改善する第一歩が、罪惡の自覚であるのは明らかだが、後悔するだけでは不十分だ。靈界では、「愛の法則」に反する行為は、犯した罪業を償うことによってのみ、解消可能だからだ。

そしてそれは、我々自身でするしかない。乗り切るための支援を受けるのは構わないが、どれほど高次の者であろうと、誰にもこの仕事を代わってもらうことができない。

司祭に免罪権を与えているのは、救済されるには教会の代理人が不可欠なので、経済的に支えてあげなければならない、と人に思わせる戦略の一部なのだ。

初めに言った通り、靈的な進化は、個人の努力によってのみ達成できるものであり、高次の存在との「コネ」によるものではないのだ。

*** それでは、十字架上で死ぬことで、イエスが人類の罪をあがなったという信念と、彼が後に復活したことについてはどうですか。**

これも正しくはない。イエスが靈性進化の道筋を教えにやって来て、彼の隣人愛の手本に従った者が決定的な変化を遂げたため、宗教上では「罪」とされた過ちを犯すことがなくその道を真っ直ぐに進んで行けた、

というのは本当だ。だがそれで、前世での犯罪行為の償いに対処しなくて済むようになる訳ではない。イエスは誰の罪も払拭した訳ではなく、各人にそれぞれの罪をどうやってあがなうかを教えたのだ。

大学入試の途中で、何人かの生徒の先生がやって来て、「私の生徒は答案用紙を提出しなくてよろしい。全員合格だ。試験官を知っていて合格にしてもらえるから大丈夫だ」と言ったとしたら、とても不公平だろう。頑張っって勉強して自力で合格できる生徒を退けて、準備不足の生徒が値しないのに受かってしまえば、それは、各生徒の努力が公平に評価されていないのだ。良い先生がすべきこととは、生徒がきちんと試験準備ができるように、尽力することであろう。

イエスが試みたことはまさにそれで、各転生での霊的な試験に合格できるように、我々にきちんと準備をさせたかったのだ。霊界には「コネクション」は存在しないからだ。

我々には、犯した過ちを改める無数の機会が与えられる。だが、それをすべきなのは我々自身で、イエスや聖母やその他の聖人にすぎるべきではないのだ。

***では、このことをキリスト教徒に納得させられますか。これは、カトリックの教えの主要な教義の一つですよ。**

次の新約聖書のマルコの福音書（10, 35-40）でも同じことを言っているよ。

さて、ゼベダイの子のヤコブとヨハネとがイエスのもとに来て言った、「先生、わたしたちの頼み事を、かなえて下さるようお願いします」イエスは彼らに「何をして欲しいと、願うのか」と言われた。彼らは答えた、「先生が栄光の王座に就くとき、一人をあなたの右に、一人を左に座らせて下さい」イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることができるか」彼らは「できずとも」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けるであろう。しかし、わたしの右、左に座らせることは、わたしが決めることではなく、準備のできている者だけに許されるのである」

***でも、「あなたの罪は赦された」と言っていたのは、イエス自身ではなかったですか。**

イエスが言いたかったことは、過去に「愛の法則」に反する行為をしても、永遠に有罪になる訳ではなく、何をしたかを問わず誰でも改悔し、いつでも好きな時に新しくやり始めるチャンスがあるということだ。

***でも、どうして病人を治した直後にそう言ったのですか。**

イエスが病人の治療をする時は、肉体の毒素のみならず、肉体レベルでの病気の原因となるアストラル体の毒素も綺麗にしていたからだ。これらは、感情や思考に由来する精神的な毒や、当時は「罪」と呼ばれた、今生や前世での「愛の法則」への違反行為による毒が蓄積したことが原因だ。

イエスが手をかざして行った癒しを、日頃の手入れを怠って汚れてしまったじゅうたん（身体）を綺麗にする、掃除機だと考えてみてごらん。徹底して掃除をしたとしても、人が「汚い」習慣を全く変えようとしなければ、少し時間が経てば、じゅうたんはまた元のように汚くなってしまう。

実際、イエスに治してもらった後で、内面を改革するよにとの助言も聞かず、霊的な悪癖を続けたために、再びメンタル体で精神的な毒素が生じて、それがアストラル体と肉体に転移して、またもや病気になってしまった人もいる。

***それでは、病人を治癒して感謝された時に、なぜ「あなたの信仰があなたを救ったのだ」と言ったのでしょうか。**

それはイエスが、レイキやプラーナ、その他どう呼ぼうと構わないが、癒しのエネルギーが効果を発揮するには、送り手が上手なだけでなく、良い受け手も必要なこと、つまり、チャクラを開いてエネルギーを受ける心づもりが要ることを知っていたからだ。

癒しが起こるためには、エネルギーを受ける人が送り手を信頼（信仰）していなければならない。信頼していないと、チャクラは閉じたままで、送り手にどんなに能力があろうと、エネルギーは流入しないし、治療効果も出ないのだ。

***でも、病人が意識不明や重病で、治そうと努力しているのが分からない場合などには、本人に対してではなく、その家族にそう言っていたようですが、これはどういうことでしょうか。**

イエスが、その愛と慈悲の力によって高度な治癒力を持つ高振動のエネルギーを伝達できたように、それを信じ必要な人を助けたいと願う者は、元の波動を「反響させる者」となって、エネルギーを高める力があ

るからだ。その場合は、彼ら自身も、癒しのエネルギーを流すパイプとなるのだ。

それと同じように、否定的な思いや懐疑心があるために、治癒エネルギーが周囲に上手く伝わることの邪魔をしてしまう人たちもいる。イエスや彼の教えを信じなかった人の事例は沢山ある。そのような場合には、イエスがいつものように病人に手をかざしても、癒しはほとんど見られなかった。このような状況は、福音書自体にも記載されている。

そしてイエスは郷里に行き、会堂で人びとを教えられたところ、彼らは驚いて言った、「この人は、こんな知恵と不思議な力を、どこで習ってきたのか」 他の者は言った、「この人は大工のヨセフの子ではないか。母はマリヤといい、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。またその姉妹たちもみな、まだここで暮らしているではないか。ならば、なぜこんなに多くを知り、奇跡を起こせるのだろうか」 こうして人びとは、イエスの教えを認めようとしなかった。しかし、イエスは言われた、「預言者はどこでも尊敬されるが、自分の郷里と家族の間では敬われない」 そしてイエスは、彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの奇跡をなさらなかった。（マタイ 13, 54-58）

*** ついでですので、復活についても話して下さい。**

いいだろう。これについては非常に混乱をきたしているので、なるべく分かり易く説明しようと思う。イエスの復活について言われている多くは、完全に間違っている。

復活という言葉を、肉体の死後にも魂が存続することだと理解するのなら、それは正しい。だが、死後も生き続けるという事態は、何も特別なことではない。魂が生き残ったのは、何もイエスが最初ではないし、もう充分話した筈だが、これは宇宙の法則であるので、いつもずっと起きていたことだった。

しかし、魂が存続するには必ず身体が必要があり、しかも生存中と同じ身体でなければならない、というような信仰は全て、正しくはないのだ。

*** キリスト教会の分派の中には、生命は肉体がなければ成り立たないと信じ、肉体の死後の魂の生を認めないものもありますが、それについてはどう思われますか。**

肉体の死後、魂が、置き残した身体に戻るまでずっと眠った状態にあり続ける、ということは正しくない。これが、蘇りに関する信仰の誤りの一つだ。肉体の死が生じた時点から体が腐敗し始め、しまいには消滅

するということは、明白ではないのだろうか？物質界に戻る日がやって来た時に、何世紀も前になくなった肉体に戻れるのだと、どうしてそう信じることができるのだろうか？

亡くなった魂は転生によって肉体生に戻るのだ、と説明する方が、簡単ではなからうか？つまり、昨日まで地上に生きた魂は、明日には新しく生まれ出る子どもとなって帰って来る、ということだ。

したがって、自然な物質の分解過程で失われた肉体を魔法で再構成して、死者が肉体生に戻る、というのは誤った信仰なのだ。

亡くなった者は絶えず物質界に戻っているのだが、自然の法則を侵すことなく、新しい子どもとして誕生することで、そうしているのだ。

魂や霊が生き続けるために肉体が必要だ、というのも正しくない。魂は、再び物質界に転生するまで、ずっと眠った状態にいるのではなく、すでに話した通りに、物質から解放されて、霊界で各自の暮らしと進化の工程を続けるのだ。

イエスが死後に復活した、という場合には、彼の肉体が再び生を得たのではなく、彼の魂が生き続けたことを意味しているのだ。

***でも信者であれば、「福音書には“イエスはラサロを蘇らせ”ラサロはその体でしばらく生き永らえたと書いてある」、と言うことでしょうか。これは、「肉体の蘇生」を証明するものではありませんか。**

イエスはラサロを蘇らせたのではなく、ラサロが実際にはまだ死んでいなかったのだ。本当のところは、イエスは彼の意識を蘇らせたのであり、これは君たちにとっては何の不思議でもない。

今日では心肺蘇生の技術で、臨床的に死んだと見なされる人を、医師が「蘇らせる」ことが可能だ。遺体安置所に何時間も放置された後で、死んだと思われていた人が突然目を覚まして生き返った、という特異なケースを耳にしたことがないのかい？

それというのも、心肺停止が起こっても、一瞬で肉体から離れる訳ではないのだ。そうでなければ、心臓蘇生など不可能だろう。

魂の離脱のプロセスは、物質への執着心や肉体自体の生命力によって、ある程度の時間を要するものだが、銀の臍の緒が完全に切れるまでには、最低二・三日はかかるものだ。イエスがエネルギーの力でラサロを蘇生させたとしたら、それは単に、ラサロが肉体との分離プロセスをまだ完了していなかったからで、現在の医師と同じように、彼を生き返らすことができたのである。

***でも、イエスの死後三日目に親族たちが墓に行くと、彼の体がなくなっていたではありませんか。**

君たちの場合はそうはならないが、イエスのケースは特別で、魂が肉体との最後の絆を断ち切ると、非常に振動の強いアストラル体が分離したために、肉体が瞬時のうちに分解し、それで遺体が墓の中で見つからなかったのだ。この解体の工程が、遺体を覆っていた布に、体跡を残すこととなった。だから、遺体が墓の中になかったからといって、イエスが生存中と同じ肉体で生き続けたということにはならない。

***でしたら、聖骸布とそこに見出された姿形は本物なのですか。**
そういうことだ。

***ではなぜ、炭素14法年代測定の結果が、その時代と一致しないのですか。**

その件に関して言えるのは、年代測定の手順において不確かなことを確実視してしまっていて、それで年代が一致しない、ということだけだ。でもこれでは、話が脱線してしまう。聖骸布が本当に、死後にイエスの肉体を覆った布であったか否かというのは、彼の肉体が皆のように時間をかけてゆっくり分解または腐敗したかどうかということのように、私たちが話していることとは関係がないのだ。これらは、イエスを受胎した時に聖母マリアが処女であったかどうかということのように、霊的な教えとは無関係だ。

君たちは奇異に思える出来事は良く覚えているが、それらは霊的な観点からは実のないもので、イエスが布教した真に重要なことに意識を向けるのを忘れてしまったのだ。

***では、イエスはどのようにして使徒の前に現れたのですか。死後、本当に彼らの前に出現したのだとしたらですが。**

死後、一緒に暮らした使徒や他の人たちの前に現れた時には、生存中に使用した肉体を伴ったのではなく、アストラル体で顕れたのだ。多くの死者が、亡くなった場所やお棺の中に動かない肉体を置いたまま、愛する人の枕元にお別れをしに顕れるのと同じだ。

というのも、アストラル体は特別な状況下では「凝縮する」のであり、肉体とほとんど同じ形に固まることも可能なのだ。しかも、イエスのような能力を持つ魂を相手にした場合にはなお更なのだが、これは、君たちが「超常現象」と呼び、多くの研究家に知られる現象だ。

***「最後の時には死者が復活する」という類の予言は、何か意味があるのですか。**

すでに亡くなった人の魂は、転生によって絶えず物質界に戻って来ているのだ。つまり、復活するために「最後の時」と呼ばれるような時代を待ちはしないのだ。人類が物的な惑星に存在する以上、魂の輪廻転生というプロセスは絶えず作動し続けるだろう。

ただ、本当に言えることは、現在は人口爆発により、歴史上の他の時代よりも大量の魂が同時に生まれ変わっているということだ。こうしてサイクルの終了時に合わせて、こうした魂も進化の最も重要な時期に転生する機会を得るのだ。これが「最後の時には死者が復活する」という一文を解釈し得る唯一のものだ。

*** それでは、原罪に対する信仰はどうですか。つまり、人類の先祖だとされる者（アダムとエバ）が罪を犯したので、子孫がその行為の結果を償わねばならないということですが。**

それについては、例を示して答えるとしよう。

ある男が銀行を襲い、逃亡時に車にはねられ死亡したとしよう。彼を裁くことが不可能なので、裁判官が強盗犯の息子に父親の罪を償わせる決断をし、親の代わりに監獄に入れようとしたとする。君たちは、このような決断を下した裁判官を公平だと見なすのだろうか？

*** もちろん公平だとは思いませんよ。それに、文明化した国ならこの裁判所だって、そんな決断はしないと思いますよ。**

人間の正義観から見て、父親の罪を息子に着せるのが異常なのなら、どうして神の裁きが人間のもの以下になり得るのだろうか？

霊界では、各自が自分の行為に責任を取らねばならず、他者のしたことには問われない。したがって、原罪や先祖から「継承した」罪などの信念は不公正なもので、何の根拠も存在しない。

*** それでは、先祖から受け継いだ罪という信念は、何に基づいているのですか。**

確かなことは、各人が自身の行為に責任を取らねばならないことで、それは過去生のものであるかもしれないので、先祖の中に過去に転生していた自分自身がいた可能性はある。

これが、そのような信念を正しく解釈し得る唯一のもので、転生の存在を認めることで、初めて理解することができる。

*** 性が罪深く、性関係を慎む者がその他よりも清純で高潔だと信じるのは誤りだ、とも言われましたよね。**

その通りだ。司祭であろうと僧侶や修道士であろうと、宗教家たちに貞潔を誓わせたそのような概念を、どこから引き出して来たのか知りたいものだ。

*** イエスが示した手本によるのだと思いますが。**

君たちはイエスに性関係がなかったと断言できるほど、イエスの私生活を知らないではないか！ 性関係を自制すれば神に近づいたりより純潔になれるなどと、イエスが公言したことは一度もない。

たとえ本当であっても、全人類が生涯にわたって性関係を控える決意をしたとしたら、百二十年以内にこの地球から人間の命は絶えてしまうであろう！ 「生めよふやせよ」ということと矛盾してしまう、と思わんかね？ もし君たちが、性関係以外の増殖法を知っていたら、お教え願いたいものだ。過去の時代には、試験管で受精させるなど不可能だったのだよ！

*** あなたのお話から、性関係はいつも繁殖のためでなければならぬと理解するべきでしょうか。**

もちろん違う。もうそれについては充分話しただろうに。進歩した魂にとっては、性関係は親密な愛の表現方法だ。

それと全く異なるのは、性欲を満たすために、あらゆる手段を用いて自由意志が侵害される場合だ。特に女性や子どもといった最も弱い者が性商売（売春や小児性犯罪のことだ）に従事させられたり、君たちの世界では良くあることだが、実際には愛してもいないのに愛していると言ったりして、セックスのために、あらゆる方法で人を操り嘘をつく場合だ。

イエスはこのようなことを全て、告発したのだ。その時代には女性は、性も含めた全ての面において、奴隷に毛が生えた程度に見なされ、実質的には何の権利も持っていなかったのだよ。男どもは、誰にも文句を言われずに好き放題で、女性は、男性の権力の乱用を、宗教の加護にすがって耐えねばならなかった。たとえば、離縁され、他に生き延びる手段がないために、売春を強いられた。

イエスは女性の権利を守るために、大いに闘った。女性を性奴隷と見なすことを止めさせ、彼女たちを咎める者を叱責し、その惨めな状況は男性のせいなのだと分かせようとした。しかし、教会がそれら全てを、性を卑しむ抗弁にすり変えてしまったのだ。

*** 教会は、イエスの母親の聖母マリアを例に挙げて、純潔と貞潔を掲げてきたのではないですか。**

イエスの受胎については一旦置いておくと、マリアは大半の女性がそうであるように、伴侶であるヨセフと性関係を持ち始めるまでが処女であった。ヨセフとは複数の息子と娘を得たのだが、彼らはイエスの兄弟に当たる。

特筆すべきなのは、これがキリスト教徒の福音書に記載されており、著者たちがイエスに兄弟がいたことを多くの者のように問題視せず、現在の教会のようにそれを隠そうともしなかった点だ。マリアに他にも子どもがいて、彼らに名と姓があったことは、福音書の様々な節（マルコ 6, 3; マタイ 13,55; マタイ 12, 46-47; ルカ 8,19-20）に反映されている。幾つか例を示してみよう。

イエスがまだ群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちとが、イエスに話そうと思って外に立っていた。それで、ある人がイエスに言った、「ごらん下さい。あなたの母上と兄弟がたが、あなたに話そうと思って、外に立っておられます」

「マリヤのむすこで、ヤコブ、ヨセフ、シモンとユダの兄弟ではないか。またその姉妹たちも、ここに私たちと一緒にいるではないか」

他の者は言った、「この人は大工のヨセフの子ではないか。母はマリヤといい、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。またその姉妹たちもみな、まだここで暮らしているではないか。ならば、なぜこんなに多くを知り、奇跡を起こせるのだろうか」

福音書の著者が、イエスに兄弟がいたことを何も問題とせず、恥ずかしがらずにそれを記載しているのに、なぜその後継者たちが問題視するのだろうか？

*** 今生での行いで未来が永久的に決定され、悪者や異教徒には永遠の処罰と地獄が待ち受け、キリスト教徒と信者のみが救われて永遠の栄光を手にする、という信心についてはどのようなご意見ですか。**

それに関しては、魂の「進化の法則」と霊界でどのように物事が作用するかについて説明した時に、時間をかけて広く話した筈だ。

だが、まだ充分明らかでないのなら、もう一度くりかえそう。実に全ての魂は不死であり、魂の目標は、靈性進化のより高次の段階に達する

ことだ。したがって、宗教的・政治的・信心や人種やその他の資質を問わずどんな人間でも、進化の計画から締め出される者は一人もいない。すなわち、神やイエスや教会などを信じようが信じまいが、または人間的には大失敗であろうと、不死だという性質や、霊的に改善できる可能性を失うことなど絶対にない。よって、誰にとっても死は存在しないし、永遠に罰せられることもない。

それに、皆の魂の過去を一人ひとりじっくり回顧したならば、過去生のどれかで、誰もが殺人者や人食い人種、またはその両方であったと分かるのだ。もし今、それを異常だと思うのであれば、それは霊的に成長できたからであり、自分の能力を試すためにくりかえし転生したことで、犯した誤ちを修正する無数の機会を得たからである。もし、改悔の機会がなくなるとただ一度の人生の行いで、将来が未来永劫にわたって決められるのなら、「地獄」はもう満杯で入れる者などないだろうし、「天国」はサハラ砂漠よりも閑散としていることだろう。

*** それでは、司祭の前での最期の告解が罪を緩和すると考えられていることに関しては、...**

肉体を離脱した後の魂の行方は、生存中の行為でのみ決まるのだが、進化し改善する機会はいつでもあるので、そう決意した瞬間から「救われる」チャンスがある。だが、それは一朝一夕にはなされず、魂の心臓からの変化を伴うものなので、反省し自覚して、否定的な態度を修正する時間が必要となる。

また、霊的な負債や「愛の法則」に反する行為を清算するためには、自分の罪業を修復しなければならず、これには強い意志と時間とが必要とされる。

このことから、司祭によって最期の瞬間に免罪されても、肉体の死後の魂の行方を変えることにはならないだろうと推察できるだろう。

*** しつこくて申し訳ないですが、キリスト教徒と信者のみが救われるという信心に関しては、イエス自身が「わたしを信じる者には永遠の命が与えられる」と言って、救済されるのは信奉者だという信仰のきっかけを作ったのではないですか。**

イエスはそういう意味で言ったのではない。

彼は、各人に霊的な変革を起こさせる秘訣を教え、命は永遠であり、それぞれが自らの運命の作家であることを自覚させたのだ。現在の言葉に置き換えるのなら、「わたしの言うことと教えを信じる者は、命が

永遠であることと、『救済』（進化）は本人次第で、その人自身が自らの運命の担い手であることを自覚できるだろう」となる。

***では、キリストの信徒だけが永遠の命を手にするという信心は、何に由来するのでしょうか。**

イエスが言ったことが誤って解釈されてしまったためと、教会がさらにそれに、「教会の外に救いはない」と付け加えて改変してしまったためだ。

この場合ではキリスト教徒のことだが、一般的に、特定の宗派の信者のみが救われるという信仰は、その宗派の首長自身の考えに過ぎず、信徒の忠誠を確保するために利用される謳い文句の一つに過ぎない。

もっと証拠が欲しいのかね？「教会の外に救いはない」というのはラテン語では“extra Ecclesiam nulla salus”と言うのだが、これは、イエスが地上に現れてから千余年も経った、1215-1216年に開催された第4回ラテラン公会議で、聖キプリアヌスが最初に発言したことを、教義に取り入れたものなのだ。

***でも、カトリックの信者の多くが、そう確信している筈ですよ。つまり、キリスト教徒だけが永遠の命を手に行けるのであり、善い信者であり救済されるためには、教会の規則に従わなくてはならない、ということです。**

いいかね、カトリック教会や他の多くの宗教が、善人とは従順であることに等しい、と君たちに信じ込ませたのだ。特に、教会の規則に従順になることだと思い込ませ、意のままに信者を扱えるようにしたのだ。

しかし、慈悲深いのと従順なのとは全く異なることだ。規則に従順で、社会的に表面上は情け深い人であっても、個人的には我欲に完全支配された真の「悪魔」であるかもしれないのだ。規則や儀式をひどく愛好したのに隣人を全く愛そうとしなかったパリサイ人を、イエス自身も「白く塗った墓」と評し、そういう偽善を批判した。

反対に、正直者で偽善を嫌う善人なのに、決められた規則に従わないがために、人から良く思われぬ者も沢山いる。そういう正直で誠実な人がいると、そうでない者との違いが歴然となるので、危険で蔑むべきだと見なされるのだ。

ここにイエスの手本がある。イエスはユダヤ教会の権威者の命令には従順ではなく、勇敢で、自己の霊的な信念に首尾一貫していた。自分の考えを公に布教すれば山ほど問題を引き起こすと知っていたが、暴力を

用いず真実と愛の力で、彼を黙らせようとした輩に立ち向かったのだ。多くの人もこれに追随した。

歴史上には、支配者に「従順」でなかったために、ローマの競技場でライオンに貪られたり、異端や黒魔術の宣告を受けて焚き火で焼かれるなど、死に至る拷問を受けた正直者や善人の事例は山ほどある。しかしそれでも、彼らは、自由で愛することができたのだから、幸せ者だと見なされるべきだ。進化の劣った同胞から苦しめられたので、きっとそれに見合う償いを受けたであろう。

奴隷のような規則に従い、心と感受性を抑圧し、苦々しい無意味な人生を送って自己を嫌悪し、その上宗教に洗脳されて、不毛な苦悩自体が善人にさせてくれるのだ、という幻覚を信じる者の状況の方が、ずっと悲惨だ。内面では、自由で本当に幸せな者を羨んでいるのだ。中には嫉妬により、他者の罪悪感を弄んで、嫌な思いをさせようとする者もいる。罪悪感を利用することは、意志放棄をさせるために教会が良く使った手口なので、彼らも充分心得ているのだ。

*** 罪悪感を弄ぶ、とはどういう意味でしょう。**

自分の不快感を他人のせいにする、ということだ。

*** 弄ばれる人を助けるためにはどうしたらいいでしょうか。**

その人は最初に、その問題、つまり信条とする観念によって自分の意志と感情が実質的に失われてしまったこと、を自覚する必要がある。

これは、それ自体がもう凄い進歩だ。それというのも、普通はこのような人は、自分が他者より上だと思っていて、自分の宗派で信用のない人の言うことなどを聞こうとしないからだ。それは、教会が、規則に従わない者は「罪人」で信じてはならない悪い仲間だと、思い込ませたせいでもある。

次に、内面を見つめる努力をし始める必要がある。本当にしたいと思っ
てすることは何か、したいのに規則で禁じられてしないことは何か、したくないのに規則に強いられてすることは何か、などを自覚することから始める。

その次のステップは、自由意志という自己の意志力を行使し始めることだ。つまり、定められた規則に逆らう必要があると、自分の気持ちに従って行動し始めるのだ。

*** これまでの長い説明からは、全ての宗教は茶番であり、神の御心など全く反映されていない、と結論づけるべきでしょうか。**

そこまで極端なのは良くない。

宗教の問題は、靈的に高次の教えを幾つか取り入れてはいても、全てを「神の御言葉」だと、一連の信念や規則をパッケージのように、論拠のないまま教義として受容することを信者に要請することだ。

そこには思考の自由も、本当に心に響くことを選ぶ自由も、自分にとって嘘や的外れなことを除外する自由も、何を信じ何を信じないかを選択する自由もない。

宗教の指導者たちは、随分長い間、隣人愛などの高次の教えを呼び水として、人を惹き付けてきた。魂の成長を阻む、その他の馬鹿げた付け足しの規則には、関心がない人がいたからだ。信徒になり、教会の権力者の叱責を怖れて、「神の御言葉」だとされるものを問いただす勇気のないまま、自称「神の代理人」に導かれてゆくと、少しずつ自分の意志を放棄するようになり、いつしか古書の規則に従って生きようになるのだ。

だが、それらの規則は、自己体験に十分な意味づけと満足のゆく答えを与えてくれるには時代遅れなので、信者はコルセットをきつく締められて、自由な自己表現を阻まれてしまう。意志を放棄をすると、神の御言葉の代弁者として勝手に立候補した者の意のままになるので、狂信に向かって進むのだ。

現存するほとんど全ての宗教・哲学・イデオロギーには、嘘に混じって真実がある。自分の心が真実だと見なし進化に役立ちそうなものを、こっちから少し、あっちからも少し、と選び取って、自分自身の真実を見つけていくことは、各人の仕事なのだ。

*** 困難な状況にいる時に、生身の人間を信頼して助言がもらえないのであれば、その方法にはリスクがありはしませんか。**

靈的な真相の広い知識を有し、多くの転生と内面改善の努力によって愛の能力をさらに発達させたために、靈性において他者を導いて助言できる人が君たちの中にいることは確かだ。でも、それらの人は仰々しいやり方を取らない。司教や聖人だなどと自分で名乗ったりはしないし、特別な衣装をまとうこともない。

彼らは表面的には普通の生活を送っているが、内面を改善したいという強い意志と、他者を助けたいという強い思いがある。自己顕示も目立ちもせず、無私で行動し、手本となって教える。そして彼らとの比較

によって、道徳性がそれほど高くないことが明らかになってしまった者たちからの、多大な侮辱と中傷とに耐えなくてはならないのだ。

霊的世界からの影響は、無神論者であろうと不可知論者であろうと別の宗派の信者であろうと、君たち全員の一人ひとりに感じ取られるものだ。だが、自分自身で決断するようにと、それはとても精妙になされるのだ。先ず一人ひとりが、それぞれの最良のガイドである良心の声を聴き、それから進みたい道を選び取るのだ。

別れ

「今日は君をびっくりさせてあげよう」と、イザヤはある日、僕を見るなり言った。

「へえ、何でしょうか？」

「今まで君がここにやって来た時は、いつも私しかいなかったね。我々は、そのほうが、君がもっと気楽に質問をし易いと思って、そうしていたのだ。だが、ここが、誰も住んでいない孤独な場所だとは思って欲しくない。君はもう、私を信頼してくれているし、この世界にも馴染めたので、他の者を紹介してもいい頃だと思うのだ。ついておいで。皆に紹介して、君に会いたがっていた友人と少し話をしよう」

そしてどうやったのか分からないが、僕たちは、その景色の上を飛び始めた。

上空から、その素晴らしい景色を眺めることができた。

緑の美しい谷に点在した、半球体の小さな建物が見えた。何だろうと質問しようとして口を開く前に、イザヤが「我々の家だよ」と答えた。

集落の中心には、ガラス張りに見えるもっと大きなピラミッド型の建物があって、そこから輝くばかりの白い光が出ていた。「あそこが、瞑想をするために集まる場所だ。我々は、靈的な教えを授かるために高次の惑星とテレパシーで通信し、後進の惑星とも、全人類に愛の教えを伝えるために交信するのだ」と、イザヤが言った。

そして、その内部に入ると、完全に透明な壁を通して、中の様子を見ることができた。壇上に、輪を描いて座っている三十人ぐらいの人がいて、とても集中しているのが見えた。その瞑想では、各人がそれぞれの役割を担っているようだった。そのうちに、輪の真ん中に、二人の人の姿が形を現し始めた。一人は男性で、もう一人は女性だったが、非常に美しく、大変穏やかで心地の良い光のオーラに包まれていた。

二人は、そこにいる人たちと熱のこもった挨拶をし、何らかの言葉を交わした後、僕たちに近づいて来た。以前、イザヤのまなざしは透き通り、深い平和と愛の感覚を伝えてくれると言ったが、この二人のまなざしはそれ以上に深く、天使のように思えた。

「こんにちは。私はベスタよ」と、女性の方が言った。

「やあ、僕はジュノーだよ」、男性が言った。「もう一度君に会いたいと思っていただけだよ」

「もう一度だって？ 二人のことなど知らないのに。前に会ったことがあったとしたら、忘れる筈がないし」と、僕は思った。

ベスタ： 覚えてなくても、知らない訳じゃないのよ。

イザヤ： イエスのことが知りたかったんだろ？ 二人は、イエスを良く知っているんだよ。知りたいことを聞いてごらん。二人は、私たちとは長くいられないだろうから、時間を無駄にしないことだ。

イザヤ： 何も聞かないのかね？ 恥ずかしがらないことだ。友達ではないか。

ベスタ： 思い切って質問ができないのなら、私が手伝ってあげるわ。イエスに、性関係も含めた全てを分かち合える女性の伴侶、つまり双子の魂がいたのか、を知りたいのよね。

なぜ分かったのですか？ と、僕は顔を赤らめながら答えた。

イザヤ： この期に及んでも、我々が思考を読めることに気づけないのかね。だが、心配するに及ばん。誰にも言わんからね、はっはっは。

ベスタ： 私が答えてあげるわ。質問の答えは、はい、よ。イエスには、性も含めて全ての愛を共有できる女性がいたし、もちろん今でも、その完全に似通った相手がいるのよ。それにそれは、イエスだけではないわ。彼と同じか、それ以上のレベルの人間だけが住む世界も存在していて、そこでもパートナーや子ども、そして性関係があるのよ。これが、霊的に進歩すると異性愛を放棄することになるのか、というあなたの質問への回答になったかしら？

はい、とてもはっきりしました。

ジュノー： イエスが地上で、人生を共にする相手と巡り会えなかったとしたら、それは彼の双子の魂が、別の惑星で似たような任務を果たしていたから、その時期に一緒にいられなかったからなのだ。でも、その別離は一時的なものだった。

イエスは、彼より進化が劣った女性とは、一緒になる約束ができなかった。そうしても、その女性には彼の使命が理解できず、執着によってあらゆる手段で彼の任務の妨害をしたであろうし、彼を失うことで非常に苦しむ結果になったであろうからだ。

だがそれでも、彼が相手を探そうとしなかった訳ではない。若い時分は、まだ自己の使命を良く自覚していなかったので、イエスも大半の人と同様に、愛せる女性を見つけ、一緒になりたいと願ったことがあったのだ。

イザヤ： もっと質問をするかね、それとも、もう二人に帰ってもらってもいいのかい？

はい、いつも知りたいと思っていたのですが、イエスは、彼の後にできたキリスト教や教会について、どう思っているのでしょうか。

ジュノー： イエスがここにいたとしたら、次のように言っただろう。

教会や宗教を創る意図など全くなかった。まして、私の名・言葉・行いを使って創り上げた、私個人への信仰に基づく宗教など、なおのことだ。

キリスト教は、人間の感情や自由を非常に抑圧しているので、愛の手本を示すどころか、それと最もかけ離れたものになってしまった。

私を賛美し称賛してくれるように、と教えたことも頼んだことも決してない。神も、称賛を求めていない。神は、神自身が君たちを愛すように、君たちもお互い同士を愛して、幸せになって欲しいだけだ。

私は、単に愛の教えを伝えるためにやって来た。私の生き方でそれを実践してみせて、君たちがそれを手本にして教えを取り入れて、幸福への道を見出せるようにしたのだ。

この愛の教えは、私個人のものではなく、霊的世界のもので、神から全人類への普遍的な教えだ。それを伝道したのが私であったことは、重要ではない。愛の叡智のある別の兄弟であったとしても、同じことなのだ。

私の名や神の名において、どれほどの非道・殺人・拷問・辱めが人類に行われたことだろう！ 互いに愛し合いなさい、敵を愛しなさい、と何百回となく言わなかっただろうか？ 私の信奉者だと名乗る者たちは、一体私のどこに、そのような愛に反する行為の口実を見つけたのだろうか？

愛の教えを世に示すふさわしい者になりたければ、祭壇や十字架や宗教遺物の前で、ひざまずくのは止めなさい。偶像を崇拜するのも、祈りをくりかえし唱えるのも、無意味な儀式も止めなさい。そのようなことをしても、愛ではないからだ。見返りを全く期待せず、威張らず、改宗させようとせず、謙虚に、苦しんでいる同胞に手を差し伸べるのだ。そうすれば、愛の使徒と呼ばれることだろう。

私が示した愛の教えの手本に従わない者には、誰一人として、私の名や神の名を語る権利がないし、私や神の信徒であると名乗ることもできない。そういうものは、自分のエゴに追随しているだけなのだ。

イエスが再び地上に生まれ変わったとしたら、人類になんと言うでしょう。

ベスタ：最後に言ったことと、それ以前にやって来た時に言ったことと同じように「愛しなさい。お互いに愛し合うのだ。それだけが幸せになれるのだ。その他のことは、どれも重要ではないのだ」と言うでしょう。

僕の人生でずっと疑問に思っていたことへの答えを知る機会が持てて、とても恵まれていると思います。お陰様で、僕は、心を開いて感情を表すことができるようになり、自分自身の鎧と抑圧から解放されました。助けていただいたお礼に、何かしたいのですか。

イザヤ：何も感謝する必要はないよ。逆に、時間を割いて熱心に話を聞いてくれた君に、我々が感謝しているよ。愛において成長したいと思っている弟を手助けできたことを、幸せに思うよ。

それでも、お礼に何かしたいのですが。何がいいでしょうか。

ベスタ：自分に、何がしたいのか聞いてみてごらんなさい。

あなた方から教わったことを他の人にも伝えて、皆で共有する必要があるように感じているのですが。もしかしたら、僕に役立ったと同じように、皆の役にも立てるのかもしれませんが。

イザヤ：それなら、君自身が自分の質問に答えているよ。君が知り得たこと、経験したこと、感じたことの全てを集めて、君の兄弟たちに見せてあげなさい。彼らに、無条件の愛の教えと、霊的世界の真相を教えてあげられるようにするのだ。

でも、耳を傾けてくれる人がいると思いますか。

ジュノー： やろうと思うことを心からやってみること自体に、価値があるのだ。もし百万人に一人、このメッセージに耳を傾けてくれる人がいて、その人が感情を目覚めさせ愛の経験に心を開くことができたのなら、その価値はあったということなのだ。

靈性に目覚めたいとは思っているのに、まだ眠ったままの人が、この世には沢山いる。内面で感じていることが、空想の産物ではなく現実なのだよと、同意してあげるだけで充分なのだ。君たちの世界では、靈性に関する真実と虚偽とがまだ混乱を極めているので、外部の世界には、その真相がなかなか反映されないからだ。

でも、それをする能力が僕にあるでしょうか。

ベスタ： その能力があるのか、と問うのは止めなさい。全員に愛す力があるのだから、多くの人にその能力があるわ。

だけど、自分の日常生活での支障をいとわず、気楽さを放棄してまでそうしようと思う人は僅かよ。自分自身に、やりたいのか、やりたくないのかを聞いたほうがいいわ。したいと思うこと自体、すごい力なのよ。あなたにできないことは、私たちが手伝ってあげるわ。いつも、あなたと一緒にいるわ。

メッセージの内容で、不快になって、僕に仕返しをしようと思うような人はいないでしょうか。

イザヤ： それは冒さなければならぬリスクだ。誰も簡単だとは言っていない。皆が自分自身で覚醒できるなら、誰もこんな仕事をしなくてもいいだろう。

だから、君自身の中でどちらの思いが強いのかを、はかりにかけて見なければならぬ。他者を助けたいという思いなのか、君への否定的な反応を恐れる気持ちなのか。したくないことで義務づけられることなどない。することは全て、自分のためにするのだ。君が自由にそうするのであり、我々に借りがあるからとは思わないことだ。

ジュノー： かつては、愛の伝道者は、火刑にされたり磔にされたりしたのだよ。でもそんなことは君には起こらない。

誰かが君の言うことで不愉快になるのなら、喜びたまえ。君の言ったことの何が、その人の内面に触れたということだからだ。魂と感情が

目覚めて抹殺されてしまうのが嫌な、その人のエゴに、火がついたのだよ。

イザヤ： さて、もう二人は家に帰るためにここを去らねばならない。君も、肉体に宿る者の世界に戻らなければならない。

ジュノーとベスタ： 友よ、また会う日まで。それまで、私たちの愛の全てをこめて。

そして、皆で溶け合うように抱擁し合って別れたが、それは余りにも鮮烈な感覚を伴う体験だったので、僕は決して忘れることはないだろう。

イザヤ： では弟よ、また会う時まで。直ぐに再会できて、対話を続けられるといいのだが。我々の家族に、よろしく伝えてくれたまえ。

どの家族のことでしょうか。

イザヤ： どれだと思うのかね。全人類の家族にだよ。

終わり

作者のあとがき

見返りを求めない無条件の愛の趣旨通り、本書が、全ての人に無私の志で届いてくれることを切に願う。

そのため、内容を変更せず営利を目的にしないという条件で、本書を自由に頒布し、現在利用可能な全てのメディアによって、全体あるいは一部を随意に複製することをこの場で許可し、その活動を後押しするものとする。

皆の協力によって、輪が広がっていけばと思う。霊性や愛のテーマに関して質問がある場合には、それが個人的なものでも一般的なものでも、遠慮なく聞いてもらえれば嬉しいし、可能な限り返事をしたいと思う。

また、できるだけ多くの人びとにメッセージが行き渡るように、本書を他の言語に訳してくれる、私心のない人たちにも協力をお願いしたい。

本話を直接聞きたい人の数がある程度まとまって、君の町や村に僕らに行きたくて欲しいと思う場合には、遠慮なくそう教えて欲しい。君の町や村が、他の国や別の大陸にあっても構わない。僕らのできる範囲で、要請に答えたいと思う。

講演会をしても、依頼者側の費用負担は全くない。完全に無私無益の活動なので、旅費や宿泊費も僕らが持つ。誰でも興味のある人が、自由に無料で参加できることが条件だ。

連絡先：

ヴィセント ギリエム・プリモ Vicent Guillem Primo

ウェブページ：<http://lasleyesespirituales.blogspot.com>

(日本語サイト：<http://tamashiinohousoku.blogspot.com.es>)

このサイトでは、電子書籍の形態で無料で本をダウンロードしたり、印刷版を要請したり、講演会の日程を調べることが可能だ。

君に、愛の全てをこめて。また会うときまで。



著者、ヴィセント・ギリェムは、スペイン、バレンシア大学で化学博士号を取得し、現在は、がん遺伝子の特定に関する研究をしている。個人的に自由になる時間を使って、無償でレイキ治療や全国講演を行うなど、無私無欲に活動している。

本書は、全世界の人びとに贈る愛のメッセージだ。

メッセージがどのようにしてもたらされたのか、また誰から伝えられたのかということは、重要ではない。問われるのはその内容だろう。

これをどう扱うかは、各人の自由だ。無視しても、批判しても、検証しても、あるいは君自身の人生に適用してもらっても構わないが、君の心に届くように、真心をこめて書いたつもりだ。

君が自分自身を知り、感情を目覚めさせてエゴを解き放つと共に、人生の目的を知り、自分に起きたことや今後起こる出来事を理解するために、役立てて欲しい。希望を持ち続け、他の人びとへの理解を深め、いつかは皆を愛せるように。また、自分が生きる世界を理解し、最も悲惨な状況からも最大の恩恵を引き出し、愛において成長できるように。

つまり、君が本来の自分になって、自由で、自覚しながら真実の愛・無条件の愛を体験でき、そしてそれによって、さらに幸せになってくれることを願う。

全ての愛をこめて。



「魂の法則」 by [Vicent Guillem](#) is licensed under a [Creative Commons Reconocimiento-NoComercial-SinObraDerivada 3.0 Unported License](#).
Creado a partir de la obra en <http://lasleyesespirituales.blogspot.com.es/>.